女鑑

第十四年
第四号

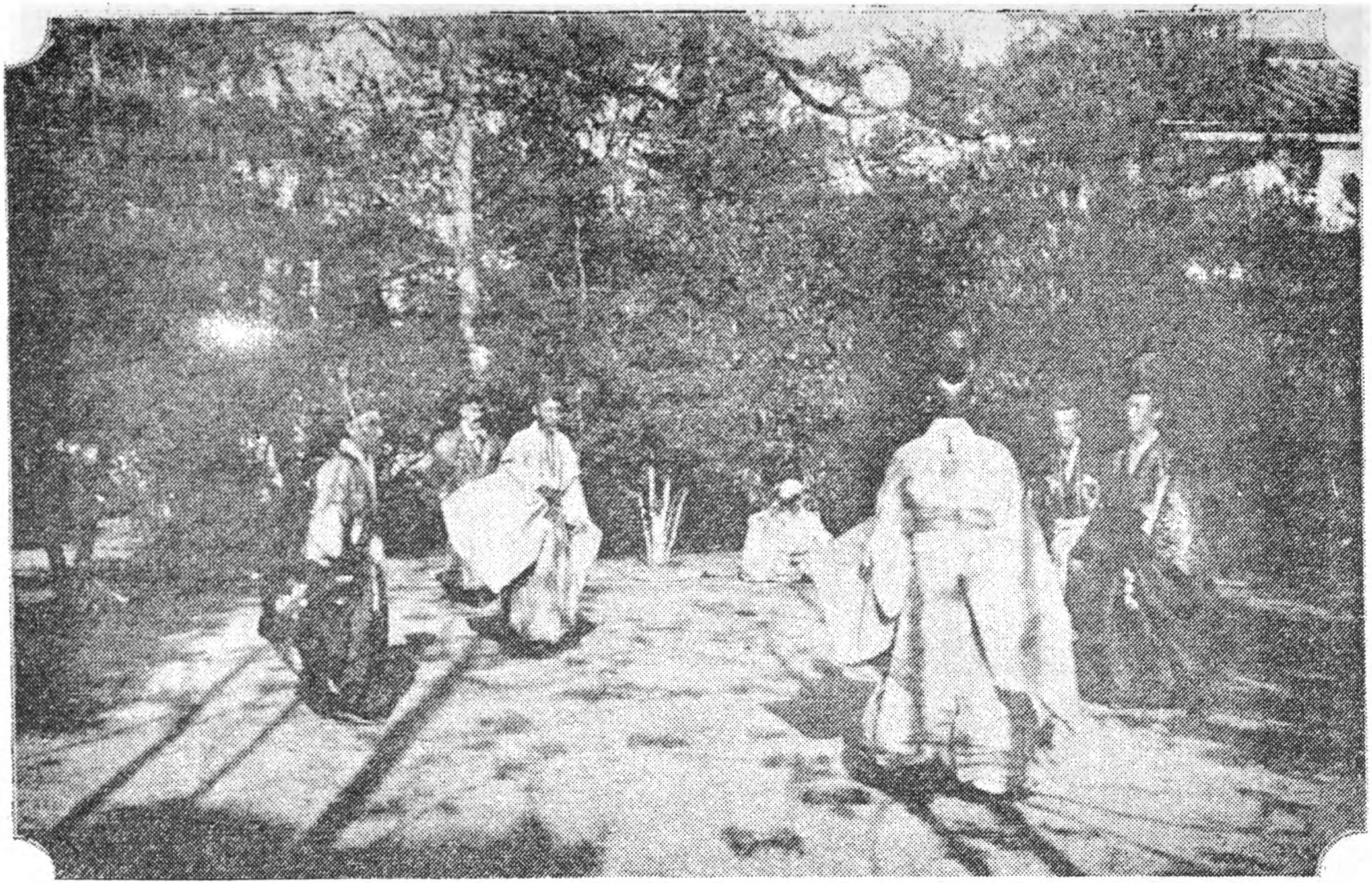
明治二十五年三月十二日 …物認可
…日發行

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候



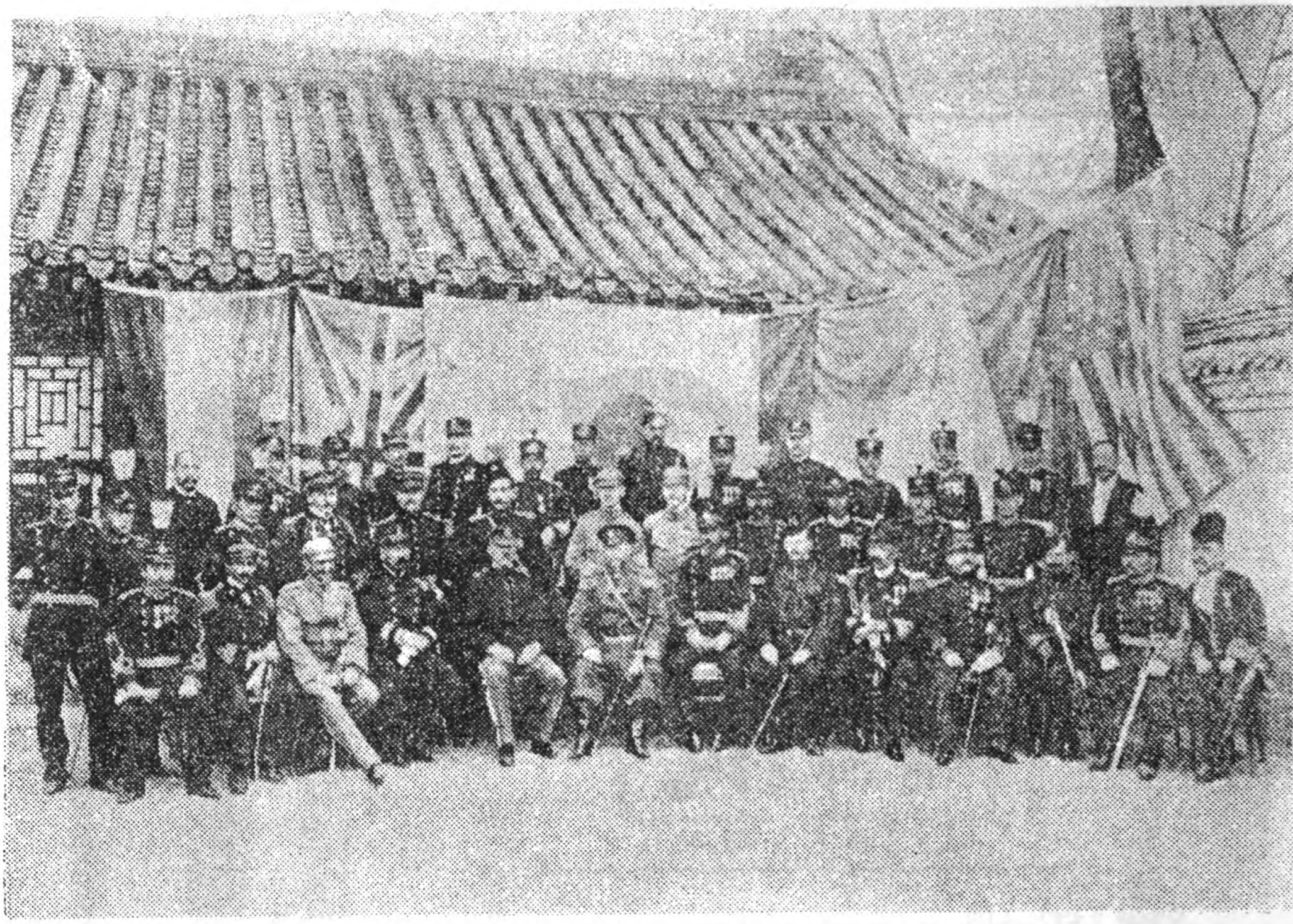
女鑑 第拾四年第四號 目次


小町印
帝都斯業界
唯一の愛賞袴
東京神田區南神保町二番地
御小賣部
永井 支店
小町印學生袴發賣元
御問屋
永井本店

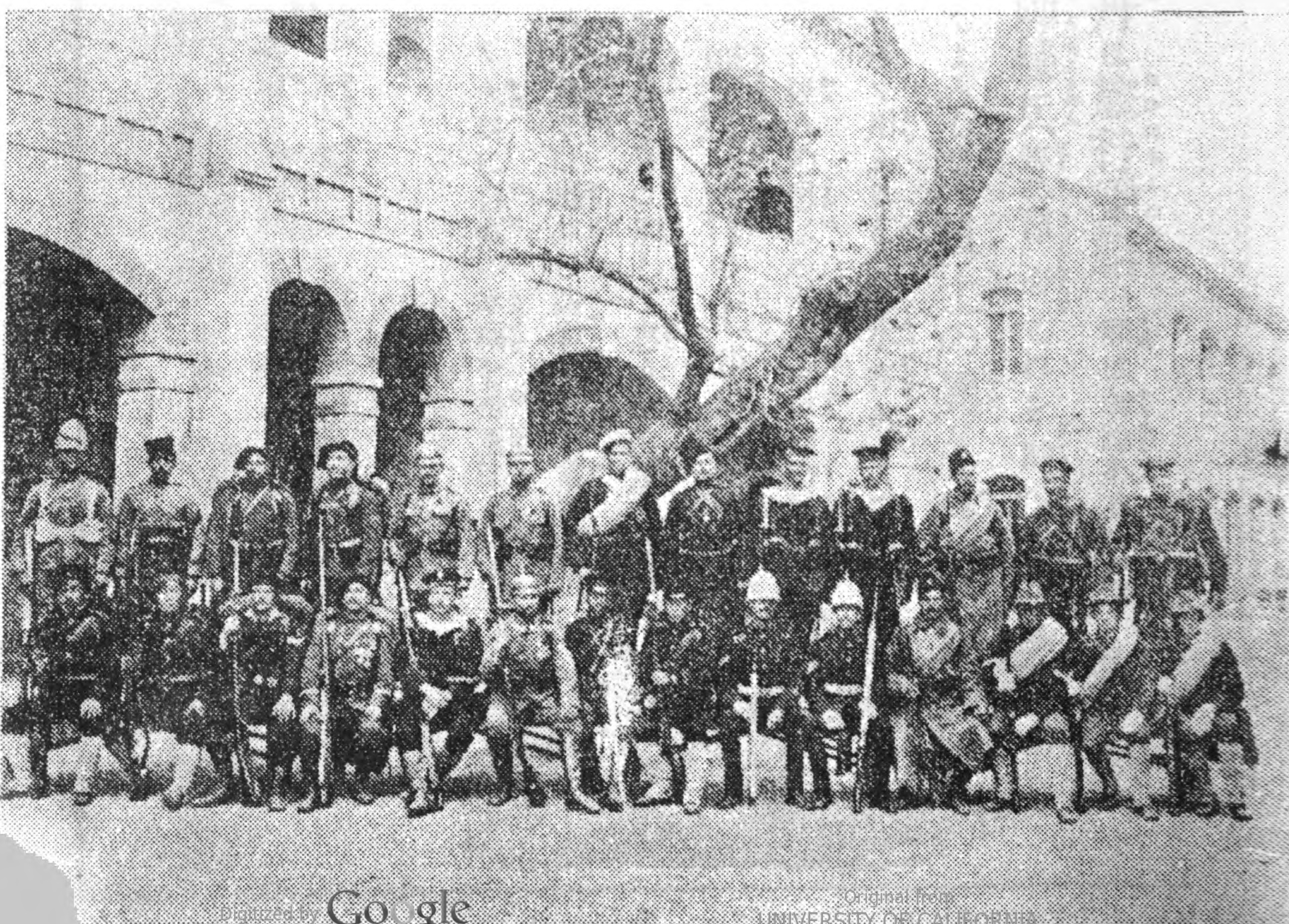


（昨年大演習御行幸の砌京都に於て天覽に供せん爲め準備せしものなり）

蹴鞠



北京駐在各國將校



御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

第五回博覧會

褒賞受領

定價 壹袋壹錢 壹罐詰五錢



此名題洗粉は皆々樣の御引立に依り益々盛大に相成難有仕合に奉存候然るに近來諸方に名題洗粉の摸造品澤山顯はれ候に付弊舖製造品には袋の裏面に芝居櫓形の登錄商標を相印し御座候間何卒御求の節は篤と御熟覧の上多少に不限御用向の程偏に奉希上候也

登錄商標

東京淺草區黒船町

梅素亭謹製

電話下谷二百三十四番

大日本圖案協會編纂

圖案

毎號 定價金廿錢 郵税金壹錢

發行所 發賣所 東京築地二丁目 國光社



東京師範學校教授　瓜生海軍少將夫人繁子

女鑑彙題投稿優等者



岩谷淺子



京都淑女學校新校舍

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

福本日南著

筑前志

總クロース金字入美本全壹冊

定價壹圓貳拾錢小包料金拾錢

筑前は九州の要衝に當り上世夙に太宰府の置設せられし處應神帝以來鎭西の治と外交の政とを綜統せり爾後都督府鎭西府探題奉行府等皆此に於てせざる無し日南先生此地に生れ高遠の見と該博の識とを以て研究多年遂に此著あり志たる七篇曰く氣風曰く國志曰く地名考曰く都邑曰く古歌曰く雜記曰く入筑記而して氣風は九州人の天潢に溯りて人種の本源より發起し其說は實に天荒を破り國志は神武天皇より箱田六輔に至り其間の內政外交治亂興廢偉人傑士碩學名匠を包括網羅せざる無し地名考は從來和漢學者の謬妄を一排し前人未發の見を立て都邑は博多福岡の沿革を叙して掌を指すが如く古歌千載の葩藻を發し併して史誌の參考とす可く讀みて雜記に至れば百貨の市に遊ぶが如く古今に出入し東西に徵證し制度文學風尙博物兼該して遺さず入筑記は先生歸鄕の作夙に傳稱する所なり先生の本志を著す和銅の遺制再興し益軒の事業を大成するに在り其志の在る故と其書の價値と兩ながら察す可し是れ筑前志たると同時に九州志たり史學文學家は固より論なく政事家事業家敎育家殊に九州の人士は必ず一讀せざる可らざる新著也

佐倉孫三著

臺風雜記

菊判大和綴

定價三十錢

郵稅四錢

澁谷愛著

萬國女子風俗

四六版洋裝

定價廿五錢

郵稅四錢

發兌元 東京築地 株式會社 國光社

第五回博覽會

銅牌并に褒狀受領

登錄商標

THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE

錫蓋附 乳白硝子器入



壽美禮おしろい

れり製 定價 大壜 二十錢 小壜 十二錢

水製 定價 大壜 二十五錢 中壜 十五錢 小壜 十錢



ヴワイオレツト水製

錫栓附乳白硝子壜入

すみれ白粉は　歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成類料等を以て配劑しあるを以て皮膚を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性あり『壽美禮白粉』は常に用て御顔肌等の色を白變せしめきめをこまやかにてきびそばかすあせも等を生せず御肌へを清々しく天然の白色さに至るべし『菫おしろい』は芳香馥郁と保つか故宴長會祝席雜踏の場所に臨て諸々の惡臭を退け不淨を拂ひ心氣を清爽快活ならしめ衛生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に於て好評を博しつゝ流行せり

皮膚艶白劑壽美禮あらい粉

綠、藍、紅彩蝶描ひボックス入 三錢

鑵詰 六錢五厘　袋入 壹錢

◎弊舗製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に專ら賞賛する香料及弊店新製の原料を用して製せし物なれば朝夕此洗粉を御用ひ給へば漸々皮膚の色を白くし美くして艶を出しきめをこまかに常に御肌を清々しくなし總而皮膚の患ひにかゝる事なし

◎常に髮洗ひに用ひ給へば毛の拔る病を豫防し毛のくせを直し美くしく艶を出し髮のねばりを取り油あかふけ等を生せず又絹綿布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する性あり

◎使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は温湯に溶し又はぬかに混せ入浴の際用ふるを良とす

登錄商標

西洋色白くなるあらひ粉

SUMIRE.
WASHILNG IOWDEF.

壽美禮すらい紛



製造本舗

東京東兩國
横網町一丁目

伊勢吉壽美禮堂謹製

販賣所は全國到る處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場に有り

明治三十七年二月十一日發行　毎月一回一日發行　第拾四年第參號　明治廿五年三月二十日第三種郵便物認可

東京築地株式會社國光社印刷

女鑑

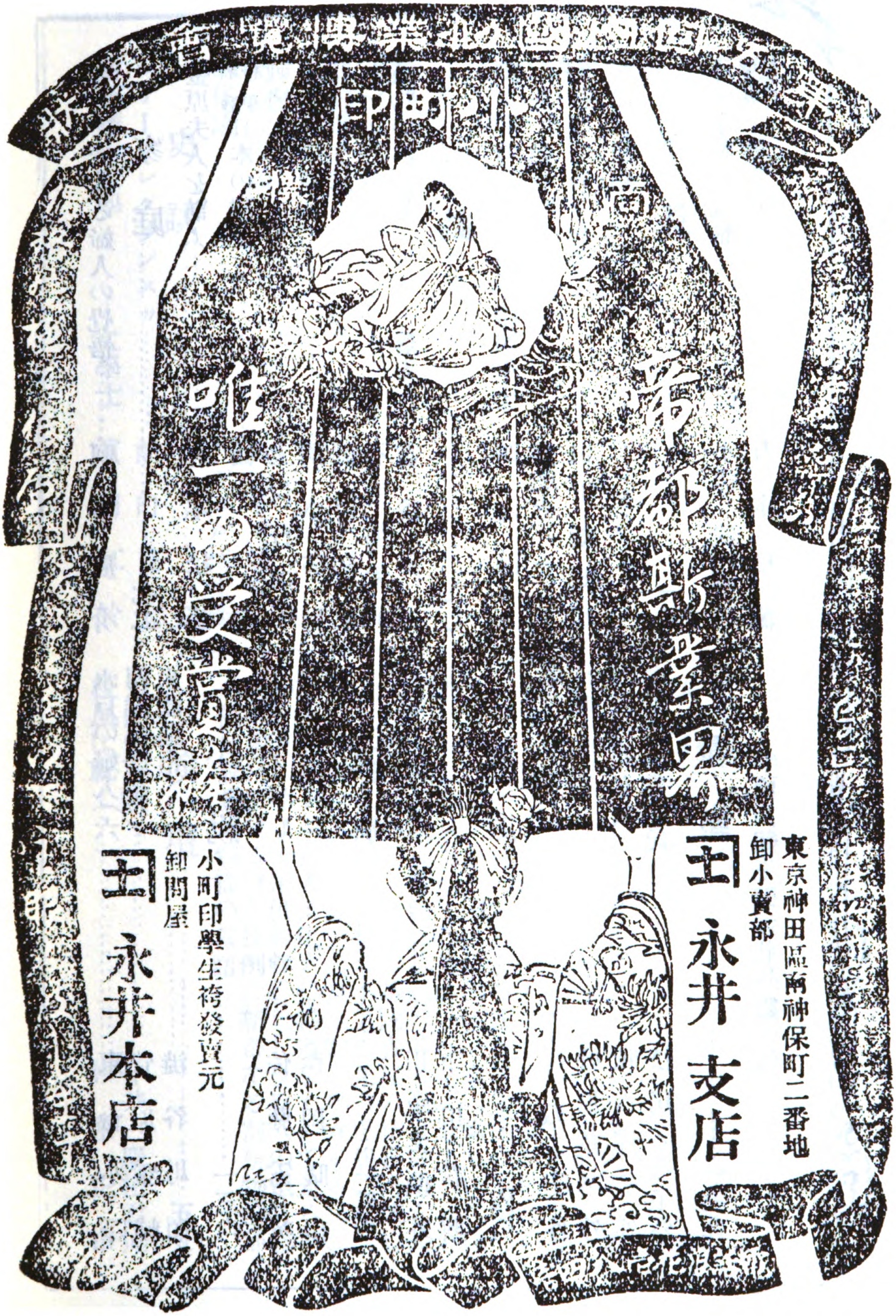
第十四年
第四号

日發行
明治二十五年三月十三日 便物認可

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

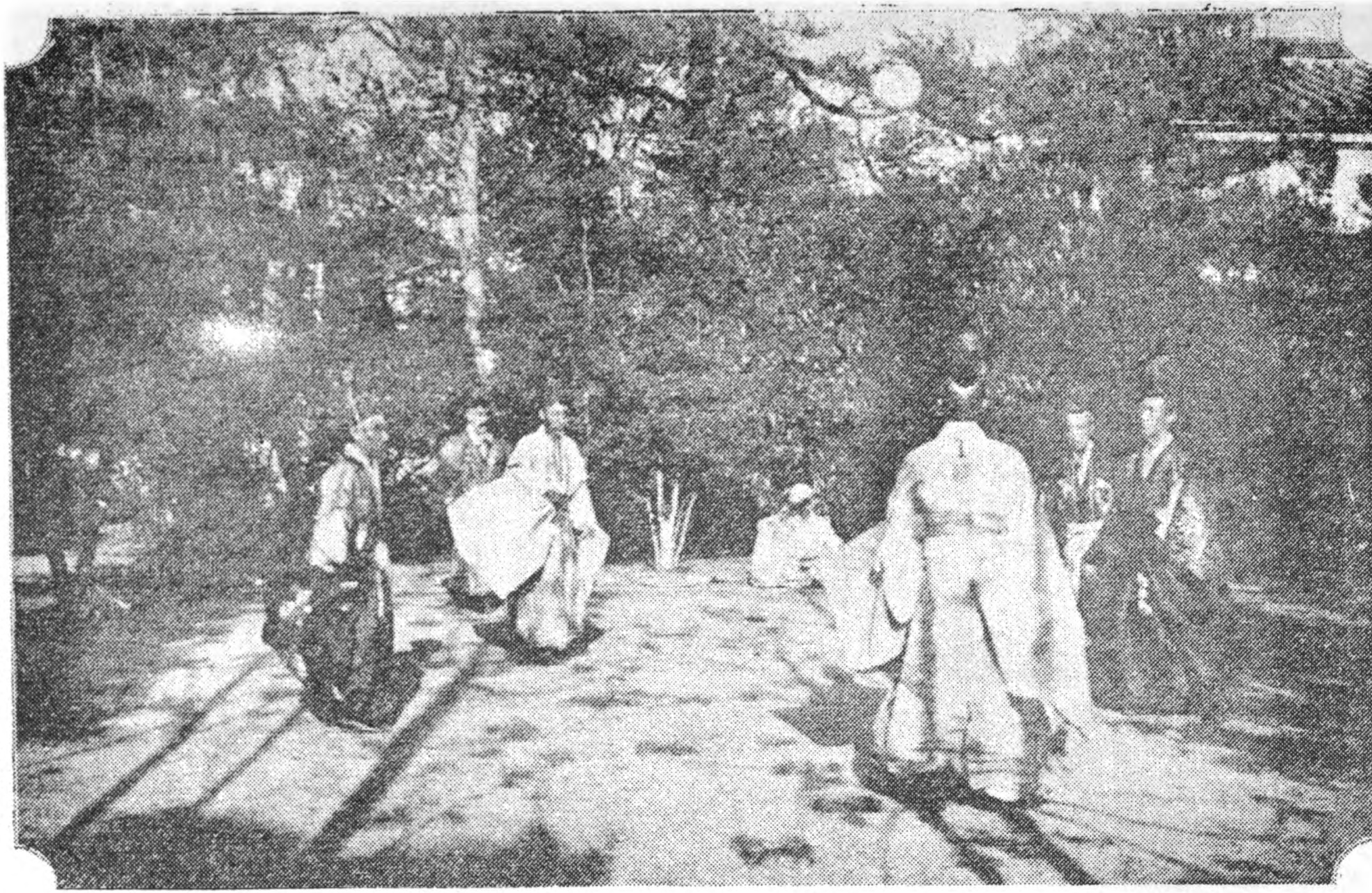


女鑑 第拾四年 第四號 目次

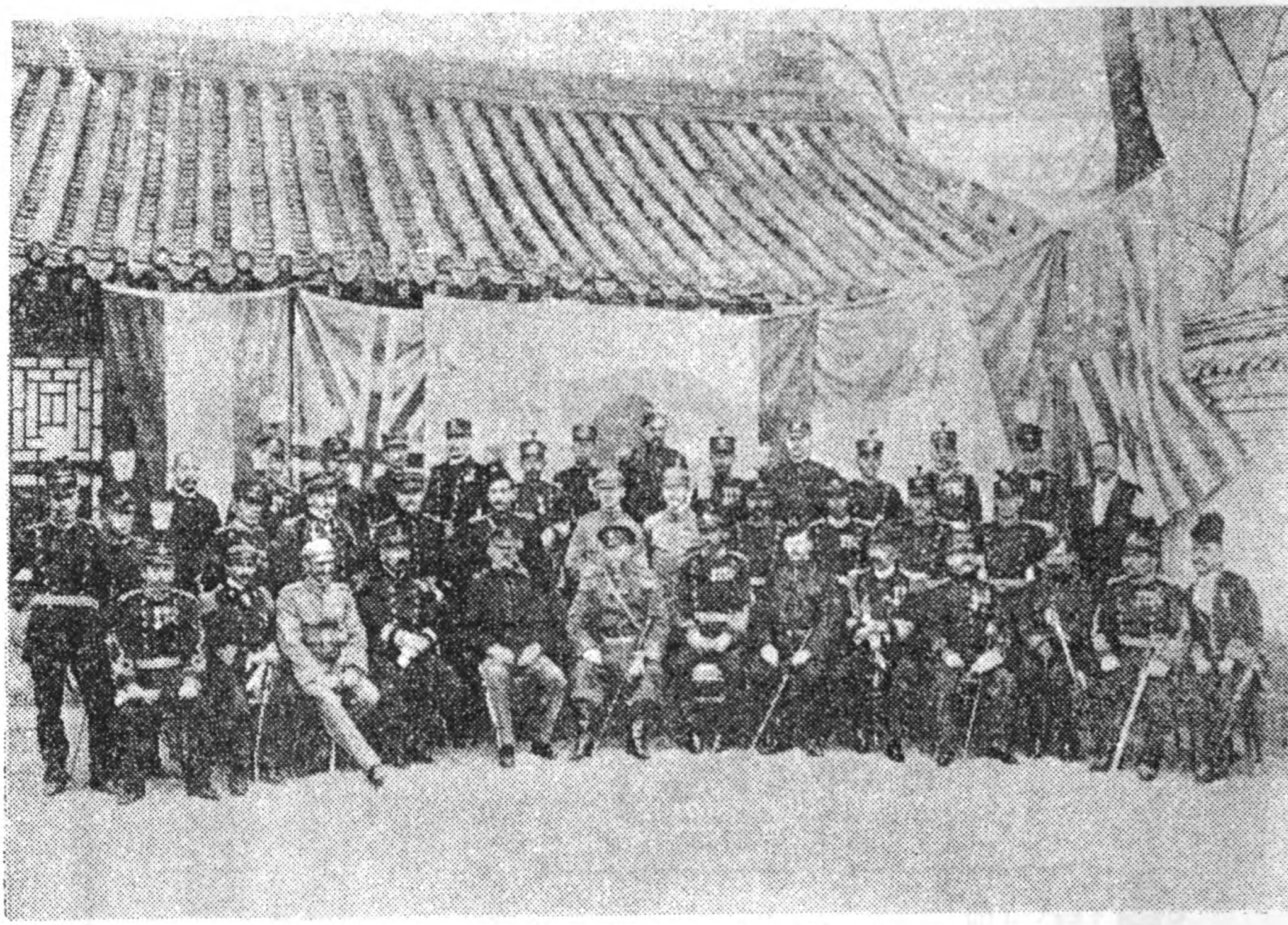


小町印
帝都斯業界
唯一の愛賞袴
東京神田區南神保町二番地
卸小賣部
永井支店
小町印學生袴發賣元
卸問屋
永井本店

（昨年大演習御行幸の際京都に於て天覽に供せん爲め準備せしものなり）



蹴鞠



北京駐在各國將校



御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

登錄商標

商標

二十七番地

守田氏確證

TRADE MARK.

寶丹上包紙表面赤色ニ印刷セルモノ

寶丹

軍旅必携

寶丹包紙裏面の商標

登錄 商標

◎寶丹は旅行乘船の際は勿論あるひは軍陣練兵等の節必これを貯へ時々服してよろしまた風土の異なる地に到り少しづゝ用ふるときは水害あるひは惡き疾に罹るの患なからしむ故に時候の不正或は惡疫流行の土地若は家に到らんとするときは別して怠りなく度々用ひてよろし希くは攝生の諸君必らず常に携帶して大ひに自他の幸福を得玉はんことを乞爾云

◎登錄商標



◎偽物御注意◎包紙の表と裏にある二個の商標幷に東京池之端仲町貳拾七番地を御認知の上御購求の程願上候也

寶丹本舖

東京市下谷區池之端仲町二十七號所有地

十世 守田治兵衛

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

輕便 瓦斯の煑燒 德用

瓦斯は燈火用の外料理其他一般の煮焼用として使用は輕便マッチ一本あれば晝夜何時にても即時に用を便じ火力加減自在にして火災の危険なく且大に人手を省き費用は薪炭よりも低廉なり

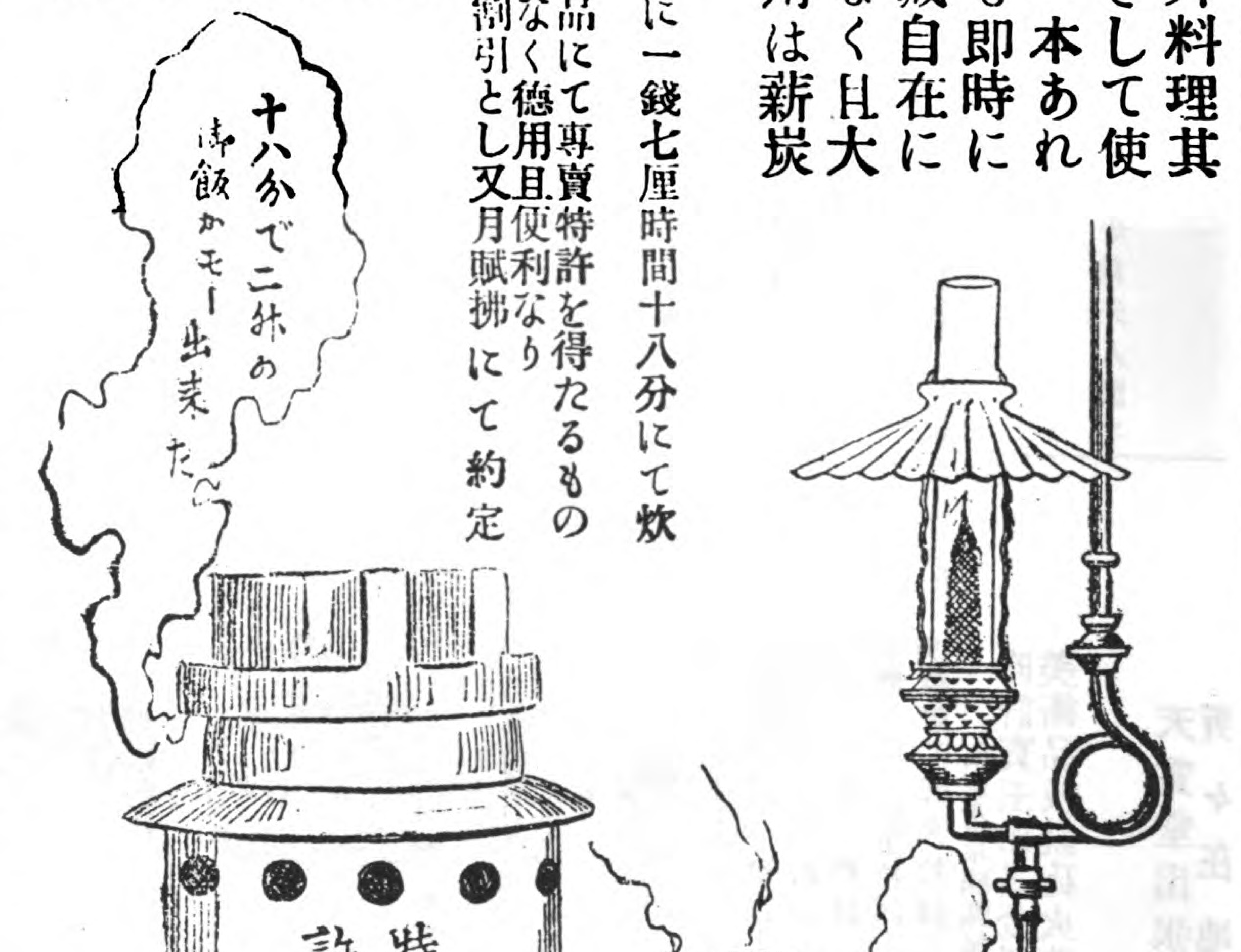
○三升の米は瓦斯代僅に一錢七厘時間十八分にて炊くを得べし

○瓦斯竈は本社の發明品にて專賣特許を得たるものにして瓦斯消費量少なく德用且便利なり

○工事費は前金拂は一割引とし又月賦拂にて約定す

○臺所竈、七輪、湯沸、風呂、並煖爐等に專用の瓦斯代は特に定價の二割引とす

尚各種瓦斯器具は當社構內陳列所又は銀座所等へ陳列縱覽に供居候御立寄御一覧被下度候



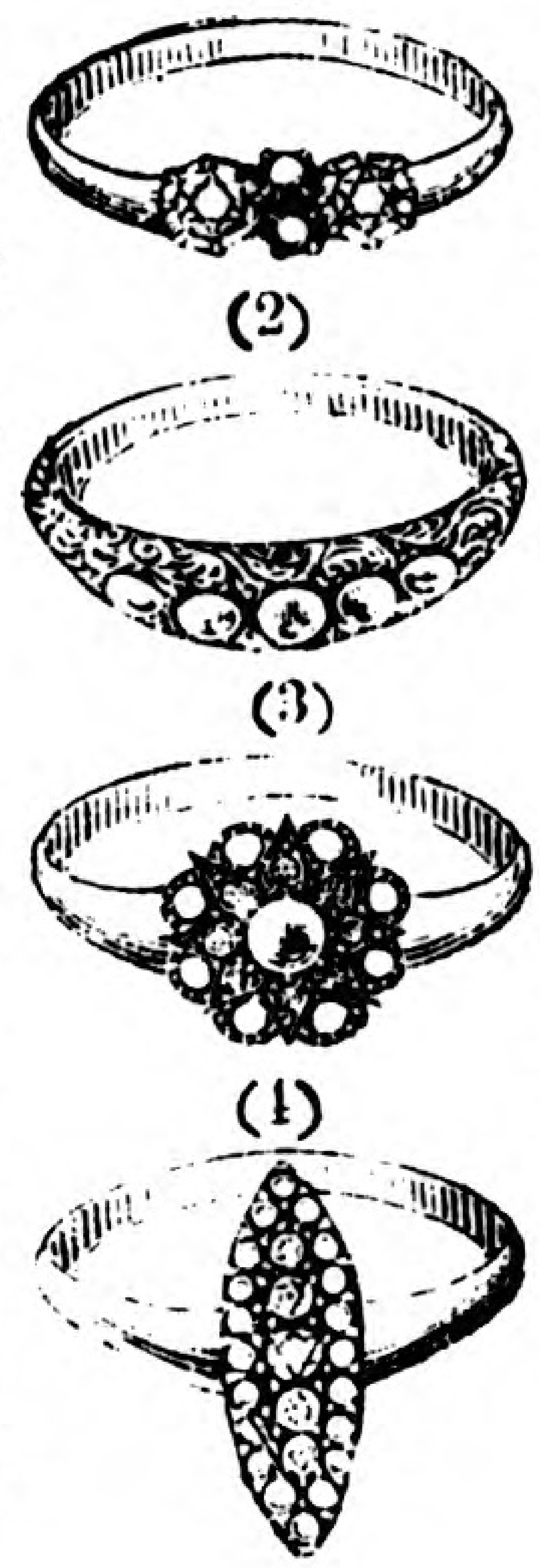
神田區錦町三丁目

東京瓦斯株式會社

電話本局 一三番、五四八番 二三〇三番

御注文の節は女鑑廣告に張りたる旨御附記被下度候

新製 寶石入指環



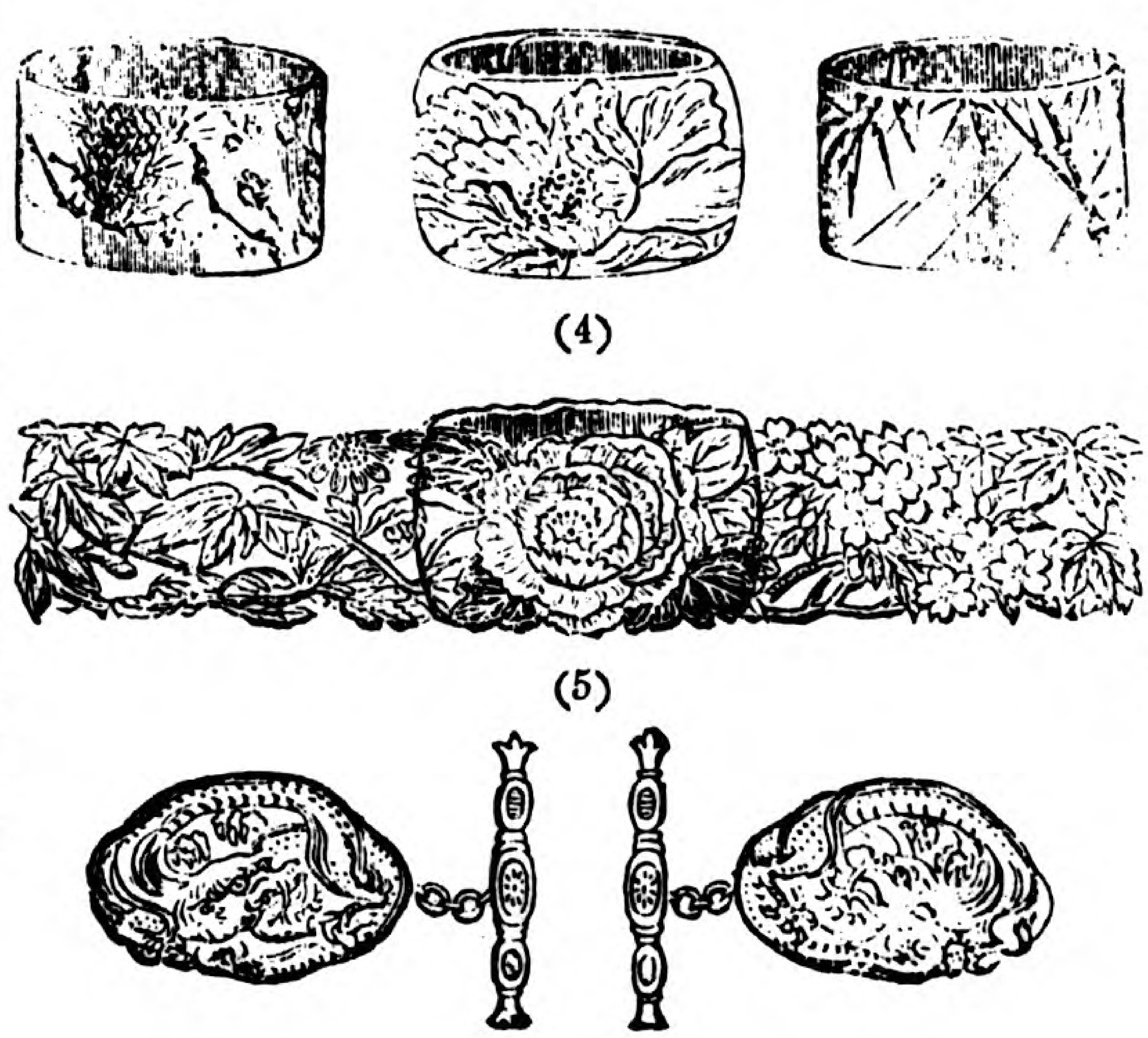
(1) 拾八金製……價九圓六拾錢
(2) 拾八金製……價廿貳圓卅五錢
(3) 拾八金製……價廿三圓五拾錢
(4) 拾八金製……價廿六圓卅錢

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八、十九番地（市外郵送料拾五錢）

時計寶玉類貴金屬商
美術品及銃砲火藥
天賞堂
電話番號新橋（特三三三）（三一五三）

●無料呈贈 天賞堂營業一覽（送費四錢）

新製指環及



(1) 價廿一圓八拾錢……廿二金三匁付片切刻
(2) 價廿七圓八拾錢……同……高刻
(3) 價二拾圓八拾錢……同……片切刻
(4) 價五拾六圓五拾錢……同四匁付……高刻
(5) 價卅二圓九拾錢……十八金三匁付高刻

東京市京橋區尾張町貳丁目拾六、七、八、九、番地

時計寶玉貴金屬商
美術品及銃砲火藥
天賞堂
電話新橋（特三三三）（一三一五三）

天賞堂出張所々在地
東京市神田小川町●横濱市●名古屋市●大坂市●廣島市●熊本市●長崎市●小樽區時

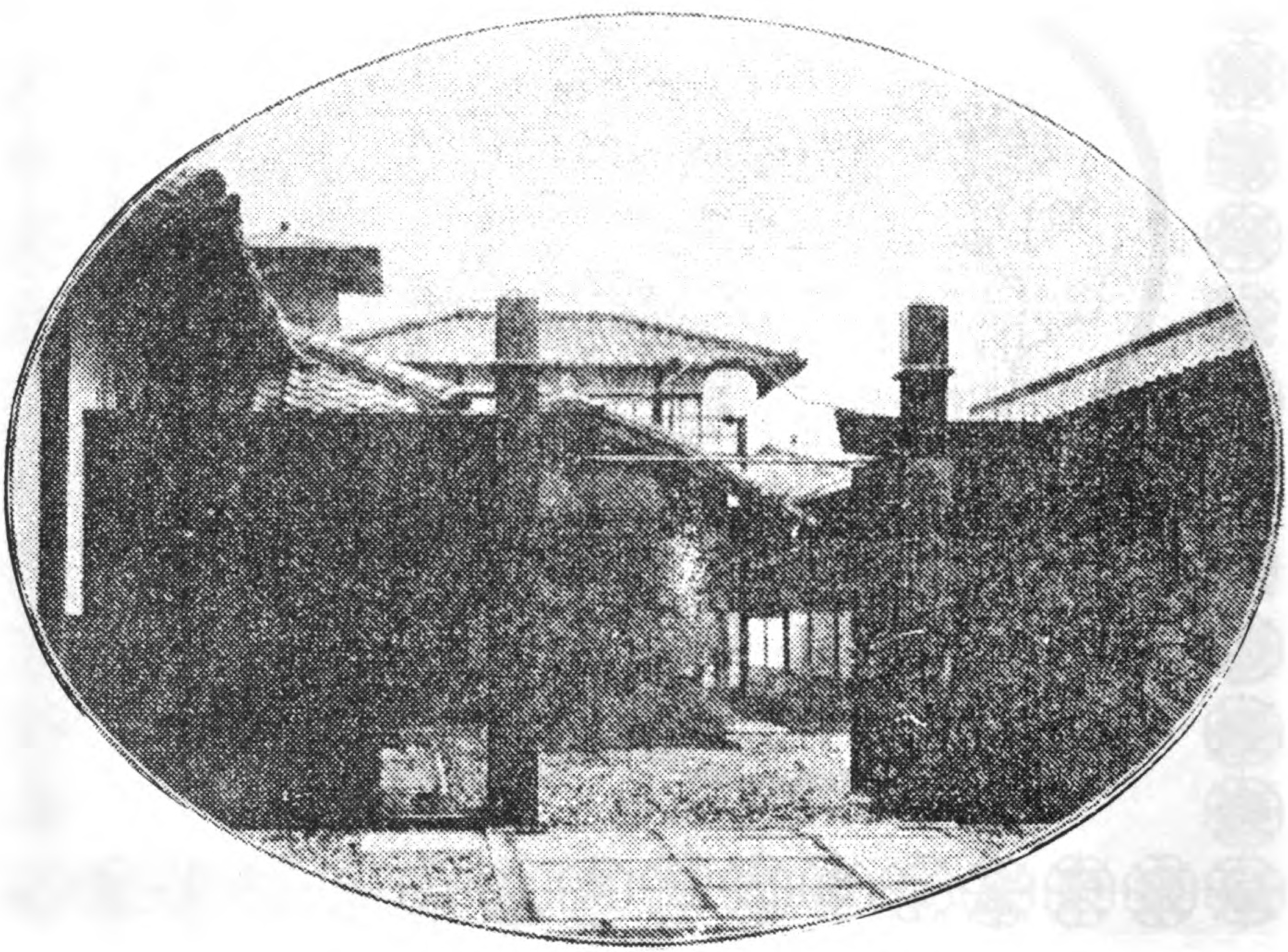


東京師範學校教授　瓜生海軍少將夫人繁子

女鑑彙題投稿優等者



岩谷淺子



京都淑女學校新校舍

池邊義象氏
增田于信氏 合著

紙数四百七十八頁 総クロース金模様入

美姫遺蹟

全壹冊
定價
金壹圓卅五錢

青山紅葉の裏殘烟荒草の間に一片の古碑を搜りてその香魂貞魄を弔ひ以て一代の歴史を説き起したる本書の内容いかに趣味ある讀物ならむ本書は小鷹狩(宇多帝皇后藤原胤子)常磐杜(常磐御前)戀塚(袈裟御前)嵯峨野(小督局)往生院(祇王祇女)法輪寺(横笛)福原(建禮門院)寂光院(同上)鶴岡(靜御前)裾野露(虎御前)浦の烟(尊良親王妃)吉野花(辨内侍)の十二篇に分ち何れも現在の遺蹟よりして過去の歴史を説き凡て裏面に渉りてその詳細を悉したれば啻に十二美姫の詳傳たるのみならず平家の盛衰源氏の興亡南北の爭亂等一貫して書き盡されたれば中古歴史の精しき物として讀まるべくまた地理歴史の參考としても見らるべし況や兩先生の筆まことに艶麗雅鍊たる今更喋喋を要せざれば閨秀諸媛の讀物としては恐くは天下またこの書に超ゆるものなからむ實に趣味ある家庭の讀本なり殊に裝釘の雅致美麗なるは優に坐右を飾るに足るべし乞ふ陸續御購求あらんことを

◎發兌元 東京市日本橋區本町三丁目十七番地
電話本局三〇二(特)本局一六一七
金港堂書籍株式會社

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

毛はへ藥

原名（ヘクチス）乙價貳圓甲價特別製參圓五拾錢二種共送料十四錢●本劑を塗擦すれば皮膚は速に新代謝陳をなし皮膚を改造し毛根を發生せしむるを以て如何なる禿も甲價壹瓶で必ず毛髮發生す●近頃流行の禿頭やけど●できもの●はつほう等のはげ●ふけ●ぬけ●はへ際うすき●婦人こまあたりのはげ其他男女有べき所に毛なきに可驚効驗あり且拔毛を止め毛足を速む

根治確証 わきが

新治療藥 ラピヨン

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を潔清驅逐し惡臭を根底より全滅せしむる作用を有する最新發見の特種の新劑にて大家の醫療も効なき者も必ず根治す輕症は丙價如何程頑固劇烈の難重症も甲價壹瓶にて必ず全治して再發せず丙價七十錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五十錢送料拾貳錢

化學的 色白なる藥

名藥 ハンドコロン溶液

本劑は貴女紳士淑女粹客間に大に高評を博し最新流行の秘方の奇劑にして本劑を塗擦すれば主成分は皮膚のグランド氣孔より藥力に依り吸收せられ皮膚は次第に新陳代謝を盛ならしめ色素を漂白すると共に皮膚を改造するが故に如何程色黑きも壹瓶で白色に變化し●にきび●吹出物をさり秀美艷麗の容貌となるを確證す乙價貳圓甲價特製參圓五十錢送料十四錢

月やくをろし

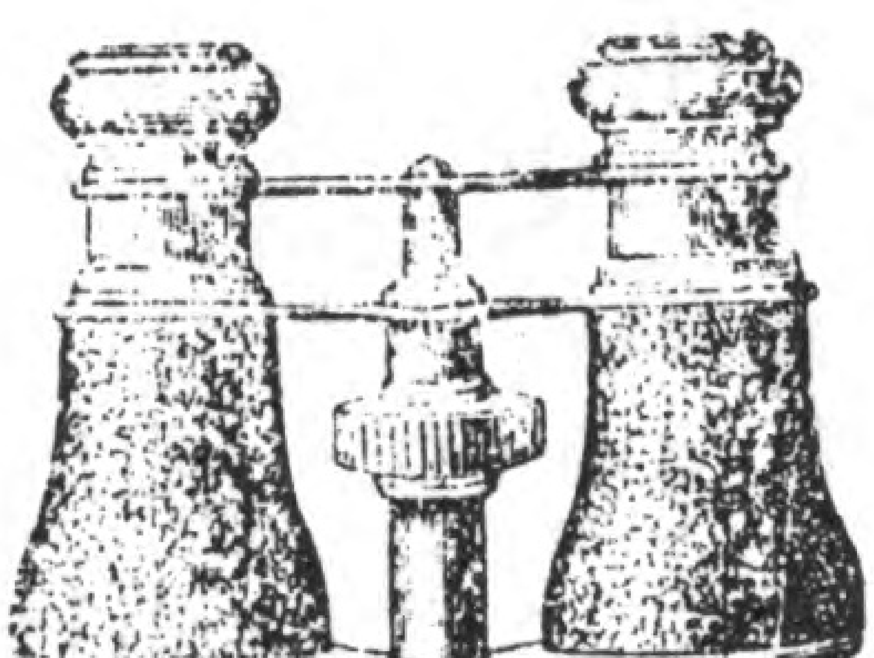
めそるひん此藥は子宮を痛ず如何ほど長き月經とまりも必ずドります又二三月位のは壹劑も用ゆればすぐドります猶五六ヶ月以上のとまり及び血塊には特製を用いよ速に流經す本劑は効能極めて烈強なるも毫も身體に害なし又月經不通月經不順より起る子宮血の道を全治し惡血古血を一掃し驚くべき効驗あり藥價半劑六十錢一劑一圓廿錢二劑二圓卅錢特製三圓五十錢●送料十錢郵劵代用一割增

專賣元 東京本郷湯島四丁目十四 **オリエンタル藥館**

●益々好評!! 益々改良

本品を賣出すや外品の輸入を杜絶せり是れ品質の優るが故也と雖偏に顧客の御愛顧に依ものと深く感謝の意を表せん爲定價三圓の處三百個限 **一圓九十錢** にて販賣（小包料拾錢）市外は爲替銀座局宛

十里保險



●獨逸本玉四枚入ニッケル皮張伸縮器付

體裁は頗る優美と云ふ程でもなけども遠見力の强大にして且つ鮮明なるは實に無比にして最も實用に適するは海陸軍及海員諸君の賞用せらるゝを見ても證するに足るべし

御意に叶ずば返戻諸

東京銀座二丁目十東仲通
電話新橋三千九百六十一 **井上商店**

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

棚橋絢子刀自著

新刊

女道叢話

菊判和裝美本
定價金三十錢
郵稅金六錢

著者棚橋絢子女史の現今女子教育界に於ける位地、名望及學識の如何は世の熟知せらるゝところなり、本書は女史が女子道に對する抱懷を記されたるものにして、女學生は勿論兒女を有する父母の必ず一讀せざるべからざる良書たるはまた多言を要せざるべし。

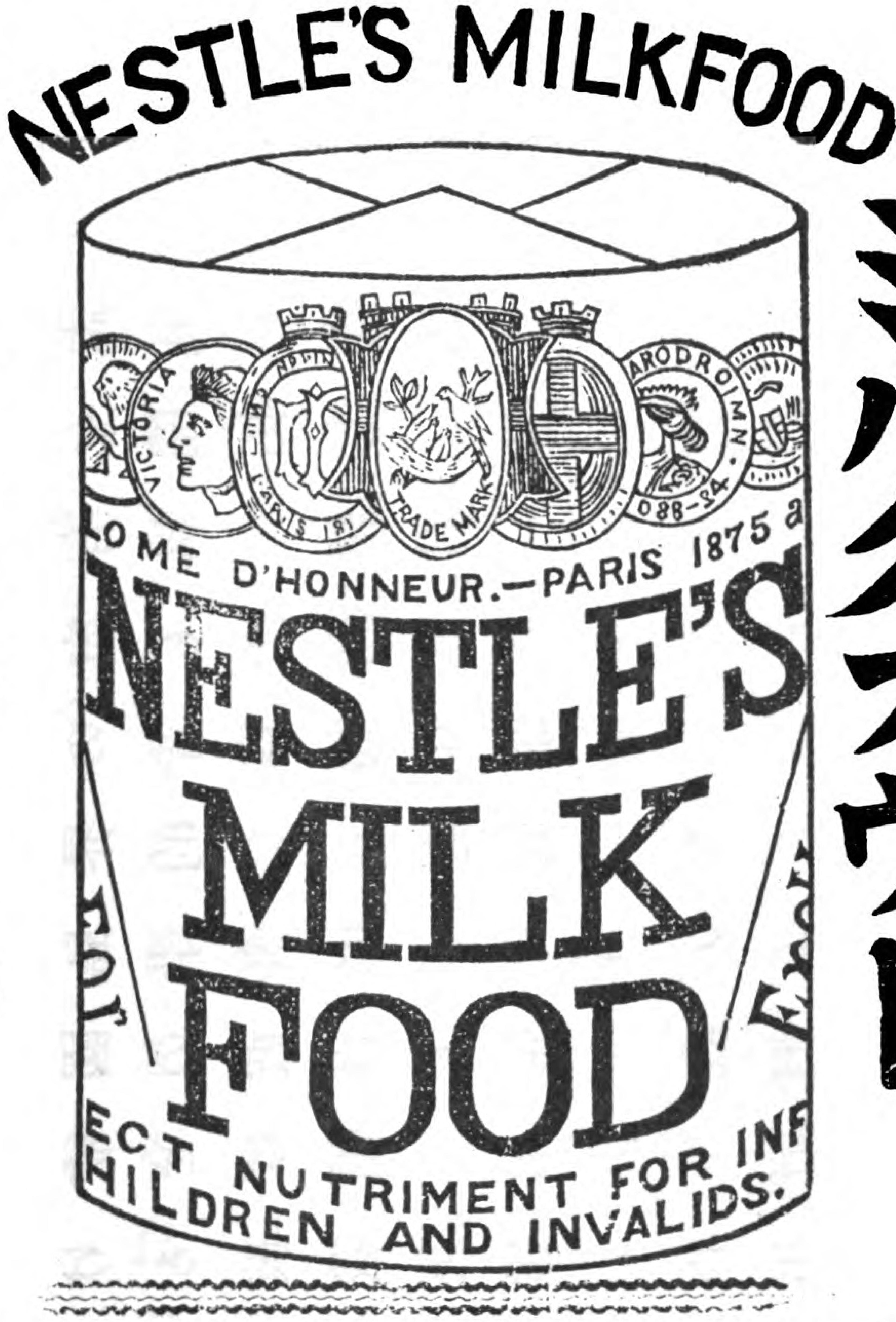
弊社は三輪田眞佐子刀自の『女子の本分』及び『女子處世論』と共に本書を出版して女性諸子に紹介するを以て大なる光榮と信ずるものなり

發兌元　東京築地　株式會社　國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下候度

瑞西國ヘンリーネッスル氏製

ミルクフウド



各國帝室御用品

各國醫科大學大病院

醫學博士ノ賞讃ヲ恭フス

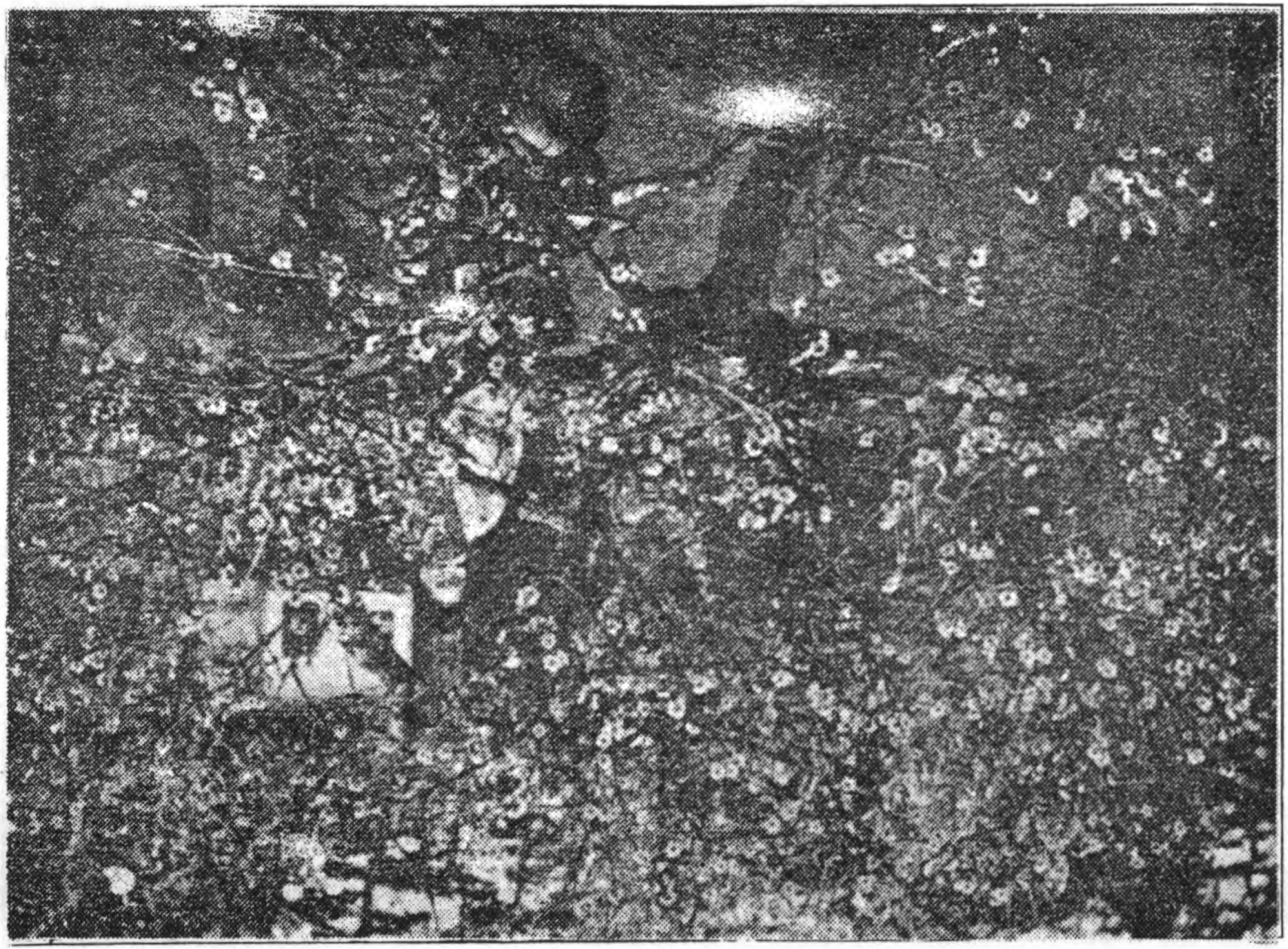
（全國洋食品店及藥舖にて販賣す）

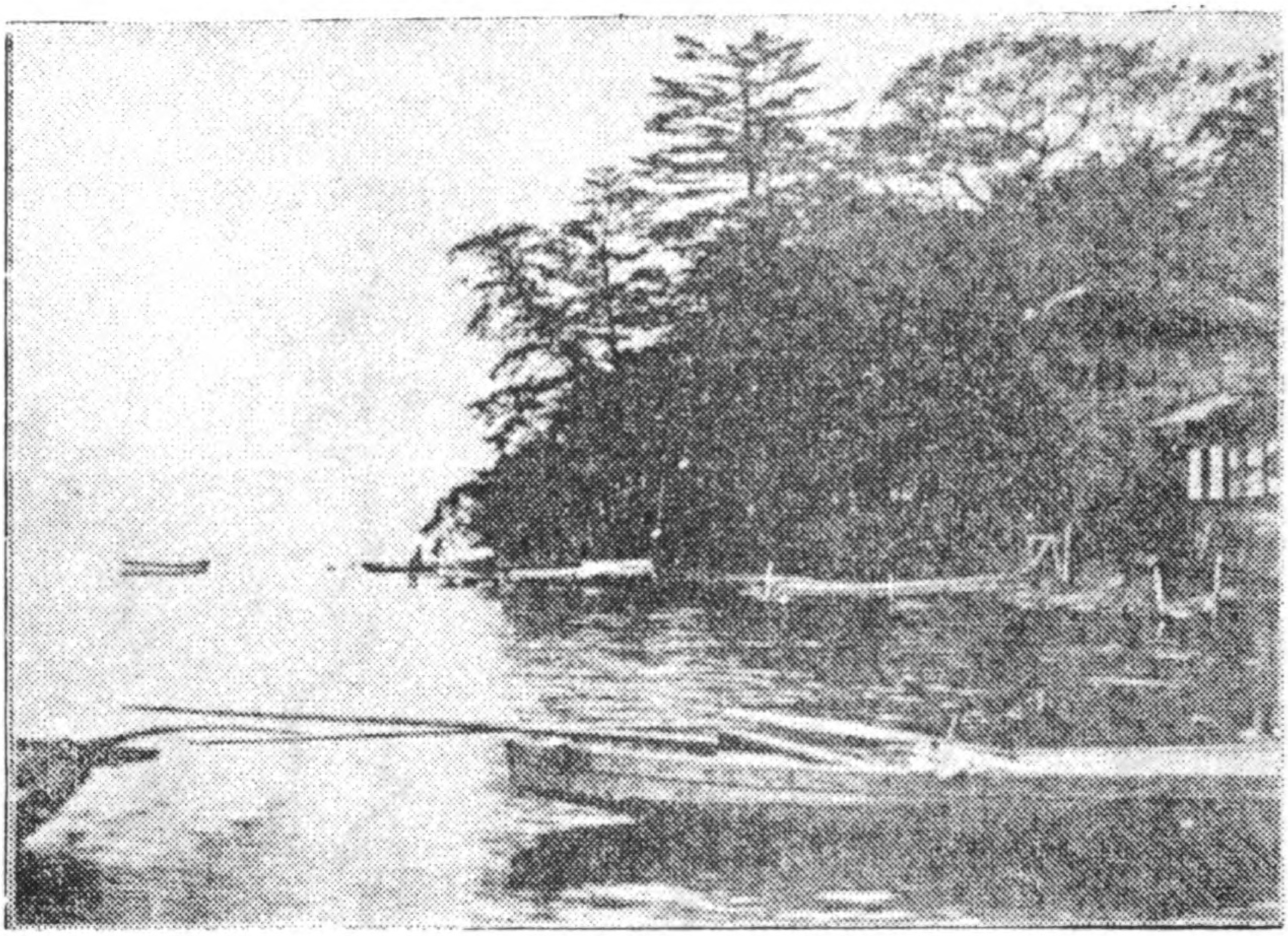
ミルクフウドは麥精と牛乳との調合になり小兒の骨、筋肉を形成するに欠くべからざる蛋白質、炭化水素を含蓄するが故に營養品として尤も消化し易き完美なる食物なり

ミルクフウドは小兒の生育、病者、虚弱者、老人の食物として他に比類なき良品なり

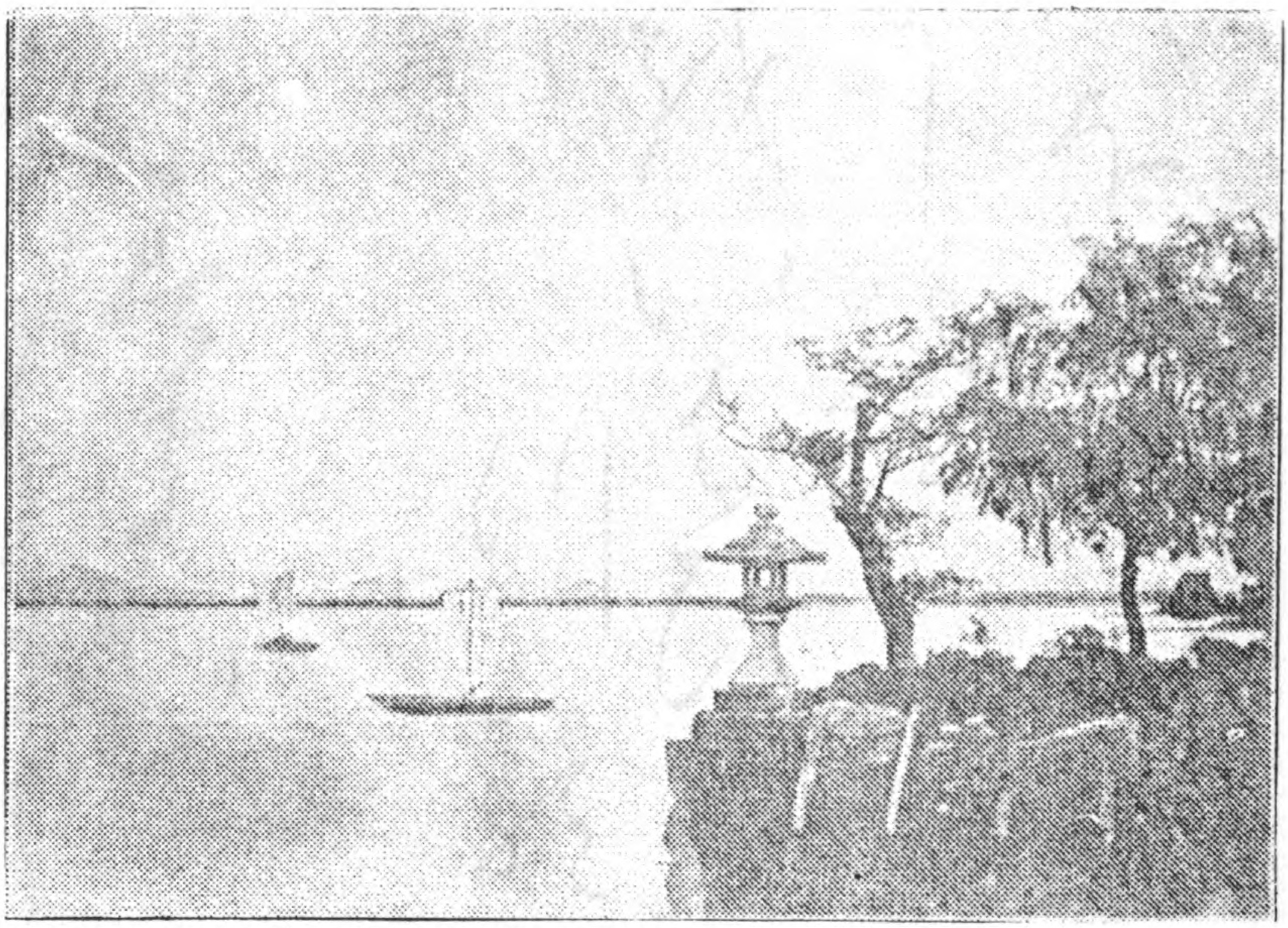
ミルクフウドは完全なる母乳の代用として著名なるものなり殊に母乳の欠乏若くは乳離れの場合に於ては尤も小兒の嗜好に適する最良品なり

武藏木下川梅園

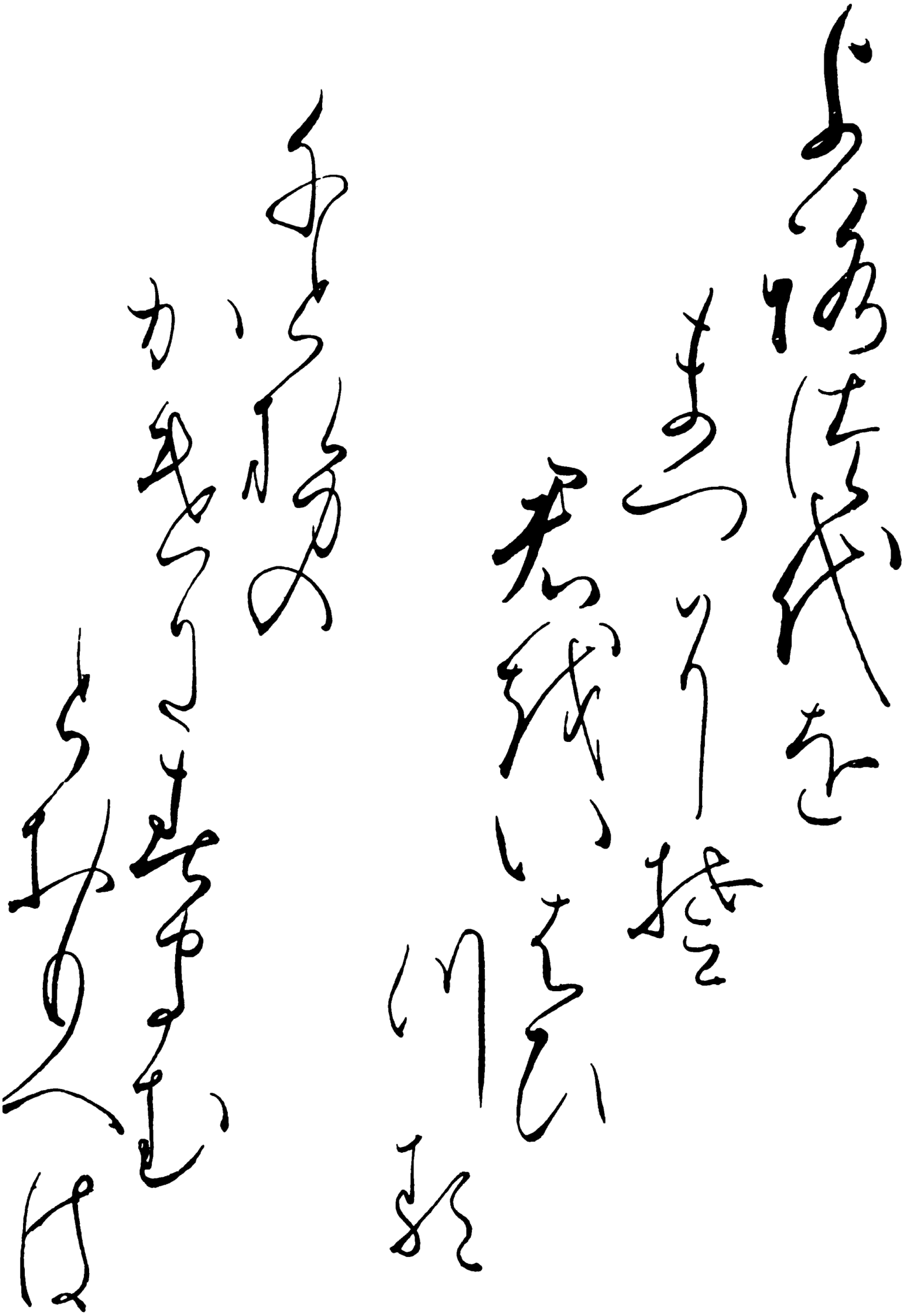




日光中宮祠湖畔



琵琶湖畔矢走の景色



宮里三木技子書

御注文の節は女鑑廣告に據りし旨御附記被下度候

新刊圖書

東京高等商業學校卒業　曾我部純一君著

最新家計簿記

全壹冊

●菊判洋裝紙數百卅頁定價廿五錢郵税六錢

從來家計簿記に關する著書は簡畧に失し或は舊慣に流るゝの怨みなき能はず著者茲に見る所あり高等女學校の家計簿記の敎科書たると同時に一般家庭に於ける主婦の參考書たらしむる目的を以て本書を編成したり其第一章には家政を論じて從來例なき帳簿整理の如何を述べ豫算の編成を論じたる所嚴密にして讀者をして一目の下に家計の要を知らしむるに足るべし加ふるに著者の注意と周到なる論述とは一般家庭の主婦並に高等女學校に於ける家計簿記の參考書として欠くべからざる所以なり讀者此書に據りて傳習せば其家政上に稗益する所大なるべし

露國サマローフ氏著　文學士中内蝶二君譯

日露戰爭未來記

●菊判洋裝紙數百卅頁定價廿五錢郵税六錢

日露の關係愈々切迫して東洋の天地風雲急に砲火旅順に轟きたる今日彼我の勝敗如何は最も興味ある問題なり本書は露國の一士官が日露の戰爭を假想して其勝敗の決を論じたるものにて露國人の觀たる日本と日本人とを知るに足るべく又以て彼の心事を窺ふに足る此の好箇の奇書は讀者諸君の一讀を要すべきものなり

發兌元　東京日本橋本町三丁目　博文館

女鑑
第拾四年
第四號

日本國の女子

日本國の女子が、今日に處するの道は、たゞ勤儉の一事にあるなり。勤儉何故にしかく今日に切なるか、曰く、之を以て報公の誠を盡さんが爲のみ。女性としての國家に對する微衷を致さんが爲めなるのみ。勤儉の美風が、如何なる時にありても、又如何なる處に於ても、よろしく遵守すべき最良の道なることは、言ふまでもなきところなれども、國家事有るの日に際しては、殊に其の必要を感ぜざるを得ず。啻に必要を感ずるのみならず、臣子の分として須らく守るべき道なるを念はざるべからざる也。

勤儉の守るべきは、獨り女子にのみ限るべきにはあらず、男子とても固より之を重んせざるべからずと雖も、一家整理の任務を以て、其の双肩に擔へる婦人にありては、身自ら朝夕家事經濟の責に當るが故に勤儉の二字は自ら其の心得の重もなるものならざるを得ず。殊には國家有事の日に於て、男子の盡す

べき報公の道は、種々樣々なりと雖も、多くは戸外に在りて、國家の事に當り、諸の献身的事業に身を寄するを以て、その勤務とするが故に、一家の事務の如きは、之を顧みるの遑なく、自然に忽諸に附せざるべからざるに至るは、數の免かれざる所なれば、是時に於て女子たるものが最も注意すべきは、家事の整理經濟の事にして、隨つて一家に於ける勤儉の事は、擧げてみな女子の任務に屬せざるを得ず。

勤儉とは、善く其の職務に勤勉するとなり。善く衣食調度其外凡ての入費を節して、假初めにも之を緩漫にせぬことなり。たゞ斯くいふのみにては、至つて易々たることの如くなれども、實際之を行ふに當りては、左かく平易の業にはあらざるなり。古諺に、言ふは易く行ふは難しといふもの、勤儉に於て最もその然るを見るなり。平素生活の極めて低度なる人々にありては、日に勤勉して以て儉約を行ふに非ざれば一家の生計を支へ得ざるが故に、勢ひ勤儉の道を守るを常とすれども、中等以上の社會にありては、かゝる必要を感ずること尠きによりて、諸事概ね忽かせに流るゝのみか、中には奢侈に流れ、贅澤に陷ゐるものすらあるも、人情の弱點としては、自然の傾向と云ふも可なるべきか、然るを今ま一旦にして勤勉節約の道に就き、例へば細君自ら襷をかけ裾を褰げて、その子女を指揮し、朝夕炊事割烹のことを自から行なひ、且つ粱肉の美味を減じ、紅粉の料をも節して、一切無用の費用を省畧するは、豈容易に行ひ得べき業ならむや。左かも男子が危險を犯し、艱難を凌ぎ、或は生命を擲ちて、報公の志を貫かんとする秋に當りては、此の容易に行ひ難き業を行ふは、婦人たるものが、國家に對する惟一の道也。

國家危急の秋に際しては、繊弱なる巾幗の身を以て、猶且つ之を默視するに忍びずとなし、戈を執つて

軍に從ひし例しありて、往々武勇の譽れを後世に傳へしものも少からざれば、忠義の志に厚き吾國婦人のこと丶して、せめて看護婦ともなりて從軍し、軍隊の苦勞を犒らうか、又は晴れの衣裝を賣り、指環、櫛、笄の類を鬻ぎても、軍資の幾分に献じたしと逸る人々も多かるべく、其志洵に嘉ぶべしと雖も斯の如きは以て凡ての婦人に望むべからざるのみならず、婦人の本分としては、靜かにその家を守りて、勤儉の實を擧げ、永久の謀計を爲すこそ、寧ろ當然の責務といふべけれ。

若し夫れ勤儉によりて貯蓄し得たる金穀物品の積んで稍々多大なるに及び、之を國家に献ずるは洵に報公の赤心を表はす所以ならずんばあらざるなり。勤儉貯蓄は是に於てか、一家に對してのみならずして、國家に對する勤儉貯蓄となり、その資益するところの範圍は、極めて大にして、軍國の勤務にまで及ぶものなれば、彼の看護の勞を執らむとて從軍するもの、又は衣服を賣り、寶石を鬻ぎて、軍資に献せんとするものに比するも、決して遜色あるを見ざるべし。

要するに日本國の女子は、耳に砲聲を聞き、目に劍影を認め、兵戈相交はる間に立つも、恐懼逃避せざるはいふまでもなく、又た叨りに進んで輕擧喧噪、一時の名譽を博せんとするが如きことあるべからず。襟度自若、迫らず、騒がず、善く内を守り、家を治め、勤儉の實を擧げて、その夫たり、兄たり、弟たるものをして、國事に盡瘁して、少しも後顧の患なからしむると同時に、勤儉によりて、得たるところのものを擧げて、之を他日國家の用に供せむことを圖るは、今日有事の日に於ける報公の誠を盡すの道なり。國家に對する微衷を致すの道なり。

論叢

男女交際論

高島平三郎氏談

これからは、今迄とは違つて、男女の交際が大に開けて、圓滿に行たいものです。此事に付ては平生能く朋友などゝも話したことですが、先づ私は次の如く考へて居ります。

一時代道德

人といふものは、其時代の道德に支配せられんければならぬものであります。其處で男女交際といふものを道德の上より觀察するに、我國の道德は是迄は、否殆んど二千有餘年の間は支那の道德に支配されて居りました。これは誰れも知らるゝ如く儒教の感化で御座います。隨つて男女交際の道德も亦全く支那的であつたのであります、而して支那の道德は如何といふに、是は洵に甚だ頑固で、且つ窮屈なものがあるのであります。

淳于髡が孟子を困らせやうとして「男女授受不レ親禮歟」と問ひましたとき。孟子が答へますには「禮也」といひ、又淳于髡が「嫂溺則援レ之以レ手乎」と問ひましたとき、孟子は「嫂溺不レ援是豺狼也男女不レ親禮也嫂溺援レ之以レ手者權也」と答へて居ります。併し此答へは隨分苦しい答へのやうに思はれます。支那では此の如くに男女の間を考へて居ましたから、男女七歳にして席を同ふせず。或は手から手で物の取り遣りをせぬといふやうに、非常に嚴格なる男女交際が行はれて居るのであります。けれども、是も孟子時代の古代では必要であつたのです。其時分の人は慾望が單純ですから、自分が慾の趨く所に從つて、直情徑行といふ風でありましたが、それでは社會が亂倫となりますから、ツイ彼の如き嚴格なる男女交際法が行はれたのであります。

此の男女交際が、儒教と共に、日本に這入つて來まして今迄我國の男女を支配して居るのでありますけれども、是は段々壞れつゝあるやうですが、私は如何しても早く之を打壞はして了いたいのであります。

二　自然

男女は到底離れることは出來ぬもので、相合して此世に立つことが、自然に適つたものであります。故に頑固で、且つ窮屈なる支那道德が我國に這入つて來ましても、根本的に男女の交際を其の字義の如くすることは出來なかつたのです。けれども儒教の權力が强かつたため、表面丈は男女七歳主義が行はれて居ました。其處で自然の要求はコソ〳〵と秘密に行はれて、種々の弊害が行はれて來たのであります。白拍子といふものがあります。靜御前などは其一人で、當世では之を藝妓といひます。かういふものゝ生たのは何故乎といへば、秘密に行はるゝ男女交際の必要から來たものと思はれます。けれども、是等のものを相手に、男女交際を行つて來たのは、多くは中等社會で、即はち儒教の制裁の下に苦んで居たも

のでありました。下等社會には別に自然的に我國古來からの男女交際が、行はれつヽあつたのであります。又倘行はれつヽあるのであります。それは古事記などにあります「カガヒ」などの面影を現はしたのです。又は盆踊など種々の男女交際法は、今日まで流行して居つたのであります。

三　必要

（二）結婚の爲

世界中で離婚の多いのは。日本を第一といひます。けれども、かゝることの第一は、餘り喜ばしきことではない第一です。

統計家の調べによりますると、日本では平均一年三十萬組から四十萬組即はち八十萬人の結婚がある。而して其離婚する數は、年々十萬人から十二三萬人である。今日本の離婚を採つて世界文明國のものと比較すると、非常の差であります。

日本	十萬人に付て四萬人
瑞西	十萬人に付て二百八人と八
英蘭	十萬人に付て一人七
愛蘭	十萬人に付て一人一
米國	十萬人に付て四百九十四人と四

此表の如く、日本は世界第一の離婚國民であります。離婚が人生の不幸、國民としての恥辱なることは言を竢たないです。

而して斯く離婚の多い理由は何であるかといふに、それは國民氣風の輕卒其他種々の惡い事情があるに

もよりましようが、特に私は、「見合」といふ結婚取定め式が與つて力あることゝ思ひます。蓋し見合は多く見損うものであります。克く見やうと心懸けて居てもイザ其時となれば、當人の顔は壁に付いてゐるやうに見えて、要領を得ないことが多いのです。ドンナ面皮の厚い男女でも妙く行かないさうですから、面皮の薄いデリケートの人が、對手の顔を見ずに了つたといふやうな事は無理はありません。乍併一生一度の偕老同穴の契を結ぶ人を選ぶのに、コンナ不完全の仕方では到底惡結果、即はち離婚が多いのは當然であります。是は全く男女交際といふことが開けて居ないから、即はち男女で相知り合ふ機會がないから、かゝる見合などいふ窮窟千萬なものがあるのであります。

（二）長短相補ふ爲め

男と女とは、各々長所を以て居ります。相交つて長短相補ふことが、相互の爲に必要であります。今男女の長短に付いて少しく考へて見まするに、

一、男――豪壯男らしい（マンリチス）或は言葉を換へていへば磊落、壯大。女――優美、顔丈ではありません、立居、振舞、言語、動作等。

二、男――獨立の氣象に富んで居る。人に頼らずして一旗揚げて見やうといふ氣象。女――温順、人のいふことを克く聽くけれども、これがドンナ無禮でもチット堪へては困る。

三、男――大局に眼を注ぐ。女――コセ〳〵して居る。

四、男――淡泊。女――執念深い

五、男――進取的。女――保守的、併し近頃は大にハイカラ的の人が多いやうで、反つて女が進取的かも知れません、けれどもハイカラ的は餘り感心しません。

六、男……理屈をいふ。女……信仰する。
七、男……アンビション。女……忍耐して分に安んずる。
八、男……綜合的。女——一つ〳〵細く記憶して往く。
九、男……創作。女……摸擬。
一〇男……向上心に富み。女——現地位に滿足し易い。

右の如く男女特性の相違は、此外澤山ありましようが、先づザットこんなものであります。此兩性相交つて其長短を交換して往くことは、男女各自に其缺乏を補ふ所以で、互に仕合な事と思ひます。

(三)社會改良の爲め

今日社會の風俗が、宜しくないことは皆人の知る所で、殊に宴會などの習慣が宜しくない。そは全く彼の白拍子、即はち藝妓の跋扈に由ることであります。

人間の情として、快樂を盡す上に於ては、必らず異性のものがなければならないです。其處で、朝鮮國では官妓といふのがあります。日本のは民妓とでもいつて可いのでせう。併し何れにせよ、かゝるもの丶其間に周旋する爲に、男子の墮落、家庭の紊亂、婦女の無節操などといふ惡いことが多くなるのです。

然るに今後、自分達の妻君娘などが出で丶、其間に交つて互に歡樂したならば、今日の如き、宴會の惡風はなくなるでありましようと考へるのです。

男女交際は以上に列舉したる如くに、洵に必要な事でありますから、我が現社會は出來得可き丈あらゆる方法で、男女交際を開きたいものであります。然るに中等社會の人々は、兎角古來の習慣を重んせられ或は舊式の武士堅氣といふ風に構へ込んで、其子女の爲に大切なる事柄を等閑に付せらる丶如き傾きのある

のは、甚だ殘念の事でわります。

私は男女交際を開く方法として、三四の考へを有つて居ます。則ち、

●家●庭●的●交●際

奥樣は必らずしも奥に居らつしやるばかりが能ではありませんから、其自分の主人公の朋友などの來られた時は、ドシドシ御挨拶に出るが宜しい。それから御孃樣方もドシドシ知人の御方が玄關に見えた時には、挨拶に出らるゝが、可いのです。

それから又時々自家で、知人朋友親戚などの集會を催ふしまして、而して樂しく話をするといふ風にしたら可いと思ひます。而して其招かれた人方も、成る可く自分の家族、或は知己を誘ふて、行つたら可いと思ひます。

●交●際●會

教師なする人とか、或は世道に志ある人で若い男女に關係の多い人は、自己の監督の下に、毎月二回或は三回、其家宅で男女交際會を開くことが可いのです。

男女交際會を開くなどゝいふと、なんだか一寸間違の起るやうにも思はれますが、男女交際が慣れて來れば決して其んな憂はないのです。反つて交際せないで、時々垣覗きなどするのが、危險なものです。互に交際をして慣れて參りますと、人情自から其間に禮儀が出來て、次第に安心になるものであります。

此外郷友會、研究會など、種々の會合を利用して、男女交際の道を開いたら可いと思ふのです。

乍併男女交際を開けば、世間は屹度誹ります。

又少しは誹らるゝことが出來るかも知れません。されども、ソンナ些々たる事に懸念しては決して今日

の如き割據主義を打壞はすことは出來ないのであります。自然からいつても、現下の必用上からいひましても、男女交際の必要である限りは、此處凡ての少事を打捨てゝ男女交際を開きたいものと考へます。

奢侈論

（佛國新婦人生活の狀態）

リギヨル博士談

私は先きに泰西女子新教育の利弊に就て述べましたが、此度は其の新教育の結果を御覧に入れたいと思ひます、新教育の結果ですから新婦人と名づけて置きます、新世紀の婦人と云ふ意味ですか、將た時世の寵兒と云ふ意味ですか、或は又今迄に例のない婦人を意味するのですか、其邊の事は私が必ずしも詳說しなくとも、讀者は本文を讀んで自ら御了解になると思ひます、新教育の眞髓は豫て申上げて置きました通り、教宗分離、所謂教育より全然宗教を排斥すると云ふ主義に在るので、新教育一名無神教育、若くは無宗教教育と言つても差支なく、隨て新婦人も一名無宗教婦人、佛國では之を『ファーム、モンデエース』と申します、即ち直譯すれば『世俗婦人』と云ふ意味であります、此の如き婦人は泰西就中佛國に澤山御座ります、今後多々益々多くなるでありませう、今茲に名を揭げて一々其の生活を描寫するのは、徒らに冗長に流るゝの憂がありまするから、此の巾幗連を十把一束にして申上げます、其のタイプは皆相

同じでありますから、一以て萬を推知することが出來ます、之を描寫するのは現社會の狀態を知らしむるが爲に餘程必要であります、彼等は現社會に重要の位地を占めて居りますから、頓て現社會の女王になるでありませう、今でも既に女人界の覇權を握つて居ります位です。

偖乃で此の新婦人には一定の家庭はありません、彼等に取りての家庭なるものは、立派に飾立てた『サロン』で御座ります、然し實際には此處に住んで居るのではありません、一時の過客の姿で、輕佻浮薄なる男子、所謂現時流行の高襟連の訪問をうくるが爲に、一時此の『サロン』に待合はせるので、翌日になると別な『サロン』に現はれると云ふ光景で、其の本體は變幻出沒、殆ど端倪すべからずといふ程であります、接見日以外には成程自宅に居りますが、然し是れ宛も旅客が旅舍に休憩すると一般で、彼等は此時に眠食し、此時に化粧するのであります、彼等には朝の時間と云ふほどの朝の時間はありません、終夜交際社會の中に騷で居ますから、晝【正午】頃漸く床を出て、お化粧の爲に少くも二時間を費やします、彼等の所謂朝午前なるものは午後三時に始まりて、此の朝は贅澤品の買物などに用ゐられます、招待附きの御馳走、夜會、舞踏、芝居などは彼等の所謂『ソアレー』であります。

此の如き虛榮、虛飾、贅澤三昧な騷々しき生活をなして、如何にして妻たり、母たるの義務を竭すことが來出るかと云ふに、それは別に珍らしいことではありません、彼等には良人などは有れども無きが如く畢竟有つても無くても宜い、本統に有るのか、本統に無いのか、一人あるか、二人あるか、數人あるか、或は又天下の男子皆其の良人であるか、そも其の良人は誰であるか、其邊の事はつまり玄の又玄とでもいふべきもので、誰も知りません、若夫れ其の子供に至りては、若し之ありとせば、別に厄介な事もない、乳母に托すれば即ち足れりであります。

彼等が念頭に有する思想は唯一つ、奢侈の念即是で全身奢侈に支配されて居るのであります、最早や遠き昔から黄金の渇望が、金錢づくの結婚と云ふものを産出したとは、今日の人のみな知つて居られるところですが、金は即ち現代の神にして、天上天下唯我獨尊、到る處に第一等の位置を占め、萬能の權利を振廻して居ります、故に今日では人が結婚するときには、何某が何孃を娶つたと云ふ代りに、何千弗が何萬弗を娶つたと申します、此の標準によつて、婦人の眞價が大へん下落しました爲に、奢侈で以て務めて其の外觀を美にし、因つて以て其の價額を騰貴しやうとするのであります、此の奢侈は時々良人の破産を來たすのであります、是れは男の方の目算が外れた結果で、大嫁資、大金庫を娶つて大金滿家にならうとした野心が、忽ち天罰に當つて却て貧的に化したのであります、蓋し是れ其の財産が奢侈の辨天樣を養ふに足らぬからであります。

此は併し何にも今に始まりたといふ事ではありません、今を距二千有餘年前の昔、奢侈に名高き羅馬の婦人は既に斯く語つたことがあります『私は確に所天の私産よりも多大の嫁資を持參しましたから、所天が私に金銀、綾羅、婢女、騾馬、乘車等を與へるのは至當ではありませんか』と、爾來たゞ馬が騾馬に代つたのみの事で、其他は依然同一、家政は相變らず立ちません、奢侈は昔も今も矢張り亡國の基である

此の狂的奢侈は他の狂的原因『虛飾』によつて尙一層煽動されます、古來何れの國、何れの代にも貴族制ならぬ社會がありませうか、昔は民族の貴族制であつたが、今は金錢の貴族制とならんとしつゝあるのである、故に天下に尊重せられ、天下に大權勢を揮ふには、金力あれば足りる、他に何をも要しません。『彼人は大金持であります』と云ふ語は、萬事を壓服するに足り、萬人を敬服せしむるに足ります、嗚呼是れ奢侈以て富豪を粧はんとするの風が、天下を風靡して、社會凡ての階級に傳播する所以であります。

されば裏棚社會の婦人、所謂山の神と稱せらるゝ者までが、貴族富家の奥樣と奢侈の競爭場裡に立たんとするの有樣あるのは、何たる狂氣の沙汰でありませう、彼等は實際に於て無き所を、外見上有るらしく示さんことを務めて居るのであります、輕佻浮薄なる婦人は滔々胥率ゐて奢侈に奔り、婦人の榮譽は全く玆に在るものゝ如く思ふて居ります、此種の婦人は、女德が世の問題に上るも、馬耳東風でありますがお化粧が人の批評に上つたら最後、耳を欹てゝ傾聽し、其の品評が少しでも酷なるときは、柳眉を逆立ててお怒り遊ばすのであります、嗟呼淑德も遂に虛飾に及ばずなりぬ、噫

此の如き輕佻浮薄の風によりて、昔の盛代に斯くまで尊重されたる淑德は、今や如何に成りたるやと云ふに、無宗教社會に於て之を見ることが極易しう御座ります、今日では文學が社會の寫眞鏡であると云ふことは、一種の主義格言のやうになりました、處で今日の所謂文學なるものは何であるかと云ふに、なさけないことには、それが重に小說に在るので、然るに今日の小說を見て、女子の淑德を判別したならば果して如何でありませう、尤も私は歐洲の事を話すのであります、就中佛國の無宗教婦人所謂新婦人に就て語るのであります、決して東洋の禮讓に厚き君子國の事を申すのではありません。

小說にも、演劇にも、廉恥節操ある美風は全く消え去つて了ひまして、最早形跡もありません、新婦人大勝利、新婦人萬歲の世の中となつて、金錢の響の外、何事にも無感覺、無神經、冷然として石の如く鐵の如く、醜穢淫靡の狀を有りの儘に示して、恬として耻る所なく、赤裸々たる醜體が其儘顯はれて、實に露骨極まるのであります、時としては敢て美貌麗容ありと云ふ譯でもなく、敢て青春妙齡の花盛りと云ふ譯でもなく、藝もなく才もなく、たゞ赤裸々たる醜體のみで人をひきつけると云ふ魔力があるに至つては罪[illegible]面貌のみを以て人を引付けるものよりも數層惡であります、然るに此の惡の魔力を以て、現社會の女

王となり、一世の頽風汚俗を盛んに煽りたてると云ふは、實に言語同斷、沙汰の限りではありませんか。

嗚呼是れ實に現今佛國婦人社會の現狀である、何事ぞ世の善良なる婦人までが之に化せられ、之に吸集せられて、其の醜風陋俗を摸倣せんことを務め、是れ流行なり、是れ時流なりとて、其の化粧、粉黛、其の言語、動作までを學ばんとして居るのは本氣の沙汰とは見えません、或は斯學を卒業して斯道に成功し其の『モデル』と一視混同されるまで酷似するやうにはなるか知れませんが、其代り榮譽と淑徳とは如何に成りませうか、嗟呼別して婦人の淑徳は遂に如何に成りませうか。

今日歐洲の婦人を見るに、其の語調、其の擧止、其の服裝、其の行歩までが如何にも氣障りになるものの多いのは、是れ何の爲でありますか、他莫し、是れ新婦人の洗禮を受けたからであります、其の信者となつたからであります、少くも其の外觀形體の上に於て然るのであります、彼等は必ずしも皆其心惡化したと云ふ譯でもありません、其の内心案外に正直なものがあるが、所謂新婦人の滔々たる潮流に捲込まれて、遂々此の如くなるのであります、洵になげかはしき現象と謂はねばなりません。

嗚呼是れ實に泰西女子新教育一名無神教育の流行より出で來れる結果であります、今日にして既に此の如くならば、昔時の信仰【勢力】全く消失し去り、所謂新教育全盛の時代とならば、果して如何でありませうか、實に寒心の至りであります。

（をはり）





マリー、レクジンスカ

前田長太

古賢曰はずや『理想の婦人、我之を何處に求め得べき』と、吾人は澆季の今日此言の特に切なるを覺ゆ、美貌の婦人は之あり、貞淑の婦人も亦之なきにしもあらず、然れども婦人最高の理想境に到達して、當時の社會にも、天下後世の女性にも、圓滿なる女德の標本となる可き者、嗚呼實に我之を何處に求め得べき、今日の社會既に之を求むるを得ず、乃ち之を古今東西の史乘に探りて一人を得たり、マリー、レクジンスカは即ち是れ。

婦人は人の子として言ふ可き所甚尠し、然れども當時の皇后として、又た人の母としては、記すべき逸事甚た多し、此の二點に於て婦人は優に理想美の極點に到達したるものと謂ふ可し、然れども傳記の順路として且は世の人の子たる者への慰藉訓戒として、余は先づ人の子としてのマリー、レクジンスカを叙し、夫より皇后としての、又母としてのマリーレクジンスカを紹介せんとす。

〔上〕 王女としてのマリー、レクジンスカ

歐洲十八世紀の歴史を繙く者は誰か同世紀の道義頽敗し、風紀紊亂せるを悲しまざらむや、此時に當りては朝野擧つて腐敗し、社會全體敗德と汚行に病めり、就中在朝有位有爵者此病に冒され、宮庭の如きも腐敗の空氣に滿ち、王者にして臭芬を萬年に遺せる者多かりしは、當代の汚辱と謂ふ可かりし、然れども花の隱君子は往々にして此の如き泥中に出るものなり、皇后マリー、レクジンスカは乃ち此時に於ける泥中の蓮花にして、闔國擧つて敗德汚行の

醜毒に腐蝕せるに際し、后のみは淤泥に染まず、亭々として獨り淨かりき。

后はスタニスラ、レクジンスカの王女にして、一千七百零三年波蘭ボセンに生る、時恰も彼のフレデリック、オグスト王の廢位せられたる時にして、スタニスラ、レクジンスクは乃ち之に代つて王位に即けり、然れども内亂起り、競爭者顯はれて、國の動搖擾亂甚しく、王も屢々蒙塵して苦楚艱險を備さに嘗めたり、是を以て王女マリーも幼少より辛苦艱難の裡に育ち、或時は旅舍の牧畜場に遺失せられたることあり、或時は田家の煉粉櫃に隱蔽されたることあり、有ると有らゆる艱苦を嘗盡したる上、漸くにして父母と共に難を佛國に避くるを得たり、佛王ルイ十五世の時年漸く十歳攝政者國を治め、マリー親子にウイスセンブールの別業を與へたり、然るにマリーの教育は斯の千辛萬苦の裡にも須臾も忽諸に附せられざりしかば、佛國は頓て其の教育の好果を收むるに至りぬ。

王女がウイスセンブールの別業に寄寓するや、多くの王子皇孫來觀し、中にも獨逸の二皇は早く之と婚儀を結ばんことを願へり、然れども王女は父母を遺棄して、我獨り幸運の位地に立つは、心苦しとて之を固辭したるを見れば、王女の如何に孝心深かりしかを推知するに足るなり、其後幾許もなくして極めて不思議なる事實に遭際せり、一日庭園の柵外に聲ありて、哀みを乞ふものありき、王女近きて見れば一貧婦身に襤褸を着け、顏色蒼然として、瘦せ衰へ神の名を呼んで哀みを求む、王女其の貧苦を憫み、所持の金貨一個を與ふ、此時貧婦手を天にあげ、欣び叫んで曰く『嗚呼慈悲深き王女、天必ず御身に福せん、然り、御身は異日佛國の皇后とならん』と、貧婦の希望は中々に實現せらるべきやうもなかりき何となれば當時佛王ルイ十五世には既に西班牙の王女許嫁の約ありて、最早同王女を佛國に遣はし、宮庭の習例を學ばしめたれば、佛國の皇后となるが如きは、王女マリーの夢寐にだも想像せざる所なれば

なり。

然るに其後幾許もなく王より使來りて、スタニスラに告ぐるに佛王ルイ十五世と王女との婚を求む父王は初め戯謔なりと思ひしに、王の敕書を見るに及び、始めて事の熟議に出でしを知り、且西班牙の王女は父王ピリップの許に遐さるべき由を聞き、心大に悦び深く天に謝して曰く『天吾等を記せり、天意の在る所、自ら行はれむ』。

若夫れ王女自身の心意如何に至りては、王女が年頃日頃心中の內密を打明けて睦み語れる者に就て知るを得べし、『此の人生一大事の異象に就き如何に思召さるゝや』と問はれける時、王女曰く『數日來われは一念の我思想を司配しつゝあるを覺ゆ、そは外ならず、佛王のわれに與ふる后冠にして、天の王(神)のわれに供するそれを失はしむるならば、わが不幸此上なけむ』と、嗚呼是れ王女が幼より其の信仰眼を以て天上無窮の榮を眺め、世の金殿玉樓などには毫も其心奪はれざりしを見るに足るなり、宜なる哉王女が後に理想美の最高點に達したるや、婚儀は一千七百二十五年八月十四日ストラスブールの大殿に於て執行せられ、佛王ルイ十五世は攝政者の子を御名代に立てたり、萬事萬端の準備整ふて、愈々將に佛國宮庭を指して出發せんとするとき、父王母公の室に至り、其の膝前に跪きて涙ながらに訣別を告ぐ、父王は其の頭上に手を翳し、天の祝福を祈りて宛も彼の古代の教祖が其の子弟の出發に臨みて爲せるが如き風にて『長へに平安なれ』と言へり。

嗚呼是れマリー、レクジンスカの結婚に至るまでの畧傳なり、吾人は人の子としてのマリー、レクジンスカに於ては、特筆すべき程のものを認むる能はずと雖、兎に角身實際人生の辛酸を嘗て、搖籃の時より早や既に將來最も著しく顯はるべき同情と仁愛との根基を玆に築きたる事は、吾人の特に注目す可き所なりとす、加旃、仔細に王女の幼少時代を檢すれば、敬虔の念と孝順の心は深く其の一身を司配したる事は、王女が獨逸の二皇に結婚を固辭せ

る時と、佛王ルイ十五世と結婚承諾の時との心事言動に徹して明に之を看取するを得るなり、曰く、我身獨り幸運の寵兒となりて、恩愛深き父母をして空しく流寓の身に委するはわが忍びざる所なりと、曰く、佛王のわれに與ふる后冠の爲めに天の王のわれに供すべき榮冠を失はんか、我が不幸此上なしと、嗚呼何ぞ孝順にして敬虔の念の深きや、吾人は尚一歩を進めて王女識見の高さを認むるものなり、今や滔々たる天下の淑女令孃を見るに、或は溫きホームを理想する者あらむ、或は金殿玉樓を至榮とする者あらむ、然れども是れ苦海の女性が將來玉の輿を期すると五十歩百歩の差のみ、時に或は後來公共的事業に從事して、社會の福利國家の隆運に寄貢せんと理想する者なきにしもあらざれども、此の如きは千百人中僅に一二人あるのみ、若夫れ眼を天に向け志を高崇にし、識見直に理想美に切逼せむとするが如きは、蓋し天下一人も之なかるべし、今日の女性に取りては、是れ餘りに高崇に失するなり、彼等は其の餘りに高崇に失するを見て『是れ空想なり』と言はむ、然り、物質主義、現世主義の熾んなる今日に於て、養成せらるゝ女子に取ては、確に是れ空想ならむ、然れども記せよ、理想を現界に於く者は、其の事業、其の名聲決して一代の域を超越するものにあらざることを、又記せよ、古來榮名を天下後世に垂れ、女德の高崇なる師表を萬國萬代の女人社會に示したる者は、孰れも皆是れ今日物質主義に養成せらる女子より見て、空想者と稱せらる可き女性にてありたることを。

〔中〕　皇后としてのマリー、レタジンスカ

貧婦の預言は不思議にも事實となれり、マリー、レクジンスカは乃ち玆に佛國の皇后となれり、貧婦曰く『天必ず御身を福せん』と、果して天の祝福は皇后の身に降り、延て佛國社會全般に及びぬ、佛國の民は初めて玆に玉座の上に女德の高崇なる師範を見るを得たり、而して其德は永く其の家庭に傳はり、子々孫々殆ど家督的に之を繼承したるは、世に

も稀なる珍寳と稱す可きなり、今余は其德の全きを描寫する能はず、唯其の皇后として最も著しく顯はれたる美德の二つ三つを紹介するに止まるなり。
佛國の民が新皇后の身に於て第一着に認めたる所のものは、其の温良慈愛の二德なり、皇后の位に昇るや、早く旣に『善良なる皇后』の稱を得たり、而して后の事績は一々之を立證したり、一日鹵簿と共にウエルサイユの離宮に御行せるとき、一人の田婦日曜日の服〔祭日の服〕を着けて、后の乘れる輦に近づき、無作法にも。
『ア、我皇后樣、私は遠方から來りました、わざ〳〵御身を見るが爲に……何卒、悠然と御身を見せてください』
善良なる皇后は直に輦を停めて、田婦に向ひ、溢るゝばかりの愛嬌をもて、
『それは〳〵遠路甚だ御苦勞さま、さアユックリと御覽なさい』
積て皇后は田婦に其の何れの國より來れるか、其の家計は如何なるかを問はせられ、尙進んで子供の有無、田婦自身に關する事柄等を親しく下問あらせられたるに、田婦も亦遠慮なく、種々の問をなしけるに、后は一々返答あらせられて、温容、一點の微雲をも止めざりき、會見畢りて、
『さア何ですユックリ見ましたか、最早去ても宜しいか、滿足しましたか』
是に於て輦は除々として、前路に向ふ、田婦は其身禮法に嫺はざれども、其心は誠實直摯、感銘の淚に咽びつゝも天に歡び地に喜び、神が此の善良なる皇后を佛國に與へたるを深く謝しつゝ、立去れりと云ふ、此時に當りては佛國良民の心には、神の觀念と王の觀念は、須臾も離れざりき、故に苟も事王室に關するときには『天』若くは『神』の語は、必ず忠良なる臣民の口より出でたるなり。
皇后は居常阿諛諂從を惡み、宮女等の忠言直諫を嘉納せられたり、蓋し平居其の過失缺點を自矯せられんことを心に懸けられたればなり、就中同情慈愛

の點に缺く所あるを太く身に自譴あらせられたり、此時に當りて宮女三人常に后に奉侍せしが、其中の二人は年長けて、始終后の慈愛深く、露程も温顔の曇りたることなきを稱讃しけるに、年少の一人は之に反して、后の身を責むるは至當なり、此點に背くと一再に止まらずと言ふ、年長の宮女等は太く其の無禮を咎め、交々之を叱制せるに、后はいつも年少の宮女に加勢し、

「直言せよ、直言せよ、友の言を聽く勿れ、思ふ所あらば憚る所なく語れ」

年少の侍女は此命に勵まされ、一日異樣の直言を呈したることあり、

『陛下直言せよとの仰せなれば、恐れながら言上すべし、婢女の思ふ所に據れば、陛下は屢々正義に背かせらるゝが如し』

皇后は侍女の心中を知る由もなければ例に依りて温容を以て悔悟の言を仰せられ、

「如何にもわれは時として知らず識らず此道に背く事あり」。

侍女は后の知らず識らず茲に出るにあらざるを證明せんとするものゝ如く、

『否々、陛下は自ら背かせらるゝやに見受けぬ』。

年長の二人其の大胆無謀の言に驚き、太く憤激の容あるにも係らず、年少の侍女は尙其言を繼ぎ、

『御身等知らずや、陛下の語る所は屢々事實に反することを、現に即今語らせらるゝ所も、實際に背けり、斯くまで謙遜したる言を仰せらるゝは、正しく是れ正義に背く證明ならずや」

年長者是に於て初めて年少侍女の心を曉り、其の論理の全式を認め、手を拍つて然り〳〵と喝采しけるに、后のみは獨り不滿の面地なりしは、直言を聞かんと期せしに、意外にも稱讃の辭に出でたるが爲なりき。

仁恩慈愛は古來常に王者の德と視做されたるものなり、后の仁愛の如きは、蓋し母公の仁愛として古來稀に見る所なるべし、富國恤民を以て心中第一の

樂みとせられ、苟も事民の負擔に關するが如きことあるときは、此上もなく心苦しき事に思召されたり、皇后の位に在ること四十三年の久しきに及ぶと雖も、内帑の費用を國費に仰ぎたる事は唯一回のみなりき、合卺式の時即是なり、嗚呼是れ實に其の崩御に當りて一大頌德の辭に價したる美德にして、后の一生中最も較明顯著なるものなりとす、皇后の位地に在りて之を行ふ、決して易きにあらざるなり是が爲め幾克己、幾獻身を要したる幾回なるかを知らざる也、后は幼より外國陶器に對して特別の嗜好ありたれば、遠近の商人等は后の通行の砌などには必ず珍器逸品を陳列するを常とせり、后は御自身の弱質を心得、御好癖の赴く所、必ず玆に陷るを豫測せられたるが故に、之を買求むる事を毎時翌日まで延期するを以て常規とせられたり、翌日になるときは貧民救恤の心が珍寶愛玩の念に勝ちたるが故に、此時容易く平生の傾癖を抑制することを得たりと云ふ、又時としては意に召したる上衣をも買求むることを思止まり、

「われには上衣幾襲もあるに、貧民は肌着も有たぬ者多し」

寒夜御衣を脱して民の貧者を思ひたると同一の美談、吾人は后の意の如何に民を恤むに切なりしかを見て、感佩の至に堪へざるなり。

「われ若し貧民を救恤まざれば、誰か之を救恤れむ者あらん」

此の如く上より模範を示して、貧民を救恤するの須臾も忽諸に附す可からざるを敎へられたり、后通行の時には人を叱斥する警吏は、却つて人を近親する御命を受け、平民の母公として、其の臣民より愛慕せられたるの深き、古來未だ曾て之が類例を見ず、一夜老婦嚴寒に衣食なく、將に飢餓に迫まりて凍死せんとするとき、嘗て皇后の慈愛の深きを耳にしたることあれば、立つて急を告げんとて、ウェルサイユの離宮を指して出發し、皇居近く到達しけるに、后は之を聞て懇ろに之を請じ、其の旅途の疲勞を慰

めんとて、葡萄の美酒を飲ましめ、自ら其の安樂椅子に座せしめて、自らも亦其側の床几に凭り、或は其の旅路の話を聞き或は其の困苦の物語を聞きて太く之に同情を表し、遂に向後一切の世話を引受くべしと語られたりとぞ。

然れども后の慈愛の最も著しく顯はれたるは、其の病人に對せらるゝ時なりし、彼の百疾百病の横はりて、人生悲慘の眞相の明に露出せる慈惠病院などに臨御せらるゝを以て無上の樂みとせられ、時に宮庭の臣に向ひて仰せらるゝには、

『人生の眞相を學ばんが爲に、屢々茲に通學するは最も有益なる學問なり』

かゝる決心なれば后自ら院に於て病人を看護して之に奉事し、時に顯榮の身を屈して病人の履を穿くをたすくることもありしと云ふ、嗚呼何ぞ夫れ謙遜の深きや、若夫れ瀕死の病人を見るや、有らゆる慰藉を加へ、

『一生一死は人生の常、自然の約束、われも亦設令皇后の身なりと雖も異日爾等と同じく病人となり爾等と同じく死を免れざるべし、世を去ること慘は慘なりと雖も是れ亦天意の遂行に服する事と思へば幾分の慰藉なくばあらず』

其の病人の側を立去るに臨みては、之に金圓を賜はるを常とすれども、其の下賜の法極めて巧妙にして、往々御袖の下より病者の手に入るやうせられたれば、從者と雖も之を認むること能はざりし、若し病者にして之を公にせざりせば、幾多の恩與は永く人知れずありしならん、嗚呼是れ右手の爲す所左手に之を知らしめざるの法、世の慈善を誇る僞善の徒の永く解する能はざる所なり、一日病者の中に后に語る者あり、

『アヽ陛下、余が今の境遇に於て、要する所のものは金圓にあらず』

后曰く、

『然らば爾の欲する所を語れ、われ或は爲す道あらむ』

病者曰ふ、

「ア、陛下、陛下若し我が爲に一小祈願を天に獻げ給はらば、我はよろこんで瞑目す可し」

后はいへり、

「わが信用天に於ては大ならじ、然れどもわれは必ず爾の爲に祈らん、安心せよ」

嗚呼后の仁德も是に到りて盡せり、至れりと謂ふ可し此の如き美談逸事を擧ぐれば、其數多くして日も足らざらんとす、余は后の美德を一々描出する文筆を有せず、后の德は余の筆に取りて餘りに光り輝けばなり、故に余は皇后としてのマリー、レクジンスカに就ては、二三の最も顯著なる美德の一斑を示したるのみにて、其他は皆之を省きぬ、讀者は余の不充分不滿足なる記事を見ても、庶幾くは一以て萬を知るに足らんか、請ふ是より余をして人の母としてのマリー、レクジンスカに就き少しく語らしめよ。

〔下〕 賢母としてのマリー、レクジンスカ

后には二王子八王女あり、二王子の中一人は夭折し、八王女の中五人は空く青春妙齡の時に散りぬ、然れども生存中は孰れも皆母に愧ぢざる德操あり、長女ハンリエットは二十四歲にして薨じ、最も母の美德を傳承したるが如し、同女も亦貧苦の者を見るときは、惻隱の心禁じ難く、年五歲にして早や旣に同年の貧女に與ふるに物なく、自身の衣を脫して之に與へたりと云ふ、固より冗費の何物たるやを知らず、又與ふる事の如何に樂しきかを知らざりせば、物を所持する事の樂しきをも知らざりしなるべし、人若し王女より受け得たる恩を謝すれば、王女は之に答へて曰く、

「人若しわが恩惠を施す時の愉快如何ばかりなるを知らば、わが爲せし所の事に就き、斯くまで謝意を表するにも及ぶまじ」

其の方正なることも亦其の慈愛と並行したり、年甫めて十二歲、王弟十歲の折、之に語りて曰く

「吾等は日々阿諛諂從者に圍繞せられて、眞を聞くこと能はざれば、今後は兄弟相互に諫め合ふ事

とせん、われ汝の過失を戒むべければ、汝も亦わが過失を戒めよ。』

嗚呼僅か十歳前後にして、斯く感心すべき言行あるは、そも誰か之を敎へたる者ぞ、蒔かざる種子は實らず、賢母マリー、レクジンスカは啻に子女の形體を生みたるのみに止まらず、其が道徳をも生みたるものなり、王女ハンリエットの慈愛方正なりしは直に是れ賢母の仁愛と正義との結果にあらずや。

王國將來の後繼者たるべき者は、后の最も其徳を讓らんと欲したる王子なりき、而して后の希望は遂げられたり、人は后の斯く獨語せるを聞けり、

『われには王子一人となれり、然れども之をわれに與へたる天は、之を養成して賢者にし、徳者にし仁者にせんことを欲したるものゝ如し、母ながらも希望外の良兒を得たるを悦ぶ。』

母の口より出でたる語なりとは云へ、事實は之を證して其の虛ならざるを示せり、何となれば王子は實に王者たるの資格特性を悉く備具したればなり。

但だ一の缺點ありしと人は曰ふ、然れども其の缺點も亦珍らしく矯正せられたり、何ぞや其の缺點とは?、力學の志に缺げたる事即是なり、然るに幸にして良師傅あり、力めて學に志さしめたるが、督勵の餘りに激甚かりしこともありたりと見え、一日王子師傅に語つて曰く、

『我は未だ曾て世に王子を强服せしむること、我に羅甸學を學ばしむるが如く甚しきを聞かず、師よ、請ふ眞に語れ、眞に然らずや』

師は乃ち胸中の眞理を披瀝して之に語りぬ、嗚呼是れ萬古味ふ可き名言なり。

『臣は殿下に眞を隱蔽せず、殿下の言は眞に然り、歷史之を立證しつゝあるを如何せむ、然れども殿下請ふ記せられよ、庸暗の王子是が爲に多々益々多きことを』

王子は師の直言をきゝて、深く其心に銘刻し、庸暗の王子の語を以て、終焉の恥とせり、此恥を避けんが爲には、萬難を排し、萬事を忍びたり、而して

其の成効も亦著大なりき、蓋し春秋高きまで力學篤行して、範を下民に垂示したり、王の言に曰く、

『王の其の國家に於ける、父の其の家庭に於けるが如くせざるべからず一國の王たる者は其の臣民の風紀を振肅するが爲めに嚴父の爲を學ばざるべからず、是が爲には模範は命令に優れり、民艸は始終上の風に靡く者なり』

又曰く

『我は確信す、羅馬帝國の衰頽の原由となりたりと云ふエピキユールの倫理說は、如何なる邦國に傳播するも、必ず其の邦家の衰滅を來たすものなることを』

嗚呼此の思想は何れに原由するものなりや、勿論良師の敎訓も與つて力あることながら、賢母の德操は尙一層多大の寄貢をなしたりと謂はざるべからず古代の大人物を歷視するに、多くは皆是れ母の敎育に出でたる者なり、泰西に一書あり、題して『大人の母』と云ふ、書中古今東西の偉人豪漢は孰れも皆其素を母の家庭に養ひたるを說けり、マリー、レグジンスカ母子の如き、是れ其が好個の一例にあらずや、吾人は斯の賢母ありて、斯の賢王子あるを見るなり。

吾人は此の賢明なる母子が、敗德汚行の最も甚しき世紀に顯出せるを見て、尙一層感嘆する者なり此時に當りては宮殿の腐敗特に甚しく、君臣上下擧つて驕奢淫逸に流れ、王庭の如き汚波濁流の渦中に捲込まれたるにも係らず、此の賢明なる母子のみは、亭々として淤泥の中に潔出し、父王すらも、佞臣と共に逸樂に耽りて、惡臭を內外に放ちしに、此の賢明なる母子のみは、令聞天下に洽く、芳名を後世にまで殘すに至りたるは、全く是れ賢母の德操其の子女に傳はり、母子相共に一世の濁流に抵抗して立ちたるに由らずんばあらざるべし。

民衆の中には比較的に健全なる者ありて、孰れも輿望を賢明なる王子に屬し、將來佛國の明主と仰がる可き者は必ず王子ならんと侍望せしが、不幸にし

て未だ王位に即かずして薨せり。
史に傳ふ皇后日夕天に祈り、若し王子にして後日王位に即きて、佞臣等の爲に腐蝕せらるゝが如き事ありとせんか、われは寧ろ早く其死を希望するものなりと、而して其の祈願は天に到達したり、王子は一千七百六十七年十二月二十日を以て汚波濁流の世を去りたり、而して其の翌年一千七百六十八年六月二十四日を以てマリー皇后も亦其後を慕ふて逝けり。
此間に父王と宮臣等の驕奢淫逸は層一層甚しくなれり、是に於て世に遺れる年少の王女は、父王の歸誠と王國の救拯を祈らんが爲に、身を修道院に投じ、一生苦業難行を執りつゝ、日に旻天に號泣して哀を乞ひければ、天も其願を聴きたりけん、在天の母や冥々の裡に加護したりけん、父王は遂に悔悟遷善して、前生國内に流したる罪惡の害毒を洗滌したり、唯其の悔遷の餘りに遲かりしぞ遺憾なる。
記して爰に到れば、マリー、レグジンスカの德操婦人としては殆ど其の理想美に到達せりと言ふも、決して過褒溢美にあらざるなり、宜なる哉生きては『善良なる皇后』と稱せられ、死しては佛國の民より永く『聖后』として紀念せらるゝことや、后は實に王女としても、皇后としても、賢母としても、各々其の位地境遇に順應して女德の圓滿なる域に進み天下の子女たる者にも、家庭の母たる者にも、將た又在上のやんごとなき方々にも殆ど理想境の高標美範を示したるものなり、是れ余が理想の婦人として其の性行閲歷の一斑を記したる所以なり。〔をはり〕

古英雄と文學

文學士　濱田紅於

凡そ人間は二様の生活をして居る、即ち一は肉體生活で、その材料は云ふまでもなく飲食である、二は精神生活で、その材料についてはいろ〳〵議論もあらうが、私は文學藝術であると思ふ、さて人間の

品格を高尙にするものは、種々の手段があらうけれども、議論を離れ、理窟を外にして、知らず識らずの裏に、人間を高尙にするものは文藝に如くものはあるまい、試に古今東西の大家の傑作に親んで御覽なさい、文學にまれ美術にまれ、熟讀或は玩味の裏、おのづからその方に惹きつけられて、魂は黄塵の中を離れ、汚れた心は消え去つて、無我無中になられる、古來英雄豪傑と云はれる人々を觀ても、文藝の趣味を解して居るものは、その偉大の度も増し、高尙な人品は、後人をして欽慕の情を起さしめるやうに思はれます、たとへば楚の項羽は隨分勇猛の人であつたが、あの力拔山兮氣蓋世の詩を讀んで見ると、勇猛一邊の人でなく、偉いと思ふ念と共に同情の念も起るのである、魏の曹操、これも機略縱横の名將で、その行爲については勿論缺點もあるが槊を横へて明月にうそぶき、月明星稀烏鵲南飛と賦したと聞けば、コセ〳〵した小丈夫でなくて、胸中には洒々落々たる閑日月を蓄へてゐたのが分る、我國でも上杉謙信がある、能登七尾の城攻に、霜滿陣營秋氣淸と歌うた時はその、精神全く塵の世を脫却してゐたらうと思はれる、要するに文藝は人間を慰め樂ましめ、閑雅にし高尙にするものである、近頃美育と云ふことが唱へられるのも、多分この理由であらう、私は今一人我國の英雄を引出して文學談を少々して見ませう、英雄とは即ち豊太閤を云ふのであります。

豫めお斷を申しておきますが、豊太閤の文學については、史學雜誌第拾四編第五號に「正確なる史料に見えたる豊太閤」と云ふ題で、三上文學博士の詳細なる口演が載せてある、讀者諸子はこんな專門雜誌とは、お緣の遠い方であらうと思ふから、それを御紹介旁々お話を致します。

凡そ我國に於て、第一流の人傑は誰であるかと云つたら、豊太閤も必ず十本の指の中に數へられる、乍併太閤の生涯は概ね戰爭を以て始終して居る、その太閤と文學たとへば、提燈に釣鐘の如くである、さ

りながら三上博士の云はれる如く、戰國時代でも毎日〳〵朝から晩まで戰爭の有つたのではあるまい、その間に修養すべき餘裕は必ず有つたらう、試に同時代の群雄と文學との關係を調べて見ると、北條早雲は御承知の通り、匹夫から起つて、關八州を征服した武將であるが、早雲寺殿二十ケ條に「歌道なき人は無下に賤しきことなり、學ぶべし」とあつて、現に早雲の作つた出陣千句と云ふものが殘つて居る、その第三子長綱入道宗哲、これも文學故實に長じてゐたことは、その覺書と云ふものでわかる、孫氏康は武將にして文才があつた、その著武藏野紀行は僞物としても、他に證據がある、上杉謙信のことは前に申した通りです、武田信玄も英將であつたが、信玄家法に「歌道可レ嗜事」の條がある、その外毛利元就も發句を作つた、徳川時代に出來た武道初心集と云ふ書物にも、文雅の篇があつて、「學問は勿論其餘暇には、歌學茶の湯など、少しづゝ相心得罷在度事」とある、又清正記に加藤清正の七ケ條と云ふものが載せてあるこれは、僞物であるが、當時の武家風俗の參考となる、その中に、「左文右武古之法也、不レ可不二兼備一矣」とある、かくの次第であるから、豐太閤と雖も、文學と風馬牛ではなかつたらう、併し以上は理論であるから、太閤の境遇を考へんければならぬ、當時諸大名の中に歌よみが少くない、伊達政宗、蒲生氏鄕、細川幽齋の如きはその白眉であつた加之太田和泉守牛一、大村由己の如き、文才濶如たる人が御祐筆であつた、況んや太閤は官位人臣を極めて、雲の上人の御交りも繁かつたらうから、三十一文字の心得は境遇上必要であつた、併しこれも尙理窟である、又一歩を讓るにしても、御祐筆共の代作でないかとの疑がある、勿論折々は添削も受けたらうが、その作歌の全體が悉くかくの如しとは云はれまい、この疑を解くために、正確な證據を示します。

こゝに細川家記といふものがある、これは肥後國熊本の舊藩主細川氏の記錄で、貴重な史料であります、

が、その家記によると、太閤は和歌を細川幽齋に學ばれたとある、なんと動かない證左ではありませんか、又一つあります、太閤と同時代に、木下勝俊と云ふ人がある、これは肥後守木下家定の長子とも云ひ、或は太閤の愛妾松丸殿の所生だとも云ひますが孰れにしても太閤の親戚である、この人は幼少より太閤に近侍して、遂に若狹國小濱の城主に封ぜられ豊臣家亡滅後は封を奪はれて京都東靈山に退隱し、長嘯子と號して餘年を風月に托し、慶安二年八十一歳を以て卒したと云ふ、此長嘯子の著「さよ衣」に曰く「太閤はやまと歌好ませ給ふおとゞにて、春秋の色に深から思ひしみ、折につけたる御口すさみ、こら世にとまりけん、まとに月花もおもひ起すべきときなり」とある、かく正確な證左があるからは、太閤に文學なしとの決論は下されぬ。

これで太閤は文學の才があつたことが分つたが、さてその作句作歌を舉げなければ、折角の說明も烏有に歸する、勿論その作はあまり澤山は殘らない、三上博士の御口演によると、日下寬氏編豐公歌集に五十首許、他の諸書に散見するものが二十首程で、總計六七十首の和歌があるそうです、その他の文學のことは、しばらくお預りにしておきまして、その例を示しませう、これも多くは三上博士の口演に載せてあります。

打出てゝ玉津嶋より眺むれば
　みどりたちさふ布引の松

これは紀伊那賀郡根來山大傳法院の衆徒が、土佐の長曾我部元親と通じて、大坂を襲はうとしたから、太閤は天正十三年三月を以て親征した、その途上紀州和歌浦に至り、山海の明媚に感じて、忽ちこの歌を作つたのです。

忍びつゝ霞と共に眺めしも
　あらはれけりな花の木の下

天正十四年春の頃、太閤參內した時、禁庭の櫻、今を盛りと咲き亂れてゐたから、太閤その美觀にひかされて去りもえやらず、しばし東風に立ちつ

くして賞してゐたのを、後陽成天皇遙に見そなはし給ひ「へだちより色香も殘る花さかり、ちらて雲井の春や經ぬべき」の御製を、櫻の枝にそへて賜はりました、太閤感佩九拜、即時の御返歌が即ち此れ、その間髮を容れず、祐筆共の添削を經た筈かない。

時ならず櫻の枝に降る雪は
花をおそしとさそひ來ぬらむ

天正十六年の孟春、太閤洛外北山に鷹狩の際、龍安寺に憩はれた、庭前の絲櫻がふゝみながらも、寒威のために咲きやらず、折から春の泡雪霏々として至つた、宛も美人が簾の雨に顰む風情、この歌は其時太閤が即興偶成の作である。

聞きしより眺望にあかぬ嚴嶋
見せばやと思ふ雲の上人

天正十五年三月、九州征伐の際、太閤は大阪を發して、悠々山陽道を下向し、安藝の嚴嶋に至りて逗留數日、島山の光景を賞して、和歌會を催し、

躬らこの一首を詠じ、扈從の將士にも唱和せしめた、英雄の胸中はかうしたものである。

千歳をもたゝみ入れをく箱崎の
松に花咲く折もあらばや

これは同年六月九州平定歸阪の途中、筑前箱崎の社頭に軍を駐め、博多灣より朝鮮の海上を望みしが、かねて抱ける雄志は勃然として湧起し、感慨無量、發してこの三十一文字となつたのである、松に花咲く折と云ふ句は味ふべし、この實物は私の實見したもので、一枚の奉書に、太閤の歌二首大村由巳の歌が一首書いてあつて、下に松といふ字がある、多分太閤の雅號であらうと思はれる、手蹟は慥由巳であつた。

萬代の君が御幸になれ〳〵む
みどりこふかき軒の玉松

太閤京都内野の地を相して、聚樂第を起し、天正十六年四月十四日より、三日間、正親町上皇、後陽成天皇の行幸があつた、十六日には雨天であつ

たのだ、和歌の雅筵を開き、公卿將士皆詠進した
この歌はその時の作で、豐鑑に「春日待行幸聚樂第、同詠寄松祝和歌」とあつて、秀吉以下四人の歌がのせてある。

吉野山誰とむるとはなけれども
今宵も花のかけにやどらむ

かえらじと思ふ心を入相の
鐘こそ花のうらみなりけれ

ともに文祿三年二月、吉野山觀櫻の際の作である前者はかの薩摩守忠度の「行くれて云々」の歌と比肩して遜色はあるまい、後者は元弘の昔村上彦四郎義光が忠義の芳名を遺した藏王堂に於ての作である、頃は恰も朝鮮征伐であるに拘らず、その胸中は悠揚として迫らない、風聲鶴唳にも膽を冷やす卑怯者とは譯がちがう、

埋火のあたりはなれぬ夜はふけて
昔かたりそ月にくやしき

年代は明ならず、埋火を擁して夜話に耽り、更たけしに驚いて、この作あり。

花に見し春や昔になりぬらむ
冬木の櫻もみち散るなり

櫻の葉霜に飽いて、金風のまに〳〵二片三片、この肅殺の景は太閤の膓に泌て、終にこの文字となつた、蓋し「月やあらぬ春や昔の春ならぬ」の轉化であらう、

かくの如く太閤は可なりの歌人であつた、即ち美的趣味を解した英雄であつた、故にその人品も高尙で舒暢で放膽であつた。

是に於て、私は天下の人々特に讀者諸子に向つて文藝の咀嚼、美的趣味の享樂をすゝめるのである。

〔をはり〕

學藝

庚子道の記評釋（一）

文學士　境野天華

はしがき

作者は白拍子武女、蓋し記行文中の上乘と云つて好い、才筆、實に才筆と云ふも不當ではあるまい。平春海は板本の首に序して、如是云ふ贊辭を呈して居る——此の道の記を見るに、到底、並一通りの女の手で書けるものではない、今時の女に此の位達者に上手に書ける人があらうか、彼の昔の蜻蛉日記の作者、紫式部日記の作者の匂ひある筆致、又は更科日記、十六夜日記の美るはしい記述に比べて、劣りて居るとは見えぬ聞けば作者は身分賤しき白拍子と云ふことではあるが、むさくろしさ八重葎に閉されてかばかり美しい文學の花は如何して咲き出でたのであらう、若しや元來は貴き身にてありながら、運命拙く假りに薄幸の地に落ちた彼の玉淵が娘の類では無からうか、——此の薄幸の才女が傳記は多く知られて居ない、其の著作の年代は享保五年中御門院天皇の御宇（德川八代將軍吉宗治世）となつて居る。

女はさかひを越えずとこそふるき文にもいへ、されどそはうるはしき人のうへなめり、海士の子のよるべなき身はさそふ水にまかせて、西へながれ東へさすらひて、つひのをはりさだめかねぬるぞあはれに淺ましきわざなる。志かりとていかゞはせむ。此春はふる里のあづまの花にもよほされぬ。七とせあまりなれし人々の名殘りも大かたならねど、

猶おやのおはさんかたにこゝろいそがるゝを、かのうちとけてしのぶかはなる心になんあるを、人の思ひくださんも、さすがにやさしうはたわづらはしきすぢなりけり。かく云ふ迄はなほ尾張のくに名古屋なりき。

男子とは異つて、女の身は無暗と高飛びをして、出歩るきすべきものでは無いと昔から物の本にも教草になりて居ることではあるが、然しそれと云ふも只身分高く生れし人に就いて云はれた言葉であらう、自分共のやうに、何處を身の依り所とする所もない哀れな賤しい身分に生れ落ちた者には到底此の言葉通りに守りつめて居る譯には行かぬ古歌にもある海士の子の寄るべなき身であれば、矢張、誘ふ水次第に、浮草のやうに、西へも流れ東にも流浪して、つまる處は、何處如何なる岸へ落ちつく事やら、一向に未來の事は認めつかぬと云ふ情ない身分である、が、然し思ふて見れば人の世の事は皆運賦天賦とやらで、幾ら藻搔いても致方もない、天が導いて下さる運命に服從して行くより外の事は無い、我が故郷の東の花が見度くて久々振歸鄕することになりて、今度境を越えて遙々と旅出をすることに成りた。何かの因緣からして此の土地の人となりてより七年餘にもなりてそれぞれに知る邊も出來たので今度東へ還るとなれば今更のやうに名殘惜しさは云ひ盡くされぬ程であるが、愈寐ても覺めても懷しく思つて居た親にも逢ふことゝ思ふては、心は只其の方に引かれて、一日も早くと心のせかるゝ事であるが、餘り戀しい懷しいと云つては身の程も知らぬなまやさしさよ、餘りした事と他人の批評も懸念であると斯樣に考へたのはまだ尾張名古屋の城下を離れぬ時の自分の心であつた。

結末「かく云ふ迄はなほ尾張の國名古屋なりき」の一句、記述の法めづらしく、極めて力ある筆と

云ひたい。
女はさかひを越えず。禮記檀弓下に婦人不越疆而吊人と見ゆ。

海士の子のよるべなき身　朗詠の中に遊女の歌、「白浪の寄する渚に世を過ぐすあまの子なれは宿も定めず」とある。

さそふ水にまかせて　古今集雜の中に小町の歌、「詫ぬれば身を浮き草の根をたえて、誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ。」歌の意は人次第にせねばならぬ身と云ふことである、

さすらひ　流離流浪と云ふ字に當る。

うちとけて忍ぶ顔なる　後撰集戀五に、一條がもとにいとなん戀しきと云ひにやりたりければ、鬼のかた繪をかきてやるとて、一條

こひしくば影を見つゝもなぐさめよ
　わがうちとけて忍ぶかほなる

かへし　　伊勢

影見ればいとゞ心ぞまとはるゝ
　ちかゝらぬけのうときなりけり

一條の歌の下の句を引き直して、餘りに物忍び顔なるも自分のやうなる身分のものにては似つかはしくないと人に惡るく思はれはすまいかと云ふ意。

きさらぎ二十日あまりなぬかの曉ふかくたびたちしに、ほそうかすかなる月の露の底に見えたる例よりもことに哀れなり、

あすも又見つゝをゆかん月ながら
　この曉はなみだおちけり

熱田の鳥居濱に出づるほど夜あけにけり、井戸田と云ふ所はいにしへやごとなき人のしばし住み給ひしあとなり。琵琶の音に神のめでたまひけんなどいとかしこし、

愈二月二十七日と云ふ日に年久しく住み慣れた名古屋城下を出發した、晦日近き事とて曉の殘月

影細く、春も漸く近くなつて居る二月の末であつて、霞み渡りて見える曙の景色、其の哀れさ不斷よりも身にしみて眺められた。それは、
(歌)有明の月は今日ばかりとは限らぬ、明日も明後日も見るべきであるが、今日特別に身にしみじみと覺ゆるのは年久しく住み慣れた邊りを今日限りに見棄つる自分であるから、涙の止められぬのであらう!

熱田明神のあたりで夜は明けた。途は井戸田と云ふ所を過ぎたが、此處の昔を思へば極めて面白い、其の昔ある身分貴き人の流され人となりて、玆處にしばらく配所の月見玉ひしこともあつた所である、其の君琵琶の名手であつて、折に觸れて撥き奏でられた妙音には、此處に鎭座まします、熱田大明神も耳を籍して聞きとれ給ふたと云ふ話は昔の傳説記録にも幾處にか見えて居る。いとも尊いとに思はれた。

井戸田と云ふ所はいにしへやことなき人の云々

治承三年妙音院大政大臣師長公を尾張國井戸田へ流罪の事、又明神公の琵琶の音に感じ給ふた事は源平盛衰記、平家物語等に委しく出て居る故事である。

鳴海をすぐとて

うきにさへなれて鳴海のあまたゝび
　浦の濱路を行通ひぬる

とはいへど今は浦つたふ道はおきて、上野の道のなほうへをぞゆきかふこゝになんなりける。

鳴海の海岸を過ぐる時、
(歌)余り度々此處の浦も通ひ此頃は、世の中のうさつらさにも漸く慣れて何とも思はぬやうになつてしまつた。思ふて見れば此の濱傳ひ往きつかへりつしたのも幾度であつたらう。
と歌には云つたが實際の處は眞の磯ばたを通りた譯では無く今は遙か上の道、歌にある上野の道よ

りもつと上の道を往き通ふことになりて昔の歌とは少し違つて居る。なるみがたの歌、夫木集に景繼

なるみ潟しほひに浦やなりぬらん
　上野の道を行く人もなし

い、、なるみの　い、、成る身と鳴海とを云ひかけて詠んだのである。

尾張と三河とのさかひ志賀須香と云ふわたりせしよし、古き道の紀ともにかけれど、今はさるわたりありとも見えず、境川とて細き流れのあるにつちばしひとつかけたり、これまで送りにとて來し人のかへるに尾張にその人のもとにとてふみかきてつく、

うかりしも今ぞ戀しきしかすがに
　住こし里をいてぬと思へば

年頃尾張を住みうくのみ思ひしに、三河にかゝるほどは、さすがになごりもをしかりけり。文のことばにもこゝろさす故里にとくつきてなどかきしを例のとわびしき心よと、あとにさへいふなるべし。

昔の海道旅行記には尾張三河の國境である志賀須香など云ふ邊りを通ることになりて居たやうに書いてあるが、今の街道の通りて居る處に左樣な名の處は見當らぬ。今自分の通るのは境川と云つて細やかな流れの上に、土橋が一つ架けられてある所である。名古屋から態々此處まで見送つて來て吳れた篤志の人々も、歸ると云ふので尾張にて身の寄り處として居つた人の（殊更に名を記してない）許に手紙を書いて、此の還りて行く人に托した。

(歌)御わたりへ居た其の時は隨分つらい、苦るしい、つまらないと思つたことも少くは無かつたが

さて分れて見、離れて見れば、矢張やはり住み慣れた所の事は氣にも懸る、懐しく思はれる、自分は此の度御地を後にして何時再び還るとも知れぬ身であるから。

此の年頃自分は東の親の許を離れて尾張の國に居るのは實につらい事と思つて暮らして居たが今度愈々東に還る身となりて此處迄來て、これから愈尾張の國でなく、三河の國に入るかと思へば、流石是れも第二の故郷、尾張も中々見棄て兼ねる、名殘が惜しい。尾張の人への手紙の中には、我が志ざす東の故郷に着いてから何事も申上ましようと、さも名殘も無さゝうに書きて遣りたが、彼の手紙を見て、如何に情も思ひやりも無い冷やかな心と云はれる事であらう、自分の本意はさうした事では無い、矢張尾張の方にも心は引かれて居るのであるけれど。

此の一段彼の「愛しと見し世ぞ」と云ふ歌の心、又一般の人情として如何につまらぬ、好ましくないと思つても、年頃日頃慣れた人物場所を見棄つる場合に、一種の未練を生ずるは免れ難いと云はれて居る人心の機微を能く書き表はして居るものと思はれる、殊に女性の筆としては似合はしい事と云ひたい。

志賀須香の渡りの事は増基法師の遠江道の記、更科日記の中にも見えて居る。更科には「三河と尾張とある（三河と尾張の境と云ふ意）志賀須香の渡り、實に思ひ煩ひぬべくをかし」とある即ち是れである。

八橋は中將のいこひ給ひし所なり、今もかきつばたの咲くにかあらん、道のついでならねばよそになして過ぎ行くものから、

　杜若へだつもあやし心には
　　かけつるものをぬまの八橋

八橋と云へば彼の在五中將の話がある所である、

どうであらう今も其の頃のやうに杜若の花が咲くのであらうか、通路にもなつてゐないから行つて見る譯にも行かず、と云つて歌はこういふのが出來た。

(歌)八橋の昔の事が、心に懸るのは自分との間に橋が架けられたと云はねばならぬ、それに何故見には行かれぬか、かきつばたのかきが自分と八橋の間を隔てるのであらうか、

かきつばたのかきと云ふ縁語よりへだつと出し八橋のはしの縁語より心にかけると續けたり、

八橋の故事、伊勢物語に、

「三河國八橋と云ふ所にいたりぬ云云その澤にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見てある人のいはくかきつばたと云ふ五もじを句のかみにすへて、旅のこゝろをよめといひければよめる

から衣、着つゝなれにしつましあれば、はるはる來ぬる旅をしぞ思ふ云々とある、

一むら山はあとなりけん、宮路山はこのあたりなるべけれども矢はぎの里過ぐる程より名さへなづかしからぬひぢかさ雨とかふり出てみのつけし馬いつらなとずさども立さわぐほどいぶせきこのうちにありければ物も覺えず、

二村山は早や行き過ぎたのであらうか、又宮路山は此の邊りと思はれるのであるか、三河矢矧の里に懸つた頃より降り出したる俄か雨清少納言が其の枕の草紙に云つた通り、名を聞くさへ厭でたまらないひぢかさ雨に降られて、簑の用意、馬に蔽ひをせよと噪ぎ立てゝ居る從者共の有樣を見て膽を潰し、二村山も宮路山もあつたものならず、自分は其中に駕籠の中に閉ち籠められて居て、何事も眼に留らず行き過ぎて仕舞つた。

ひぢかさ雨　枕草紙に「名おそろしき物ひぢかさ雨」とある、又六帖に「妹が門行き過ぎ兼ねつひぢかさの雨も降らなんあま宿りせん」とある、又

空穂物語には「ひぢかさあめふり、雷ひらめきて」とある。俄かに雨ふり、笠の用意もなく肘かざして笠に代ふる意、

藤川といふほどより日もくれしなるべし、御油のすくに宵すがりてつきぬ、こゝには女どものあまたありてたはれをの心とるけしきなり、難波わたりなどうたふにもあらで、たゞだみたるこゑしてさかしらにくちとなるものいひきこゆ

おのづからみもひたゝけぬ旅やかたはつかしと思ふ人しなければ

あなかま女のほこりかほなるは人のにくむにをといふ。

藤川の驛を過ぎる時分に日は暮れたやうである、御油の驛に着いた頃は夜はとつぷり暮れて居た。此の驛の旅宿には、浮かれ女ども數多居て遊冶郎の歡を迎へて居ること昔に變らぬが、それも「難波わたりに比ぶれば」と歌ふにては無く、濁りた聲して、口疾く何事か無暗と小さかしく喋舌り立てゝ居る。

(歌)宿には誰も憚るべき身分の人も居ない所から自分勝手に、心の儘にさし出かましく振舞ふことよ、此の旅宿の狼藉は何と云ふ事であらう、見るに忍びぬ事である。

斯く女の我は顔に振舞ふのは餘り見よきものでは無い、あゝ喧しい、やめて欲しいと云つた。

いかゝ、

難波わたり　更科日記にあそび(遊女)三人、いつくよりともなく出きたり云々にし國の遊びはえかゝらしなと云ふをきゝて難波わたりに比ぶればなどゝうたひたり、とあり、

いかゝ、

ひたゝけて　紫式部日記に「なとか女しもおもにくゝ引入たらんかかしこからん、又なとかひたたけてさまよひさし出づべき」とあり又源氏物語にも「人しげくひたゝけたらむすまひは、いとほいなるべし」とある、何れととり締りなく、亂

骨なる態、
廿八日、つとめて御油をいづ、吉田と云ふ所の橋をわたれば左にをかしき山の見ゆるを人にとへば石巻山とぞいふ、このあたり知り給ふ君の上にもし不思議のことあらんとては此山のなることありとぞ、草のかき葉もことやめし世にあることにかはとあらがうてすぐる人もあり。

二十八日は朝早く起き出て御油の驛を出發した、吉田の橋を渡り行く程に左手に當りて姿面白き山が見られるのを、人に指し尋ねたら、石巻山と云ひ又此の山は不思議なことには、此の邊りの土地を知領せらるゝ國守、郡領等の身の上に何か不時の變災でもある時には何時も其の前兆として鳴動することになつて居ると云ひ聞かされて、これを聞いてさういふ不思議な事が果してあるのであらうか「草のかき葉もことやめし」と云ふ世にさう云ふ不思議はあることではあるまいと云ひ爭ふて居た人達もあつた。

草のかき葉　草の片方の葉、拾遺集の歌「ねきかくるひえの社のゆふたすき、草のかき葉もことやめてきけ」神の威に草木も音を立てぬと云ふ意

高師山は文字に書きけるがいみじう目たゝし、いづれの山に何をかをしへてさる名をばおひにけん、又みやこさへまだしとおもふに山櫻さきたるもあやし、

道いそぐをちかた人もとまりけり
　高師の山の花の下陰

高師山と文字に書いた所を見れば、極めて仰山に見ゆるが、實際の山はさうも無い、此の邊り何れの山に何事を敎へてさういふ名を付られた事やら都にもまだ櫻が咲いた便りは無いに、氣候は遲れ勝の山里に、われ不思議な事よ、櫻の咲いたの

が見える、

(歌)急ぐ旅路の事ではあるが、咲いた花は見過されず、しばしは花の下蔭に足を駐めた、今珍らしく咲きこぼれて居る高師の山の山櫻の下に、

潮見といへる坂の上よりは遠江の海原はる〴〵と見わたさる、たかし山ふもとの濱とよめるは此わたりなるべし、馬追ふをの子の語りけるは十とせばかり昔のことなりけり、難波よりあづまへかよふ舟のありしにこの白菅の港近くにてあらき風に逢ひ、舟は岩にあたりて碎けつるに、帆はしら楫などの折れたるにとりつきて、十一人乗りたるもの一人も沈まで漂へるが、日數十九日經しとぞ廿日にあたるあした、荒江の沖にて釣りするものどもの見つけて、あはれがりて、おのが舟にたすけ乘せ、關所にまゐりて、かう〳〵と申しつれば、よくも仕りぬとて、公まできこえあげ、祿などかづけさせ給ひけり。さてかの舟人どもの中にも老たるがひとりなくなりて、殘りはみなことなくながらへつゝ、今猶難波に還り住みて年毎にかの釣人のもとにせうそこし、むくいすとなん。げにかばかりの不思議の命もあるものにやあらん。

汐見坂の上に立ちて見れば遙に遠江の海は眼の下に見晴らされる彼の古歌に「たかし山ふもとの濱」と詠んであるのも此の邊りの事であらう、馬の手綱を取りて居た馬子の話が面白い―今より十年ばかり前の事であつた、攝津の難波の湊より東の江戸へ航して居る船があつたが、折惡しくこの白菅の港近くになりて、暴風に逢ひ、其の船は岩に

打ち當てられ、粉微塵となされたが、折れた帆柱、楫の端にとり付き、乘りて居た船員十一人とも殘らず、十九日間かほど海上に漂流した後、廿日目の朝荒江の沖に流れ着いたのを、丁度其處に釣りに出て居た漁夫どもが見つかりて、其の船に乘せ伴れ歸り、其所の關所に事の樣子を訴へたので公義でもよく救つて遣つたとお褒めがあつて、賞を下されたことがあつた、其の救はれた人達は其の中の一番年の入つて居た人が一人其後死んだ許りで、其外は今も皆生き存へ、難波に住んで居る、其後年々に恩人である、漁夫の許に便りを欠いだことなく、今に其の恩に報じて居ることである、馬子の此の話、こんな不思議な事も世にあればあるものであらうか、如何にも命冥加な事と云ふべきてある。

いゝいゝいゝ、

たかし山ふもとの濱　夫木集に爲家、

「たかし山ゆふ起え果てゝやすらへば、ふもとの濱にもしほ燒く見ゆ」

いゝいゝ白菅の港　枕草紙には「渡は白菅のわたりと」見えて居る、

濱名の橋はあとだにさだかならず、過來し里の名に橋本など云ふ所あるや昔の名殘ならむ。板田のよしならば、せめてけたよりもゆかんを

名のみなほきゝこそわたれ東路の
濱名の橋はあとだにもなし

小宰相の君の歌に、濱名川入しほとほき山おろしにたかしの沖もあれまさるなりとよみたまへるも此所なる、へしたかしの濱高沙の沖などは和泉にあるをぞ歌にはよめる、また濱名の橋は入江にかけられし橋なれば濱名川とよみ給へるもいかにぞやなどいふものありし、さはれ下れる世の人のいかで古のことをば

さたむべき。

彼の昔より云ひ傳へし有名なる濱名橋も今は物變り星移り、何處なりしか、跡もそれとは認められぬ。さきに通り過ぎし處の名に橋本とあつたのは若しか其の昔の跡では無からうか、彼の古歌にある板田の橋であつたなら、橋は無くとも桁を踏むでも渡らうものを、然しこれは其の橋で無いからそれも出來ない、そこで、

（歌）濱名の橋と云ふは只名に聞くばかりで（さ、ゝ、ゝわたるを橋を渡るに云ひ懸く）實際の濱名の橋は昔の跡も留めて居ない。

彼の小宰相と云ふ人の詠んだ歌の中に「濱名川入しほ遠き、山おろしにたかしの沖もあれまさるなり」　山おろしが烈しく吹き、たかしの沖の浪も名の如く高く、濱名川の邊りへ遠く汐がさし入りて來る――とあるのも大方は此處の所を詠んだものと思はれるがどう云ふものであらうか、普通には高師の濱高砂の沖と云ふ名所は和泉の國にあるのを歌には詠み込むことになつて居るが、彼の歌はどう解釋すべきであらう、それに濱名の橋と云ふのは入江に架けられて居ると云ふことに成つて居るのに彼の歌は濱名川と成つて居るのも少し不審の至りであると云ふ人もあつた。然し、時代下りて居る今日から昔の事に嘴を入れて、兎や角と云ふのも不都合のやうである。

、ゝ、ゝ、ゝ板田のはしの　万葉集十一に「をはり田の板田のはしのこほれなばけたよりゆかんなこひぞわぎも」とある、橋毀たれても、桁あらばそれより通はんと云ふ意、

小宰相の歌は夫木集に、ゝ、ゝ入汐遠きは入汐、ゝ、ゝ寒きとなつて居る。

荒江舟にてわたる、今日は風もなくわづらはしからず、唐に賈島と云へる人の并州といふ國に久しう住なれて後、都に還り上りする時、桑乾と云ふわたりす

とて思ひつゞけたりしからうたの今の身のうへにあひたるをふと思ひ出てゝいといたう哀れにて、幾度かずしけるに、文字いつゝむつ變へたればわろう聞ゆるも一は興あり、

客舍尾州已七霜　歸心日夜憶東陽
無端更渡新江水　却望尾州是故鄉

かくずゝるををこなりとて舟こそりて笑ふなにさのみはおとしめ給ふらん、才も不才もみな故鄉ひとつはもたるをといふを又笑ふもをかし、舞坂に着きぬ。

荒江と云ふ所を船で渡りた今日は幸と風も吹かず少しの難儀も無かつた。昔唐の代に買島と云ふ詩人が居た、此の人幷州と云ふ地に長らく住まひをして久し振り京都に還らうと云ふ時、途に桑乾と云ふ水を越ゆる時、心に感ずることありて詠んだ詩が有名なものになつてあるが、詩の意が丁度今の自分の境遇、感情にそつくりであるので、自分は何とも云へぬ思がして、幾度となく其の詩を吟して、其の詩の中の文字五六字變更したら、折角の名作　其の爲に拙いものとなつたが是れも時に取りて一興である詩と云ふのが如是である

(詩)故鄉を離れて尾州の地に旅住まゐすること茲に七年、日として夜として東の空を眺めて歸りたいと思はぬことは無かつたが、さて、今度、偶然にも思ひ立ちて新江(荒江)の水を渡り愈東へ還ると云ふになると、人情は奇體なもの、今後に見棄てゝ來た尾州の方が何となく氣に懸りて尾州は自分の爲には故鄉のやうに思はれて、少頃らくは東へ歸る身である事も忘れて、只尾州の方が懷かしく幾度となく後顧りて、其方の空を眺めらるゝ、如是云ふ詩に作り變へてそれを吟じて居るのを舟中の中悉く馬鹿な事と笑つた然し、自分は、さうばかり見下げて下さる事ぢや無い、才あるもの

も（賈嶋を指して云ふ）才無きものにも（武女自らを云ふ）故郷を思ふ情には異いは無い、誰にも故郷はあるものであるにと云つて遣りたら、又笑はれた、面白い事であつた。それこれして舞坂の驛に着いた。

賈嶋の詩の原作と云ふは、

客舍幷州已十霜　歸心日夜憶咸陽
無端更渡桑乾水　却望幷州是故郷

となりて居て、第一句の幷字十字第二句の咸字第三句の桑乾の二字、第四句の幷字を變へたばかりである。

才も不才も　論語先進篇に「顔淵死、顔路請子之車以爲之椁、子曰才不才亦各言其子也」とあり、是等より思ひ付いた詞であらう　（つゞく）



Dear Sir,

I beg to thank you most sincerely for the handsome magazine you have so kindly sent us. It is very nicely got-up and contains much useful information, and will, therefore, I feel sure, gain favour and popularity among the ladies of Japan. I have shown it to many of my lady-pupils who agree with me on its excellence. Wishing your new periodical all prosperity and success, and with repeated thanks for your kindness in sending me a presentation-copy.

I remain,

Respectfully yours,

Ellen Sammerss.

33 Tsukiji,
Tokio.
Sept. 28, 1903.

拝啓

雑誌「女鑑」御贈り下され御好意洵に有り難く御禮申述候拜見致候處表紙其他至極御立派にて有益なる記事も澤山御掲載相成候へば日本の淑女間に好評を博せらるべきは疑ひ無之儀と奉存候現に吾が學校の女生徒等も一見致候て現今の女學雑誌中に尤も優れたるものなりと申居り候依て玆に貴雑誌の發達と成功とを希望致候ま丶幾重にも御好意を感謝致候不備

エレン、サムマーズ

MAXIMS AND PROVERBS.

(歐米格言集)

The empty vessel maks the greatest sound.

シエキスピア

空桶は其響最も大なり

Love that has but beauty to feed on is short lived and subject to fits.

エラスムス

美貌に由て保たる愛は其期短くして時々のものたるに過ぎず

The lord prefers common looking people; that is why he made so many of them.

リンコルン

神は容姿平凡の人を愛す是れ尉かく多數の夫れを造り給ひし理由なり

註 Many of them = many of common looking people. 平凡なる容姿の人の多く

Beauty without grace is the hook without the bait.

エマーソン

容姿美にして而かも優雅を缺く婦女は猶は餌なき釣鉤の如し

Beauty is like a rainbow—full of promise but short lived.

ジヨセフ、ビリングス

美貌は虹霓の如し希望に充つと雖も壽命極めて短し

Beauty is worse than wine; it intoxicates both the holder and the beholder.

チンメルマン

美貌は酒よりも尚ほ悪し是を有する者も是を見る者も共に酔はしむ

She who is beautiful is stronger than iron and fire.

アナクレオン

嬋娟たる美人の力は刀槍砲火に優る

A thing of beauty is a joy forever.

キーツ

美なる物は永久の快樂なり

All orators are dumb when beauty pleadeth.

シエキスピア

美人の抗辯に遭へば凡ての雄辯者も啞者に異ならず

Call no man unhappy till he is married.

ソクラテス

人は結婚したる後ちにあらざれば其幸不幸を稱す可からず

Whoever is free from wrangling is a bachelor.

セント、ゼロム

喧嘩爭論の憂なき者は即ち獨身者なり

註　To be free from「……の憂なき」「…………の恐なき」「……のこと全くなき」の意

海外新話

◎讀書家としての露國皇后

露國皇后カセリン第二世は甚だ書物好きでなかなかの本讀みであつた、皇后が文學上に貢獻されたことは隨分多いが其の一例はボルティヤデッデロットの藏書を買ひ上げられたのでも解る皇后は佛國哲學者達の親しい友達で又た尊敬者であつたそして皇后は政治や政府に關する新しい學理を學ぶ爲に好んで此の學者達の著書を讀まれたボルティアの藏書は七千部もあつたが今日では露國のハアミティジ宮殿は帝國圖書館の一部分を占めて居る、ボルティアのために特別に設けられたる會館にはハウドンの手になれるボルティアの肖像が置かれてあるといふ又皇后がデッデロートの藏書を買上げになつた話が面白いこれで此の皇后がどんなに怜悧の方であつたかといふことがよく解るデッドロードは自分の藏書が一萬五千弗の價値があるといふて居つたところがカセリン第二世は一萬六千弗に買ふと申込まれたその上其の賣買の約定條件としてこの賣買はデッドロードの死ぬまで待たるゝこととなつたデッドロードは巴里を去らずに自分の書齋で圖書掛となることが出來給料として毎年一千弗づゝ送らるゝこととなつたそしてカセリン皇后は自分の圖書掛に書を送つていふには自分は到底自分の圖書に心配をかけ度はないから今後五十年の間圖書の世話もし擴張もする爲めにかゝる丈の費用を送らうし五十年たつたらば改めて整頓もしようとて二萬五千弗の切符を封入したといふことである

◎マチルド内親王薨去

去月巴里に於てマチルド内親王薨去したる由なり同内親王は多年間巴里の社交上美術上文學上の指導

者として知られ其居宅は常に有名なる文學者及び美術家の集會所の如くなりき内親王は極めて人望多く皇族の身なるにも拘はらず第二の帝國政府顛覆の時にも更に其名聲は衰へざりしと云ふ内親王はナポレオンの弟なるウエストファリア王ゼロームの娘にしてデミドロソフ親王と結婚したるが後破鏡の不幸を見るに至れり享年八十四なりと云ふ

◎婦風界の二女傑

カアリッスル伯爵夫人は、近頃ヘンリー、ソーマアセット夫人の後を襲うて英國婦人矯風會の總裁に擧げられたり夫人の家は世々俊材逸足を出して、名聲常に一代を聳えしめたりスタンレーの名は英國史上に屢々見る所、就中ヂロン子爵の娘にしてカアッリスル伯爵夫人の母なるアルダーレーのスタンレー夫人名聲最も顯はるスタンレー夫人の配偶者は保守黨内閣の下に重要の官職を帯び一八四一年には議會總理の一人となれりスタンレー夫人も亦當時政界の一勢力たりしが特に婦人をして高等敎育を享けしめむとする熱中運動の重なる役者となり遂に大學及び醫學校の如きは婦人に向つて開放せられガアトン其他婦人の高等敎育を目的とする學校の施設を見るに至れり夫人の子女は何れも父母の天資を傳へ活動世界の公生涯を送らざる者なけれども母夫人の自由敎育に由るためか子女は各々好めるまに〳〵敎派を擇べりカアリッスル夫人はプレスビテリアン敎會に屬す

カアリッスル夫人は愛蘭の血統を受けし母夫人より温和にして且つ熱情に富める天資と、强健なる品性と一種の感化力とを傳へたり母夫人は自由主義なりしかどカアリッスル夫人に至つては正に急進主義也母夫人は敎育の効益を男女に均等ならしめむとて大に盡瘁し而して成功したりカアリッスル夫人は政治上の權利をも同一ならしめむとて當に戰士的態度を取れる也カアリッスル夫人の事業の歷史は即ち英國近代の婦人選擧權獲得運動の歷史也夫人は目下政治上の顯著なる勢力を有する「婦人自由同盟」の

創立に就て功績最も多く久しく同盟の總理たりしが一年以前に此位地をアバアデン伯爵夫人に讓れりされば英國婦人矯風會の新總裁は社會上の地位と個人的才幹と好個戰士の天資とを兼備具有せるものと謂ふべし夫人と共に働ける人々は皆夫人の政治家的才能に敬服せざる者なしと云ふ今や夫人は拾萬の會員を代表して矯風事業の爲めに全力を盡さむと欲すその活動蓋し大に觀る可きものあらむ

英國に於けるカアリッスル夫人と殆んど同一の位地を米國に於て有するものはリャアン、ステフエンス夫人也二十餘年間「婦人基督敎徒矯風同盟」の總裁たりしフランセス、ウキラード夫人の盛名は讀者の永く記念する所ならむウキラード夫人職を去りし後此位置を承くべきはステフエンス夫人を措いて他に無かりし也蓋し夫人は亞米利加に於ける矯風事業の先鋒とも謂ふべき人にして一八七四年、ヂオ、レウキス博士が酒精飲料の使用に反對する婦人同盟の切要を說くや夫人は率先して「メーン婦人信徒矯風同盟」を組織したりしが爾來此種の事業に關して經歷する所尠からず嘗つてシカゴに於ける萬國コロンビア博覽會の理事たりしこともありき今ウキラード夫人の後を襲うて同盟の總裁たる其任や頗る重しと謂ふべし

◎黑人の女子銀行頭取となる

米國に於ける黑人が年々大に進歩しつゝあるは確かなる事實なるが今回北米の某市に設立されたる貯蓄銀行の頭取及び事務長は黑人の女子マッキーワルカーと稱するものなりと

◎成功せる米國の女子

一昨年の米國現今人名辭書に掲ぐる人の數は男女合せて一萬千五百五十一人にして女子は九百七十七人なるが其內十六人は外國の有名なる女優等なるを以て米國の成功せる女子は九百五十四人ある都合なり之を職業に依りて類別すれば著作者最も多く四百八十七人にして殆んど半數なり之に次ぐは美術家百三人次は敎育家九十一人其次は新聞記者六十五人女優

五十九人音樂家四十三人社會改良の運動者二十七人醫士二十一人科學者十七人宗教家十三人慈善家十二人法律家九人等なり又此内學校に於て高等教育を受けたるものは百十一人又既婚者は五百二十二人にして總數の五割四分に當る而して年齡の平均は五十二歳なりと云ふ

◎今代のボーシャ

佛國のディルハンと呼べる二十七歳の婦人辯護士は昨年十一月二十七日同國ツールース裁判所に於て養子謀殺の刑事被告人デューマなる者の爲めに辯護の勞を取れるが同婦人は辯舌頗る流暢にして法廷に非常なる感動を與へたりと云ふ佛國裁判史上婦人辯護士の出廷せるは同婦人を以て嚆矢となすと

◎世界最小の婦人

玖馬の產にしてチクイタと云ふ一婦人は本年二十七歳なるが前身長は僅に二十六吋に過ぎず其足の如きは生れて凡そ八個月を經たる嬰兒の足に異ならず恐らく世界に於て最小の婦人ならんと云ふ然も此女は身體の各部釣合を得て無恰好ならず容貌も亦美麗にして恰も人形を見るが如し音樂及び舞踏を能くし裁縫の術は其最も好む所にして自轉車に乘ることをも好み屢ば自轉車にて外出することあり極めて健康にして性質頗る快活なりと云ふ

◎遺骸を銀像となす法

獨逸の一教授は人の死骸を銀メッキに爲し直ちに銀の肖像に化せしむる方法を此程發明したり此方法によれば、之を金メッキと爲すことも容易なれど費用莫大なる由にて、銀メッキと爲す費用にても二萬五千圓を下らずと云ふ到底貧しき人の遺產にては成す能はざることなり

◎最高地にある料理店

アルプス山脈中のユニグフラウ山の頂上に近きブイゲルクワント停車場に、テルゼンと稱する瑞西の料理店あり之れ世界の料理店の尤も高き土地にあるものにして其家は巖窟の中に建てられたるものあるも登山者は此料理店にて普通の料理店に劣らざる便宜

を得べしと云ふ

◎丁抹の教育

丁抹の首府コーペンハーゲンは其學校工藝館博物館等を以て有名なる土地なるが丁抹人は歐洲の諸國民中尤も教育ある人民にして千八百十九年來干渉教育の制度を實施し來り同國民中に文盲の人を見ること殆んど無し國内至る所公立小學校及び諸種の技藝學校の設けなきはなく牛乳配達業學校牧童學校ビール釀造職工學校等、有らゆる種類の學校一として同國に無きものなき由

◎英國小學生徒の勤勉

英國ダービーンヤイヤーのウードヴイールツエスレーヤン小學校に於て昨學年度の兒童缺席度數を調べたるに非常の好成蹟にて二百一人の生徒中一人の缺席者だに無く或一人の生徒の如きは八年間一日も休業したる事なく或る三人は七年間休業したる事なく或る九人は六年間又十一人は五年間十七人は四年間十四人は二年間九十人は一年間全く缺席せずに勉强したさうな日本の小學校生徒も願くは斯く有り度きものなり

◎衛生的婦人を好む國民

エスキモーの青年間には妻を選ぶ場合には容貌の如何を問ふに非ず體格の如何に注意するなりとは同地に在りて婦人の勞働を要すること多きを以てなり而して殊に奇なるは男子が或る女を娶らんと欲するときは先づ其女を途中に待構へて其女の腕力を試驗するなり若し其女が此場合に腕力を以て之に抵抗せざるときは妻たる資格なきものと認めらるゝなりと云ふ

◎拇指一本の爲めに二萬弗の要求

米國フイラテルフイアのアーロン、フイッスと云ふ一職工は同地の米國橋梁會社に雇はれ或る橋梁工事に從事中繩にて材木を引揚げ居りたる際繩の切斷したるはづみに橋上より墜落し之が爲に拇指を失ふに至りたるがフイッスは其損害賠償として會社に對し二萬圓要求の訴を起したるが此男は紐育の一辯士

の需に應じて其事の起りたる數日前に一方の耳を五千弗に賣渡したるものなりと云ふ

◎長壽の法

サー、ヘルマン、ウエーベル氏が國立醫科大學に於て演說した中に長壽の最良法を述べたがその方法といへば出來る丈凡ての機關を規則正しく働かせて夭折を防ぐ傾向を作るにあるので飮食及び身體の惰けるのを節して新鮮な空氣を吸ひ又外氣に出で呼吸の運動を能くし步行擧行を勉めて朝は早く起き睡眠時間を六七時間に節するにあるが又每日人によつて冷水浴又は冷水浴後の溫浴をなせば大いに長壽を得るといふ

◎無心の小兒は最上の寫眞

三歲乃至五歲の小兒及び十二歲乃至十五歲の少女は寫眞のモデルとして最上此上なし元來小兒は無邪氣無心にして毫も作り飾りなきのみならず其顏には何處ともなく人を引き付くる魔力あり如何に澁面作れる頑固の人なりとて小兒の笑顏に對し其澁顏を辛抱せんとするは容易の事にあらず其の楓の如き小さき兩手及び渦の如くに生ずる笑靨は確かに小兒の美を形ち作るものなり美人は勿論美なるには相違なけれど人に依りて趣味異なり殊に其容貌を注視するときは必らず何れかに非難すべき點ありされど愛らしき小兒を賞讚せざるもの天下何れの處にあるべき、十二歲より十五歲までの少女は淡白と云ふより寧ろ粗野なる時代なれど物心付かず打ち開きて瀟洒なり殊に味ひ深く美術的感性を滿足せしむる者洵に多し彼等は美の眞の實現と共に來る自覺平たく云へば作り飾り未だなく物々しからず容子振らざる所殊に佳し一體快き曲線卽ち圓きことは美の最要素にて女傑を小說抔にて描くときは丈高く瘠せぎすに書きなせど畵家が婦人を描くときは決して直線を用ひず而して小兒及び少女等は曲線以外に獨特の妙處あることと上記の如しといふ

◎男は曳船女は遊船

夫は哲學者及び談話家にて妻君は實行家なる一組の

夫婦打ち連れ立ちて散歩に出掛け橋の上より一艘の曳船が多数の遊山船を引き連れ河を遡るを見夫妻君を顧みて云ふ様、此れが生活の活きた書ぢや曳船は即ち男子で終日營々として勞作し居るが女子は即ち遊山船で……妻君皆まで聴かずそうですとも曳船は何時でも氣笛を吹いて(呼吸の意)遊山船は何時でも重荷を載せるのです

◎英國の美人競爭會

英國リーヅの體育會にては今月中に同地のアルバート會館に於て男女の美人競爭會を開く筈にて已に去月中競爭の申込を為したる男女各十數名あり美人の審査を為す人々は同地の醫師等にして男女の最優等者各一名に二千圓宛の賞金を與ふべく受賞者は更に紐育に赴き萬國美人競爭會に於て美を競ふ都合なり尚右の申込を為したる人の中タインサイドの體育會を代表せるマリー、ヘンダーソン孃と云ふは年齢二十四歳體量十五貫二百目身長五呎七吋にして身體の各部極めて能く發育し頗る壯健にして健足なること驚く可く五哩の距離を五十四分間に十三哩半を二時間半に歩行し得るなり又九十ポンド乃至百四十ポンドのダムベルを運動に使用し劍術拳闘術等を能くする由なり同孃は曾てコルセットを使用したることなしと云へば此事は大に體の發育を助けたるものなるべしと

◎太陽の熱度

科學者の説に據れば太陽が黑き物の如く輝くときは其温度五千八百八十度にしてプラチナムの如く輝くときは五千二百度なりと稱せらる勿論學者に依りて多少の相違ありされども未だ一萬度以上の計算を為したるものなし但しラヂウムの發見せられたる結果近來其温度を非常に低く計算する傾きありと云ふ

◎世界の最大橋

紐育のイースト河に架設中なりし世界の最大橋なる新ウイルリアムスバーグ橋は工事落成して去十二月十九日開橋式を行ひたる由なり此新橋は明治二十九年の十月に起工し七個年餘を費して竣工するに至り

たるものにして其長さは七千二百呎幅百十八呎を有し複線の電車道二條複線の汽車道一條人道二條車馬道二條自轉車道一條を有す架設費は總て二千一百萬弗を要したりと云ふ

◎英國貴族の結婚奇談

去月十九日英のノーフオーク公はグウエンドリーンマックスウエル孃と結婚したるが此結婚は種々の點に於て大に世人の注意を惹きたる由にて第一に奇なることは新郎は五十六歳の高齢なるに新婦は其半數を達せざる二十七歳にして二十九歳の相違あり又新郎と新婦とは從兄妹に當り尚又新婦の母は二年間に五人の子を生みたることを以て名高き人なりと

◎幼兒の月に對する思想

パオロ、ロムプロソ夫人佛國のラ、ルヴエーに寄書して曰く三歳の幼兒は月を以て風船なりと想像し其半空に懸れるは風船に結び付けたる絲切れし爲め高く飛んで天にヒッつきしなりと云ひ或る畫師の伜は其父が畫布の上に草木若くは人物を描く如く月は天に描かれたる者なりと云ひ或る幼童は月は神が市街を照す爲め空中に懸けたる提燈なりと云ひ尚市街毎に月の提燈一つ宛輝く者なりと信ずる兒童多し又六歳の小童は天體を以て父(太陽)と母(月)と小兒(星)とより成り立つ一大家庭なりと考へ居れりと

◎小兒と死の思想

小兒は死を解して眠となすもの丶如し或る婦人其幼童に向ひ豫て友達となり居りし小兒死したる旨語りし處幼童問を發しそれでは私共が倫敦から歸へつて來るまで死んで居るのですかと云ひしとあり又或る幼童は其祖父が天に於て酒に醉はざらんことを冀ふ旨語りしことあり

◎猛獸の爲に殺さる丶人の數

印度に於ては毎年猛獸及び毒蛇の爲に殺さる丶人の數は頗る多く政府は其害を除かんがため種々の奬勵法を設け居るに拘はらず其數は依然として減ずることなし今一昨年の統計に據れば同年間に同地に於て毒蛇の爲に殺されたる人は二萬三千百六十六人家畜

は九千〇十九頭又猛獸の爲に殺されたる人は二千八百三十六人家畜は八萬〇七百九十六頭なり此内虎のみに殺されたる人千〇四十六人あり又之に反して人の爲に殺されたる猛獸の數は一萬四千九百八十三頭にして其内一千三百三十一頭は虎なり殺されたる毒蛇の數は七萬二千五百九十五匹なり此數を合せて對照するときは猛獸及び毒蛇の爲に殺されたる人畜の數は十一萬五千八百十七にして人の爲に殺されたる猛獸及び毒蛇は八萬七千五百七十人なるを以て猛獸及び毒蛇の方人よりも損害少なき割合なりと云ふ

◎犬及び蛇を嘲弄する鳥

米國にてロードランナー(道を走るもの〻意味)と稱する鳥は郭公の一種にして長き尾を有するものなるが此の鳥は滑稽の趣味を解し屢犬等に戯むる〻ことあり其戯むる〻仕方は此鳥が蚯蚓等の蟲を喙み居る際犬の來りて之を捕へんとするや犬の達し能はざる程の距離を保ちて飛翔し犬の留まるときは其鳥も留まり犬が非常に憤激して其鳥を捕へんとするときは犬の頭の上を飛翔して之を嘲弄し犬の疲る〻に及びて再び地中の蟲を喙み始むるなり此鳥は又響尾蛇に戯むる〻ことあり其仕方は響尾蛇が眠り居るを認むときは此鳥は其仲間を集め來りて響尾蛇が眠り居る周圍に枯枝及び木葉等を持來りて檣を築き其檣の全く出來上りたるとき喧しく鳴き叫びて蛇を醒すなり響尾蛇は其檣の外に出づる能はず餓死すること屢ばなりカリフォルニア州にては此の如くして死したる響尾蛇を見るは極めて普通の事なりと云ふ

◎X光線黑人を白人に化す

米國ペンシルヴアニヤ大學に於てX光線に依り生來の黑人種なる阿弗利加人を純白の白人となし得る驚くべき發見を實驗し得たり即ち黑人を立たしめX光線に浴せしむること若干時にして皮膚は漸次に灰白色を呈し尚光線を放射すること多時に及び該光線の照せる處は悉く純白色と化し少時間の内に黑人白人と早變りしたり尚白色人にても該光線に照さるれば白色は何處迄も白色ながら其の實質は全く化

して最も健全無病の皮膚となる由

◎鐵道なくして走る列車

舊臘佛都巴里に於て鐵道を用ゐざる列車の運轉を試驗せしに頗る良好なる成績を得最後にエリシー宮殿前に止まりし時發明者は大統領ルーベーより優渥なる賞讃の辭を得たり同列車は自動車と同一の動力を使用するものにて五輛の列車を聯結しあり發明の要部は最初の車より後に聯結する列車に動力を輸送する點にあり

◎棺の中より子供の聲

或る墓地にて今や子供を入れたる小さき寢棺を埋葬せんとせし時突然棺中より泣聲あり人々驚き怪しみしも結局之を開きたるに子供は眞に死せし者に非ざるを確められ直ちに取り出して鄭重の看護を加へしに漸次快復して元の健康體に復したり是れこそ眞の命拾ひなり

◎珍らしき巨人の遺骨

合衆國ウエナッチエ附近にて工夫が土を堀りたる際地下三尺程の所にて端なくインデアン種族と覺しき者の遺骨を發見せしが骨格に依つて察するに生前は餘程の巨人なりしならむ骨は大半碎けたれど全體の大きさは略ぼ察し得らるゝ程にて頭蓋骨の周圍は二尺三寸下顎の後部は約四尺六寸、腕は肩の所より臂までにて一尺七寸五分計なりき

◎大都會に於ける出產比例

伯林に開かれし萬國統計學會に於て世界各國都市の出產比例に關して興味深き報告ありたり大都會と稱せらる可き者の中にて獨乙のエッセン市ほど出產比例の高きはなく一九〇一年の出產は千人中四七一人の割合あり之に次ぐ者もまた獨乙に在りマンハイムは千人中四三、九人、ヌレムブルグは四一、三人なり、千人中四十人以上の比例を有するは此外にアルゼンチン共和國の都府ロザリオあるのみ統計に依れば百萬以上の人口を有する都會はこれより少數の人口ある都會よりも槪して兒童の數少しモスコウ府は出產率高き方なれど猶ほ千人中三〇、九人に過ぎず

之に次ぐものは維也納、倫敦、伯林、及紐育あり巴理の出産率は人の能く知る如く頗る少くして千人中二一、三人のみされど佛國の都市中リオン、ボルドウ、ツールーズの如きは猶ほ少くして僅かに千人中一八若くは一九人の出産あるのみ也

◎新奇なる寵玩物

英國に於て最新式の寵玩物として交際社會に持囃さるゝは佛國種の蛙也、右蛙は青色なるを尊び且つ其大さは六ペンス貨の大さ位なるが通例也價は八志より一磅一　志位の處にて蛙の賣買は利益ある商賣の一となれり、今蛙を寵愛する貴婦人等の云ふ所を聞くに蛙は極めて怜俐なる性質を有し忍耐して藝を誨ふるものあれば諸種の藝能を演ずるに至るべし其藝能の重なるものは指輪抜け指輪飛び等類似の諸遊戯にして卓上に其演戯を見るは一寸愛嬌ありと云ふ然れば一應其所有の蛙を教育し終れば常に卓上に連れ出して諸種の演伎を試ましめ時には數匹を陳べて其の競爭演伎を試ましむる抔は座興として興味あるもの、由なり又是等蛙類の平生の生活は極て驕奢を極め季節々々の美味佳肴を與へらる之を聞けば人間生て蛙に如かずの嘆を發するものもあらん

◎猫の値段騰貴す

英國に於て今日猫の値段は順次騰貴の傾あり即ち毛の短き猫一頭に對し百圓を得るは六ヶ敷からず其毛長きものに至ては五百圓を得べし或る猫の如きは共通會の賞として年々二千五百圓宛を得るものありと云ふ

◎猫の言語

佛國の一科學者は近頃猫の言語に關して研究を爲せる結果先年ガルナー教授が猿の言語を研究せる場合と殆んど同樣の成功を爲せりと云ふ日本文字にては正確に猫の唸聲を示す事能はざるが故にそは讀者の推讀に任す事として今其二三を擧ぐればアリオー（牛乳（腹が減つた）アリルー（咽喉が渇いた）ラエーが欲しい）、人の能く知れる「ニヤヲン」は何を意味するやら明らかならずと

箏曲の秘訣

東京音樂學校教授　今井慶松君述

先づ音樂と發音といふことよりお話をしやうと思ひますが、音樂の修養ある人は一寸時候の挨拶を致しても、つまり此方で「今日は」と言つても、先方の受が大變に聲の釣合が好いものでございます、是は發音が好い爲と見えて、例へば男の方で挨拶した時に、それを女の方で受ける時にも、丁度其受手はオクテーブの上に受けるといふやうに、發音の調子が好くなるのでございますから、何うしても音樂といふものは皆さんに必要であらうと思ひます、今まで私が經驗致した所では、音樂の心得ある人と無い人とは、其話を聞くと直に分りますので、今世間で言ふには、どうも七歳か八歳位までは幼稚園とかいふやうな處で、腦を責める其上に音樂までさせては身體の發育が思はしくないだらうといふやうに言はれる人が多い、けれども私は然ういふ事はないだらうと思ひます、歌を唱つても調子の外れるといふ人がありますが、それは十歳以上になつたらどうしても其調子の外れるのは直りませぬけれども、十歳以下の中には十分それ

を直すことが出來ます、それは少しでも歳を取るに隨つて、外見の心が出ますから此方で直しても極りが悪いといふやうなことで本當に直さない、遂には唱はないで琴ばかり彈いて居れば宜いといふやうなことで、どうも調子の外れた人は十歳を越しては直りませぬ、其點から行くと音樂を仕込むなら、五歳六歳位から初めて戴かなければならないと思ひます、現に西洋では六歳以下で大變立派にバイオリンを彈く人があるといふ事でございます、琴といふものは今までの人の考へでは、大抵此れを彈くに屈んで彈かせるから、體育に大變障るといふ事でございますが、それは大變な間違ひで、琴といふものは身を反せなければ彈けないものであると思ひます、素人は皆屈んでお彈きになるといふお考の人が多いやうですが、どうしても最初に體を極めて構へをすつかり直して、下腹に力を入れてからでなければ本當のとは出來ない、指を動かすばかりでは迚もいけない、體の拵へが肝腎であります、それ故に小さい子供が習つても身體には決して害になるやうな事はない、寧ろ歌も唄ひ手も動かす爲に却て身體の發育を助ける位であるだらうと思ふのです、次に西洋の音樂と日本の音樂の長短を比較しますに、御承知の通り西洋の音樂は何うしても音域が廣いので少なくも二十音三十音位、ピアノの如きも皆然うなつて居ります、それ故にどうしても豪宕とか活潑とか云やうな調子は西洋の音樂に多いので、この點は日本の音樂の及ばぬ所でございます、それに拍子の變化と云ふものが西洋の音樂には多いので何うしても曲の中に波瀾が多いから、一般の人に解り易い即ち其長所は音域の廣いのと拍子の變化の多いのが先づ主なる點であつて、殊に樂器が大きいから公會などで彈くに適して居る、ソコで日本の音樂は音域が西洋のよりも狹く、又拍子の變化も從來の曲は拍子の變化殆ど無いと言つて宜い位で、唯だ一定の拍子だけを守つて居るばかり、勿論名人となれば自から自分の特色があるから、それで人に面白く聽かせる事も出來るけれども、拍子に餘り變つたものはない

のでございます、又豪宕だの活潑だのと云ふ方には乏しいが、其代りに日本のは優美とか、靜かに聽かせるとか云ふ點に於て、確かに西洋の音樂に負けないだらうと思はれます、それで私の考へまする所では、どうも西洋の樂器は凡て獨奏の方にも進歩して居り、合奏的にも亦た大變進歩して居ります、其進歩の點から言つても、日本のは餘程負けて居ります、日本の音樂でも從來の長唄なんぞは個人的に出來て居つて下方などが這入ると中々賑やかに聽えますが、三味線の音は皮の音が多くて、絲の音が少ないから西洋人などの請けが惡い、バチ〳〵して皮の音が多いから、絲の音は餘り現はれない、但し此れも段々に名人と云はるゝ人達が心付いて、取替へるだらうと思つて居ます、さう云ふ譯で長唄の方は先づ合奏的で日本の音樂としては進歩して居ります、琴の方は生田流と山田流との二派ありますが、生田流の方は獨奏を主として昔から段々進歩して居りますけれども、獨奏と云ふと何うしても組ですけれども、組で言ふとホンの靜かなものです其代り極くしんみりとしたものです、源氏物語を歌にしたり、何か歴史的のものを歌に作つたりしてあるから、極く靜かなもので、一人で彈いては大變に面白い、併し多くの人に聽かして、樂ませると云ふ譯には往きませぬ、合奏しても生田流の方は三絃と合すぐらゐなもので、三曲合奏と云ふやうなことは餘り致しませぬ、然るに山田流の方はまだ新らしいもので、山田檢校が創めて以來百年にはなりませぬけれども、此山田流の方は合奏の方を主として出來た流義で琴三絃胡弓と、此三曲を合奏して面白く聽かせやうと云ふやうな考で開いた流義であります、それですから生田流よりは合奏が進歩して居りますけれども、それとても未だ何うも今お話した通り、拍子の變化も少なく、又音域が狹いからして、此まま往つたら段々に退歩するかも知れませぬ、私も常に西洋の音樂を聞いて拍子の變化と云ふものに注意しまして、今私が拵へる新曲などは、餘程其の拍子の變化が變つて居る積りでございます、其他にも音や

何かを餘程廣く使ふことを考へて居ります、デ此日本の樂器の特色と云ふものは、つまり其曲に掛かつて調子を自由自在に動かすことが出來るので、之れが西洋の樂器にまた無い特色です——まだ無い特色と判然申されませぬ、バイオリンなどは調子を取變へられますが併し曲其物が途中で調子を變へなくつても宜いやうに出來て居りますけれども日本のは琴でも三味線でも御承知の通り、一つの曲の中に何十通り位に調子を變へることがある、それが日本の樂器の特色でございませう、それ故に音域は狹くとも途中で調子を變へる事が出來ますから、其の割合に音域は廣く使へます、ですから是から新曲を拵へるには拍子に重きを置いて、人を倦かさせない工夫を致さうと思ひます。

今までの人の中には、歌などを歌つて居る當人が、是は何の事だと云ふことを本當に知らないで、歌つて居る人が有つたらしい、それではお聽きになる方が、其歌に感じて悲しいとか、嬉しいとか云ふやうな情はマア薄いだらうと思はれます、それですから段々其歌の意味を十分に解して、さうして曲を奏することが肝腎であらうと思ひます、つまり小督なら小督の曲は秋のものであるから、さて樂器に對つた時に、其小督の曲はどう云ふものであると云ふことを、十分に考へて其心持になつて奏しますと、十分に其秋の意が現はれ又春の所を彈くときには、矢張り春の心持になつて、歌出すから終結まで其心懸で奏すれば、能く人を感動させることが出來ませう。

それから音樂を奏する時の心懸けと云ふことを申しますれば、何曲を彈くにも今日は人が大勢居るから、又は斯う云ふ種類の人だから、斯う彈いたら面白いだらうか、どう彈いたら面白いだらうか、と云ふやうな考を前に持つと、大變に音樂が遣難くなつて、何うも其音樂が十分に榮えない、それですから何でも音樂を奏する時には、神に對つて——詰り信心する時の心持で、以て彈くと云ふやうにして、何も考へな

いで無念無想で其曲だけの事しか考へずに居て、別に人に聴かせると云ふ念もなく、賞められたいと云ふ念もなく、一心に其曲を奏するのが、音樂師の秘傳だらうと思ひます、私が幼少の時から苦心の話は、各社の新聞や雜誌に出ましたから、別段更めて申上げませぬが、十六歳から一昨年までの中に辱なくも皇后陛下の御前で彈きましたことが十七度　御前では五尺位しか離れて居りません所で、彈くのでございます、併し實に恐多いことでございますが、音樂に掛かつて其曲を奏し難い程にはなりませぬ、それは今お話した通りに自分は神に對つた積りですから、他の事は餘り考へなかつたからです、いつでも一曲の御積りで召されまして彈きましたが、大抵御好みが出て、又二曲ばかり奏して、いつでも御褒の御言葉を戴きました。

それから琴の音に就てお話いたしますれば生田流の方の琴は、爪の恰好も大變に違ひますし、爪の使ひ方も山田流とは異なつて、少し斜に使ひますので、爪を横に使つて絲も大變緩くして彈きますので、丁度三味線に譬へますと、絲の方を使ふ所謂西京流は駒の大きいのを掛て、皮が弛んで居るから、絲がボン〳〵と云ふやうな音がします、夫に合奏する琴も矢張り絲を弛くするから、ボン〳〵と云ふやうな傾きがあります、それと反對に山田流の方は長唄の三味線にしても、細い駒を掛けて皮を強く張つて、パチ〳〵と云ふやうな音がする、それと同じく琴も矢張り、絲を固くして、又爪の恰好も大變に違ひます、あやめ形と謂つて圓い爪でございますが、あの爪で十分に力を入れて彈きますから、少しパチ〳〵云ふ方の音です、謂はゞ活潑の方の音がいたします、で是はどちらにも長所がありまして、曲に依つては其ボン〳〵する方の靜かな音が宜い時もあり、又活潑なパチ〳〵する音の宜い時もありますが、私の考では其山田流と生田流の長所を取つて、どうか其中の好い音を取つて彈きたいと思つて居りますので、それで爪を使ふのに柱の

方へ寄せて彈くのと、或は角と申して隅の木の方へ寄せて彈くのとは大變に相違を生じます、それは大抵の人は其ことを御承知がなくつて、どこで彈いてもそんなに變らないと考へて居るやうですが、柱の方に寄せて彈きますと悠然とした音がする、又角の方に寄せて彈くと活潑な音がする、一つの曲の中にも此處は此方へ寄せるとかこゝは、角の方に寄せなければならないとかいふ所が澤山ありますが、それを十分に呑込んで彈くと、隨分大きな座敷で彈いても、皆さんに滿足させるだけの音がある積りでございます、昔は八疊か十疊の座敷きで四五人の人に聽かせるのを能として居りましたが、當時は西洋の音樂と肩を並べて、其樂器にあるだけの音は、十分に出さなければならないのですから、私なども種々心懸けて居りますが、今申したやうな爪の使ひ方であると、十分に大きな音が出るのです、さうして第一には精神が肝腎です、一曲を奏するときに、其一曲が間違はなければ宜いと云ふやうな考では詰らない一本の絲を彈くにも十分に精神を入れて彈くと、餘ほど其音が大きく出る、精神が拔けると直に絲の方が違つて來る、幾ら指に力を入れても、指だけで好い音が出るものではない、氣合で好い音がするのでございますから、氣合が肝腎でございます、それでいろいろ前後いたしますが、曲に依て人々を感動せしめて泣かせるとか喜ばせるとか云ふやうなことは、琴でも出來ぬ事は無い、先づ大抵出來る筈ですけれども、琴の方では隨分難かしい、義大夫とか云ふやうなものは、御承知の通りそこに現はれて、泣くときには泣き笑ふ時には笑つて聽かせるから、人を感動せしむることが何うしても早い、所が琴の方は例へば熊野なら、熊野を彈いても其熊野の言葉と宗盛の言葉とは、それは別段に變つて女の聲を出したり、男の聲を出したりするのでないから、一寸聽くと變つて居ない、それで歌になつて居る所も、言葉になつて居る所もあるから、義大夫のやうに現はして行くことが出來ない、唯彈く人の心で女の言葉になつたときには其積りで弱く美しく言ひ

又男のときには强く、宗盛なら宗盛の心になつて言ふ位に、心懸けてやらないと、なか〳〵人を感動させることは出來ませぬ、琴の方では今までは餘り泣かせたり喜ばせたりすることは出來ないといふやうに、琴彈きの方でも考へ、唯お孃さん方のお慰だと云ふやうに、今までは思つて居つた、又聽く方でも然う云ふ考の方が多いやうでございますが、是からは琴彈きの方でも皆一致して、人樣を感動させることを心懸けたら、段々日本の音樂も盛になるであらうと思つて居ります、西洋の樂器と日本の樂器とは之を花に譬へますと、花の師匠が木振枝振をすつかり拵へて、是は此花活に活けて十分に宜いから、之をお活けなさいと、弟子に授けて吳れてさうして、弟子がそれを活けるやうなのが西洋の樂器でございます、さうすると花が十分に出來て居るのを活けるのでありますから、苦心が少なくして人には早く面白いとか美しいとかいふことが解り易い日本の樂器の方は枝振も木振も拵へずに、唯天然の木を持つて來て、サア之を活けろと言ふやうな鹽梅で、其花を活ける人が苦心して、初めて成功したものが出來るといふやうな譯です、丁度さういふ譯で日本のは桐を裏表合して、それへ糸を掛けてあるから、それで能くあれだけでも音がすると思ふのです、ピアノだのオルガンといふやうな、あゝいふ進歩したものから考へると、割合に能くピアノと合奏して往かれるのです、學校でも試して見ましたが、決して琴の音が隱れるやうなことはない、十分現はれて往きますで、琴彈きの方でも餘程心懸けて、一本の絲を彈くにも其積りで氣合を入れて彈かないと、どうしても好い音を出すことは難かしい、それには心懸が肝腎で、理の細かい堅い桐の琴を彈くときには、瓜の厚いので十分に力を入れて彈く、又理の疎い軟かいのは、薄い爪を以て餘り力を入れずに彈く、力を入れると押えつけるやうになるから、力を入れないやうにすれば、自から其樂器だけの音を出すことが出來ます。

話は少し前後いたしますが、琴の曲をピアノの譜に付けることを述べましよう、是は私が音樂學校で專ら行て居ることです、私が未だ師匠山勢松韻氏の手を離れない時分でした、何かして譜を覺えたいと心がけて、師匠に連れられ音樂學校へ行ては譜の講義を聞取り兼て西洋の音樂の樣子や、其曲の仕組法を尋て見ましたが、日本の曲は西洋の曲のやうに、拍子や何かの秩序が取つてありませんし譜を付る心持で出來て居りませんから、中々困難でしたが、師匠は私の熱心に感じたと見え、深切に日々敎へて吳れました、當時琴の曲を譜付ける事を知て居るのは、師匠山勢氏一人でありました、調子の事から申しますれば長く音譜を保つのが、全音譜其半分が二分音譜四分音譜八分音譜十六音譜三十二音譜と拍子が分て居ります、之を色々に組合して、一ツの曲をなすのです、其譜を付くる順序を申せば、機械は矢張り譜の紙に五線を引いて有る通り、金で出來て居る、其線が溝の樣になつていまして、夫れに色々の形の譜を並べるので其盤が一枚になれば、之をピアノの譜を書く人に書取らして、如斯幾度も繰返し、初て一回出來ますので、中々面倒な譜の數が幾種類もありますので、覺える苦心は餘人の想像し難いことです、私は晝は業務が繁忙で考へて居られませんから、臥床し二時頃迄で考へ、食事の時は箸を持て譜の代へころを心に造り忘れぬ樣に心がけ、車に乗る時は紙で譜の形を切ぬいてもらい、もつて居る樣にいたしました、これ丈骨の折れるものですから、師匠の苦心も一方でなかつたと思はれます、私が常に師匠の恩を忘れないのは其處です、此の外に琴の平調子や、雲井調子がピヤノの何の音に當ると云ふ事も詳しく御話ししたいと思ひますが餘り長くなるから別に御話しいたしませう。

（をはり）

校風に就きて

靜岡精華女學校長　杉原正市

近來學校に校風といふことを重んずる樣になりましたが、局外の人には往々考へ違ひをして居る方も見受けられたる樣ですから、簡單に其御話を致そうと思ひます、校風は勿論規則申合の樣な形式的のものではなく全く精神的のものであります、人に銘々の氣風が備はつて居る樣に、學校にも亦自ら學校の氣風があります、商業學校には自然に商人的の氣風が行渡つて居り、軍人の學校は萬事に亘つて武斷的の氣風が見えます、三田の書生と早稻田の書生と自然に各特色のあるのは、其學校の校風の相違から出るのであります。學校に校風のあるのは人に精神のある樣なもので、校風は實に學校の精神たり本領たるものでありまして學校內の事々物々萬般の上に、敎員生徒の口を借り手を借りて發現します、時としては小使などの言動の上に赤裸々として發揮せられます。又一方から形容しますと、校風は恰も學校に充滿せる空氣の樣なもので敎員も生徒も日々夜々之を呼吸して自然に其感化を受け其性情を淘冶せられます若し學校の規則を一國の法律に擬するならば、校風は之を國風民俗に比すべきものである國民は自ら風俗を作つて、一方に又知らず識らず其風俗に感化せられます、學校の諸規則は極端に申さば一夜にして製作することが出來ますが、校風は自然に生長するものであつて、俄に之を製作することは出來ません、ソロモン賢しと雖一夜机に寄りて校風を立案することは出來ません、弗蕈那の舌鋭しと雖一日演壇に立て校風を樹立することは出來ません、只高尙なる理想卓絕せる性格が永き日月を費して親く全校を感化薫育するに由りての

み漸次に成長するものであります、恰も數十年雨露の惠に由りて成育せる巨木の如きものであります、それ故に校風は全く人に由りて成り人去りて亡ぶるものであります。思ふに學校敎育なるものは、單に個々別々に人を敎ふるを不經濟なりとするも經濟上の理由のみを根據とするものではありません、善良なる校風を今日育成し、旦夕其內に在りて不知不識の間に善良なる感化に俗せしむるといふ敎育上の理由をも有することゝ考へます、故に學校にして善良なる校風なからしめば學校敎育の意義の大半を沒了せしむることゝ考へます、又敎場に於て生徒に授くる所のものは其大部分は智識に屬します、修身談などは隨分感動を與へ情操を涵養しますが、それさへも多分は道德上の智識の開發に終ります、實に德育といふべきものは、善良なる校風に浴せしめて一呼一吸一擧手一投足皆其感化を受けしむるに由りてのみ行はれます、更に思ふに今日敎育の現狀にて最缺點と認めらるゝは意志の訓練であります、此事たる最も言語文字力の及ばざる所であつて、健全なる校風力に由りてのみ幾分か其目的を達し得べきかと思はれるのであります。斯樣に校風なるものは重大なるものであり且敎育家の天職なる所以も敎育の困難なる所以も主として此處にありますが、前にも申す通り、これを育成するは一朝一夕の業ではありませんから、敎員の勤續といふことは最必要なる要件であります、近來のように轉任が頻々では到底善良なる校風は立ちません、御覽なされ善良なる校風の認めらるゝ學校が何程ありませうか、老生が空拳を以て各種の困難と戰爭しつゝ、此校を設立して之を堅守するものは聊か此處に冀ふ所あつてのことなれど、薄德菲才にして事の志と相添はざるは、日夜苦慮して措く能はざる所であります。

（をはり）

戰時に於ける婦人の覺悟

阿多廣介

凡て物には靜止する時と活動する時とあるものにて、自然には晝夜四季の別あり、又晴天もあれば風雪もあり、人事には老幼生死あり、富貴の時もあれば貧賤の時もあり、國家には平和の時代と戰亂の時代ありて轉換變化常に絶ふることなきものなり、人世五十年、此の間に立ちて身心の調和を保ち、健康を持するは即ち自然の道に適ふものにして、彼の富貴にして驕らず、貧賤にして屈せず、老を憐み、幼を惠み、生を樂み死を覺るは、人道を踏む所以の道なり、而して國家の平和に當りては常業を營み、戰亂に處しては節操益々見はるゝが如きは、即ち忠臣とも義士とも云ふべし、斯の如き人物は、實に古今に照し中外に鑑み人の模範たるべきものにて吾人が學を修め業を習ふは、其の究極するところは佛語に所謂靜中に動あり、動中に靜ありの域に達せんとする譯けにて、平生の修養が實に必要なりといふべし。

今や我邦東洋平和の爲め、天下正義の爲め、義軍を起して世界の最大國たる露國と干戈を交ふるに至りしが、忠勇なる我が海軍は、仁川にても旅順にても、早くも名譽の勝利を得て、全世界の賞賛を博し、頑强なる露人の肝膽を冷かならしめたり、されど敵は大國にして、縱令ひ海軍は全滅に歸するも、陸軍は以て彼れの賴みとする所滿州に充滿せる彼の數十萬の陸兵を掃蕩するは、又容易の事にあらざるべし、聞く所によれば連戰連勝を以て、彼れを進擊するも、ハルビンなる彼れの第二の根據地に至るまでには、少くも尚ほ六ヶ月を要すといへり、而して彼の外交術の老猾なるは世界各國の皆恐るゝところなれば、その慣

用手段を以て歳月の間に如何に時局の變遷を起すことあるも知るべからず、己れを知り敵を知るは戰の秘訣にして、己れを誇り、敵を侮るは兵の拙なるものなり、されば國民たるもの此際大に覺悟する所なかるべからず、否な我が國民は平常よりして、今日あるを覺悟するものなれば、前九年、後三年の戰は愚か、たとひ幾十年の久しきに彌るも、遂に彼れをして白旗を立て丶、我が軍門に降らしむるに至らざれば止べきにあらざるは吾が國民の大決心なり、吾人は信ず我海陸軍の將士は必ず終始一貫して、全局の勝利を見にあらずんば、刀を鞘に納め、彈丸を砲より拔かざるを、されど戰は將士の勇氣のみに依賴すべきにあらず、必ずや國民の後援なる者なかるべからず、則ち兵器は勿論、被服糧食等國民之れを供給して、武人をして能く後顧の憂なからしめざるべからず、反言すれば國民の財力能く外征貔貅の兵站に堪へ、幾多糧廠の彈藥炭油を饒にし、又補充將士の兵紀能くその前軍の志を繼ぐ所なかるべからざる也。

斯くの如きは、多くは男子のなすべきことにして女子の預り知る所にあらずと誤解せるものなきにあらざるべし、是れ余が今特に戰時に於ける婦人の覺悟を論じて、大に注意を喚起する所以なり。

何れの物にても、平時には必要を感せすと雖も、さらばといふ時に當りて、初めて後悔する事少からず、家貧くして良妻を懐ひ、國危ふして良相を思ふとは、古人も謂ひし事なるが、吾人は十數年間久しく其局に當りて、女子教育の必要を絶叫し、世人も亦茲に見るありて女子教育の漸く今日の盛況を呈せるは甚だ喜ぶべしと雖も、吾人が數々唱道したる女子の體育を奬勵すること女子の獨立心を養成すること、女子の交際法を改良すること、女子に職業を附與すること公共心を普及せしむることの如きは、歐化主義なりとか、御轉婆養成なりとかと冷笑せられ顧みるもの甚はだ少なかりしは、吾人の甚だ遺憾として嘆息せしところなるが、今日は徒らに之を嘆息聲中に措くべきにあらざるに至れり、何となれば軍人將士が今回の外征に從事するは、職責上勿論の事なるも、他の軍人軍屬ならざる凡ての國民も間接に直接に軍國の業務を執

らざるべからざるに至り、眞逆の時は全國の壯丁擧げて干戈を執らざるべからざるを以てなり、此の時に當りて一家の内外を整理し、子女を敎育し、男子をして後顧の憂なからしむるものは、實に婦人の任にあらずや、外征軍人の掩護者は非戰員たる國民なり、而して其國民の援護者は實に婦人たらざるべからず、故に婦人にして、身心孱弱に一家を養ふの力なく、又國家に酬ふるの公共心なきときは、單に一家の不幸不名譽なるのみならで、軍國男子をして一意專心國に殉するの勇氣を減殺し、千歳不磨の國辱を受くるに至るも知るべからず、然かも我邦の婦女は、殘念ながら實に此弱點を有するが如し、今日之を指摘するは、恰も盜を見て繩を綯るの譏あるも知るべからずと雖ども思ふに我が神洲男子が全局の勝利を得て、日章の國旗を東洋大陸の中央に樹つるに當りては、戰後の經營に於て大に膨脹せざるべからざるの必要ありて、韓國に、淸國に、滿洲に、西比利亞に大に國威を扶殖せざるべからざれば、國民の半數以上は以て大陸の經營に鞅掌せざるべからず、此際に當りて我が快男子をして後顧の憂なからしむるもの、否な其快男子と共に海外に於て、宏壯絶大の偉業を奏すべき好運を有する者は、實に我帝國の婦人にあらずや、されば帝國婦人たるもの、徒らに因循卑屈に流れ、男子の玩弄たるに甘んぜず、爾今以後一層體力を强健にし、心膽を剛勁にして雄々しき氣質を養成せざるべからず、余は此稿を草するに當り、米國婦人マギー女史が大に我邦に同情を表し萬里の波濤を蹴つて同志を伴ひ、我が赤十字に投じて將士の勞を犒はんとするの擧あるを聞き、覺へず感嘆し、且つ名譽の戰鬪に從事したる東郷司令官以下我が軍人の留主を守れる令夫人達が、今日に處する態度を聞きて欽仰感嘆に堪へざるのみならず、巷間僻地に至るまで、兵士の父老妻女達が、その夫たり子たる健兒の出陣を名譽とし、恰もスパルタ的の訣別をなすを見るときは、覺へず腕鳴り體躍るの感に堪へざるものあり、多くの令夫人令孃等以て如何となすや、所感を記して以て戰時に於ける婦人覺悟の概要を記し、其の詳細は後日に讓るといふ。



金原夫人を訪ふ

有本松濤

頃日金原明善夫人たまき子の君を神田駿河臺の邸に訪ひ有りし種々の話の一つとして年若き諸嬢の爲ならぬはなきを其まゝ茲にかいつけつ

私は無學の昔者でございますから、何もお話申上げる事はございません。たゞ幼い時から三十一文字を叔父に少しばかし仕込まれましたが、此叔父は昔武田信玄に仕へた後裔とか申して、今に武田姓を名乘つて居ります、此叔父に頭をはられて歌を習はせられました。けれども此節は皆樣が立派におできなさるので、私どもは到底及ぶことではございません。

又――これは血統の叔母ではございませんが――谷中に河合きさと申す私の叔母がございますが、これは大さう歌を勉强いたしましたし、且性來裁縫が好きでございましたが、今は歌の添削などを致して居りますから、これは相當に歌のお話なら能ましやうが、私は迚も申し上げるやうな事は能ません。私は今でも大日本歌道奬勵會の會員になつて居りますが元來本居派でございますので、近頃新派といふ方の何うもこの殺伐の樣な事は、歌として何うかと考へます。

女子教育の事でございますか、さやう、近頃は女學校が澤山出來まして、皆さんが此にお通ひになると年限の經つに從つて、靴を穿くとか、自轉車に乘りますとか、ヤレ洋學をやるとか、遂には妾は一生良人を有たないとか申す事もあるのでございますが、これは私は洵に感心致しません。私どもはやはり儒

道を信じて居ると云ふ方ですから、女子は妙齢になれば先づ良人を持つべき者。洋學をしたゝめに愆う妙な風習になるのは甚だ可くないと信じて居りますそれで娘や孫にも洋學は勉强致させないのでございます。

貞女兩夫に見えずとか申すので、甚だ結構であるには違ひございませんが、それも場合による事と信じます。近頃は兎角なまなかの敎育を受けるお陰で、遂に結婚の時機を失くし獨身で押通す人や、一度良人を有つたが後分れた爲に、今は獨身の方も澤山でございますが、何うも此人の口には戸が閉てられませんので何とか斯んとか種々の噂が耳に入つてなりません。全體日本の邦は其麼國體ではございません、で私は娘や孫に洋學は勉らせないで居ります、詰り此等の事が家庭の波瀾を惹起す原因で、女子が良人を持たないと云ふことは能く考へなければならぬ事と思ひます。

又此節諸學校で敎へる課目の中、割烹とか料理法とかは誠に宜しうございますが、それとても中以下の暮をして居る者に適當するやうなのを敎へる學校の課程はございません、それから遊藝といふ事も如何のものでございましやうか。私の考へはお茶とお花位を心得て居れば可からうと存じます、それで私の家では琴なぞでも習はせないので、昔は琴を弾いては藏の壁が落ちるなぞと云つて弾らせませんし、明善なぞも能く那の往來に八十九十の見すぼらしい老婆が琴三味線を弾いて哀れな日を送るのは、詰り何の爲であるか、那の女に那の藝が無ければ那の耻は洒さないであらうにと申すことでございます。けれどもお茶は他人樣の前にも御座敷にも、是非女子の心得て置かなければならない事ですし、お花も人知れず活けて置く位の事は必要と思はれます、で私共の娘達は遊藝は知りません。私の知人に琴に堪能の人がございまして、他に縁付きましたが、其時に貰ら ふ方では、琴を持つて來るのは好いが始終弾かれては困ると云つて、夫から後琴の緒などもきれた聞取

替る事はありませんが、なるほど女子が琴が上手でも他に縁付いた後、小供を抱へて琴を彈く譯にも往きません、何れにしても私は遊藝と申しますのは、女子は榮耀ならぬ限りにお花を活ける事、一通りのお茶を心得ておくだけで宜しからうと思ひます

御存じですか何うですか存じませんが、私の良人明善は、節儉と慈善とを旨として凡て正直にして居りますが、それがため却て他人の名譽に係はるやうな事でも出來まいものでも無いといふ位正直に致して居るのでございます。御維新此の方お上の事をばかり致して居りますので、隨分御國の爲に盡すといふ事ばかりの話にたづさはりますが、イザお金の段になりますと誰人でも逃足でございます。良人が今日までの中には隨分お話する事はございますが、其中でも恁う云ふ事がございました。

彼の名高い天龍川の水難を防禦するために、良人は家宅を蕩盡致して居りましたのが明治十年でございましたが……この天龍川の水難の事や、これに力を注いだ事は種々のお話がありまして迚も容易にお話する事は能ません、詰り山林を作り立てゝ水源利用をするので、それを當時の大久保卿に計りまして朝廷へ獻納するのでございました――その明治十年に天皇陛下には御巡幸といふ事になりました。其時に今の土方さんや……土方さんとは特別に御懇意申し上げて居りますが――それから亡なつた山岡さん達がお出でになつて私共夫婦に拜謁仰せ付けられると云ふ事になりました、天皇陛下に御拜謁とは甚だ恐れ多い事でございまするが、さて御拜謁申し上げるに我々夫婦は着て出ます衣類がございません。それ程家産を傾け盡して了つたのでした。

恰度其日は十一月の十一日でしたが、良人は木綿の綿入に縮の紋付の單物を着、私は濱松まで往つて羽二重三尺巾を買つてまゐり、それを三ツに切つて木綿の着物の上にかけて、そして拜謁いたしましたやうな仕末でございました。

それから隄の上に小さな家を建てゝ協力社を建て、

此處に出張いたして水利の事を營みましたのですが、それは本當に椅子もなければ毛布も無いといふ有様、加之に此家へ御巡幸御用の札を建てまして御上様には私共に眞に戸一重お隔てでございました。そしていろ〳〵の下賜物を頂戴いたし、お立ちになつたのでございますで、其の時の騒ぎと云つたら大層なものでございましたこれから後ち良人は益す苦心經營をいたして他人様からは狂人と云はれた位でしたが、明治十七年から山林を作り三百萬本の樹を植えましたが、それが恰度一昨年の十二月二十五日に献納する事になりまして、御料局に納めたのでございます。



それから銀行の方なぞも、彼此と充分儉約を致して段々と發達を致し、今では孫達が寄つて經營致して居りますが、良人は今は彼の三方ヶ原を疏水を開いて田地にする事を業務と致して居りますが、此三方ヶ原を田地にしますには三百萬圓の費用が要るさうですが、これは今から三百萬本の樹を植ゑつけて、其の樹一本が一圓の價する樣になれば、それで誰れの手も要らずに目的を達する事が能ると申して居ります。

其外或は美濃岐阜邊の山林の事や、又富士が根に山林を作る事や、長野邊からや、諸所の相談を持ち込まれて、其等の事に始中終留守勝でございます。

それで始終申す事でございますが、何うか口先ばかりで兎や角言ふばかりでは不可から、すべて實行して貰ひたいものだと言ふのでございます。此家なぞも餘り狹いからと他人樣が勸めて呉れますけれども何有立ン坊は濡れて居るが私共は斯うして雨露を凌いで居られるのは結構だと申して居ります何でも人に罪を拵へるといふ事は能く無いからとて、庭なぞにも果實類は一切作つてありません、ツイ甘さうな美くしい實なぞがなつて居ると、あれを欲しいと思ふ、自然と罪を作るやうな事になりまするので、それで何にもございません。植木なぞも眞の緣日位で買つて來たもの位、松竹梅の外は何にも無いのでございます。

全體先祖は質屋渡世を致して居りましたさうですが或年火事に遭ひまして預り物を皆燒いて了つた折、我家の物ばかり殘つて居ては宜くないと云つて、家の着物なぞ悉く火の中に投げ入れて燒いて了つたさうです。所がこれがために又大さう評判になつたさうでございますが、昔から此ういふ風ですから竪に事業のために家産を投じた時にも、眞實に殘らず賣つて了ひまして、掛物なぞも七福神のを一軸殘して置いたゞけでございます。

妾は元來繪を嗜みます處から、間々にチョイ〳〵習ひましたが、前申しましたやうに良人の事業のために充分遣つても居られませんでしたが、十年頃からまた再び習ひ始めまして、彼の南畫の名人衣笠豪谷さんについて習ひましたが、迚もお耻かしい次第でございます。此節は美術の事がなか〳〵隆でございますが、何ら美術が盛んになりましてもお國が貧乏では致し方がありません。兎に角お國のためになる事を心掛けねばなりません。

斯くて夫人との談話諄々として尚盡きず、話の間間に、夫人は筆の跡ゆかしく書きなされし御勅題の歌及び其他のものなど示されし、又床の間に懸けられたる軸の一は松上鶴にして一は竹に雀の圖にして、雅號は霞汀女史とぞ聞えし。（をはり）

家庭科學

日本の獸王

倭翁

上野の動物園へ往て御覽なさい、大なるものは象も居る駱駝も居ります、强いものは第一獅子が居る、虎も豹も居ります、獅子を世界の獸王と申すことは誰方もよく御承知でありますが、さて我日本の獸王とは抑何物を指して申せばいゝでせうか、勿論象や獅子どもは大きくもあり强くもありますが、是等は何れも皆外國產で、元來我國の動物と申す譯に參りませぬ、そこで我國產の獸類の內で、王と尊稱を附すべきものは何でせう、私は熊を以て日本獸王と稱して最も適切と申すのであります、成ほど熊は象や駱駝の如く大きくはありませんが、象や駱駝のやうに不格合ではありません、虎や豹の如く其毛皮が美麗ではありませんが、虎や豹の如く其性質は獰猛でありません、獅子の如き長き鬣、耀やく眼、大なる口、鋭き牙、巖の如き鼻、即ち珍らしき威貌はござりませんが、彼の光澤ある眞黑な毛を以て全身を包まれ、凛々しき逞しき貌は侮るべからずではありませんか、私が特に熊を推して我國獸王といたしますは何處となく我れ〳〵日本人に似て居る所が有るからです、彼が勇氣あり情け深く、思慮に富で居る所などは獸類中の眞に珍とすべきであつて、即ち熊は智仁勇の三德を備へて居ると申しても溢美でないと思はれます。

これは奧州での實話でありますが、一冬新晴に乘じて獵に出掛けました獵人がありましたが、一昨年でしたか八甲田山で澤山な凍死軍人を出した日のやうに、俄に吹雪天を捲きまして見る〳〵內に四面皆皚皚たる銀世界と相成り、山も木も岩も谷も一樣で勿論道が何處やら分らぬ筈が御坐りませんでした、かくなりましては平素如何に地理が明るい所でありま

してモ一向駄目ですから、獵人はとふ〳〵雪中の迷兒となつて仕舞ました、さて如何に大聲を揚て救を求めても人里遠くかけ離れたる深山でありますから人の耳に屆く筈はありません、その上雪に封じられたことゝて反響の答さへありませんから、その心細さは如何計りでせう、かくなつては凍死するより外は、せんすべがありませんから、よし一歩でも我家へ近つかんものをとて、其處此處と脚のつゞかん限り辿りましたが、忽ちヅル〳〵ドット千丈もあらうと思ふ陷井の中へ陷りまして一時人事不省になりました、幸に身に微傷も負けなかつたによつて暫くして氣が附いて見ると、先に陷井と思ふたるは一條の深き谷底に、おちて居のでありました、程遠からぬ片崖に雪のかゝらぬ場所とも見へて黑き所が目につきましたから、一時彼方にて一思案せばやとてよろよろ探りて參りました、黑き所と思ひしは一つの洞穴でありますから、中をのぞいて見ると、何だか奥に居るやうな氣配がいたしますから恐る〳〵眼をこらして克く見ますと、小牛のやうな大熊が伏て居りました。

獵夫はかくと見て忽ち其處にベッタリと腰餅を搗きました、今まで澤山殺生をした報が廻つて來て今日と云ふ今日熊の爲に餌食となつて相果つるとじやと思ふたから、腰が拔けて仕舞て立つことも逃ぐることも出來なくなつたのであります、熊は人の來りたる樣子に驚きてヌックと大なる頭を擧げて入口を一瞥いたしましたが、急に出て飛び掛らうともしないで、又そのまゝ臥して仕舞ました。

獵人は逃ぐるにも逃られず、寒さは一刻〳〵に身を切るやうに浸み渡り、その苦しさに堪へやらで、同じくば一思に熊に喰はれて斃れる方が嬉しいやうな感じもして參りまして、なぜ熊が早く喰ふて吳れぬぞと我を忘れて死を急ぎ、熊の方を恨らめしさうに打ながめるやうになりました、然るに熊は時々僞に首をもだけまして獵人を見ましたが、何だか此處まで這入て來よとおしゆるやうな氣持がいたしますか

ら、獵人も喰はるゝ、熊が戀ひしくなつてソロ〳〵と喰はれうと居ざりて穴の奥へと進みました、熊は別段害せうともいたしませんからその脇の處に最初は少さくなつて居ましたが、何分にも吹雪の屆かぬ奥といひ熊の棲處でありましたから、中々暖かでありました、熊はそしらぬ顔を致して居て呉れましたから知らず識らず抱つきまして、遂に熊の懷中で前後も知らず寢入て仕舞ました。

かくて獵夫はしたゝか熊に温ゝめられてグット寢入りましたが、暫らくして眼を覺ますと、先の凍えは何處へやら屈んだ腰も延び所勞も漸く醫りました、これこそ地獄で佛に遇ふたと云ふのでありませう。

さて一たび熊に助けられて凍死を逃れました獵夫の喜びも束の間でありまして、今度は體の助かりて心の弛みしにつけて、飢を覺へて參りましたが、如何に考へても食を得る道のあろう筈が御座りません、その思案に暮れて己が薄命を悲みて居りますと、熊は唐團扇のやうな掌を以て獵夫の顔を覆ひました、顔を覆はれてそれをのける勇氣もなく〳〵泣きけるうち、何心なく舌にて熊の掌を嘗めました所がその甘きことは砂糖のやうであります、これはと更に嘗め味はへば正しく砂糖であります、今は何をか遠慮すべき再三再四嘗むるうち先きの堪へ難かりし飢餓は何時となく醫へまして、茲に全く蘇生いたしました、而して此洞穴にて熊の庇陰に生活せること彼れ是れ前後四五十日にもなりました。

或日のこと熊はしきりに獵人の腰を押しますから、獵人は何事かと不思議な思ひをいたして居ましたが出て見よとの事なるかと漸く氣が附きまして、初めて洞穴を出る氣になり恐る〳〵出て參りますと、外は先きの大雪は名殘なく消亡せて兩崖の木々も芽含みかけて居りますから、再三熊の棲處を伏し拜み、茂れる葛蘿などに縋りて漸く崖を登りてまゐりますと最早人里も程遠からず、かすかに人聲が聞へましたから、喜び勇みて恙なく歸りました、家人は亡人の更に此世に生れ出でたる如く喜びて、ありし次第

を開きました、それから猟人は決心して再び銃を採ることを止めました、さて熊は寒中食物の乏しき用意に掌に蜜をぬりおきて貯ふと云ふことであります猟夫の餓死を免れましたは、斯の貯蔵の賜であります。

これは熊に助けられた名高き話でありますが、今でも北海道には往々熊に出遇ふことがあるそうです、熊は人の害心あるを恐れますゆゑに残酷なるやうなこともいたすやうですが、實はやさしい獣であります、故に山途でも熊に出遇ふたときは、直に倒れて死んだまねをするそうであります、此時はうつ伏せに寝て、決して仰向に倒るべからず、熊は先づ鼻口呼吸の如何を験していよ〳〵死人と認むれば己が棲處へ掻き入れて身を以て温め蘇生せしめ、時を計つて歸して呉れるそうであります、所が若しその時に手足を動かすなどいたして覺られるときは忽ち彼れが鋭爪の下に斃れねばならぬそうであります此等の行為は他の獣類に見るべからざる情ある義侠なることではありませんか、私が熊に仁ありと云ふのは此處のことであります。



又熊が馬を捕ふる所などは中々怜悧なものであります、これも北海道での話でありますが、馬を引いて峠などで熊に遭ふことがありますとこのとき馬子は我身が大切でありますから、そこで馬を放ちます、

馬は熊の居るのを見て喫驚天倒して一生懸命に走ります、元より馬に奔られては熊の到底及ぶ所ではありません、所が馬は馬鹿の初にある位ですから、三四町も馳つて後を振反て見る、そこで熊の姿が見えませぬと先きの怖さを忘れて路草を喰ひ始めます、熊は疾くに此處の呼吸を呑込で居るものと見えまして馬に逃らるゝと、直ぐ路を變へまして見隠れに跡を追ふて參りまして、今や馬が安心して立止つて居る面前に立現はれワツト聲をかけます、馬は不意に聲かけられて周章狼狽し直ぐ引反して逃げ出す知恵はありません。馬の性としてヒヽンといなゝきて、後脚で二足立ちとなりますから、此時熊は得たりとクツワ／＼と再三回爪で掻きますと馬は忽ち參いつて仕舞ますから、前脚を肩に引掛けドシ／＼と己が棲處へ擔ぎ込むそうであります、中々すさまじい勢であります、此等を見ても思慮のあるとが分るではありませんか、私が智ありと許るすも差支ありますまい、序に鮭を漁ることを一寸申置きませう、鮭の隊をなして川を上る時を見計ひ、熊殿は山より長き藤蔓などを採り來つて、ザブ／＼と川の瀬に歩み入り、手當り次第鮭を爪に引きかけて押へ目差のやうに差し通すのであります、最早や思ふ存分あさりて携へたる蔓に滿ちました頃、ヤツコラサと肩へ擔ぎ跡を見ずして揚々と棲處へ引揚ぐるのであります、此等が利巧でも獸類でありますから、蔓の先きに結目を拵へて置きませんですから、岩の上となく柴の間となく彼の健脚に任せて引きづり廻るものですからポツ／＼先きから拔けて參りまして、漸く棲處へ着いた頃には僅か二三尾しか殘つて居ません、此時の立腹と申さば中々恐しいものであります、全身の毛髪が盡く逆立ち疾風枯草を捲くの勢を以て引反して出て參ります、是れは折角已があさりし獲物を何ものかにして遣られた如くに思ふのでありますから、此時に出遇ふたならば決して容赦はありません、此時は假死も役に立たんそうであります、故に北海道では路に鮭でも落ちて居るのを見れば充分に警戒し

て、その附近の地は晝なほ戸を鎖して出でぬやうにする位だそうであります。

又獵夫が若し熊を獵ふとして命中を誤るときは驀然に獵夫を引き摑みて迯さず、獵銃など直にねぢ折り獵人を引き裂くそうであります、熊を獵るのは中々危險じやと申すとであります、月の輪とて首に白毛のあるをねらつて打つので此處に命中すれば一發にて斃すことが出來るそうであります、一たび怒れば人を裂き銃をも折り馬を屠る處はスバラシイ勇氣じやありませんか、私が熊に勇ありと申すは故なきことではありません。

其他容姿の素樸なる、歩行の堂々たる何となく愛らしく賴母しき所などは日本男兒の品性に似て居る所少なからずと思はれます、私は日本獸王の稱を與へても可然と存じます

（完）

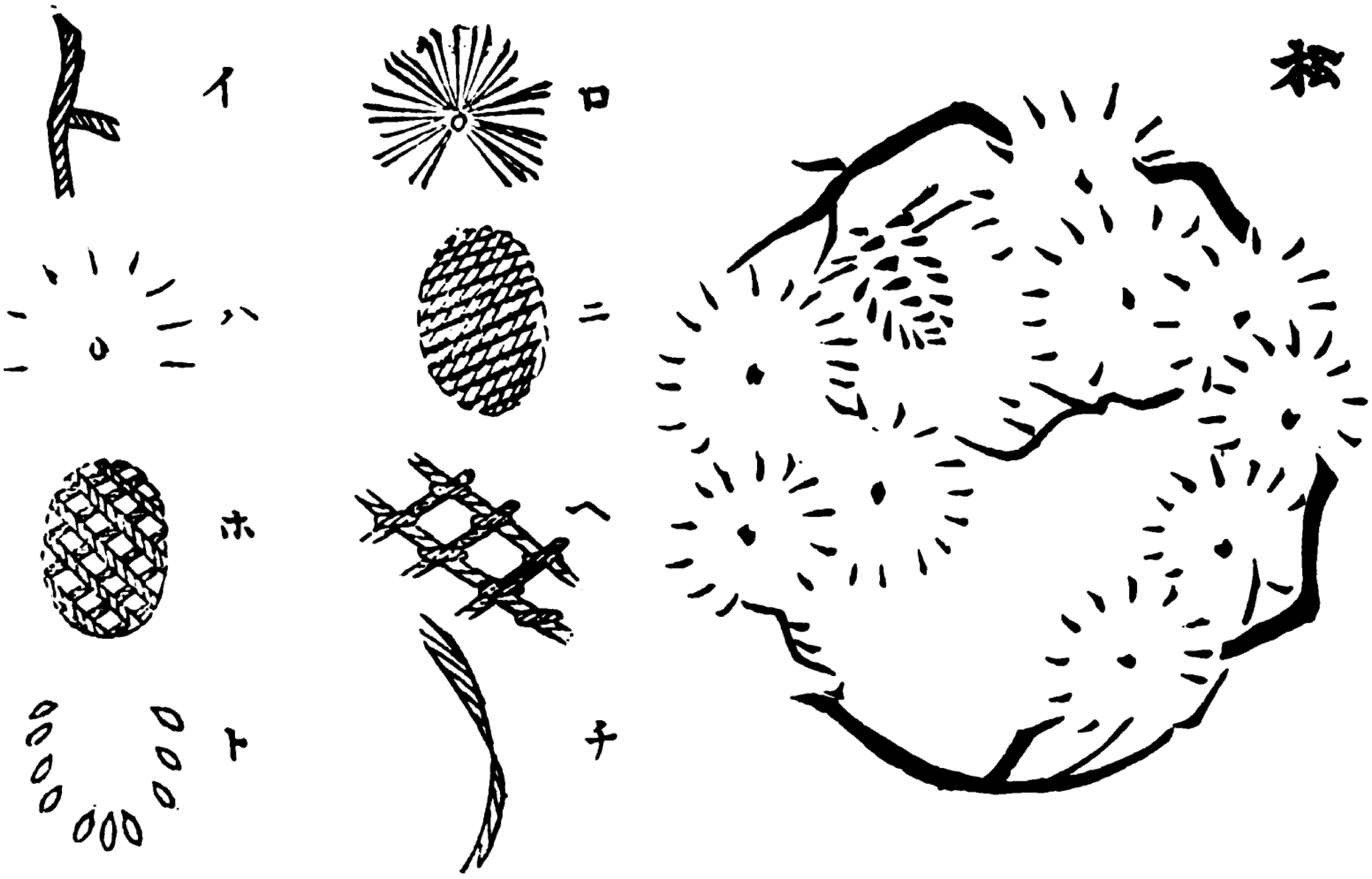


刺繡（つゞき）

上村百世子

松平糸縫ひ方

松を縫ひますのに用ひます糸の色は、青茶色を使ひまして、枝を縫ひます、此の色は普通の店には御座いませんから、只の茶を用ひましてよろしいので有ります、枝の縫ひ方は、（イ）圖の如くはすに縫ひまして、別に小なる枝を後から付けるので有ります、之も餘り針目の短かく成らぬ樣に致します、次に緑を縫ひます、是れは實物の樣な色糸を用ひなければ成りませんけれども、此松は矢張り摸樣縫ひですから、赤か或は白茶を用ひまして、はすにかま糸一本にて縫ひまして、松の葉を縫ひます、之もかま糸一本の草色を用ひまして（ロ）圖の如く緑に向つて致します、松葉は（ハ）圖に示して有る形の所に二本渡し其間にそれよりすこし短く針を出して縫ふので有り



ます、次に松かさ是は茶色の糸を二本合せに左よりに(甘より)致しまして(ニ)圖に有る樣にはすに糸を渡して縫ひつめます、次に圖に示したる樣に、前縫ふて有る上に菱に糸を掛けます、次に其菱掛に(ヘ)圖の如く又に成て居所に同じ糸で綴じます、次に松かさに附て居る(ト)圖の形を縫ひます、上に有る三つは二針りづゝで縫ひ、矢張周圍も二針づゝで縫ひます、次に松かさの下に有ります二本づゝ出て居る葉も、松葉と同じ事でよろしいのです。

蘭平糸縫ひ方

蘭是は大なる葉から致します、矢張りはすに縫ひまして、針目の短く無い樣に能く針目に注意して、そろう樣に縫ふので有ります、葉の細く成つて居ります所は、裏返つて居ります所で有りますから、先きの方を濃き草色を用ひ、根本の方を淡くするのです其縫ひ方は(チ)圖に示したる如くに致します、根本に有ります小さき葉は淡草色を用ひます、根は白茶

花縫ひ方



蘭



を用ゐまして、枝を縫ひました如くして縫ひます。花に用ひます糸は、白茶に草色がゝつたのがよろしいので有りますけれども、是は別に注文して染めさせなければ御座いませんから、極淡き草色と淡時色を用ひます、中の小さき花瓣だけを時色に致しまして、後は草色で指圖に有ります樣に、糸のなびきに注意して致します。

次に時色で縫ふて有ります、所に圖に有る如く濃時色で致します、次に軸を致します、是れは花を縫ひました糸でいたします、只細く縫へばよいので有ります。

次に金糸で葉脉を入れます、是は其眞中に入れ五厘置き計りに綴じます、綴じ糸は草色のすか合に致しまして、後に金糸を下に引きこみます、引き込みますには、太き糸を二本にし針を下に出し、輪の中に金糸の切りはしを入れ、下より糸を引きます。

牛と馬の話

清水橘村

我國は昔から菜食する國民で、太古は獸や鳥の肉をも食用に供したものであるが、佛法が印度より輸入されてからは肉食が嚴禁されて、僧侶はまづ野菜のみを用ゐ決して生臭いものを用ゐず、信徒もそれに伴ふて肉食を禁じ、之を行ふものは畜生道に墮落し極樂の美園にたのしむことができないやうに言ひなされてから、一般に菜食のみを貴んで、未だ衞生など云ふことは知らなかつた爲め、人種は劣等な體格の、氣力も血色もない、形容枯稿した小さな國民となつてしまつて、民に菜色ありとは我等一般國民を形容する好標式となつたのである。

處が明治の新天地開けてより、外國の文明我日東の美山水に波及し、近來は人も肉食することの缺くべからざるを知り、野菜とそれを合せ用ゐ、恒産あるものは却て肉食に重きを置くやうになつたのは我國

民の爲め誠に賀すべきことであるが、然しそれは重に男子の上にあつて、女子は當時の若き女を除くの外、尙佛法の敎が腦裡にひしとしみこんで居るから進んで肉食する者とてはないのである。

かゝる舊思想は全滅せねばならぬが、尙我國の外國程肉食が盛んでないのは、牧畜の事業の盛大ならぬのを見ても知れやう、今肉食が盛に行はるれば、この牧畜も盛になり國家の富を增加させるのであるから、肉食はわが身體を壯健にするばかりでなく、一方に於ては國を富すと云ふ利益があるから、言ひ換へれば肉食は一の公益である、女子まづ進んでこれを行はしめざる可らざるものだ。

偖爰には牛と馬とのみ說明すべき筈であるが、事の序に豚の一項を加へることにするが、

わが乘りしことをうしとや消えにけん
　草葉にかゝるつゆのころもを(閑院)

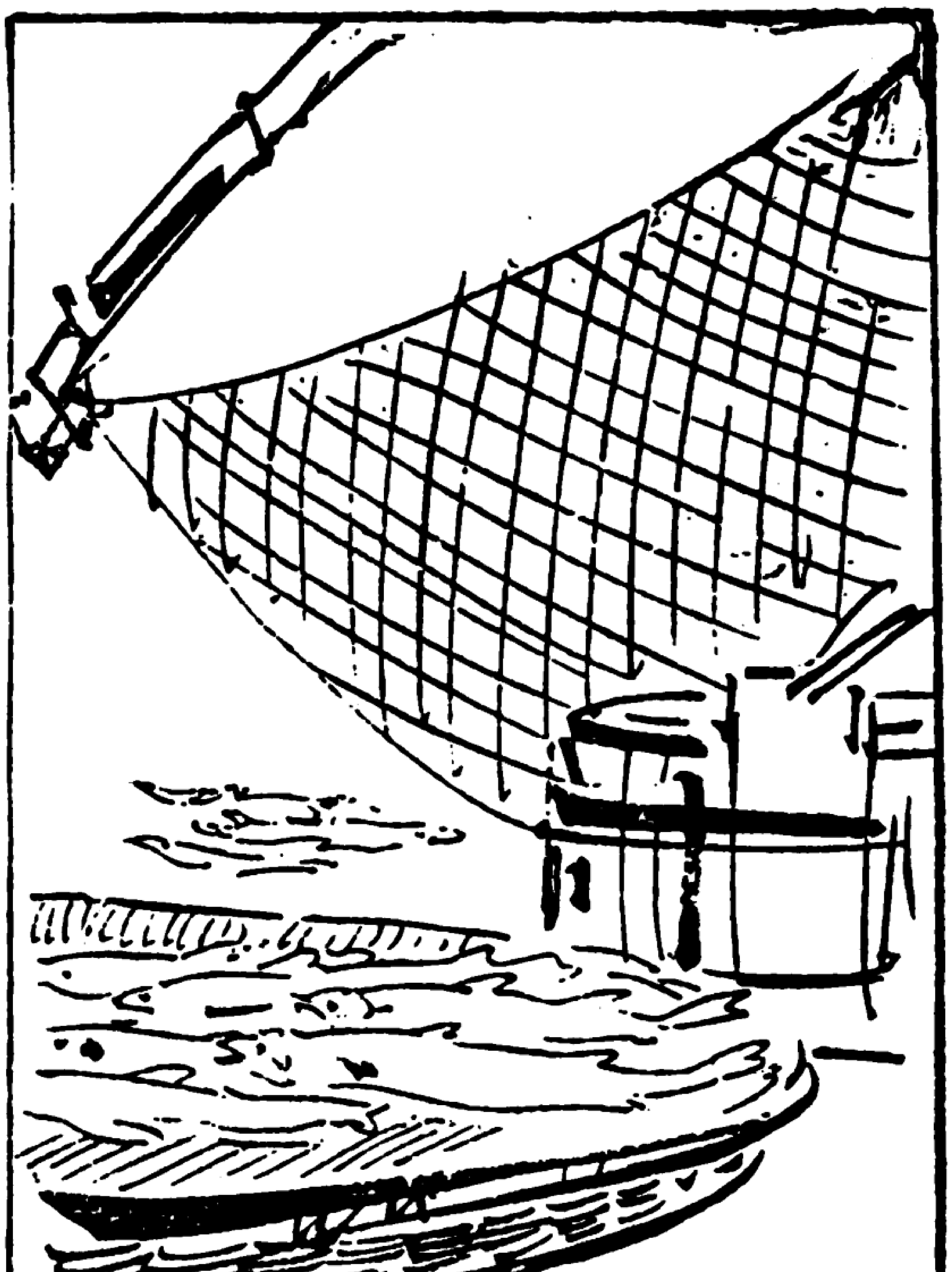
馬に亞で人に用ゐらるゝ動物は實に牛である、牛は馬の如く走ることは速くないが、力量は到底馬の及ぶところではない、かつ忍耐の強きことも馬に勝つて居る、故に多くは輓用の力役に利用し、又は牛乳をとるに用ゆる、而して牛は馬とともに草食獸にして、嘗ては强烈なる時もあつたのであるが、人に種種に用ゐられて、今日のやうな靜かな動物になつたので、あの角を供へて防禦の用に供するのは、昔日の强烈な面影の遺つたものである。

而して牛肉及び牛乳は美味にして最良の滋養品である、角は又種々の細工に用ゐ、骨其他は肥料となし毛は毛氈を織り、皮は靴等に用ゐる、牛は力役以外に是等の目的を以て飼養せられて、神戸牛は日本全國中最良の品で有名なものだ。

牛乳は大人に効がなく、小兒にはある、肉は却て大人に巧がある、それから肉の良否を識別するに、まづ赤色黃脂なるは牡牛の肉で、赤み薄く脂白きは牝牛の肉で、黑みを帶ぶるは老肉で、指にて肉を推し手を引けば原形に復するは肥肉で、彈力少なきは瘦肉で、肉硬く枯燥したるは病牛の肉で、黑血或は水

分多きは病肉である。
神代紀に保食神の殺されまし丶に、其神の頂化して牛馬となつた由が記してある。これ牛の物の本に見えたる始めで、和訓栞に牛は人の勞に代るをもて、能を稱して名とするなるべしとある。

食後直ちに寢ると牛となるといふ諺は、小兒を戒ゆる物語で、陸奥の國栗原郡つらつといふ在所に縫衛門といふ老人があつて、家に一人の僧侶を寄宿させて置いた、するとこの僧はお經をも讀まず、晝寢ばかりして居ると、或時黒き牛一匹はなれて庭をはね廻つて居る、縫衛門これを捕へて見れば晝寢を好む僧が牛になつたのである



後縫衛門又ひるねして牛となつたりと或書に見えた

夫れから馬は諸動物中で、尤も多く人の使用せらるる獸なり、性活潑なれど從順、體形美にして且つ威あり、脚長く人を乘せて馳ると速かであるので、軍用には最も缺くべからざるものである或はこれを荷駄に用ゐ或は又耕耘を行なはしむ、皮は以て鞄、鞍、靴底等に製すべく、骨は肥料とし、蹄は櫛とし、尾は篩とし、毛はこれを以て筆を製するので一つも捨てる處がない、馬は元野生であつたけれど、人類に使用されて現在の如き狀態に發達し來つたのは、牛と同樣で即ち頸長くして草食し、齒は野草を咀嚼するに適す

而して又其尾は害虫を拂ふに足り、鬣は寒暑を防ぐに足るので。

馬は草食の動物であるから、性自ら激烈ならず攻防の武器を有せず、敵に對しては只後脚にて蹴るのみである。

驢、斑驢は馬の一屬で、他に馬の種類多々あれど之を要するに皆一種の變成したものに過ぎない、中央亞細亞は其本産地である、而して幾多の變種中、アラビヤ産を以て最良とし、我國に於ては、青森、宮城、福島の産出を以て良種とする、而して駒と稱すのは雄馬であつて、雌馬はこれを雜役と稱す、古來より馬の毛色の名稱を揚れば

鹿毛　褐色　　栗毛　赤色
葦毛　暗色に白色の交れるもの
月毛　白色　　糟毛　頭と四肢との外に白色の雜れるもの
驪　黑色

今度は豚であるが、豚の先祖は野猪より變生したものであつて、原産地は歐洲及び印度で、當時日本の重なる種類はバクシヤ、ヨクシヤの二種で、皆肉を用ゆる爲めに飼養せらるゝのである、體格は肥大で短脚、飴粕、甘藷の屑及び厨下の廢物で生育するから、飼養者にとつては頗る利益である、今左に牛と豚肉と鷄卵とを比較すれば

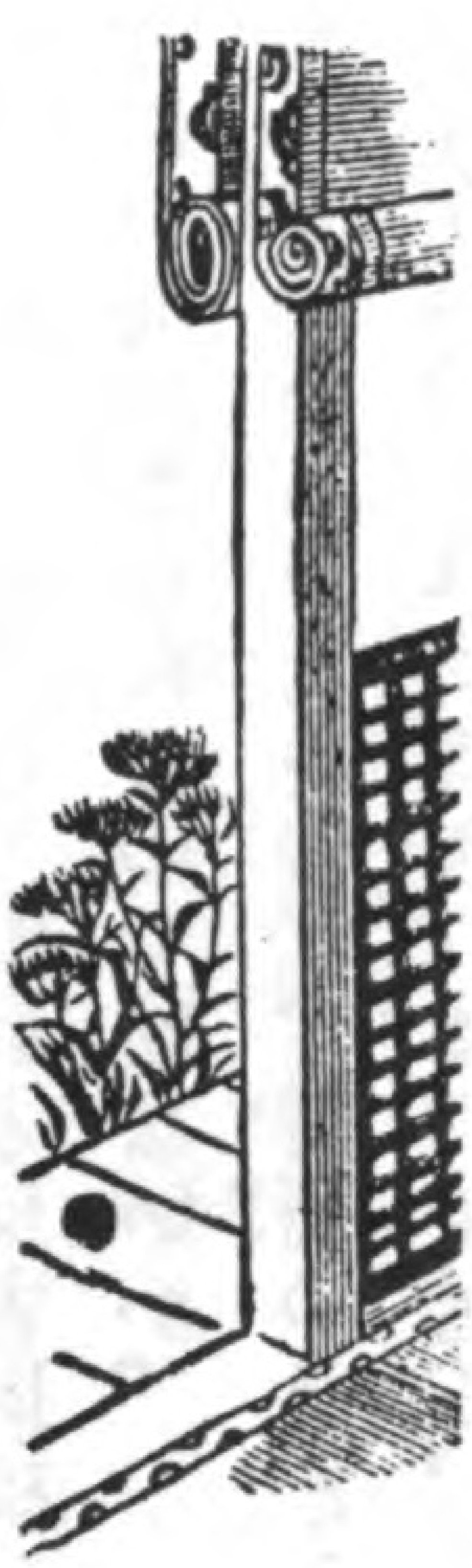
	蛋白質	脂肪	水	其他
牛肉	二〇、九一	五、一九	七二、二五	一、六五
豚肉	一四、五四	三五、三四	四七、四〇	二、七二
鷄卵	一二、五五	一二、一一	七三、六七	一、六七

肉中には寄生虫がある、人若し之を食へば條虫の腹部に發生する、特に豚肉にはトリキネと稱する一種恐るべき虫の寄生することがあれば何虫に依らず必らずよく煮出したる後でなければ食用してはならぬ。

ハムは豚の腿部を煙にいぶして防腐せしめたもので、相州鎌倉より出づるを以て名産とする。

肉には寄生虫が居て、頗る危險であるらしいけれ

ど、相當の豫防法を用ゆれば、決して恐るべきことでない、又これが爲めに肉食を嫌惡するには當らないから摘宜の手段を用ゐて、盛んに肉食することを女子に慫慂る、菜食をして體格の立派な國民を造らうとて決して出來る相談でないから、まづ此冬を利用して、衣食の道の立つ者はより多く肉食した上に血色のいゝ美くしい女となつて、次に賢母の一資格を得られたい、肉食をせぬものは血色も惡く、精神も軟弱である、何で明治の新理想婦人に當はまるものぞ、新理想を抱いて健全なる國民をつくらうと思はば、まづこれを實行して貰ひたい、さすれば一方にかゝる利益あると共に、他方には當今の複雜な敎育を受けるだけの腦力もできるだらうと考へる。



慈善割烹店

岡野知十

慈善及びその種類（たとへば孤兒院とか免囚徒保護とかいふ類）の名目のもとには隨分すくなからぬ團體があるやうである。佛敎のものもあらう。耶蘇敎のものもあらう、これ等の團體は平生どういふ働をして居るだらう。孤兒養育などには成績のよいのもある、併かし多くは報告一片でさほどの成績を世にあらはして居ない。集めた金は慈善の用にならず、慈善といふ一種の營業者の腹をこやすに過ぎない。時事新報社が時々催ふす慈善會の如きは臨時のものではあるが、慈善の目的をよく達して居る。慈善のやり方は右の手の事を左の手に知れぬやうにするのが本意ではあるが、しかしその成績は貧弱者の病所によく利いて、同時に社會一般の目にいかにもその事業の成績が神々しくあらはれて、善事の爲すべき事の快よき事を感得せしめるやうでなければならぬ

團體はある、その團體はたゞ看板と反古同樣の報告ばかりでは一向つまらぬものではないか。

慈善のやり方はいろ〳〵あらう、醫藥のほどこしもよろしからうが、これは既に行はれて居る、たゞ一層ひろくゆきわたるやうにしてほしい。私ののぞむところは醫藥よりも一層日常に切實な食事にむかつて慈善の方法を用ゐたい事である、貧民といふほどでなくとも隨分相應な勞働をするもので、榮養不足のさまを顔に現はして居るのが多い。私のちかごろ知る人になつた學生に既に三ヶ年間夜間車を引て晝は英語を修め、今年は卒業して米國へゆくといつて居るのがある、刻苦勤勉は驚くべきであるが、榮養の不充分か顔色がきはめてわるいので氣の毒に思ふほどである。この類の學生や勞働者はすくなくはない、そこで一片慈善の心あるものは慈善割烹店を開く事にしたら、施療よりも一層効力が多い事であらう。

これは新しい工夫ではない、泰西にはいくらも行はれて居る。露西亞の如き國柄でさへこの種の設備が社會に行はれて居る。

露西亞の慈善割烹店には二種あつて(一)は『無代』(二)は『一錢料理』とである、これ等は(一)市立(二)慈善の團體(三)一個人の三種から開かれて居る。『無代』の方は警察の證明あるものに限り給與する仕組である『一錢』の方は一錢を拂ひ得る力のものには誰にも供給する。やゝ上等の乞食等の來るところである。『無代』の方はスープに肉切を入れ、黑パンを添へる。これが常例であるのだ。流石に慈善家のする事ゆゑ美味でなくとも健康を害するやうなものはない。貧民にとつては好餌であるさうだ。

日本にはまだこの種の店を開くほどの必要を見ない貧民が尠ないといふのは公論ではあるまい。要するに慈善といふ事をどうするかを解さぬゆゑであらうたしかに榮養の不良はいろ〳〵の上に見える。ちかごろの人力車夫がむかしほど走らぬのはそのひとつの例ではあるまいか。どうかすると意氣張では非常

競走したものであるに、ちかごろは車夫が競爭をしない。腹が不充分であるからであらう。寒夜提灯を煖火にして、僅に餅一切を喰ひつゝ『旦那いかゞ』といふのを見ると憐れむべきの念に耐ぬ。

慈善料理店、せめて無代でなくとも、せめて一錢でなくとも、まづ原料の代價一杯のものを賣つて、その調理者、その見世の雜費ぐらゐは慈善會の支出として利益といふものを見ぬ割烹店を開きて、豚なり馬なり、飯なりを十分にくはせるだけの方法は出來さうなものであらう。

耶蘇敎の禁酒會救世軍なども演説ばかりでなく、チトまづこういふ馳走をしたらどういふ者であらう。

うめの花たがそでふれしにほひぞと
　はるやむかしのつきにとはゞや
はるのよのやみはあやなし梅のはな
　いろこそみえねかやはかくるゝ

だいところ

女子美術學校講師　石井湧太郎

茶懷石献立

向｛たいらぎ貝　鹽引鮭せん切　あられ生姜｝

汁｛生海苔　小口せうろ｝

飯

椀盛｛鴨ふわ〳〵　つみ菜　ゆず｝

燒物｛味噌漬　ほう〴〵｝

取肴｛まき鱚　にしめ富貴頭｝

吸物｛しらうを　ぼうふう｝

湯

香物（かくや）

菓子（そばまんぢう）

向、たいらぎ貝は鹽で洗つて、程よく切る、鹽引鮭

は細く切て用ふ、但し此の細く切りたる鮭は一度味淋の内に浸し置くものなり、わられ生姜は細かく才形に切りたるもの、酢の加げんは生酢に食鹽少しを溶解して之れに味りんの煮返したるものを加へて用ふるのである。

汁　三州味噌と並味噌と半量づゝに合して鍋に入れ水をよき程注入て之れに鰹魚節の削りたるものを随分多く入れて煮返すのである、之れを馬尾節で漉して後ち再び煮立てゝ用ふる、松露は小口切りにして其の煮漉した汁で下煮をして置く、海苔は其のまゝ入てよろしい。

▲椀盛、鴨の身をよく敲きて骨筋を去り馬尾節にて裏漉にかけ其の身を取りて玉子を摺り合せ之れに味淋のにぎりと、冷えたる煎汁と醤油を混合して鉢に入れて蒸す成べくよく蒸したる後ち金杓子にて掬ひ取り盛り付けるなり、つみ菜は菜を細かにつみたるものを茹でゝ用ふ、柚子はへぎ柚子にして入る、露は煎汁四合に對して醤油一勺八夕、味淋一勺二夕、食鹽五分、好く煮立て用ふる事とす。

▲燒物、ほう〳〵を切身となし二日程味噌に漬け置きたるものを燒きて用ふ。

▲取肴、鱚を三枚に卸して骨を除け其の身に薄鹽を振りかけ暫く置きて後ち尾の方より之を卷き串に指して燒くべし、燒上げたる後ち照を引くなり、照は味りん、醤油を同等に合せ煮詰めたるものなり、富貴頭の煮染は先づ洗いたるものを三四度水を取り替へてよく茹で充分苦味を去りたる時之れを煮染るものとす。

▲吸物、白魚は鹽水に入れて箸を以てよく洗ふべし後ち之れを笊のまゝ煮立たる湯の内に一寸入れて湯がくなり、防風は洗ひたるものを細かに刻みて入ればよろし、露は煎汁に淡さりと味を付けたるがよろし。

▲湯、煎り米を沸し之れに鹽氣を少し付けて用ふ。

▲香物、何にてもよろし薄く刻みて水に三十分程浸し置きて用ふるがよろし。

▲菓子、上新粉五十匁、篩砂糖六十五匁右二品をよく合せて置き、長芋の皮を剝きたるもの四寸程を摺り卸し、以上の粉を混ぜ合せ柔らかくして手に付かざる位までにこね合すなり、此の如くなりたる時、餡を團子位に丸め置きて之れを前にねりたる粉にて包むべし、之れを包む時成るべく手早くせざれば手に付くものなり、されば手粉を充分に付けて行ふべし、さて之れを濡れ布巾を敷きたる蒸籠の中にならべ十五分程蒸すべし。

▲鮑のこしらへ方

鮑の上面の青いのを見立て〻口の所を庖丁で切去り、鹽を上面へ附けて再三揉つて固くなるまで洗ひ、貝をはなして、庖丁し又は煮もするのだが、指身に作つて、その上へ手をおほひ水をかけ(手の上から)濁を流し水を切つて器へ盛り、茗荷など刻みて盛りそへ二盃酢をかけるなどよろしい。

漬物いろ〳〵

農學士　富益良一

漬物とは普通食鹽、米糠、味噌、麴、酒粕等を以て適宜の調味を加へ、蔬菜及び果實の類を貯藏せるものを云ふ。

第壹　蔬菜漬物

一　澤庵漬

澤庵漬とは、米糠及び食鹽を用ひて萊菔(蘿蔔俗に大根)を貯藏せるものにして、四時の需要頗る多く殊に冬期間の如き生菜の供給充分ならざる時に於て消費する量頗る多額なるものなり、其法先づ成るべく形狀の正しき、殊に菜肉の發達佳良なる萊菔を取りつ〻清水を以て鄭寧に萊菔に附着せる土砂を洗ひ去り、葉と細根とを切り捨て、之れを日光に曝らし以て乾燥せしむべし、而して乾燥の度合は、貯藏時日の長短に從ひて、食鹽の用量及び壓力の強弱と共に相異ならしむるを要す、普通の方法は、二週間

乃至三週間晴天に乾燥し、夜間及び雨天には、雨霜を防ぐが為めに蓆莚の類を以て適當の覆蓋を施こし或は寒氣の襲來して氷凍するを豫防すべし、斯くして碎米の混交せざる米糠七升に就き、食鹽三升の割合にて能く揉み混ぜ、四斗入酒樽の空樽を用意し、能く洗滌乾燥したるものゝ内に、糠鹽の混合物を布き、其上に乾燥したる萊菔を、多くの空間を殘さぬ樣に駢べ、又糠鹽を撒布し、而して萊菔を載せ、遞次斯くの如くして、凡そ七八十本の萊菔を漬くることを得べし、此際注意して菜根の大いなるは、成るべく下方に漬け込むべし、斯くの如くして上方に板片を置き、强壓を與ふるが為めに重き石を載せ置けは數日にして水分上昇すべし、此時壓力を減じ、其の水の溢出せざる樣にして、貯藏し置けば、翌春一月より初夏の候に至るまでの、香物として美味なるべし、茲に注意を施すべきは、米糠に碎米の混せざるものを用ゆることにして、若し米糠中に米の碎片あれば、漬けたる後ち桶中に於て醱酵して貯藏品に酸味を與ふべし、又貯藏の際には成るべく暗冷の場所を撰び、窖中に置けば最も適當なり、今左に貯藏時日の長短に從ひ、萊菔乾燥の度合及び食鹽用量の相異を記さん。

一ヶ月半の間貯漬したる後ち、食用に供すべきものは、四斗樽一挺に付き、食鹽一升五合及び米糠八升を用ゐ、萊菔は多少縮皺の現はるゝまで乾燥せしむべし。

二ヶ月の後ち食用に供すべきものは、食鹽一升五合及び米糠六升を用ゐ、萊菔は全面に縮緬皺の現はるゝまで乾燥せしむべし。

三ヶ月の後ち食用に供すべきものは、食鹽二升及び米糠五升五合を用ゐ、萊菔は同上にして、尾端の絞びるゝ位に乾燥すべし。

四ヶ月の後ち食用に供すべきものは、食鹽二升五合及び米糠五升五合を用ひ、萊菔は同上にして、弓形に屈曲するまで乾燥せしむべし。

五ヶ月の後ち食用に供すべきものは、食鹽三升及

び米糠五升を用ひ、萊菔は同上にして環狀に屈曲し得るまで乾燥せしむべし。

六ケ月の後ち食用に供すべきものは、食鹽四升及び米糠五升を用ひ、萊菔は環狀に屈曲して壓締するも折れざるまでに乾燥せしむべし。

七ケ月の後ち食用に供すべきものは、食鹽六升及び米糠四升を用ひ、萊菔は充分に乾燥して、結び得る位のものを用ゆべし。

夏期土用を越して、食用に供するには、食鹽七升及び米糠三升を用ひ、越年せしめて食用に供するには食鹽一斗に米糠五升を用ひ、萊菔は前者よりも能く乾燥したるものを用ゆべし。

壓力は最初強く重きを加へ、水分の溢出せんとするに至らば、之れを和らげて壓力を減少すべし。

二　奈良漬

越瓜を二つに縦斷し中肉を去り、食鹽を其中に充塡して、樽或は桶の中に浸漬し、壓石を加へて一夜放置し、翌朝取り出し鹽汁を去りて、果肉を上方に向け之れを日光に射さしめ、暫時の後ち反轉して、果皮の方を日光に曝露し、四時間許りにして取り入れ貳個の大形越瓜に對し酒粕壹貫目の割合に用意し、桶又は樽に米糠と少量の食鹽とを混加したるものを凡そ三寸許り布き、處々に穴を穿ちたる中底の板片を其上に置き、瓜と瓜と接觸せざる樣に注意を加へて、酒粕とを交々に漬け込み、適當の重壓を加へ置くべし、斯くの如くして一年の後ち、酒粕を新しきものに替へ、三年の後之を用ゆれば頗る味美なり。

奈良漬、押漬を製するには、越瓜を縦切し中肉を去り、之れに食鹽を三分の二許塡め、樽に入れて二日間重壓を加へたる後ち取り出して莚又は蓆の上に列べ、日光に曝らして乾燥し、酒粕の上に列べ漬けて上より食鹽を撒布し、覆蓋をなして貯藏するなり。

胡瓜も亦た越瓜と同樣にして、粕漬になすことを得べし、而して四五日を經れば食料に供することを得れども、長期間の保存に堪へがたし。

茄子は之れを二日間鹹漬になしたる後ち、少しく日

光に曝らし、酒粕に食鹽を混和せずして、前者の如く漬け置くべし。

山葵は一日間淡鹽漬け、翌日酒粕に漬て用ゆべし。

三　初夢漬

落花小茄子の帶を切り廻はし、淡く鹽押にして、芥子をかき醤油にてゆるめ、少量の白糖を加へて鹽梅し、是れに鹽押の茄子を漬くべし、此漬物は長期の貯藏に堪へず。

四　麹漬

甘酒麹十三枚に味淋酒一升の割合に混加して數日間之れを放置したるもの丶中に、鹽押茄子、干瓜及び萊菔等を漬け込み、或は嗜好によりて、薑根、蕃椒の少量を加ふるも佳なり、又麹を味淋に解かずして醤油或は酒と水とを等分に混入したるものに、麹を揑ねて糊狀となし、之に蔬菜類を漬け込むなり。

五　阿茶羅漬

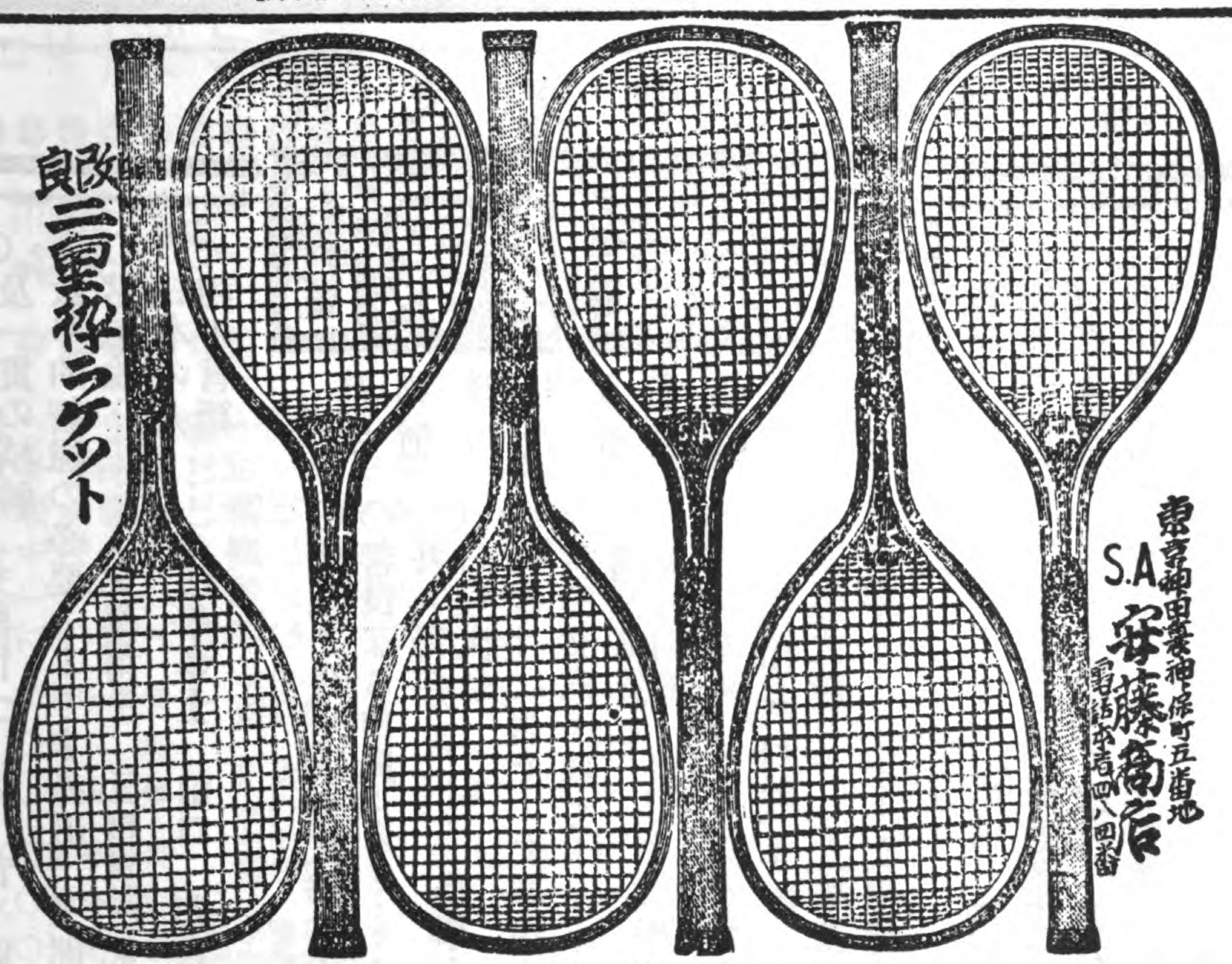
阿茶羅漬は主として當坐漬物として用ゐられ、其法先づ干萊菔を四ッ割にして一寸許りの長さに切り之に薑根、昆布、鹽漬茄子、茗荷の子、小梅干等を加へ、酢と醤油との混合物又は醤油と味淋とを混合して、煮沸したるもの丶中に漬け込むなり。

六　辛子漬

茄子の辛子漬は、先づ小形の茄子を取りて、其の果莖を去り、凡そ二日間鹽漬になしたる後ち、之れを掬ひ上げ、布片を以て鄭重に、果皮に附着せる水分を去り、偖芥子粉一升二合を取り冷水を注いで堅く練り、之れを布片に包みて、苦味を去るが爲めに熱湯の中に投じ、凡そ十分乃至十五分間許り煮沸し、鍋中より出して放冷したるとき、醤油を加へて糊狀に練り合はし、更らに米麹七合許を加へ、再び能く攪拌したる後ち、茄子を壺中に并べ、その一列毎に芥子及び米麹等の混合物を置き、斯くして全數を漬け終はらば壺に覆蓋を施こし固封して貯藏すべし、又た醤油の代はりに、酒と醤油との混合物を用うるも可なり、而して混合物の割合は、芥子六分に付き麹四分、及び酒七分に付き醤油三分となす。

（つゞく）

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候



諸學校用　体操器械

登録商標

S.A.

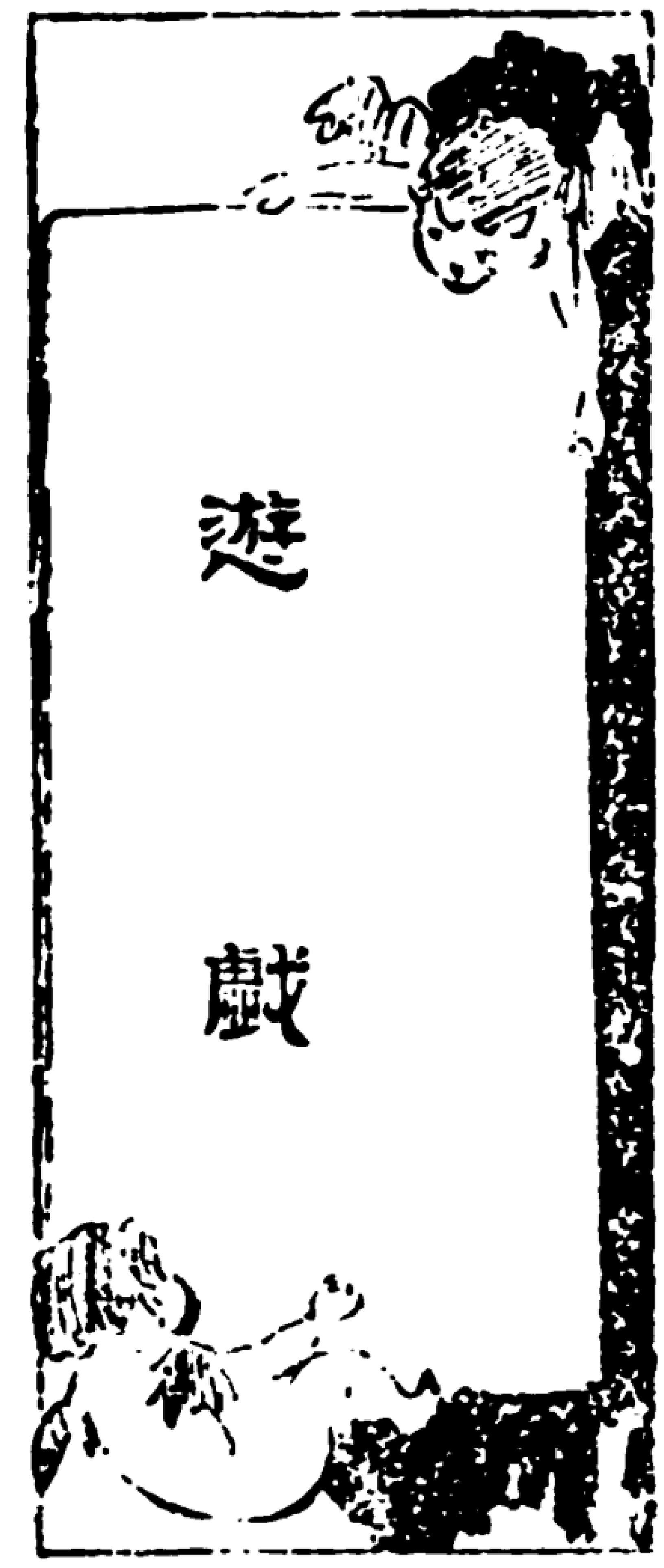
安藤商店

改良二重枠ラケット		
一號	四本	一三、五〇
二號	四本	一一、五〇
三號	四本	一〇、三〇
四號	四本	八、二〇
五號	四本	七、二〇
六號	四本	六、二〇
七號	四本	五、二五
普通二重枠ラケット		
一號	四本	一三、〇〇
二號	四本	一一、二〇
三號	四本	九、八〇
四號	四本	七、四〇
五號	四本	六、七〇
六號	四本	五、七〇
七號	四本	四、七五

テニスネット		
一號	長四間半 巾三尺五寸	一、七五
二號	長五間半 巾三尺五寸	二、三五
三號	長六間 巾三尺五寸	二、四五
四號	長七間 巾三尺五寸	二、九五
網張棒		
上等	四點付	二、九〇
並等	三點付	一、五〇
最新形室内テニス		
ラケット二本 ボール四ケ ネット一張 網張棒二本	壹箱入	一、四五

S.A. 電本四八四
体操器械
遊戯品一切
東京 安藤商店 神田

S.A. 電本四八四
体操器械
遊戯品一切
東京 安藤商店 神田



婦人躰育の新方面

獸醫學士　四　走　涙　人

貴婦人の野外遊戲

◎婦人體育の新方面とは　未だ我邦に多く其例を見ない處の所謂婦人銃獵のことを云ふでありますす婦人の銃獵は一見甚だ奇異の思を爲す樣ではありますが其我邦にこそ奇異なれ獨乙にても英國にても又た米國にても佛蘭西にても凡そ文明を以て立つ處の國々にては又た婦人の體育と云ふことを重んずる國々にては、

◎此の銃獵は一般婦人の間に　行はれ殊に貴婦人の野外遊戲として最も著しく賞揚せられて居るのであります左れど私は之を我國一般の婦人にとは申しませぬ責めては社會中流以上に階級する家庭の奥樣や御孃樣を初め常に學問の爲めに精神を勞することの著い女學生諸君……所謂貴婦人としての諸君即ち諸君の野外遊戲として諸君は必ず此の銃獵のことに志しを寄せられんことを希望するのであります語を換へて云へば婦人體育の新方面を開くことを御勸告申上ぐるに外ならず。

◎原頭霜白うして銃獵好適　の期節なりとは專ら男子壯夫の方面に叫ばれつゝあり然れども這は一體に普通のことに屬し別に珍らしいことではございませぬ處で私は此に聊か風換りを學び我邦貴婦人諸君の爲めに又た女學生諸君の爲めに聊か銃獵の事柄を記し以て婦人體育の新方面に資するものあらんと欲するのであります追々春陽和氣の時は來る其れ此の時を待つて其實行を企てなば深窓幽閉の趣味では更に一層甚しき趣味あるを發見すべし之れ浪人の切

の最も希望する處であります斯く申しますると、

◎をやまわ婦人に銃獵をと　驚きになる御方も御座いませうが斯樣の御方はまだ世界の形勢を御存じない御方で敎ゆべきことが澤山あります先づ年は目出度新たになり時候は追々に暖かくなつて参りますると獨り男子のみに限らず一般御婦人の方までが野外の遊戯と申すことに注意して参ります銃獵は野外の遊戯として、

◎最も多くの趣味を有して居る　野外の遊戯は運動の一つで男子に必要なるが如く御婦人にも又た甚



だ必要のものであります御婦人方の運動と云ふことも四五年前に比較して見ますると今日では大分進步して参つた樣に思はれますが大體から論じますればまだ甚だ幼稚を免れない論より證據は我邦の大勢を左右する而かも萬事が此の地を以て中心とする東京ですら私立女子大學を初め幾多官私の高等女學校に於ても僅かに不完全なる體操の一科を設け殊に珍らしくも女子大學に於て薙刀べースボールを學べるが如き我邦婦人の唯一の體育にして大日本體育會の女子體操も又た甚だ振はぬと云ふとであります而かも猶ほ之を以て女子體育の進步

と致して居ります即ち之を西洋の婦人而かも其多くの貴婦人、女學生等が勇ましく又た逞ましく騎馬、釣網、銃獵を行ひ其勇壯其活潑倶に男子の群に劣らざるものに比すれば其差は果して幾何でありますか……思ふて此に至らば我邦の貴婦人女學生諸君たるものは文明的體育に於て甚だ多くの遜色を有して居ると云はねばなりますまい。

◎騎馬、釣網、銃獵倶に之れ　一種の野外遊戯にして御婦人の方と云へども必ず之を學ばねばならぬ必要のあるものにして……をやまー銃獵を婦人にと申して懼くには當らぬのであります而して之を上流の階級に在る御婦人而かも一定の教育ある御婦人に仍りて試みらるゝ時は必らず多くの趣味を禁せずして又た高尚なる行樂を貪ぼるに適當致して居ります故に私が先づ貴婦人と申す部面の御方に向ふて銃獵の志を望む所以も全く之が爲めであります近來に及びましては、

◎華族其他上流の方面に在る　御婦人殊に妙齡の令嬢諸君が乘馬の御稽古を爲されて居らるゝことをも屢々拜見致しました這は誠に結好なる美風でありますから一般の婦人殊に學問の爲めに常に頭脳を苦めらるゝ處の女學生諸君は競ふて此の美風を學ばねばなるまいかと存じて居ります細腰柳枝が婦人の一徳として尊重せられたる時代は既に過ぎ去り今日は又た、

◎二十世紀の婦人として體育の甚だ必要なる時代と爲り換はりたのであります其こで私の注文は騎馬もよろしい薙刀もよろしい釣網もよろしいが更に之よりも規模の廣大なる而かも趣味の一層深遠なる銃獵を學ばれんことを希望するのであります銃獵と申しましても強ちに深山幽谷に分け入るには及ばぬ僅かに郊外の散策に優る運動によりて田圃畦畔に田鴫、鶉、雀の如き飛鳥を驅るも又た之れ銃獵の一つであります而して其銃器の如きも強ちに大形のものを用ゆるには及ばず唯だ其婦人として操縦に適する空氣銃の如きものにても容易に之を射獲すること

を得るのであります要は其初めは簡易の方法により漸次複雑の銃獵に志しなば期せずして深遠の趣味と高尚の快樂を味ふことを得るのであります近者の米國女學雜誌により次に米國に於ける婦人の銃獵を紹介致します。

米國貴婦人の銃獵

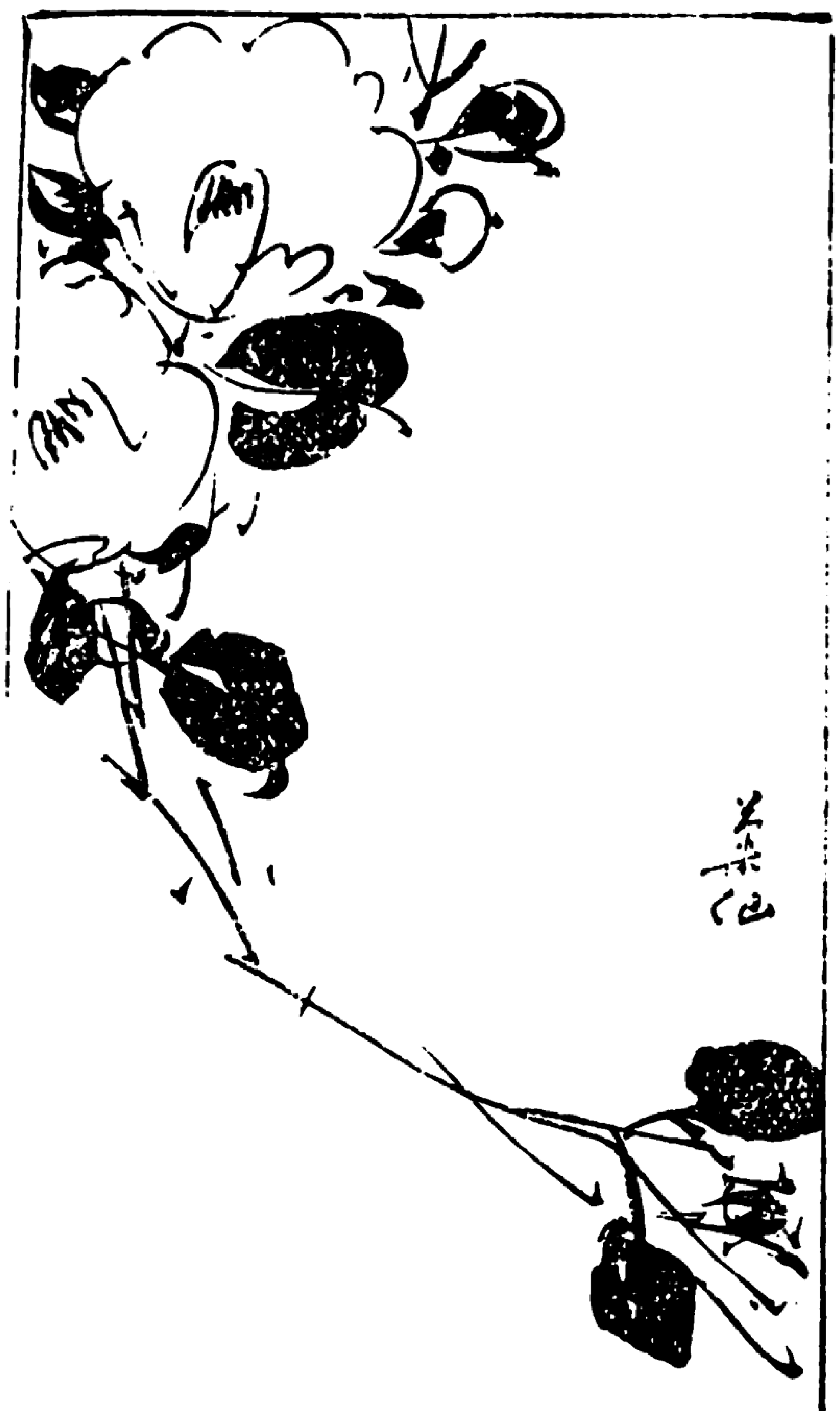
◎米國のメーン州と申す土地は○○○○○○随分銃獵の盛なる土地でありますが此の土地にては啻に男子のみではなく婦人の釣網、銃獵をも又た多く之を見るのであります殊に其婦人と申すのが何れも社會中流以上の貴婦人で中には會社の書記もあり學校の教員もあり新聞雜誌の記者もあり醫師もあり技師もあり修學中の女學生もあり又た交際社會の女王とも言はるゝものもあります斯かる種類の婦人が……而かも日常社交上に多忙を極むるレデー連が時に紅塵尚丈の都會的生活を離れて一天空濶、四望廣漠たる原野又は谿谷深き森々たる山林に分け入り野營的生活を送りつゝあることが如何に彼の人々の爲めには、

◎心機一轉の妙を得るに○○○○○○○好適して居るかゞ窺ふに足るのでありますそこでメーン州に於ける一般の習慣を見ますると恰も幾千歳の古へにありし祖先の遺風とも云ふべき狀態がありまして甚だ奥床しいのであります一見して柔弱なる婦人連が獨木船に打乗り土人の案内者を伴ひ到る處の河流沼澤に逍遙し或は獵銃を肩にし深く森林山野に別け入り獲物を搜索するのでありますから其四肢を平均に勞働し體の發育を完全にすることは恐らく之に優るものはありませぬ而して其案内者たる土人は如何なる人物であるかと申しますれば實に世界に於て得易からざる適當の伴侶者であつて到る處の地理を諳んじて居るのみならず婦人に對しては恰かも中世紀の、

◎歐洲に於ける武士の婦人に對する○○○○○○○が如き待遇振りであつて弱を扶け强を挫くと言ふ一種の高尚なる氣質を有して居るので多くの婦人は安心して此の銃獵に從事し敢て餘念を存せざるが常でありまする而して毎年此のメーン州に向つて狩獵の爲めに出掛く

る婦人の數は年一年に增加して參つたのでありま す之は啻に其良人に伴て已むを得ず赴くのでなくて多くは婦人自身が其趣味と其快樂を貪ぼる爲めに進んで銃獵に出掛くる樣になつたのであります故に或る時期に達して參りますと幾百幾千と申しまする貴婦人が丁度我邦の溫泉行き見た樣に其名山なり其大河なり有りと有らゆる、

◎山水明媚の塲所に集まつて　概ね野外的生活を營んで居る山水明媚の土地と云へは有名なるソンゴー河にして此の河邊に於て最も多數なる婦人の銃獵者を見受くるのであります其他ムースヘッド湖畔の如き少しも男子の扶けを受けずして高貴なる女性の常に跋涉しつゝあるを見受けるのでありります加之彼のバンゴルの東北に當つて居ります森林では屢々貴婦人體の女性が足に獵靴を穿ち身に獵服を着けて獵銃を肩にして純然一個の女獵夫たるの扮裝にて其良人又は父兄と俱に獵犬を叱咤し麋を逐ひて終日其體の疲るゝを知らざる壯快をも見受けることがあり。



◎野營即ち天幕的生活　多くの人は此の野外的生活を定めて辛いものであらう苦いものであらうと思召さるゝが這は大なる間違ひで實際左樣に辛く苦いものではない寧ろ一方から言へば甚だ愉快のもので有ます前に申しましたメーン州にては每年春から夏にかけて二千四五百人と云ふ多數の婦人連が概ね天幕的生活を營むで

居ります此の婦人連の話を承はれば左こそと思はるゝ節が多いのであります。

◎序に其天幕の構造　を申ますれば先づ柱は生木の皮に剝ぎたもので之にすつく製の天幕を張り二三の寢室と一つの休憩室とを區別し又た別に廚房を設け朝夕の料理に便利を欠かぬ樣にしてありまな此の外に又た別に大なる天幕が張つて各自の天幕より之に集合して會食する時の便利に備へてあります斯かる臨時の經營に屬する天幕も一個の旅舍と同じく期日を定め郵便物の集配をも受くることになつて居ります罕れには電話を架設したる天幕をも見受けたことがあります斯の如く便利の經營に爲つて居りますから假令ひ野營とは申すものゝ何一つ不自由のことはない。

◎薫風吹來る樹陰清流潺々たる　河邊に天然を友として消閑するが如き(俗塵紛々たる都會に生活し)實に人生最上の良生活であると言はねばなりませぬそこで夏期の間は一餘の釣竿を携へて河流に漁り多期の間は一挺の獵銃を肩にして山野を跋渉し鳥獸を射撃し常に其壯快を嘗むることは米國上流婦人の甚だ名譽とする所で而かも又た之を他の國人に向うてまで誇るのであります。

◎獵區と婦人の獲物　バンゴル及びアルーズツツク邊は主もに獵銃家の野營を張る地方でありますから此の地方には良人に伴はれたる令閨父兄に伴はれたる令孃が良人父兄の助手となつて倶に獵銃を肩にして飛鳥走獸を驅逐しまた射撃して居ります此の地は一帶に米國の中にて二つとない好獵區であるのみならず世界中の最も好獵地と申して居りますから此の獵區に停まる婦人は啻に米國の貴婦人のみならず歐洲諸國の貴婦人も又た多く米國の婦人と同じく單獨又は同伴して此の地に參つて居ります試に其獲物の種類を申しますれば先づ鹿、麋の類最も多くして次は熊、狐、水獺、河狸の類であります鳥類では山鷸、パトリッチ、鶉、水禽では鷸鳥、鴨の類であります從來メーン洲にて獲たる鹿の大さを聞くに比

較的尨大のもので其重量は大抵八百斤から一千斤もありますそして立派なる其角は實に四呎に擴がつて其容貌は中々に偉大高崇と申す趣を備へて居ります故に之を追蹤し之を射留むるの爽快は又た實に謂ふべからず而かも其婦人の大膽は其れ容易に測るべからずではありませぬか未だ多く足効外に出でざる我邦の貴婦人たる方々は之を聞きて以て如何の感を爲し賜ふぞ。

◎獵區往來の便利　またムースヘット湖の邊では毎日一定の滊船があつて定期に此の獵區の岸に往來し旅客の便を計つて居るから婦人の出獵にも左ほどの不便はないのでありますそうして一日前に郵便を出して置けばそこの旅館ではちやんと獵に必要なる獵具を注文して取寄せて置ひて呉れる故如何に素人の婦人にも何一つ不自由なく清遊の好機を授けて居ります云々。

幼兒の戯れ

實相寺　一二三

青眼氏から兒童遊戯の續編をものせよとの御話があつた、生憎その手控が見あたらぬのと、何分原稿〆切日が切迫して居るので、こゝには幼兒の戯の題の下になるべく小戯に關したる事について、一言を述べて見やうと思ふ。

（一）あんよ

嬰兒誕生前近くになると、自然と智慧がついて立つて歩かうとする、此時母親はその手を捉へて、あゆむ稽古を教へて、「あんよはお上手。轉ぶはお下手」と言ふのである、漢字には桀と言ふ字がこれに當るので、その意味は手を以て何物かを捉まへると言ふ事になる、俗に言ふと、赤子の手を引いてあゆむ事を教へるのを言ふのであるさうな。

（二）おつむてん〲

「おつむ」と言ふのは、「おつむり」の「り」が省か

れたのである。「つむり」は「つぶり」とも言つて、頭と言ふのに同じである、お、の字を添へて「おつむ」と言つたものであらう。「てん〳〵」とは頭をたゝく音である、故に嬰兒が戯れに手を以て頭を叩くのを「おつむてん〳〵」と言ふのである、序に言つて置くが「つむじ」と言ふのは旋毛の事で、渦のやうに巻いて生した毛を言ふのである、「つむじが曲る」と言ふと、心のねぢれたと言ふ意味になつて、やはり頭に縁のあつて生じた語である。

(三)かいぐり

これも嬰兒の藝の一つである、その方法は左右の手を胸の邊に横にならべて、手のさきを互に廻し合はせるのである、即ち播繰の義である、糸を繰る有樣に似て居る處から、糸くりと言ふのは九州邊で言ふ語である。

(四)とつとのめ

「かいぐり〳〵、とつとのめ」と言ふ、その「とつとのめ」と言ふのは、右指を左の掌につけるのを言ふ、是は魚の目と言ふ義であるまいかと思ふ。

(五)あわゝ

支那では俗に小兒を哇々と言ふさうな、一體哇々と言ふのは小兒の聲である、今嬰兒が口に手をあてゝ「あわゝゝゝ」と言つて、自身特有の藝として居る。

(六)かぶり

「いや〳〵」とも「かぶ〳〵」とも言ふ「日本書紀の神代の卷に「頗傾也」と言ふ字に「加夫志」と言ふ訓をつけてある、嬰兒の頭を振るのを「かぶ〳〵」と言つた事は、随分古い語である、今は「いや〳〵」と言ふと、嬰兒は頭を左右に振るのである。

(七)居ない〳〵ばあ

嬰兒の附添の者が、わざと顔を隠して、不意に顔をあらはしては、嬰兒の對手となつて遊ばせるのである、すると嬰兒は驚きながらも、機嫌よくにこ〳〵笑ふのである、それを覺え込むと、嬰兒は自身の顔を隠して、不意に人のまへに顔を出しては、その笑

を促し、又自らもつとめて笑ふのである、此戯は嬰兒のみでなく、身を隱して不意にあらはれて人を驚かすと言ふ遊戯は、尙は小兒の間柄に於て行はるるのであるが、支那に[口+臥]と言ふ戯があるが、頗るこれに類似して居る、この[口+臥]と言ふ漢字の意義は、（智𧨏反、言隱ㇾ身忽出以驚ㇾ人也」とあるので御了解であらう、隱したる己が身を不意にあらはして、對手の者を驚かすを言ふのである。

（八）ちよち〳〵

「ちよち〳〵」をせよと言ふと、嬰兒は兩手をひろげて手を拍つのである、即ち「ちよち〳〵」は手打ち〳〵の義である、社會の單純な上代にも、拍手と言ふ事だけは行はれた、兒童の尤も幼少なる時代に、拍手とも見るべき「ちよち〳〵」の行はる、のも、理なきにあらずなどとは强いて申さぬのである。



その他、高い〳〵、ト言ふと、手を高くさし上ぐる。にぎ〳〵、と言ふと、手を握つて見せる、握り〳〵

の意味である。ねん/\、ト言ふと、横になりて眠につく眞似をする。

以上述べた處は、わづかに其一般を擧げたのみである。

(九)人みしり

古い歌などには「おも嫌ひ」と言つて「世の中に、幼き子の面嫌ひ、見しが、なきにぞ、音は泣かれける」、など丶言ふ歌も見えて居る、これで小兒の人見しりするを「面嫌ひ」と古く言つたのが解る、一體幼兒の癖とて、始めて逢つた人や、亦久しく見ぬ人に出會ふと、何と思つてか泣き出したりするのである、これを俗に人見知と言ふのである、畢竟幼兒の眼識に、見た人と見馴れぬ人との貌の差別が、漸くつく爲であらうか。

(十)やんちや

江戸時代の延寶七年の俳諧に「西瓜の種ややにちや坊」など丶言ふ句が見えて居るのがこれである「やゝにちや」坊とは幼兒を「やゝ」と言ふから、その「やゝ」を借りて、西瓜の種のにちや/\して粘るのに例へて言ふたので、その種を數珠によそへたのは坊を、法師のやうに言ひ廻したのだそうな、今は「やんちやん」と言ふのである、宅の小供は言ふ事聞きませんと言ふのを「何うもやんちやんで困ります」と、世間の母親は言ふのである。

とりとめも無き筆の運び、あまり長々しきもいかゞとて、筆をとゞめる事とする。(をはり)

美的遊戯 星月夜

日本女子大學校教師　白井規矩郎

此頃婦人方の運動に付て大分八釜敷云はれる樣になりました、中には女子も男子と同じ體操なり遊戯なりを行ひ、特に之れは女子のもの男子のものと區別を付けられるのは、反つて女子にとつて難有迷惑であるなど丶極端な御說も見受

けます樣でありますが、古今東西女子が男性の服裝して押通して行くと申すことは余り承りません、服裝が男女其形を異に致すと申すのは何か其れに必要な事があるからで、又た生理的から見ましても、男女各發育する部局を異にして居ります處を見ますれば、各其れに適應する運動なり遊戲なりを致す樣になりますのは自然の理だらうと思ひます。

玆に述べます遊戲は、全く女性諸君の爲めに考案せられましたもので、原案者はエム、モートン氏であります、之れは自分も屢々實驗致しましたのだ、今に女子大學の生徒に行はせて居りますが、頗る興味ある運動法であります。

●人員● 此遊びは十二人を一組と致して行ひますが場所さへ廣くありますれば、幾組も同時に致して差支ないのです、否反て組數の多い程宜しいのです。

●用具● 各自に幅三寸乃至四寸長さ七尺乃至一丈の極めて柔かい布帛（金巾にて結構です）を一條づゝ用意致させます、ソコデ此布の色は成るべく種々のものを用ひますと宜しいです。

●音樂● 十分直しく致すのには始めの行進はマーチを演奏して、運動は凡てワルツと申す三拍子のものを用ひますのですが、其れ程にも及びません、適宜の皆さんが御存じの歌曲でも出來ます、樂器もピアノが一等ですが、風琴でも結構です。

行進

遊戲場の後方に一列となりまして、美しく布帛の兩端を双手に保つて、其まゝ兩手を頭の上に揭げる樣にして置きながら、次に申す樣な步調で行進いたします。

第一步　右足にて一步前へ、

第二步　左足の趾尖を右足の左の方へ、僅か離して床に觸れます、

第三步　左趾の尖を以て右足の前に半圓を畫きまして、右足の右の方へ運びます、同時に上体を左の方へ屈し

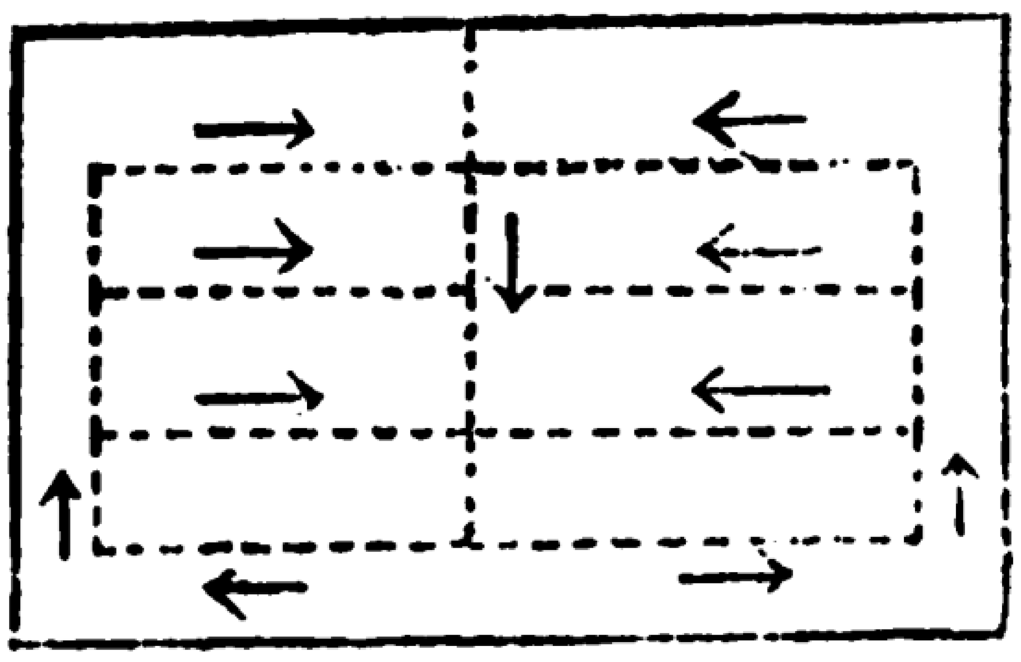
ます、

其まゝ靜止して居ります、

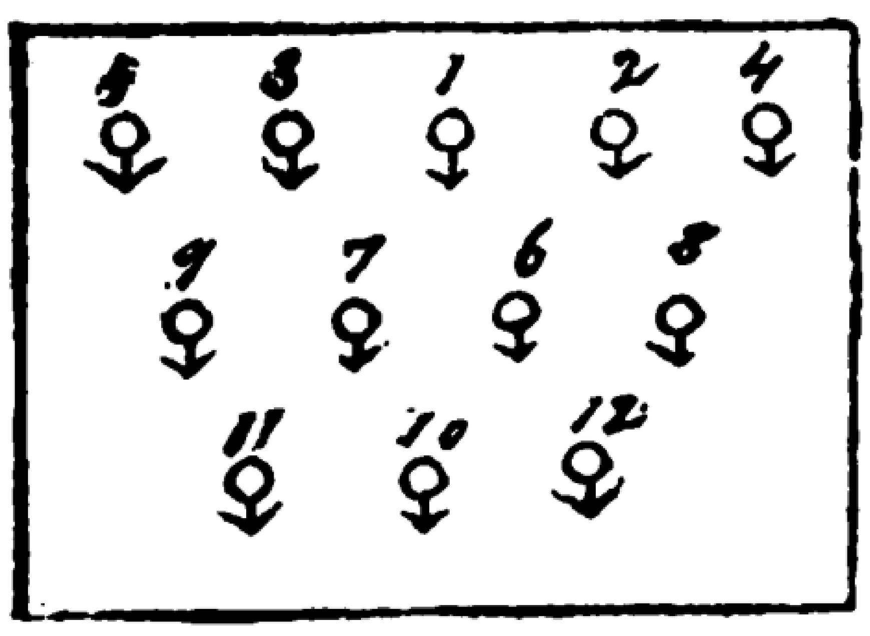
第四步

斯樣に致して次には第一步を左足を前面に致し、第二步第三步と前に右の足で致した事を左の足で致し、左の事を右で致す、次には又た右の足から始めると申す樣に、交互に右左と前へ進めて段々遊戯場の中央へ參る樣に行進致します、ソコデ中央まで參り來したら偶數生は右方へ、奇數生は左の方へ回りまして、第一圖の樣な形に並びます、其れから第二圖の形に移ります。

第一圖



第二圖



第二圖の位置に並び終つた處で、樂器の合圖に從て遊戯者は兩腕を兩側に垂れまして、布帛を前面に横たへ其兩端を懸垂する樣に致します。

再び樂器の合圖で布帛を胸の邊へ水平に執りまして、次の運動の用意を致します。

本來是れから音樂を三拍子のものに變へまして致すので、若し三拍子のものなら、一擧動に三呼間(則ち一小節)づゝを與へますが、四拍子のもので致すなれば極めて徐かに二呼間(則ち一小節に二擧動)づゝと致します。

一　布帛を胸部より眞直に上方に……………三呼間
　胸部に復す、……………………………三呼間
　　四回反覆する

二　右腕を側方に肩と水平に展伸して、左手を右の肩の前へ來たす、……………三呼間
　胸部に復す……………………………三呼間
　左腕を左方に展伸して、右手を左の肩の前に……………………………三呼間
　胸部に復す……………………………三呼間

三　二回反覆する

（イ）、布帛を頭上に水平に揚げ、双手の間を緊張する、…………三呼間

（ロ）、右腕を下方側に垂下して、左手を頭上に揚げ、布帛を右側に垂下する樣に…………三呼間

（ハ）、（イ）に同じ…………三呼間

（ニ）、（ロ）を左側で行ふ…………三呼間

四　二回反覆する、

（イ）、布帛を頭上後方に水平に揚けて、上體を右方に屈する、…………三呼間

（ロ）、眞直の位置に、…………三呼間

右と左とで各四回づゝ反覆する、此運動をする間は、腕は常に體に伴つて、同一の位置を保つて居る樣に注意する、

五　（イ）、布帛を水平に保つ、右手を前面に展伸して、左手を後方に引く、則ち布の前面から後方へ斜に水平線をなす樣にする、…………三呼間

（ロ）、前面に水平に置く、…………三呼間

（ハ）、左手を前面に、右手を後方へ、…………三呼間

（ニ）、前面に水平に、…………三呼間

六　十二呼間

二回反覆する、

布帛を輕く頭上に投げて、肩の上に懸垂して、指尖を肩へ載せて、布の兩端を前面に垂らす樣に、兩臂を肩と水平に揚げ、同時に體を右足に保つて、左足を前面に點し、體を左方に捻回して、其まゝ十二呼間を保つ、

七　十二呼間

布帛を左手を以て頭上に揚げ、右手は肩に止めて、次に左手を左側髖骨に來たす、布帛は今右肩より左髖骨に對角線に垂下せり、同時に左足を左側に移し、體を徐かに

右前斜に捻回して十二呼間の終りまで保つ、

八　右手を右側髖骨に來たして、左手を左肩の上に、同時に體を左足に保ち、右足を右方に點し、少しく左方に捻回し十二呼間を保つ、　十二呼間

九　左手を左髖骨に執り、右足を後方に歩して、頭を少しく右後斜に面す、　十二呼間

一〇　布帛を頭上に揚けて、右足を右前斜に歩し、右膝を屈して上方を眺む、左膝を眞直にして、　廿四呼間

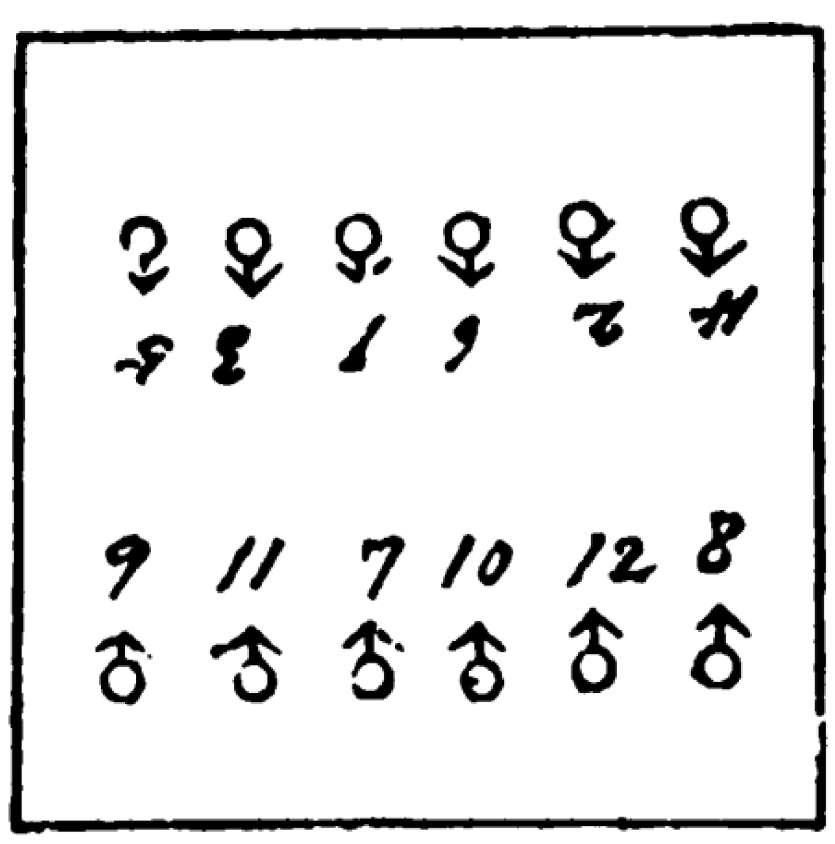
之れを始めの第一呼にて行ひ十二呼間を保つ、次に左足に搖移して左膝を屈し、右膝を眞直にして兩腕を頭上に揚く、

之れを十三呼間めに行ひ其まま廿三呼目まで保つ、廿四呼目に兩腕を前面に垂下し、右足を左足に垂れて、前方に面して、體を右足に保つ、

右前斜に歩して反覆する、

一一　第三圖に示す樣に、六人一列の二列を搆成する　十八呼間

第三図



次に前列は右列を跪ひて、凡て兩腕を側に垂下する、布は前面に横に垂らす、　六呼間

一二　凡て布帛を對角線に保つて、右手を肩に、左手を垂する、　三呼間

二列に於ける布帛は正しく併行するを要する（勿論後列の各生は、前列の其れよりも頗る高くして美しと）
位置を變じて、左手を上に右手を下に　三呼間
四回反覆する

一三　前列は双手を左膝に來たして、跪き、布帛を懸垂して、後列の左肩を經過して上方を眺むる如き姿に、　廿四呼間
同時に後列は前面に歩して、布帛を前列の頭上に美しく保つ、

一四　前列は左手を揚げて、後列の左手と結握し（小指と小指とで）布帛をして三角形の二邊を構成する樣になす、
三角形の尖點は跪けるものゝ、眼の水平よりも少しく上邊にある樣に、

一五　後列は後方に歩して舊位に復し　十二呼間
同時に第十二節の如く、對角線（右手を上に左手を下に）保つ、
同時に前列は反對の對角線（左手を上に右手を下に）を作つて、後列と十字形をなす、
次に舊位に復して、

一六　第五生と第三生、第二生と第四生、第七生と第十生、はアーチを作る、則ち手を對手の方に揚け小指を結握して、同時に他側の手を肩上に揚け、布帛を懸垂して、頭上にアーチの一點を作る、　廿四呼間
第一生と第六生　第九生と第十一生、第十二生と第八生とは（跪きて）對手の方の手を揚け、他の手

光に曝らし、酒粕に食鹽を混和せずして、前者の如く漬け置くべし。

山葵は一日間淡鹽漬け、翌日酒粕に漬て用ゆべし。

三 初夢漬

落花小茄子の帶を切り廻はし、淡く鹽押にして、芥子をかき醤油にてゆるめ、少量の白糖を加へて鹽梅し、是れに鹽押の茄子を漬くべし、此漬物は長期の貯藏に堪へず。

四 麹漬

甘酒麹十三枚に味淋酒一升の割合に混加して數日間之れを放置したるもの丶中に、鹽押茄子、干瓜及び萊菔等を漬け込み、或は嗜好によりて、薑根、蕃椒の少量を加ふるも佳なり、又麹を味淋に解かずして醤油或は酒と水とを等分に混入したるものに、麹を捏ねて糊狀となし、之に蔬菜類を漬け込むなり。

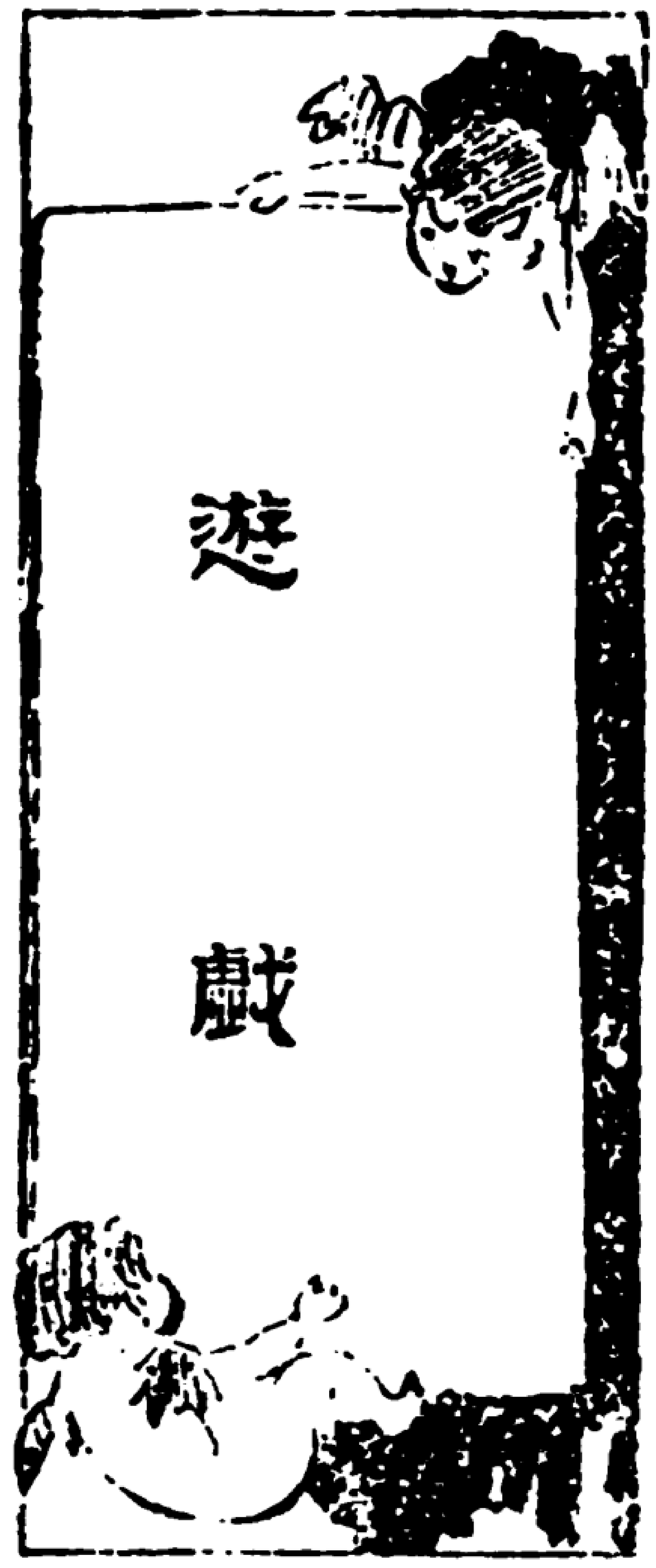
五 阿茶羅漬

阿茶羅漬は主として當坐漬物として用ゐられ、其法先づ干萊菔を四ッ割にして一寸許りの長さに切り之に薑根、昆布、鹽漬茄子、茗荷の子、小梅干等を加へ、酢と醤油との混合物又は醤油と味淋とを混合して、煮沸したるもの丶中に漬け込むなり。

六 辛子漬

茄子の辛子漬は、先づ小形の茄子を取りて、其の果莖を去り、凡そ二日間鹽漬になしたる後ち、之れを掬ひ上げ、布片を以て鄭重に、果皮に附着せる水分を去り、偖芥子粉一升二合を取り冷水を注いて堅く練り、之れを布片に包みて、苦味を去るが爲めに熱湯の中に投じ、凡そ十分乃至十五分間許り煮沸し、鍋中より出して放冷したるとき、醤油を加へて糊狀に練り合はし、更らに米麹七合許を加へ、再び能く攪拌したる後ち、茄子を壺中に幷べ、その一列每に芥子及び米麹等の混合物を置き、斯くして全數を漬け終はらば壺に覆蓋を施こし固封して貯藏すべし、又た醤油の代はりに、酒と醤油との混合物を用ふるも可なり、而して混合物の割合は、芥子六分に付き麹四分、及び酒七分に付き醤油三分となす。

（つゞく）



婦人躰育の新方面

獣醫學士　四走浪人

貴婦人の野外遊戯

◎婦人體育の新方面とは　未だ我邦に多く其例を見ない處の所謂婦人銃獵のことを云ふであります婦人の銃獵は一見甚だ奇異の思を爲す樣ではありますが其我邦にこそ奇異なれ獨乙にても英國にても又た米國にても佛蘭西にても凡そ文明を以て立つ處の國々にては又た婦人の體育と云ふことを重んずる國々にては、

◎此の銃獵は一般婦人の間に　行はれ殊に貴婦人の野外遊戯として最も著しく賞揚せられて居るのであります左れど私は之を我國一般の婦人にとは申しませぬ責めては社會中流以上に階級する家庭の奥樣や御孃樣を初め常に學問の爲めに精神を勞することの著い女學生諸君……所謂貴婦人としての諸君即ち諸君の野外遊戯として諸君は必ず此の銃獵のことに志しを寄せられんことを希望するのであります語を換へて云へば婦人體育の新方面を開くことを御勸告申上ぐるに外ならず。

◎原頭霜白うして銃獵好適　の期節なりとは專ら男子壯夫の方面に叫ばれつゝあり然れども這は一體に普通のことに屬し別に珍らしいことではございませぬ處で私は此に聊か風換りを學び我邦貴婦人諸君の爲めに又た女學生諸君の爲めに聊か銃獵の事柄を記し以て婦人體育の新方面に資するものあらんと欲するのであります追々春陽和氣の時は來る其れ此の時を待つて其實行を企てなば深窓幽閉の趣味では更に一層甚しき趣味あるを發見すべし之れ浪人の切

の最も希望する處であります斯く申しますると、

◎をや、まあ婦人に銃獵をと驚きになる御方も御座いませうが斯様の御方はまだ世界の形勢を御存じない御方で敎ゆべきことが澤山あります先づ年は目出度新たになり時候は追々に暖かくなつて参りますると獨り男子のみに限らず一般御婦人の方までが野外の遊戯と申すことに注意して参ります銃獵は野外の遊戯として、



◎最も多くの趣味を有して居る野外の遊戯は運動の一つで男子に必要なるが如く御婦人にも又た甚だ必要のものであります御婦人方の運動と云ふことも四五年前に比較して見ますると今日では大分進歩して参つた様に思はれますが大體から論じますればまだ甚だ幼稚を免れない論より證據は我邦の大勢を左右する而かも萬事が此の地を以て中心とする東京ですら私立女子大學を初め幾多官私の高等女學校に於ても僅かに不完全なる體操の一科を設け殊に珍らしくも女子大學に於て薙刀ベースボールを學べるが如き我邦婦人の唯一の體育にして大日本體育會の女子體操も又た甚だ振はぬと云ふとでありますで而かも猶ほ之を以て女子體育の進歩

と致して居ります即ち之を西洋の婦人而かも其多くの貴婦人、女學生等が勇ましく又た逞ましく騎馬、釣網、銃獵を行ひ其勇壯其活潑倶に男子の群に劣らざるものに比すれば其差は果して幾何でありますか……思ふて此に至らば我邦の貴婦人女學生諸君たるものは文明的體育に於て甚だ多くの遜色を有して居ると云はねばなりますまい。

◎騎馬、釣網、銃獵倶に之れ　一種の野外遊戯にして御婦人の方と云へども必ず之を學ばねばならぬ必要のあるものにして……をやまー銃獵を婦人にと申して驚くには當らぬのであります而して之を上流の階級に在る御婦人而かも一定の教育ある御婦人に仍りて試みらるゝ時は必らず多くの趣味を禁せずして又た高尚なる行樂を貪ぼるに適當致して居ります故に私が先づ貴婦人と申す部面の御方に向ふて銃獵の志を望む所以も全く之が爲めであります近來に及びましては、

◎華族其他上流の方面に在る　御婦人殊に妙齡の令孃諸君が乘馬の御稽古を爲されて居らるゝことをも屢々拜見致しました這は誠に結好なる美風でありますから一般の婦人殊に學問の爲めに常に頭腦を苦めらるゝ處の女學生諸君は競ふて此の美風を學ばねばなるまいかと存じて居ります細腰柳枝が婦人の一徳として尊重せられたる時代は既に過ぎ去り今日は又た、

◎二十世紀の婦人として體育　の甚だ必要なる時代と爲り換はりたのであります其こで私の注文は騎馬もよろしい薙刀もよろしい釣網もよろしいが更に之よりも規模の廣大なる而かも趣味の一層深遠なる銃獵を學ばれんことを希望するのであります銃獵と申しましても強ちに深山幽谷に分け入るには及ばぬ僅かに郊外の散策に優る運動によりて田圃畦畔に田鴫、鶉、雀の如き飛鳥を驅るも又た之れ銃獵の一つであります而して其銃器の如きも強ちに大形のものを用ゆるには及ばず唯だ其婦人として操縦に適する空氣銃の如きものにても容易に之を射獲すること

を得るのであります要は其初めは簡易の方法により漸次複雜の銃猟に志しなば期せずして深遠の趣味と高尚の快樂を味ふことを得るのであります近着の米國女學雜誌により次に米國に於ける婦人の銃猟を紹介致します。

米國貴婦人の銃猟

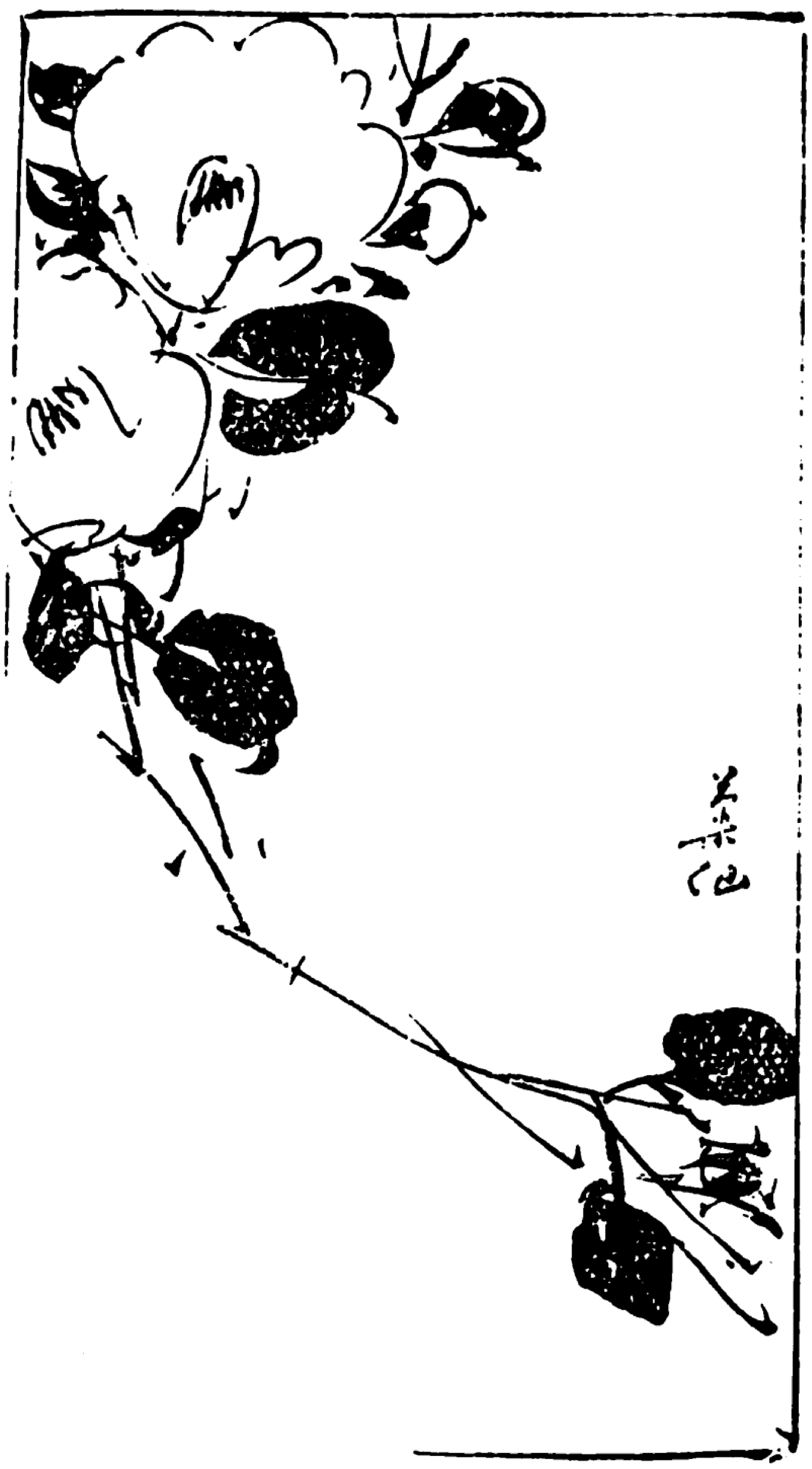
◎米國のメーン州と申す土地は隨分銃猟の盛なる土地でありますが此の土地にては啻に男子のみではなく婦人の釣網、銃猟をも又た多く之を見るのであります殊に其婦人と申すのが何れも社會中流以上の貴婦人で中には會社の書記もあり學校の教員もあり新聞雜誌の記者もあり醫師もあり技師もあり修學中の女學生もあり又た交際社會の女王とも言はるゝものもあります斯かる種類の婦人が……而かも日常社交上に多忙を極むるレデー連が時に紅塵萬丈の都會的生活を離れて一天空濶、四望廣漠たる原野又は谿谷深き森々たる山林に分け入り野營的生活を送りつゝあることが如何に彼の人々の爲めには、

◎心機一轉の妙を得るに好適して居るか、窺ふに足るのであります そこでメーン州に於ける一般の習慣を見ますると恰も幾千歳の古へにありし祖先の遺風とも云ふべき状態がありまして甚だ奥床しいのであります一見して柔弱なる婦人連が獨木船に打乘り土人の案内者を伴ひ到る處の河流沼澤に逍遙し或は猟銃を肩にし深く森林山野に別け入り獲物を捜索するのでありますから其四肢を平均に勞働し體の發育を完全にすることは恐らく之に優るものはありませぬ而して其案内者たる土人は如何なる人物であるかと申しますれば實に世界に於て得易からざる適當の伴侶者であつて到る處の地理を諳んじて居るのみならず婦人に對しては恰かも中世紀の、

◎歐洲に於ける武士の婦人に對するが如き待遇振りであつて弱を扶け強を挫くと言ふ一種の高尚なる氣質を有して居るので多くの婦人は安心して此の銃猟に從事し敢て餘念を存せざるが常であります而して毎年此のメーン州に向つて狩猟の爲めに出掛く

る婦人の數は年一年に增加して參つたのであります之は啻に其良人に伴て己むを得ず赴くのでなくて多くは婦人自身が其趣味と其快樂を貪ぼる爲めに進んで銃獵に出掛くる樣になつたのであります故に或る時期に達して參りますと幾百幾千と申しまする貴婦人が丁度我邦の温泉行きを見た樣に其名山なり其大河なり有りと有らゆる、

◎山水明媚の場所に集まつて　概ね野外的生活を營んで居る山水明媚の土地と云へは有名なるソンゴー河にして此の河邊に於て最も多數なる婦人の銃獵者を見受くるのであります其他ムースヘッド湖畔の如き少しも男子の扶けを受けずして高貴なる女性の常に跋涉しつゝあるを見受けるのであります加之彼のバンゴルの東北に當つて居ります森林では屢々貴婦人體の女性が足に獵靴を穿ち身に獵服を着けて獵銃を肩にして純然一個の女獵夫たるの扮裝にて其良人又は父兄と倶に獵犬を叱咤し麋を逐ひて終日其體の疲るゝを知らざる壯快をも見受けることがあり。



◎野營即ち天幕的生活。　多くの人は此の野外的生活を定めて辛いものであらう苦いものであらうと思召さるゝが這は大なる間違ひで實際左樣に辛く苦いものではない寧ろ一方から言へば甚だ愉快のもので有ます前に申しましたメーン州にては毎年春から夏にかけて二千四五百人と云ふ多數の婦人連が概ね天幕的生活を營むで

居ります此の婦人連の話を承はれば左こそと思はる丶節が多いのであります。

◎序に其天幕の構造　を申ますれば先づ柱は生木の皮に剝ぎたもので之にずつく製の天幕を張り二三の寢室と一つの休憩室とを區別し又た別に厨房を設け朝夕の料理に便利を欠がぬ樣にしてありまする此の外に又た別に大なる天幕が張つて各自の天幕より之に集合して會食する時の便利に備へてあります斯かる臨時の經營に屬する天幕も一個の旅舍と同じく期日を定め郵便物の集配をも受くることになつて居ります稀れには電話を架設したる天幕をも見受けたことがあります斯の如く便利の經營に爲つて居りますから假令ひ野營とは申すもの丶何一つ不自由のことはない。

◎薫風吹來る樹陰清流潺々たる　河邊に天然を友として消閑するが如き(俗塵紛々たる都會に生活し)實に人生最上の良生活であると言はねばなりませぬそこで夏期の間は一餘の釣竿を携へて河流に漁り冬期の間は一挺の獵銃を肩にして山野を跋渉し鳥獸を射斃し常に其壯快を嘗むることは米國上流婦人の甚だ名譽とする所で而かも又た之を他の國人に向うてまで誇るのであります。

◎獵區と婦人の獲物　バンゴル及びアルーズツツク邊は主もに獵銃家の野營を張る地方でありますから此の地方には良人に伴はれたる令閨父兄に伴はれたる令嬢が良人父兄の助手となつて倶に獵銃を肩にして飛鳥走獸を驅逐しまた射斃して居ります此の地は一帶に米國の中にて二つとない好獵區であるのみならず世界中の最も好獵地と申して居りますから此の獵區に停まる婦人は啻に米國の貴婦人のみならず歐洲諸國の貴婦人も又た多く米國の婦人と同じく單獨又は同伴して此の地に參つて居ります試に其獲物の種類を申しますれば先づ鹿、麋の類最も多くして次は熊、狐、水獺、河狸の類であります鳥類では山鷸、パトリッチ、鶉、水禽では鵞鳥、鴨の類であります從來メーン洲にて獲たる鹿の大さを聞くに比

較的尨大のもので其重量は大抵八百斤から一千斤もありますそして立派なる其角は實に四呎に擴がつて其容貌は中々に偉大高崇と申す趣を備へて居ります故に之を追蹤し之を射留むるの爽快は又た實に謂ふべからず而かも其婦人の大膽は其れ容易に測るべからずではありませぬか未だ多く足跡外に出でざる我邦の貴婦人たる方々は之を聞きて以て如何の感を爲し賜ふぞ。

◎獵區往來の便利。。。。。。　またムースヘット湖の邊では毎日一定の滊船があつて定期に此の獵區の岸に往來し旅客の便を計つて居るから婦人の出獵にも左ほどの不便はないのでありますそうして一日前に郵便を出して置けばそこの旅館ではちやんと獵に心要なる獵具を注文して取寄せて置ひて呉れる故如何に素人の婦人にも何一つ不自由なく清遊の好機を授けて居ります云々。

幼兒の戯れ

實相寺　一二三

青眼氏から兒童遊戯の續編をものせよとの御話があつた、生憎その手控が見あたらぬのと、何分原稿〆切日が切迫して居るので、こゝには幼兒の戯の題の下になるべく小戯に關したる事について、一言を述べて見やうと思ふ。

（一）あんよ

嬰兒誕生前近くになると、自然と智慧がついて立つて歩かうとする、此時母親はその手を捉へて、あゆむ稽古を敎へて、「あんよはお上手、轉ぶはお下手」と言ふのである、漢字には朶と言ふ字がこれに當るので、その意味は手を以て何物かを捉まへると言ふ事になる、俗に言ふと、赤子の手を引いてあゆむ事を敎へるのを言ふのであるさうな。

（二）おつむてん／＼

「おつむ」と言ふのは、「おつむり」の「り」が省か

れたのである、「つむり」は「つぶり」とも言つて、頭と言ふのに同じである、お、の字を添へて「おつむ」と言つたものであらう、「てん〳〵」とは頭をたゝく音である、故に嬰兒が戯れに手を以て頭を叩くのを「おつむてん〳〵」と言ふのである、序に言つて置くが、「つむじ」と言ふのは旋毛の事で、渦のやうに巻いて生じた毛を言ふのである、「つむじが曲る」と言ふと、心のねぢれたと言ふ意味になつて、やはり頭に縁のあつて生じた語である。

(三)かいぐり

これも嬰兒の藝の一つである、その方法は左右の手を胸の邊に横にならべて、手のさきを互に廻し合はせるのである、即ち搔繰の義である、糸を繰る有様に似て居る處から、糸くりと言ふのは九州邊で言ふ語である。

(四)とつとのめ

「かいくり〳〵、とつとのめ」と言ふ、その「とつとのめ」と言ふのは、右指を左の掌につけるのを言ふ、是は魚の目と言ふ義であるまいかと思ふ。

(五)あわゝ

支那では俗に小兒を哇々と言ふさうな、一說に哇々と言ふのは小兒の聲である、今嬰兒が口に手をあてゝ「あわゝゝゝ」と言つて、自身特有の藝として居る。

(六)かぶり

「いや〳〵」とも「かぶ〳〵」とも言ふ「日本書紀の神代の巻に、「頗傾也」と言ふ字に、「加夫志」と言ふ訓をつけてある、嬰兒の頭を振るのを「かぶ〳〵」と言つた事は、隨分古い語である、今は「いや〳〵」と言ふと、嬰兒は頭を左右に振るのである。

(七)居ない〳〵ばあ

嬰兒の附添の者が、わざと顏を隱して、不意に顏をあらはしては、嬰兒の對手となつて遊ばせるのである、すると嬰兒は驚きながらも、機嫌よくにこ〳〵笑ふのである、それを覺え込むと、嬰兒は自身の顏を隱して、不意に人のまへに顏を出しては、その笑

を促し、又自らもつとめて笑ふのである、此戯は嬰兒のみでなく、身を隠して不意にあらはれて人を驚かすと言ふ遊戯は、尙は小兒の間柄に於て行はるるのである



支那に叺と言ふ戯があるが、頗るこれに類似して居る、この叺と言ふ漢字の意義は、（智賊反、言隠ㇾ身忽出以驚ㇾ人也」とあるので御了解であらう、隠したる己が身を不意にあらはして、對手の者を驚かすを言ふのである。

「ちよち〳〵」をせよと言ふと、嬰兒は兩手をひろげて手を拍つのである、即ち「ちよち〳〵」は手打ち〳〵（ゝ）義である、社會の單純な上代にも、拍手と言ふ事だけは行はれた、兒童の尤も幼少なる時代に、拍手とも見るべき「ちよち〳〵」の行はるゝのも、理なきにあらずなどとは強いて申さぬのである。

（八）ちよち〳〵

その他、高い〳〵、と言ふと、手を高くさし上ぐる。にぎ〳〵、と言ふと、手を握つて見せる、握り〳〵

の意味である。

ねん〳〵、ト言ふと、横になりて眠につく眞似をする。

以上述べた處は、わづかに其一般を擧げたのみである。

（九）人みしり

古い歌などには「おも嫌ひ」と言つて「世の中に、幼き子の面嫌ひ、見しが、なきにぞ、音は泣かれける」、など〻言ふ歌も見えて居る、これで小兒の人見しりするを、「面嫌ひ」と古く言つたのが解る、一體幼兒の癖とて、始めて逢つた人や、亦久しく見ぬ人に出會ふと、何と思つてか泣き出したりするのである、これを俗に人見知と言ふのである、畢竟幼兒の眼識に、見た人と見馴れぬ人との貌の差別が、漸くつく爲であらうか。

（十）やんちや

江戸時代の延寶七年の俳諧に、「西瓜の種ややにちや〳〵坊」など〻言ふ句が見えて居るのがこれである、「やゝにちや」坊とは幼兒を「やゝ」と言ふから、その「やゝ」を借りて、西瓜の種のにちや〳〵して粘るのに例へて言ふたので、その種を數珠によそへたのは坊を、法師のやうに言ひ廻したのだそうな、今は「やんちやん」と言ふのである、宅の小供は言ふ事聞きませんと言ふのを、「何うもやんちやんで困ります」と、世間の母親は言ふのである。

とりとめも無き筆の運び、あまり長々しきもいかゞとて、筆をとゞめる事とする。（をはり）

美的遊戲　星月夜

日本女子大學校敎師　白井規矩郎

此頃婦人方の運動に付て大分八釜敷云はれる樣になりました、中には女子も男子と同じ體操なり遊戲なりを行ひ、特に之れは女子のもの男子のものと區別を付けられるのは、反つて女子にとつて難有迷惑であるなど〻極端な御說も見受

けます様でありますが、古今東西女子が男性の服裝して押通して行くと申すことは余り承りません、服裝が男女其形を異に致すと申すのは何か其れに必要な事があるからで、又た生理的から見ましても、男女各發育する部局を異にして居ります處を見ますれば、各其れに適應する運動なり遊戯なりを致す様になりますのは自然の理だらうと思ひます。

玆に述べます遊戯は、全く女性諸君の爲めに考案せられましたもので、原案者はエム、モートン氏であります、之れは自分も屡々實驗致しましたのだ、今に女子大學の生徒に行はせて居りますが、頗る興味ある運動法であります。

●人員　此遊びは十二人を一組と致して行ひますが場所さへ廣くありますれば、幾組も同時に致して差支ないのです、否反て組數の多い程宜しいのです。

●用具　各自に幅三寸乃至四寸長さ七尺乃至一丈の極めて柔かい布帛（金巾にて結搆です）を一條づゝ用意致させます、ソコデ此布の色は成るべく種々のものを用ひますと宜しいです。

●音樂　十分直しく致すのには始めの行進はマーチを演奏して、運動は凡てワルツと申す三拍子のものを用ひますのですが、其れ程にも及びません、適宜の皆さんが御存じの歌曲でも出來ます、樂器もピアノが一等ですが、風琴でも結搆です。

行　進

遊戯場の後方に一列となりまして、美しく布帛の兩端を双手に保つて、其まゝ兩手を頭の上に掲げる様にして徐きながら、次に申す様な歩調で行進いたします。

第一步　右足にて一步前へ、

第二步　左足の趾尖を右足の左の方へ、僅か離して床に觸れます、

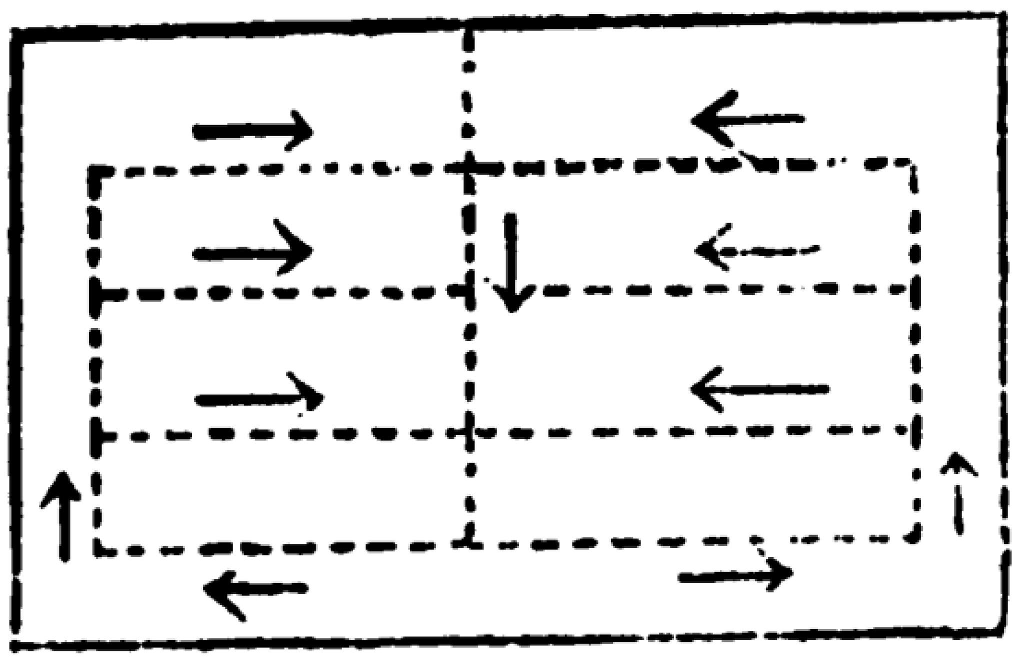
第三步　左趾の尖を以て右足の前に半圓を畵きまして、右足の右の方へ運びます、同時に上体を左の方へ屈し

ます、

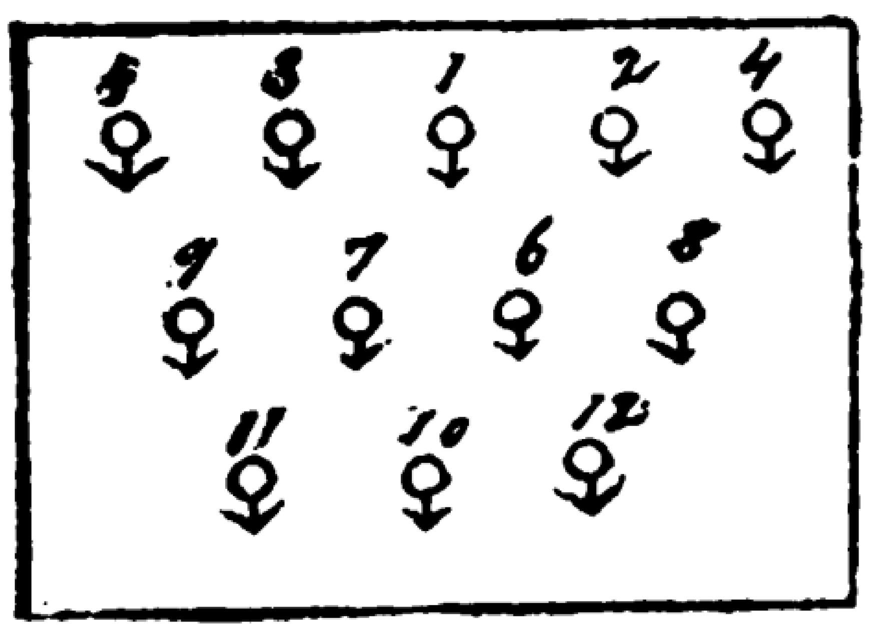
第四步　其まゝ靜止して居ります、

斯樣に致して次には第一步を左足を前面に致し、第二步第三步と前に右の足で致した事を左の足で致し、左の事を右で致す、次には又た右の足から始めると申す樣に、交互に右左と前へ進めて段々遊戯場の中央へ參る樣に行進致します、ソコデ中央まで參りましたら偶數生は右方へ、奇數生は左の方へ回りまして、第一圖の樣な形に並びます、其れから第二圖の形に移ります。

第一図



第二図



第二圖の位置に並び終つた處で、樂器の合圖に從て遊戯者は兩腕を兩側に垂れまして、布帛を前面に橫たへ其兩端を懸垂する樣に致します。

再び樂器の合圖で布帛を胸の邊へ水平に執りまして、次の運動の用意を致します。

本來是れから三拍子の音樂を三拍子のものに變へまして致すので、若し三拍子のものなら、一擧動に三呼間(則ち一小節)づゝを與へますが、四拍子のもので致すなれば極めて徐かに二呼間(則ち一小節に二擧動)づゝと致します。

一　布帛を胸部より眞直に上方に……………………三呼間
　　胸部に復す、……………………………………三呼間
　　　四回反覆する

二　右腕を側方に肩と水平に展伸して、左手を右の肩の前へ來たす、………………三呼間
　　胸部に復す……………………………………三呼間
　　左腕を左方に展伸して、右手を左の肩の前に……………………………………三呼間
　　胸部に復す……………………………………三呼間

三 二回反撥する、

(イ)、布帛を頭上に水平に揚げ、双手の間を緊張する、……三呼間

(ロ)、右腕を下方側に垂下して、左手を頭上に揚げ、布帛を右側に垂下する樣に……三呼間

(ハ)、(イ)に同じ……三呼間

(ニ)、(ロ)を左側で行ふ……三呼間

二回反撥する、

四 (イ)、布帛を頭上後方に水平に揚げて、上體を右方に屈する、……三呼間

(ロ)、眞直の位置に、……三呼間

右と左とで各四回づゝ反撥する、此運動をする間は、腕は常に體に伴つて、同一の位置を保つて居る樣に注意する、

五 (イ)、布帛を水平に保つ、右手を前面に展伸して、左手を後方に引く、則ち布の前面から後方へ斜に水平線をなす樣にする、……三呼間

(ロ)、前面に水平に置く、……三呼間

(ハ)、左手を前面に、右手を後方へ、……三呼間

(ニ)、前面に水平に、……三呼間

二回反撥する、

六 布帛を輕く頭上に投げて、肩の上に懸垂して、指尖を肩へ載せて、布の兩端を前面に垂らす樣に、兩臂を肩と水平に揚げ、同時に體を右足に保つて、左足を前面に點し、體を左方に捻回して、其まゝ十二呼間を保つ、……十二呼間

七 布帛を左手を以て頭上に揚げ、右手は肩に止めて、次に左手を左側髖骨に來たす、布帛は今右肩より左髖骨に對角線に垂下せり、同時に左足を左側に移し、體を徐かに……十二呼間

右前斜に捻回して十二呼間の終りまで保つ、

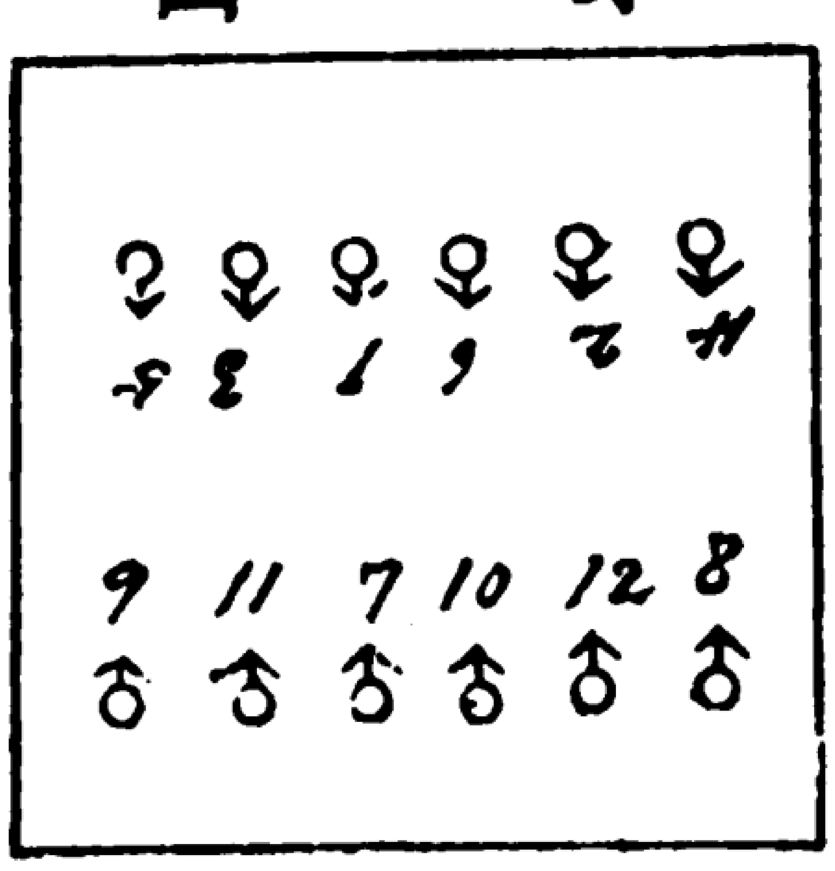
八　右手を右側髋骨に來たして、左手を左肩の上に、同時に體を左足に保ち、右足を右方に點し、少しく左方に捻回し十二呼間を保つ、　十二呼間

九　左手を左髋骨に執り、右足を後方に歩して、頭を少しく右後斜に面す、　十二呼間

一〇　布帛を頭上に揚けて、右足を右前斜に歩し、右膝を屈して上方を眺む、左膝を眞直にして、　廿四呼間
之れを始めの第一呼にて行ひ十二呼間を保つ、次に左足に搖移して左膝を屈し、右膝を眞直にして兩腕を頭上に揚く、之れを十三呼間めに行ひ其まゝ廿三呼目まで保つ、廿四呼目に兩腕を前面に垂下し、右足を左足に垂て、前方に面して、體を右足に保つ、

一一　右前斜に歩して反覆する、第三圖に示す樣に、六人一列の二列を構成する　十八呼間

第三図



一二　次に前列は右膝を跪ひて、凡て兩腕を側に垂下する、布は前面に横に垂らす、　六呼間

一三　凡て布帛を對角線に保つて、右手を肩に、左手を垂する、　三呼間

二列に於ける布帛は正しく併行するを要する（勿論後列の各生は、前列の其れよりも頗る高くして美しと）

位置を變じて、左手を上に右手を下に　三呼間

四回反覆する

一三　前列は双手を左膝に來たして、跪き、布帛を懸垂して、後列の左肩を經過して上方を眺むる如き姿に、　廿四呼間

同時に後列は前面に歩して、布帛を前列の頭上に美しく保つ、

一四　前列は左手を揚げて、後列の左手と結握し（小指と小指とで）布帛をして三角形の二邊を構成する樣になす、

三角形の尖點は、跪けるもの、眼の水平よりも少しく上邊にある樣に、

一五　後列は後方に歩して舊位に復し　十二呼間

同時に第十二節の如く、對角線（右手を上に左手を下に）保つ、

同時に前列は反對の對角線（左手を上に右手を下に）を作つて、後列と十字形をなす、

次に舊位に復して、

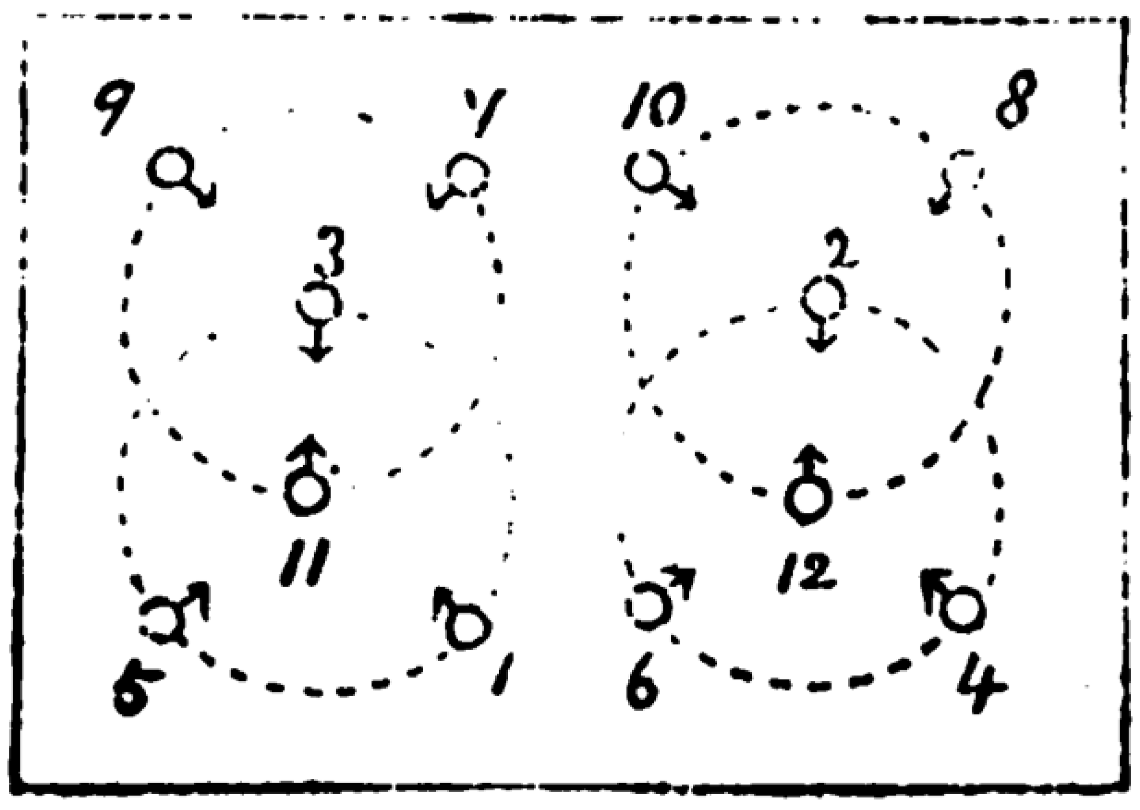
一六　第五生と第三生、第二生と第四生、第七生と第十生、はアーチを作る、則ち手を對手の方に揚げ小指を結握して、同時に他側の手を肩上に揚け、布帛を懸垂して、頭上にアーチの一點を作る、　廿四呼間

第一生と第六生　第九生と第十一生、第十二生と第八生とは（跪きて）對手の方の手を揚け、他の手

を胸と水平にして、斜線を作り、
布帛を對角線に保つ、
次に變更して、斜線を作りしもの　廿四呼間
アーチを作る

一七　前列は起ちて回轉し後列に面し　廿四呼間
第四圖の如く六人一組の二圓を作る、
第七生は己れの右手に　布帛の兩端を執り、第十一生は右手に布帛の一端を執り、他の一端を第七生に與ふ、

第四圖



第九生は右手に一端を執りて、他の一端を第十一生の左手に與ふ、
同時に第五生は己れの布の兩端を右手に保つ、第三生は一端を右手に執り他の一端を第五生の左手に與ふ、
第一生は一端を右手に保ち、他の一端を第三生の左手に與ふ、他の六生一圓も之れに倣ふべし、次に
第三生は兩腕を揚げ、第五生及び　廿四呼間
第一生は第三生は亞で兩腕を揭ぐ
第九生は第五生及び第三生の間を經過して、同時に第七生は第三生と第一生との間を經過して、第九生と第三生の背後に會す第九生は第七生の布帛の一端を執る、
同時に第五生及び第一生は、第十

一生の後方に歩して、第一生は第五生の布帛の一端を執る、

他の一團も同一の運動を行ひ、各團に三人一組の圓形を二個作る、此圓形を作るに、十二呼間乃至十八呼間を與へ、布帛を美しく懸垂して廿四呼間の終りまで保つ、

次に第九生と第七生、第五生と第一生とは兩腕を揚げて、第五生は第九生及び第七生の腕の下を通過して後方に歩し、又た第十一生は第五生及び第一生の腕の下を通過して後方に歩す、

廿四呼間

次に第九生及び第七生第五生及び第一生は、第三生及第十一生の前面に向て、互に兩腕を低下し六角星形を構成す、第五圖

次に以上の運動を反對に行ひ、順次舊位に復す、

凡て布帛を一定の高さと、一定の長さとで保つ樣、對手と相互に注意するは遊戯を美麗になすに付て、必要な事です、

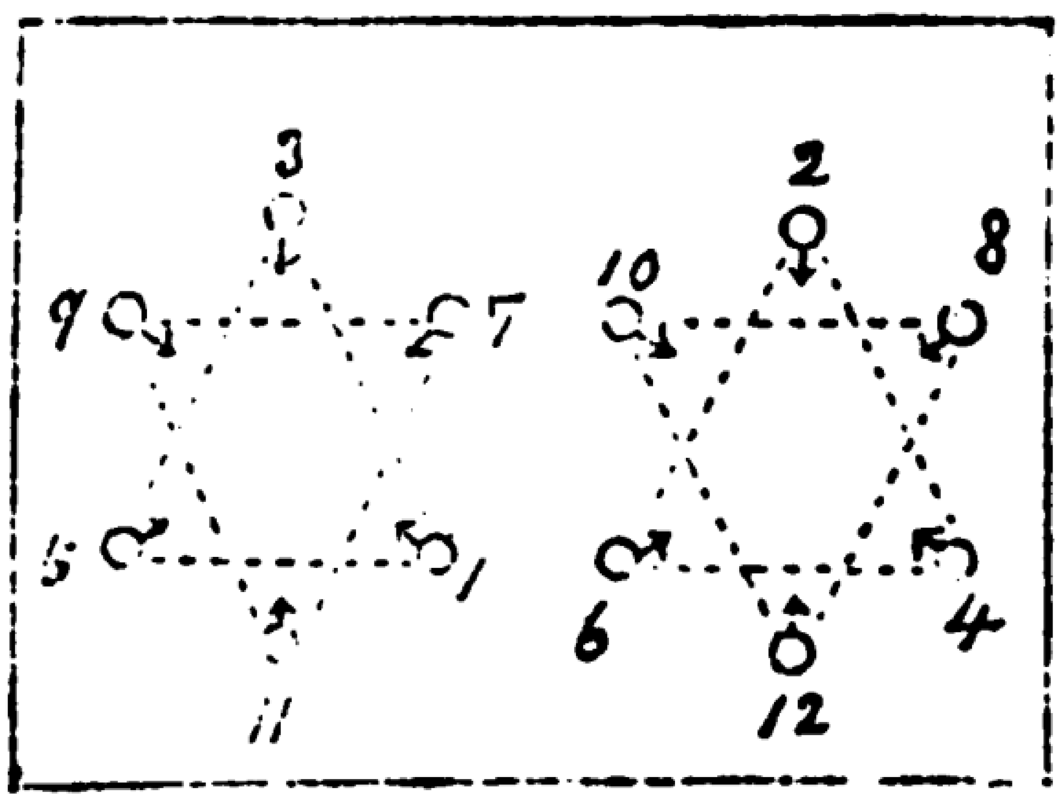
一八

再び第三圖の如き二列となる、

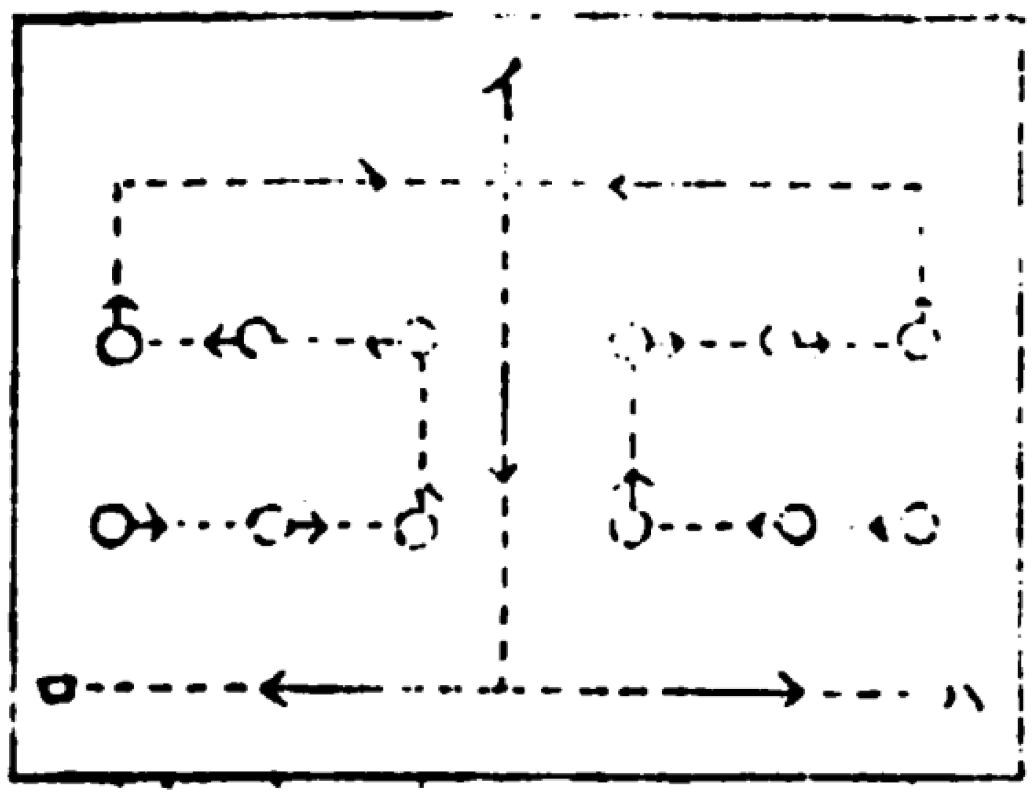
第九生第十一生第七生第十生第十二生第八生の六人は回轉して中心に面し、第五生第三生第一生第六生第二生第四生は側方に面ずる、

樂器の合圖にて　用意

第五圖



第六圖



次に進行曲に依て第四生及び第五

生は先導となり、戯場の後方より中心前面に進む　第六圖
第五生第四生の(イ)に來れば布帛にて高くアーチを作り、(他の手は肩に布は胸に垂下して)第二生第三生其下を經過して又たアーチを作り、全員アーチを作り終れば第五生第四生の如く順次其下を經過して、次に布帛を頭上に揚げ前に述べた、此遊戯の特別步調をしながら、(ロ)(ハ)に分れて退場する、

此遊戯は之れで前部一回終つたのであります、上手に致せば一回三十分間位は掛ります、其れで之れは星の形を作ります處がありますので、假りに星月夜と譯したのであります。

（完）

○面白き問答（答は次號に出ます）

◎物識天狗

モシ貴公は至つて智惠者だが、昔支那に中々頓智に富んだ先生があつて、天に耳がありますかと尋れたら、天は高きに處りて卑きに聽くといふとあり、又詩經に鶴九皐に鳴きて、聲天に聞ゆとあろ、耳がなくして聞ゆる譯はありますまい、然らば足がありますかと問へば、有りますとも、詩經に天步艱難と書いてある、足がなくして步けませうかと答へた、ドーデス頗る面白いではありませんか、處で貴公に一に尋れたいが、聲といふものは見ゐとが出來ますか

乙「黃いな聲といふことがありますから、見えるに相違ありませぬ見えなくして色の分かる譯がありませぬ、

甲「聲に形がありますか、

乙「ありますとも、長い聲、短い聲、堅い聲、和い聲、

甲「ソレデハ香が見えますか、

乙「見えます、青くさいといひます、

甲「成程、人の談話にも色がありますか、

乙「あります、

甲「人の藝にも色がありますか、

乙「あります、白うと、黑うとといひます、此藝や調子は甜めて見た人があると見えて澁い藝、甘い調子といひ、人の顏まで甜めて苦い顏ともいひます、

甲「オヤ〳〵、ソレナラ人の心にも色がありますか、

乙「ありますとも、人の交際にまで色がありますから、赤の他人といひます、

右の問答の中にて人の談話にも、人の心にも色があるといふ證據な考へて御覽なさい、

○二人令孃の年齡答（題は前號にあり）

三°十°七°を合すれば　3　10　+7　20

二十となる

雜録

赤十字社の近情

男爵 小澤武雄君 談

時節柄赤十字社の事を聞くのも、必要でもあり、又面白からうとも思ふて同社の副社長小澤男爵に乞ひ、赤十字社の近情を聴き、其大略を筆記して讀者に紹介することゝした、尤も文字上の責は記者にありと御承知を乞ふ。

一 赤十字社の起源

赤十字社は如何して起りたる乎といふに、これは瑞西の人ヘンリヂユーナンがソルフヘリノの戰後墺伊の光景を觀て

「戰後の有樣といふものは如何にも慘憺たるものである。人類は互に仁愛を以て此世に立つ可きに傷者病者を其儘戰場に委弃して、空しく鳥獸の餌食にするのは洵に人類の耻辱である」

ヘンリヂユーナンはかういふ感慨に堪へ得ない處から、直ちにソルフヘリノの紀念といふ一書を著はして、以て歐洲の帝王名士及び社會に訴へたのである。さうすると名高きナポレオン三世は熱心にヘンリヂユーナンの所説を嘉納し給ひて、尤も有力なる後援者となられた。これが抑も赤十字社なるもの丶生じた濫觴である。

赤十字社は斯の如くにして起りたるものである。故に我國の赤十字社も亦世界一般のものと同じく、戰場に於ける傷者病者を救護するを以て其重なる目的として居るは勿論である。之を以て二十七八年役のとき我國政府は支那が未だ赤十字條約に加盟せざるほどの國とて、我國の傷者、病者を甚だ慘酷に取扱ひたるにも係らず、出來能ふ丈好意を以て、支那

の負傷兵又は病兵を收容救護して、以て各文明國の賞賛を得しことは普く世の知る所である。

而して赤十字社といふ名は、キリスト敎國の發起に成たる事とて、即はち神の愛を現はす意味から出來て居るものである。されば赤十字は國家の名譽として營む事業なれども實は世界的事業、いひ換れば人類共同の事業といつて可い。

二　赤十字社の組織

赤十字社は、かくも高尙なる目的を以て設立されたものであるから、苟も十字の旗を樹てゝ居る上は何國の兵器も之に向つて試ることの出來ないほどのパワーを持て居であるから、文明諸國では慈善事業中、尤とも神聖なるものとして組立てられて居る。

而して君主國にては、其皇室の名譽として此事業を起さるゝのである。露國の如きは、赤十字稅といふ一種の租稅を人民に課して居る。日本は未だ人民に賦稅する迄ではなくして、其財源は人民の寄附に據るものなれども、都てが政府の命令の如く行はれ

又皇室から格別なる保護を受けて居る。

日本赤十字社社長及副社長の就任に付ては勅許を與へらるべし(三十四年勅令二百二十三號)

此勅令に由るときは社長副社長は全く勅許を蒙むるべきものとなつて居る。更に此勅令以外總裁を一名置くことゝなつて居つて、これには皇族御一名を戴くのが其慣例である。目下總裁は閑院宮殿下、社長は松方伯、副社長は花房男と予との二名である。それから又赤十字社社員及び其勤務に付ては次の如く規定せられて居る。

陸軍大臣海軍大臣は第一條の目的(戰時衞生)の爲め日本赤十字社を監督す(三條)

戰時服務中日本赤十字社の理事員、醫員、調劑員及看護婦監督は陸海軍將校相當官の待遇に書記調劑員補、看護長、看護人及輸長は下士の待遇に看護婦看護人及輸送人は卒の待遇に準す

これ等の規定より見るときは、我國の赤十字社の地位は、如何なるものである乎が知らるゝのである

けれども、猶深く赤十字社の性質を知るには其定款を見なくてはならぬ。其定款を見るに、我國に赤十字社の起りたるは、十年西南戰爭の際、彼我の別なく傷者病者を取扱ひたる博愛社を以て其始めとするので、さうして戰後博愛社は平時は克く諸般の準備を整へて有事の日征途へ從ふ可く期して居たが、去る明治十九年我政府がヂユーチーブ條約に加盟せられてから、本社の名は、(博愛社の名)改りて赤十字社となり、越へて三十一年新民法の發布と共に其規定に從ひて本社を社團法人とすることゝなつた。

三　赤十字社の財力と機關

赤十字社の財源は

一本社の所有に屬する動產及び不動產

二帝室の恩賜金

三社員の年醵金寄附又は遺贈に係る金錢及物品

四本社の事業又は所有財產より生ずる特別の收入金

過去の赤十字社は殆んど財力に關する一定の方針なく、汎乎として自然の成行に放任して居た。然るに漸く近年に至つて、其方針か確定し、即ち創業の礎が据へられて、其處に始めて赤十字社てふ新建物が建築されたのである。其著るしいといへば平時戰時の二部に分けて夫々準備し、其財源はこれ迄積立金を基礎として、一ヶ年百十萬圓の積立金で、十ヶ年に壹千五百萬圓を積立つるのである。其外細かい事に關して、それ〲準備を立てゝ居る。

而して日露開戰となれは赤十字社は一ヶ年三百萬圓二ヶ年六百萬圓の金を支出する筈にて、これには何等の困難を見ないのである。

四　常議會

常議會は社長の招集に依り每月一回開會し本社重要の事件を議決す但し臨時議決を要するものは此限に非す(十八條)

凡て赤十字社の意思は、其常議會にて決せらるゝものである。而して常議會は常議員三十名より成り其權限は十八條の規定の如く、本社の重要なる要件

常議會の上に理事及び監事がある。理事十名監事三名、而して社長及び副社長は理事中より互選するのである。

五　戰時に於ける赤十字社

（い）救護班

戰時に於て赤十字社が如何なる編成を以て其活動をなすやといふに、目下陸軍に對して百十二個の救護班、海軍に對して四個の救護班を付するやうに成つて居る。救護班の編成は

醫員	二人
調劑員	一人
書記	一人
看護婦長（看護人長）	二人
看護婦（看護人）	二十人
計	二十六人

救護班一個にて、百名の患者を取扱ふ筈なれば、陸軍は百十二個にて一萬一千二百人を取扱ひ得、海軍は四個で四百人を取扱ひ得る筈である。外に患者輸送縱列が三個ありて、陸軍に付することゝなつて居る。是れは一個で患者三十名を輸送し得るもので其編成は

理事	一人
醫員	一人
書記	一人
看護人長	二人
輸長	三人
看護人	三人
輸送人	百二十人
計	百三十一人

（ろ）病院船

病院船は、陸海軍傷者病者の收療、難船者の救助、及び其航送に關する衞生勤務を爲すもので、目今此船が甲乙二艘に分たれて居る。甲種は患者百名を收療し、又は二百名を航送し、乙種は患者五十名を收療し又は百名を航送するものである。其編成は

△甲種病院船

理事	一人
醫員	四人（内一人は醫長）
調劑員	一人
書記	二人

調劑員補	二人
看護婦長	二人
看護人長	二人
看護婦	二十人
看護人	二十人
計	五十四人

△乙種病院船

理事	一人
醫員	三人(内一人は醫長)
調劑員	一人
書記	一人
調劑員補	一人
看護婦長	一人
看護人長	一人
看護婦	十人
看護人	十人
計	二十九人

此病院船は、三十三年北清事件の當時甚だ克く奏功したるものであるが、今は當時よりも凡ての準備手落なく整ひ居ることとなれば、一朝開戰の場合には隨分役立つことであろう。

目下赤十字社では、開戰の準備は十分に整へて居るから、何時どんな命令に接しても狼狽することはない。平時に於いて赤十字社は今後大に面目を革めるだろうと思つて居る。其尤とも著るしいのをいへば、赤十字社の病院が各府縣に出來る事で、已に三四縣は其縣立病院を本社に寄附したのもある。

又赤十字社は、天災地變に對しては、尙戰爭の場合に準して、夫々用意して居る。

五 日本赤十字社の名譽

日本の赤十字社は忝くも、皇后陛下に特別なる思召を蒙り、其大會毎には必らず御臨場の榮を賜はるのであるが、今や喜ばしいことには、日本赤十字社は、世界第一といはるゝことである。

英、佛、獨、露、米などの人々は皆感心して、日本位統一あり、秩序ある赤十字社は何處にもないから、今後赤十字社の改良は、日本を中心とするが可いといつてゐる。世界的事業即ち世界人類の共同事業として、十字旗の向ふ所國旗をも沒すといはるゝ赤十字社事業に於て、日本が世界第一の美名を博する所以は、一に我皇室の名譽で、二に我國民の名譽といはねばならぬ。

(をはり)

戦時に於ける赤十字社

有本松濤

戦時に於ける赤十字社の事を話すには、先づ其組織から云はねばならぬ。

抑も赤十字社には救護班なるものが置かれてゐるが其救護班なるものは、看護婦に依つて組織せらるゝものと看護人に依て組織せらるゝものとがある。看護婦によつて組織せらるゝものは本部に第一第二第三が備へられ、あとは沖繩縣に一級と各府縣に各二級づゝ常備せられてゐる。又看護人によつて組織せらるゝものは本部に第九十九と第百の二級があつて其他は北海道、京都、大阪、神奈川、兵庫、長崎、愛知、宮城、青森、石川、廣島、香川、福岡、熊本臺灣に各一級づゝ備へられてゐる。此外に輸送縱列といふものがあつて、それは第一患者輸送縱列第二患者輸送縱列第三患者輸送縱列とに分れて居る。以上總計百十六救護班から組織せられてゐるのが、則ち今日の赤十字社である。

而して此救護班は如何なる目的を有するかといふに一救護班について患者百名を救護するのを目的とするのである。それには一救護班に醫員二人調劑員一人書記一人看護婦組織の分は看護婦長二人看護人組織の分は看護人長二人、及び看護婦組織の分は看護婦二十人、看護人組織の分は看護人二十人、合計二十六人づゝを要する定めである。又輸送縱列の目的は一縱列について患者三十人を輸送するのが標準で其掛員としては理事一人醫長一人醫員三人、書記一人、看護人長二人、看護人三人、及び輸送人百二十人、合計百三十一人を要するのである。

以上の如き組織目的であるが、戦時に於ける赤十字社は尚此外に病院船……即ち救護船なるものを設くるのである。其救護船は又甲乙の二種に分つてゐる即ち甲種の救護船は理事一人、醫長一人、醫員三人調劑員一人、調劑員補二人、書記二人、看護婦長二人、看護人長二人、及び看護婦二十人、看護人二十

人、合計五十餘名から組織せられて船内には患者五拾人を收容するのを目的とし、若し戰地から本國陸上に患者を送り返す時には、百名を收容するのである。それから乙種の救護船は、理事一人、醫長一人醫員二人、調劑員一人、同補一人、書記一人、看護婦長一人、看護人長一人、及び看護婦十人、看護人十人、合計二十九名にて組織せられてあつて、此他に甲乙兩種とも磨工一人、通譯官一人、洗濯人一人づゝを随へるのである。

尚又此外に陸上に於ける材料庫を編制して、其處には理事一人、調劑員一人、書記二人、磨工一人を置いて事務に當らせるのである。

以上海陸の組織編制で標準を立てるのが、今日の我が赤十字社であるが、勿論戰時の事であるから、患者の多少によつて凡てに增減のある事は明かである扨て斯くして組織編制せらるゝ我赤十字社は、常に陸海軍と同じく嚴整なる規律の下にあるのであるから、其戰時に於て召集せらるゝ人々は、凡て軍隊と同じく召集令の下るや、十二時間以内に我居住地を出發して、七十二時間内には、本部又は支部に着せねばならぬのである。で、召集に應じて到着した以上は、被服其他凡て官給となり、指定の宿舍に在ることは、陸海軍と少しも變らぬのである。そして勤務は孰れも陸海軍大臣の命令によつて、陸軍に勤務する者と海軍に勤務するものとに別たれるのである陸軍大臣の命令による陸上勤務は、先づ外地には主に看護人組織の救護班を以て之に充て、內地には主に看護婦組織の救護班を以て之に充てるのであるが外地の救護班は、主に兵站部に附隨して、即ち兵站病院內に監督長の命令に隨ひ、陸軍の看護長以下と共に合併して、救護の事に從ひ、內地の救護班は、各師團の病院に在つて、各自看護の事に從ふのである。

海軍大臣の命令による海上勤務……即ち救護船乘組を命せられたものは、上官の命令に從つて、戰地に於て患者の出來た際に之を收容して、內地の豫備

病院に護送して還り、軍艦に於て死傷疾病者の生じた時には直ちに之を病室に收容して、其看護治療を施して、後再び戰爭に堪へるものは軍艦に送り還し堪へざるものは内地の病院に送る事に從ふのである。

陸上勤務の外地にあるものと内地に在るものとを問はず、海上勤務の病院船に在るものとに論なく、固より其規律は嚴粛であつて、重大なる責任を帶びて居る事は、孰れに甲乙の隔りがあるでもなく、又勤務の繁閑困難の輕重がある筈のものではないが、併し、世人が思ふ樣に決して看護の事は容易で且割合に樂なものでは無い。殊に病院船乘組は、縱令石炭は充分に積込むであるにしろ、船は巨大く安全であるにしろ、



激しき風波に遭遇して海上に幾日間も漂ふ時、又は多くの〱名譽ある負傷者を收容して、其恢復を祈る時、其困難と云つたら決して一通りではないのである。

兵站部に附隨して往く所の看護人又は看護婦等は、常に軍隊の戰爭を爲て過ぎ去つた跡であるから、四面の光景等落寞として轉た一種の感に打たれざるを得ぬのである。

そして看護婦看護人には孰れも外來と病室附との二種あることも、凡て平時と變らず、戰時であるからと云つて、疎畧に流れるといふ樣な事は決して無く、却て益す緻密叮嚀になるのみならず、固より各自交代に徹夜勤務で、大方は重傷患者一人につき、必ず

看護婦若しくは看護人一人づゝは附いて居るのである。

此間に理事は、常に看護婦、看護人等の動靜を監督し、又一々患者を慰問する事を怠らず、醫員と云ひ調劑員と云ひ、書記と云ひ、其他夫々少しも閑暇などのあるべきもので無い事は今玆に云はずもがなの事である。

過ぐる北淸事變の折に、在天津の兵站病院にあつて一日に収容した患者の數、實に六百八十五人に及んだ事もあつたが、其後該變に就ての統計を作つた時に負傷患者が百分の三十、傳染病患者が百分の五十五、花柳病患者が百分の十五といふ割合になつた。

それから病院船の設備は、これも去る卅三年に始めて試られたのであるから、日尙淺いのであるが、今や日露戰爭が始まつたに就いては、此度の成蹟こそ大いに注目すべきものである。で、過般其筋からは博愛丸弘濟丸などが救護船たる事を命せられ、夫々赤十字社の乘組員も定まつたが、云ふまでもなく此救護船乘組は、殊に老錬なる人々を要するので、彼の博愛丸乘組の理事吉川元雄氏の如きは、廿七八年戰役以來、老錬家の聞えたかき人、又弘濟丸乘組の醫長小山善氏の如きは、是亦實に手腕の勝れた人其他すべて撰に撰つた人々であるから、必ずや絕大の好成蹟を我赤十字社……否な世界の赤十字の上に留める事であらうと思はれる。

要するに戰時に於ける赤十字社は、未だ平時と何の異る事は無いので、常に其準備を整へてある事少しも軍隊と違はぬのである。たゞ夫れ百萬の貔貅敵國に血躍り肉裂る時に當り、一道博愛慈善の熱き光明を輝かすものは、我親愛なる赤十字社ではあるまいか？

以上は二月十六日に今回博愛丸乘組を命せられた赤十字社員某を訪ふて聽き取つた談話の一端である。

水戸の婦人（六）

東台小隱

お幸、お儀、

お幸は水戸哀公の侍妾なり、哀公の夫人は十一代將軍家齊公の息女にて峯姫君と申しける。水戸家へ御入輿の時、將軍より老女を以て、侍妾を進せらるべしと懇切の命あらせられしも、固辭して受け給はざりしが、公御年三十にならせ給ひても峯姫君に御子なかりしかば、姫君より侍妾として此のお幸を進せられける。然るに僅三年に滿ずして文政十二年秋の中より公病にかゝり、次第に重らせ給ひ、九月下旬には早賴み少なく見えさせ給ふ。公には男女の御子一人もなく、御養子の沙汰も未だあらざりしかば臣下一同御身の上と、御家の行末を案じ煩ひ、聲立て物言ふ者もなし。まして御側に近く侍る者は、何れも皆手に汗を握りて打まもるのみ、御大切の御遺命を承はらんと心付く人もなかりし、幸は徐々と御前に進み出で、涙を呑んで申上げるは御病氣必定御本復はあらせらるべけれども、自然御覺悟の事もあらせられなば、御申聞け下さるべしと述べけるに、公頷つかせ給ひ、隨分心得居れりと御意ありしと、（此時御弟敬三郎君を御養子になさるゝ事、其他後事を秘密に認め置かれしかば別段御遺言はなかりしなりと）此時の幸の振舞いかにも健氣に見えしかば、流石に御人選になりたる程の者なりと、人々感じ合ひしとなり。（登天能之久連）

君主病に臥して繼嗣定らず大臣巨室惶惑して出す所を知らざるの時に當り、幸一侍妾の身を以て、よく人の言ひ難き所を言ふ、平生修養する所あらざりせば、爭でか斯の如きを得んや。蓋妾の其君に於ける義は君臣なれど情は夫婦なり、今君にして夫なる人と永訣の大事に臨んで、從容迫らず、幸の如き眞に女丈夫と謂ふべし。

哀公此年十月薨ず、享年三十三。幸は髮を斷て幸信院と稱し、長く公の靈牌に奉仕せり、幸前名某、幸

の名は公より賜はりしなりと（侍間小識）

侍女お簾は安藤某の女、色美にして才敏なり、最も音律に長じ、遊城樂の秘曲を傳へり、哀公にも平生亦音樂を好み給ひしかば、寵愛他に異なりしが、忽ち自殺して失けり、年僅に二十歳なり。公甚だ惜ませ給ひ、大乘寺（東京駒込鷄聲ケ窪）へ位牌を納め脊後へ御自筆にて御文章を記るされ、尚詩一絶を添へ給ふ。

錦衣紅粉屬黄泉。幾住人間二十年。今夕絃歌人不見。翠簾夜靜月偏妍。

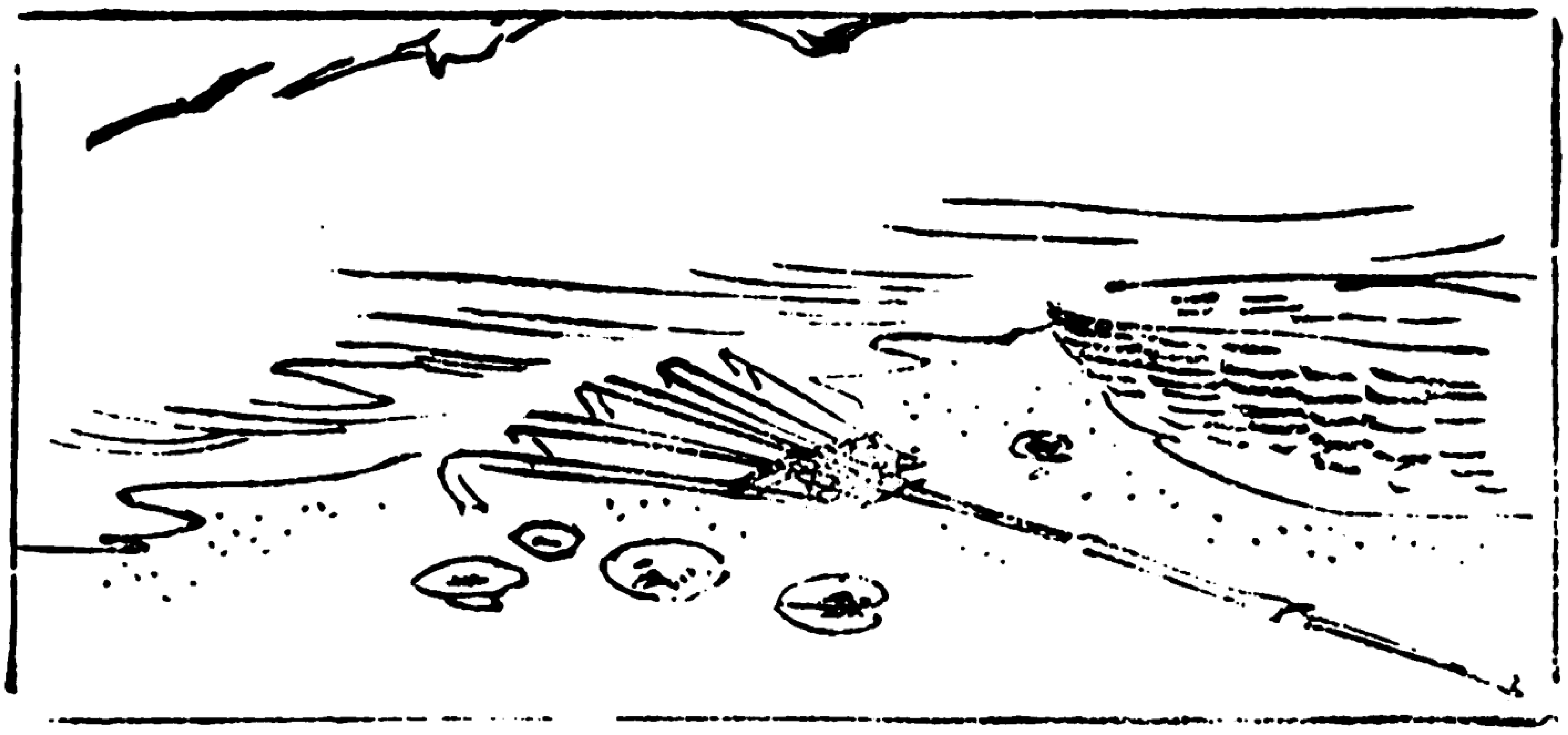
先是小石川の邸燒失し、公は大塚なる松平大學頭の邸に遷り夫人には大城へ移らせ給ひぬ。阿簾は大塚へ參りて公に侍づき、時折は大城へも伺候せり。或日大城へ參りて夫人の機嫌を伺ひ歸邸せしが、其夜刄に伏して死しける故上下の騷亂大方ならず、其屍體を檢せしに、懷姙の徵ありしかば、人々別して惜しみ嘆きけり。然れども其何故に自殺せしやは、何人も之を知る者なし。但前後の形蹟に就て推考するに、元來奥女中は意地惡ろき者なるに、まして將軍より降嫁の女公子に附屬し來る老女輩は特に陰險殘忍の者多ければ、阿簾の懷姙せしを嫉みて種々に中傷せしならむ、阿簾は深く行末を考へ、己れの世にながらふ時の、終に君公の御身に不利なるべきを思ひ量りて、命を捨てたるならんと、其頃噂わりしとかや。（故老遺聞）

お簾の事文獻の徵すべきものなし、然れども哀公の殊に悼惜深かりしを見れば、身を以て君の難に代れるものに似たり。美人薄命とは是等をや謂ふなるべし。

立原春沙女史

女史は水戶有名の書家立原杏所先生の長女なり。幼より家庭に學びて經史に通じ、書畫詩文を善くせり殊に畫は父及び文晁、華山、椿山の諸家に就きて、各其長とする所を採り、妍麗の裏に剛健の氣を含みて、自ら一家の風を爲せり。又能く一絃琴及び月琴

を彈ぜり、一日藩主烈公其家に臨み、女史をして月琴を彈せしめ、傾聽し給ふこと數時、其精妙を賞せらる。扨歸殿の後使を賜はりて召されしかど、固く辭して參らざりき。或人何故に辭されしやと問ひしに、六法の技は先人より授けられし所、是にて召されんには喜んで參殿すべきも、月琴は遊戲消閑の具のみ、是を以て召さるゝ事本意ならねば、參らざりしと答へしとかや。杏所先生交遊極めて廣かりし故、文士才子の女史を迎へんとする者多かりしが、高く標致して應ずる事なし。卷菱湖當時盛名都下に鳴り、亦先生と親善なる故婚娶の事に及びしに、女史笑て曰く妾不敏詩家者流の妻たる能はずと後加賀侯の後宮に仕へ、姬君の寵任を得たり。嘗て命により屛障へ花卉翎毛



を畫きけるに、傳彩絢爛として筆々生動の妙あり、觀る者驚嘆せざるはなし安政二年十一月病に罹りて遽に歿す享年四十三、駒込海龍寺に葬る。女史名は春、春沙は其號、字は沙々、其畫く所寸絹尺紙と雖も、人爭ひ購ふて之を珍とす。

女史の天才に配するに、池貸成、柳里恭の如き人物を以てし、日夕和研磨したらんには、其造詣する所量り難きものありしならむ、月老好緣を吝みて孤棲に終らしめ、且つ年を假す長からず、憂鬱して竟に隕す、天の才俊を待する、薄しと謂ふべきなり。

伊平太の妻佐輿

さよは水戸城の東、吉沼村の農、伊平太の妻なり。伊平太妻と與に田畑を耕

して日を送りしが、不圖惡疾にかゝり、治療効なく農業もなり兼ければ、家益々貧しくなり、遂に田畑を賣て醫藥の資となしぬ。斯てさよは人の衣裳を裁縫して辛く朝夕の烟を立てけるが、夫に事ふる事は益篤く、深く身を愼み、まめやかに介抱しければ伊平太其勞苦を憫みて、余の死せざるは全く爾の力にて忝なく思ふ所なるが、さりとて我が疾今はゝやせんすべなし、然るに爾は年倘壯ければ、更に人に嫁ぎて身の安堵を圖るべしと諭しけるに、さよひたと打泣て、若おんみの疾癒ずして永き別れともならんには、妾終身其御墓守とならんのみ、身の勞苦を厭ふて、おんみを棄去るに忍ぶべきとて更に聽入るゝ氣色なければ其儘に止みぬ。伊平太奥州岩城の溫泉、其身の疾に効能あるべきよしを聞て、往き浴せんと思へど、旅費のなきに心を苦しめしに、佐與或人より錢三百文を借り來り、大工某に躄者車を作らんことを請ひしに、此大工亦志ある者にて、良材を挾みて車を造り與へ、其賃銀をば受ざりける、さよ大に喜び、伊平太を此の車に寢せ、二人の幼兒を背に負ひ、懷ろに抱き、彼の車を挽き岩城を指して旅立ける。觀る者涙を流さぬはなかりし。素より路銀の用意とてもなければ、夜は大家に就きて一夜の宿を借り、晝は乞食して行くに、行遇ふ旅人皆ふびんに思ひ、助けて車を挽き吳るゝ者多かりける故遂に恙なく岩城に着しぬ。斯て伊平太溫泉に浴する事一月餘りにて、疾大方に癒ゑければ、妻子を引連れ徒歩にて吉沼に還りけり。然るに藩の法にて國境を出づる者は先づ役所に告げ、許を得て後出立すべき掟なるに、さよは其等のことを知らざる故請はずして旅行せしにぞ、其處の名主より右の趣を所管の役所へ具狀せしに、之が爲めはからずも從前奇特の行爲一々藩主の耳に達し、たゞに其咎を免されしのみならず、いたくさよの貞節を賞せられ、曩に賣拂ひし田地は官にて之を買戾され、更めて伊平太夫婦に賜はり且つ終身其租税を免除せられけり。是實に享保十九年秋七月の事なりき。(東里文稿)

富貴には他人娶り、艱難には親戚離る、是世間普通の事なり、其家貧にして而も良人に惡疾あり、良人は外に嫁して身の安堵を計るべきを許す、此の一つあれば今の世之を棄去らざる者殆ど稀れなり、さよは啻に棄てざるのみならず、益善く之に事へ久ふして變ることなし、素より貧家の一匹婦なれば平生何の教養をも受けざるべきに、其行爲は古の賢女烈婦にも愧ぢざるものあり、終に能く伉儷の樂を全ふし、賞賜を拜して老境の安穩を得たる、天の善人に惠みする者にあらずや。

千萬のあたはありとも眞金もて城はかたむとも大君の
御をかゝふり人さきら神にこひのみ我の名のいつのな
たけびふりおこしいゆきむかひて其城を蹈破すてむ千
萬の醜男のとちは千尋繩つなぎからめむ長たてろやつ
こがくひは打きりてかくぞありしと大君の御前に我は
聞えあげてむ

朝鮮のはなし

菅原雅輔

七不思議

朝鮮へ兵を出さねばならぬ、朝鮮の鐵道を早く拵らへねばならぬ、朝鮮海峽の電線は我國で持たねばならぬなど、昨今我國人は矢鱈に朝鮮のことに氣をもみ出し、日々の新聞紙に朝鮮の記事の見へない日はありませぬ、そこで私も時節柄すこし朝鮮のお噺を致そふと存じます。

一寸考へますと朝鮮と云へば外國のとではあり、彼れ是れと騷げば、何だか他人の面上の蠅を氣にしてヤンヤと云ふやうに聞えまして可笑ありますが、所が中々左樣ではありません、他國と申してもツイお向ふ隣で、我々日本人が同じ國內でも北海道や臺灣へ出掛くるよりは遙か容易に渡海が出來まして、既に先々から出掛けて暮して居る同胞は幾萬と云ふ高に上つて居りまして、朝鮮の仁川とか釜山とか申す

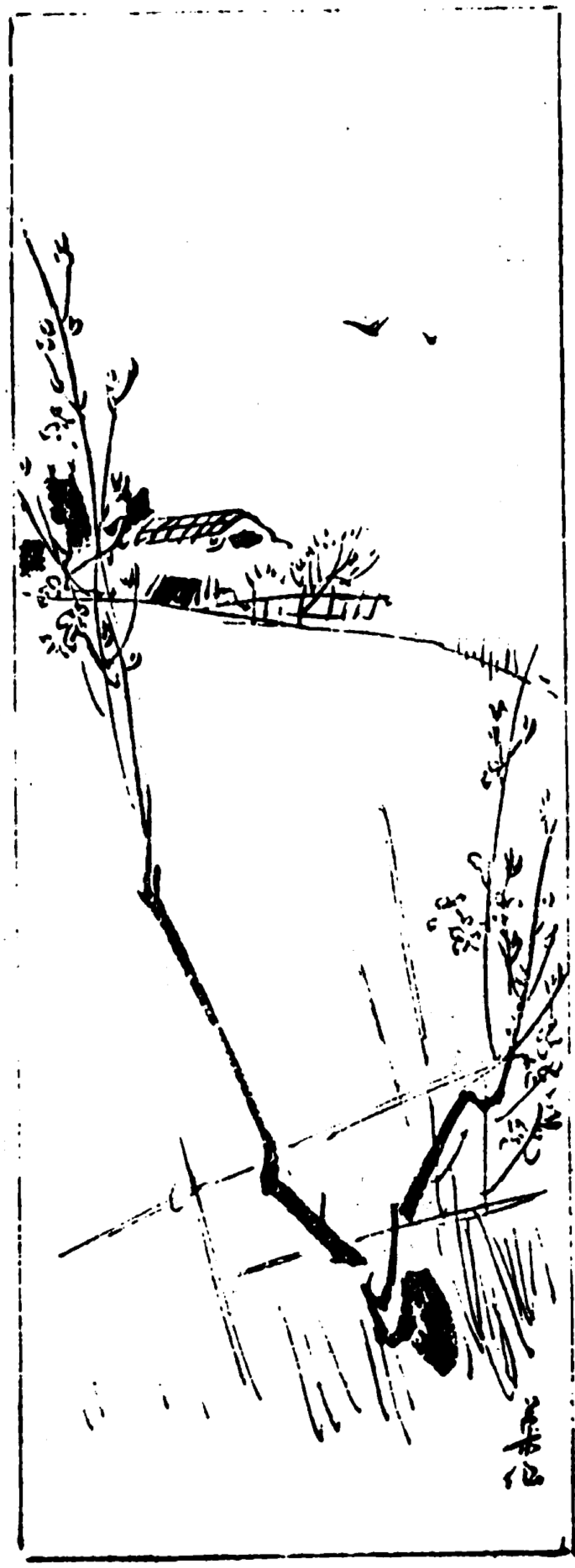
所は丸で日本人の市街であつて、一たび彼地へ往たものは、誰でも外國とは思はない位であります、其上國防上の關係がよく申す唇と齒との間柄でありますから、决して餘所事に打遣て置く譯けに參らぬのであります。

さて此大切な相談相手である朝鮮人と來たら、どうでありませう、世界一の意氣地なしで、上に立つお役人と申さば又眼前眞闇で民とか國とか云ふ心掛は塵ほどもござらぬ、只我身勝手のみ計つて居ると云ふ始末でありますから、國王樣も安心ならず一寸何か騷動でも持上らふものなら、直ぐ他國の公使館へ逃げ込で保護をお頼なされると云ふやうな情けなき有樣であります、又何時國が亡ぶかも譯らぬとて、その御用心に亞米利加の銀行へ貯金して居らしやると申すことであります、唇齒の關係ある一方が斯やうな現狀でありますから、我國の氣が揉めますのも無理はないのであります、大に奮發せねばならないのでせう。

吾人は日出國じや、蓬萊島じや、瑞穗國じや、世界の上國じや、天下の樂土じやなど丶申しまするが引換へて、年々打ちつゞく天災には實に閉口いたします、大雨が降る、暴風が吹く、山が崩れる、洪水がでる、海嘯がする、地震がゆる、火山が吐く、ペスト、赤痢、コレラなどの疫病が流行する、旱魃がする、虫害が起る、數へ來らば限りがありません、これほど天災のある國は世界に珍しい、世界の樂鄉どころでなく天災の問屋と申しても差支ありませんでせう。

所が我國のかく天災國なるに反し朝鮮は息災國であります、朝鮮には火山がありません、海嘯がありません、地震がありません、有ても百年に二三度位で感じないほどの微震であります、風災がありません洪水があつても極小區域で直ぐ止みます、その上氣候が乾燥して居りますからバチルスが繁殖いたしません、そして空氣の淸くして天氣の良イことは伊太利以上だと申すことであります。

我國の勝地の筆頭に置かれてゐる須磨や舞子を御覽なされ、病院や、療養院の建てられてからは、あたら勝區も肺病患者の巣窟となつてしまつて、今日では盛にバチルス製造をいたして居りますから危險千萬であります、所が朝鮮へは馬關から船に乘れば一夜の内に着まして、それに海上が熊野沖や瀬戸内のやうに危險でありませんから、ポッポッ彼地へ出掛るやうにしたら命を拾ふやうなお目出度ことがあらふと思はれます、ことに地價は安し、海陸の產物には富で居るし、風景はわるくなし、住民はなつき好く、言葉は學び易いから、ツイ鼻の先きなる大磯や逗子や鎌倉あたりに不廉な別莊を持つより、少し離れた朝鮮に別莊を作つたならば、安直で愉快で、如何ばかり健康と利益とを得らるゝか知れませぬ。



でありますから朝鮮人が意氣地がないからとて相手にせぬのは、義俠なる日本人の遣り方ではありますまい、又かやうに好い所があるのを捨てゝ顧みないのは天の與ふる寶を取らぬのと同じことではありますまいか、つきましてはいろ〳〵彼の國情をおはなしいたさば又變て面白いこともありますが今回は先づ一寸七不思議を述べて置きませう。

（一）玉笛　これは古新羅朴赫居王の時東海の東海中で漁夫が得たもので、國寶として、新羅の都、

今の慶州にて保存せられましたが、この笛は誰が吹きても一切音が發ませぬ、所で古より慶州領内のもので只一人欠け必ず吹者が出來まして代々絕えません。

又此笛を鳥嶺から西方へ持行かば國家大亂ありと戒められてありました、所が今の朝鮮王の先祖の李氏が漢城に都したに依て、前の戒を破つて漢城へ移しました、處が笛の音が出ませぬ、是れは吹者がわるいのであらふとて、慶州の吹者を呼び寄せて吹かせましたが、一向音が發ませぬから、人々奇異の思をなして心ある者は竊に心配をいたして居りましたが、其翌年果して倭冠の亂がありました、是れ偏に笛を嶺西へ移したからじやと恐れまして、急に元の慶州へ返したと云ふことであります、今では慶州の郡役所で大切に保管して居るそうですが、本邦人で郡守に賴みて一見したものがあります、聞けば笛は白色にして微に水色を帶びた玉石であつて長二尺太さ二寸計り孔は上六、下一すべて七つありて、玉色の美しく彫刻の古雅なことはまことに稀代の珍品であると申すことであります。

(二)松　前の慶州を五六里計り離れた所で一つの老松があります、此松は根幹から伐りても必ず新芽を吹き出しますことが、樫や槲のやうであつて、現在の老樹は古から幾回も伐採した後の新芽が成長したのじやそうであります、それで奇の一つになりて居ります。

(三)逆砂　これは慶州の西を流れて居ます、巾十四五間計の川流のことで、水の流れに逆ふて砂を河上へ逆るそうであります。

(四)海印　陜川と云ふ所に海印寺と申す寺があります、此寺は新羅時代の創建で朝鮮三大寺の一であります、此處の寶物に海印と八萬大藏經とを秘藏してありますが、この大藏經と申すは支那から渡來したものじやそうです、さて海印と云ふものは拳ほどの大な玉に彫刻せられてあつて、此海印を前の大藏經の上に置く時は經中の幾部を其中から隨意に出

入することが出來て、すこしも障碍を感じないと申し、又層積してある形も毫も崩るゝことも無いから不思議の一と數へられてあります。

（五）金蛙　　通度寺と云ふは梁山郡にあつて、これも朝鮮三大寺の一つであります、此寺の附近に一種の蛙が棲て居りますが、大さ我國の蟇のやうで其形もそれによく似て居りますが只美しき金色をして居ります、此の蛙を捕へて甕の中へ入れて密封して置きますと、一夜の内に其蛙が何處へ往つたか更に見えません、全く甕の中で消えて無くなつて居るそうであります。

（六）佛國寺　　佛國寺と申すは、慶州を距れて四五里もあらふと思ふ所にある寺で、此寺の後は高き一の山であります、この高峯を隔てゝ三里計りある所に一つの大なる池があります、その池中へ常に先きの佛國寺の堂や塔が寫るそうでして、それが不思議の一であります、朝鮮人より聞くと、此影の顯れますは晴天の日に限るとのことであります。

（七）浮石　　これも亦慶州を距ること程遠からざる所のはなしであります、大石の上に更に一箇の大石があります、恰も鏡餅を重ねたやうなものでありますが、此の石と石との間は密着して一見空隙がないやうでありますが、試みに一筋の綱の兩端を採りて石を廻してその層間を引きましたなら、自在に通過することが、恰も空に浮べるものゝやうであると申すことであります。

これで七不思議に付ての咄は一班述べましたから次に朝鮮の女性に付ておはなしをいたしませうと存じます。



米國通信

渋谷馬頭

一、タカミネ夫人

◎米國婚姻事情と云ふ通信の中に高嶺さんの奥さんの事が見えました、あれは女子高等師範の校長の高嶺秀夫さんの奥さんの事ですか、

△答いやいや之は飛んだ間違で御座いました高峯讓吉さんの奥さんの事で、タカミネ間違で御座いました、どうぞ御免あそばせ

◎高峯讓吉さんとは御聞き申した御名前のやうですが、

△答左様で御座います當國ニユヨルクで、紳士間で知らない人のない位で御座いまして、殊にタカヂアスターゼ、其他一二の新藥の發見で、世界に名をひびかせました方です。

◎その奥さんは通信によれば、米國婦人で立派な家柄の方のやうに聞えますが、詳い事を承りたいもので御座います、

△答御尤の御問で御座います、奥さんは當國シカゴ市の出生で、父君はシカゴ市に住し、醫を業として、同市第一流の名家でございまして、ヒッチ氏と申します、奥さんの妹さんは、また有名なる經濟學者ヘンリー、ジョージ氏に縁付きました、

◎妙な事まで御尋申ますが、そんな名家の御孃さんが、日本人に縁付ましたのは何か深い仔細でも御座いましたのですか、

△答そんな深い事まで私は存じませぬが、何しろ高峯さんも、今とは違つて、もとは哀れな一書生で御座いました所へ、名家の令孃が縁付きましたので御座いますから、一通りの事情では御座いませんでしたらう、

◎そして

△答へイ日本の一書生たる高峯さんに、奥さんは、其時はまだ奥さんでは御座いません、御孃さんが、深く見込みを付まして結婚の御約束をいたしました

が、父君はその結婚を御喜びになりませんでした、
◎それから
△答當國の風として、必ずしも父君母君または親族などの同意を得なくても自由に結婚する事が出來ますので、御孃さんは高峯さんに緣付きましたので御座います、
◎それから
△答當國で世帶を持ちますには、非常に困難で御坐います、高峯さんは奥さんを貰つて、生計のために困難に困難を重ねましたのです、內心其結婚を喜びなさらない、奥さんの父君は、一向見ついでくださらなかつたのです、
◎高峯さんは其頃何事業に御從事でしたか、
△答いろ〳〵化學上の研究に從事して御出でして此時ウイスキー酒製造原料を發見しました、有益な大發明で御座いましたけれども、天運いまだ來らぬためか、米國ウイスキー釀造組合は高峯さんの法を排斥して、採用しません、でしたから、少しも生計の

困難を救ふためにはなりませんでした、哀れやパン一塊を買ふ錢もない位におちぶれました、併し奥さんは、此貧書生を見すてゝ、富家に立ち戻る考へは少しも起しませんでした、
◎それから
△答ウイスキー釀造組合と高峯さんとの悶着で、毎日の新聞に高峯と云ふ名の載つて居ない事は御座いません、とにかく此一事で有名な人と知れ渡りましたので、奥さんの父君もやうやう考へ直はしなすつたので御座います、「よいにしろ、惡いにしろ、とにかく毎日のやうに新聞に名を載せられるは、一廉わる人物に相違ない」と御考へ直しなすつて、それから父君も少しづゝ助力してくれましたので御座ます、それ故高峯さんの今日の成功は、奥さんの內助の力が與つて多う御座ひますと聞きました、
◎今日の樣子を少し御聞き申たいので御座います、
△答只今はニウヨルクに御住居です、高峰さんと、奥さんと、御子さん御二人と、奥さんの弟さんと

五人の御家族で御座います奥さんは常にお兒さんたちに御教へになつて、お兒さん達に決して「私どもは米國人である」と云はせません、「日本人であると心得させておいでゝす、今日家庭の樣子は、よくは存じませんが、此一事で、大概の事は推し測られます、

二、日米の結婚

◎ついでに珍い御話を承りたいので御座います

△答　珍くもありませんが、ついでと仰しやれば、日米人の結婚話です、其場所は桑港の近邊で、男は日本人で容貌もよし、教育もあり、紳士として耻かしからぬ者、女は米人で其土地の者、

◎それだけですか

△答まづそんな者ですが、惡魔めが嫉妬を起しまして此二人の間を裂かうとして居ます、即ち此近所の人たちが、大勢聚つて相談を致しまして「日本人へ嫁を遣つたからには、我等一同今夜から御交際を致しかねます」と云ふのです、此談判いまだ結局を告げませんやうです、米國でも田舍にはこんな事があります、



三、日米の結婚其二其一

◎又ですか

△答左樣です、是だけでよします、場所はシヤトルの北の小市街、ワチカムと云ふ所、夫は日本人で其所の一洋食店の主人木村儀之助と云ふ者、女は米人然るに寺院で結婚式を終へて、後夫婦手を携へて歸宅はせずに別々になつて歸りましたと當地タイムス新聞に見えました、



白すみれ

佐藤露英

（上）

都大路に、衣紋亂れし花見小袖の匂ひ溢れて優しう、足は千鳥の一とむれ騷がしき、彌生のたそがれ。額にも頬にも髮の毛散らけて髷の恰好も埒なく、節美しき守唄に乳欲しとて泣く脊の子を賺して、爪先破れたる麻裏草履に塵砂を立てつゝ、右手の風車高う翳し行きし少女の、唐人髷に房長き簪の欲しかるべき年頃に、さすが裝ひ飾れる浮世の人の美ましくてか、唯有る小路の前に足を停めて、圓らなる愛くるしき眼にしばし恍惚と往き交ふ樣を打ち眺めしが、再び泣き出でし嬰兒の聲におどろかされて、思ひ出せしやうに守唄を續けつゝ、足を返して小走りに其の小路へと曲りゆく、時、忽ち後に人の聲して、消魂しき鈴の音、耳近う響き渡りつ、

年齢足らねども都に住む身は見馴れ聞き馴れて、人を注意る自轉車の鈴の音とは知りながら、何方に身を退かばやと躊躇ふてそゞろ心に振返れば一方は淺さ小溝、一方は折り曲りたる黒板塀、間狹き一と筋道のはや車の輪は少女の脊に迫つて進むは危ふし、さりとて避くるに途はあらず、と彼方も思ひ惑ひながらに身を輕う轉ばして、周章だしう自轉車より下りる途端、叶はぬまでもと右方に走せ寄りし少女の足に車輪觸れて、わと叫ぶ間に幼き者の足許弱く支えられて其處に轉びしが、何時か溝に落入りて、身を俯伏せに少女の半身は埋れたり。

年若き自轉車の主は、車を塀に投げかけつゝ、走り寄つて華奢なる兩の手に少女を抱き上げしが、地上に立たせて言葉せはしう、

「何處か痛めたでせう、え、石で打ちはしなかつたの」

其の人の身の氣遣はれながら、驚き餘りて波うつ胸の我が苦しさに堪へかねつゝ、組みたる腕にしかと胸を押へて、青年は少時天空を仰ぐ。

何れへか草履の失はれたる、片々の足を爪立てながら悄然と佇みて、幼兒に被せたる半纏の半ばより、裾も袂の先きも泥に塗れしあさましき我姿を我れと眺めし少女は、恨めしき人ながら言葉優しう問はれて急に物悲しさの迫りしが、答へもせで犇と振れし袂に面を掩ひしが、忍び泣きてその音も洩らさず。

「濟まない事をしました、勘忍して下さい、ね、負傷はしなかつたの？」

吻と息吐きて再び問へば、幽に點頭くに、

「然う、そりや可かつた、けれど」

と不安氣に、幾度か洗ひ洗はれて地の薄うなりし垂帽子の、毛糸ながら暖か氣にもなきをそつと除けて、

戰時に於ける赤十字社

有本松濤

戰時に於ける赤十字社の事を話すには、先づ其組織から云はねばならぬ。

抑も赤十字社には救護班なるものが置かれてゐるが其救護班なるものは、看護婦に依つて組織せらるゝものと看護人に依て組織せらるゝものとがある。看護婦によつて組織せらるゝものは本部に第一第二第三が備へられ、あとは沖繩縣に一級と各府縣に各二級づゝ常備せられてゐる。又看護人によつて組織せらるゝものは本部に第九十九と第百の二級があつて其他は北海道、京都、大阪、神奈川、兵庫、長崎、愛知、宮城、青森、石川、廣島、香川、福岡、熊本臺灣に各一級づゝ備へられてゐる。此外に輸送縱列といふものがあつて、それは第一患者輸送縱列第二患者輸送縱列第三患者輸送縱列とに分れて居る。以上總計百十六救護班から組織せられてゐるのが、則ち今日の赤十字社である。

而して此救護班は如何なる目的を有するかといふに一救護班について患者百名を救護するのを目的とするのである。それには一救護班に醫員二人調劑員一人書記一人看護婦組織の分は看護婦長二人看護人組織の分は看護人長二人、及び看護婦組織の分は看護婦二十人、看護人組織の分は看護人二十人、合計二十六人づゝを要する定めである。又輸送縱列の目的は一縱列について患者三十人を輸送するのが標準で其掛員としては理事一人醫長一人醫員三人、書記一人、看護人長二人、看護人三人、及び輸送人百二十人、合計百三十一人を要するのである。

以上の如き組織目的であるが、戰時に於ける赤十字社は尚此外に病院船……即ち救護船なるものを設くるのである。其救護船は又甲乙の二種に分つてゐる即ち甲種の救護船は理事一人、醫長一人、醫員三人調劑員一人、調劑員補二人、書記二人、看護婦長二人、看護人長二人、及び看護婦二十人、看護人二十

人、合計五十餘名から組織せられて船內には患者五拾人を收容するのを目的とし、若し戰地から本國陸上に患者を送り還す時には、百名を收容するのである。それから乙種の救護船は、理事一人、醫長一人醫員二人、調劑員一人、同補一人、書記一人、看護婦長一人、看護人長一人、及び看護婦十人、看護人十人、合計二十九名にて組織せられてあつて、此他に甲乙兩種とも磨工一人、通譯官一人、洗濯人一人づゝを隨へるのである。

倘又此外に陸上に於ける材料庫を編制して、其處には理事一人、調劑員一人、書記二人、磨工一人を置いて事務に當らせるのである。

以上海陸の組織編制で標準を立てるのが、今日の我が赤十字社であるが、勿論戰時の事であるから、患者の多少によつて凡てに增減のある事は明かである扨て斯くして組織編制せらるゝ我赤十字社は、常に陸海軍と同じく嚴整なる規律の下にあるのであるから、其戰時に於て召集せらるゝ人々は、凡て軍隊と同じく召集令の下るや、十二時間以內に我居住地を出發して、七十二時間內には、本部又は支部に着せねばならぬのである。で、召集に應じて到着した以上は、被服其他凡て官給となり、指定の宿舍に在ることは、陸海軍と少しも變らぬのである。そして勤務は孰れも陸海軍大臣の命令によつて、陸軍に勤務する者と海軍に勤務するものとに別たれるのである陸軍大臣の命令による陸上勤務は、先づ外地には主に看護人組織の救護班を以て之に充て、內地には主に看護婦組織の救護班を以て之に充てるのであるが外地の救護班は、主に兵站部に附隨して、即ち兵站病院內に監部長の命令に隨ひ、陸軍の看護長以下と共に合併して、救護の事に從ひ、內地の救護班は、各師團の病院に在つて、各自看護の事に從ふのである。

海軍大臣の命令による海上勤務……即ち救護船乘組を命ぜられたものは、上官の命令に從つて、戰地に於て患者の出來た際に之を收容して、內地の豫備

病院に護送して還り、軍艦に於て死傷疾病者の生じた時には直ちに之を病室に收容して、其看護治療を施して、後再び戰爭に堪へるものは軍艦に送り還し堪へざるものは内地の病院に送る事に從ふのである。陸上勤務の外地にあるものと内地に在るものとを問はず、海上勤務の病院船に在るものとに論なく、固より其規律は嚴肅であつて、重大なる責任を帶びて居る事は、孰れに甲乙の隔りがあるでもなく、又勤務の繁閑困難の輕重がある筈のものではないが、併し、世人が思ふ樣に決して看護の事は容易で且割合に樂なものでは無い。殊に病院船乘組は、縱令石炭は充分に積込むであるにしろ、船は巨大く安全であるにしろ、



激しき風波に遭遇して海上に幾日間も漂ふ時、又は多くの〳〵名譽ある負傷者を收容して、其恢復を祈る時、其困難と云つたら決して一通りではないのである。

兵站部に附隨して往く所の看護人又は看護婦等は、常に軍隊の戰爭を爲て過ぎ去つた跡であるから、四面の光景等落寞として轉た一種の感に打たれざるを得ぬのである。

そして看護婦看護人には孰れも外來と病室附との二種あることも、凡て平時と變らず、戰時であるからと云つて、疎畧に流れるといふ樣な事は決して無く、却て益す緻密叮嚀になるのみならず、固より各自交代に徹夜勤務で、大方は重傷患者一人につき、必ず

看護婦若しくは看護人一人づゝは附いて居るのである。

此間に理事は、常に看護婦、看護人等の動静を監督し、又一々患者を慰問する事を怠らず、醫員と云ひ調劑員と云ひ、書記と云ひ、其地夫々少しも閑暇などのあるべきもので無い事は今茲に云はずもがなの事である。

過ぐる北清事變の折に、在天津の兵站病院にあつて一日に収容した患者の數、實に六百八十五人に及んだ事もあつたが、其後該變に就ての統計を作つた時に負傷患者が百分の三十、傳染病患者が百分の五十五、花柳病患者が百分の十五といふ割合になつた。

それから病院船の設備は、これも去る卅三年に始めて試られたのであるから、日尚淺いのであるが、今や日露戰爭が始まつたに就いては、此度の成蹟こそ大いに注目すべきものである。で、過般其筋からは博愛丸弘濟丸などが救護船たる事を命せられ、夫々赤十字社の乘組員も定まつたが、云ふまでもなく此救護船乘組は、殊に老練なる人々を要するので、彼の博愛丸乘組の理事吉川元雄氏の如きは、廿七八年戰役以來、老練家の聞えたかき人、又弘濟丸乘組の醫長小山善氏の如きは、是亦實に手腕の勝れた人其他すべて撰に撰つた人々であるから、必ずや絶大の好成蹟を我赤十字社……否な世界の赤十字の上に留める事であらうと思はれる。

要するに戰時に於ける赤十字社は、未だ平時と何の異る時は無いので、常に其準備を整へてある事少しも軍隊と違はぬのである。たゞ夫れ百萬の貔貅敵國に血躍り肉裂る時に當り、一道博愛慈善の熱き光明を輝かすものは、我親愛なる赤十字社ではあるまいか？

以上は二月十六日に今回博愛丸乘組を命せられた赤十字社員某を訪ふて聽き取つた談話の一端である。

水戸の婦人（六）

東台小隠

お幸、お龍、

お幸は水戸哀公の侍妾なり、哀公の夫人は十一代將軍家齊公の息女にて峯姫君と申しける。水戸家へ御入輿の時、將軍より老女を以て、侍妾を進せらるべしと懇切の命あらせられしも、固辭して受け給はざりしが、公御年三十にならせ給ひても峯姫君に御子なかりしかば、姫君より侍妾として此のお幸を進せられける。然るに僅三年に滿ずして文政十二年秋の中より公病にかゝり、次第に重らせ給ひ、九月下旬には早頼み少なく見えさせ給ふ。公には男女の御子一人もなく、御養子の沙汰も未だあらざりしかば臣下一同御身の上と、御家の行末を案じ煩ひ、聲立て物言ふ者もなし。まして御側に近く侍る者は、何れも皆手に汗を握りて打まもるのみ、御大切の御遺命を承はらんと心付く人もなかりし、幸は徐々と御前に進み出で、涙を呑んで申上げるは御病氣必定御本復はあらせらるべけれども、自然御覺悟の事もあらせられなば、御申開け下さるべしと述べけるに、公頷つかせ給ひ、隨分心得居れりと御意ありしと、（此時御弟敬三郎君を御養子になさるゝ事、其他後事を秘密に認め置かれしかば別段御遺言はなかりしなりと）此時の幸の振舞いかにも健氣に見えしかば、流石に御人選になりたる程の者なりと、人々感じ合ひしとなり。（登天能之久連）

君主病に臥して繼嗣定らず大臣巨室惶惑して出す所を知らざるの時に當り、幸一侍妾の身を以て、よく人の言ひ難き所を言ふ、平生修養する所あらざりせば、怎でか斯の如きを得んや。蓋し妾の其君に於ける義は君臣なれど情は夫婦なり、今君にして夫なる人と永訣の大事に臨んで、從容迫らず、幸の如き眞に女丈夫と謂ふべし。

哀公此年十月薨ず、享年三十三。幸は髮を斷て幸信院と稱し、長く公の靈牌に奉仕せり、幸前名某、幸

の名は公より賜はりしなりと(侍間小祿)

侍女お簾は安藤某の女、色美にして才敏なり、最も音律に長じ、遝城樂の秘曲を傳へり、哀公にも平生亦音樂を好み給ひしかば、寵愛他に異なりしが、忽ち自殺して失けり、年僅に二十歳なり。公甚だ惜ませ給ひ、大乘寺(東京駒込鷄聲ケ窪)へ位牌を納め脊後へ御自筆にて御文章を記るされ、尙詩一絕を添へ給ふ。

錦衣紅粉屬㆓黃泉㆒。穠住㆓人間㆒二十年。今夕絃歌人不㆑見。翠簾夜靜月偏妍。

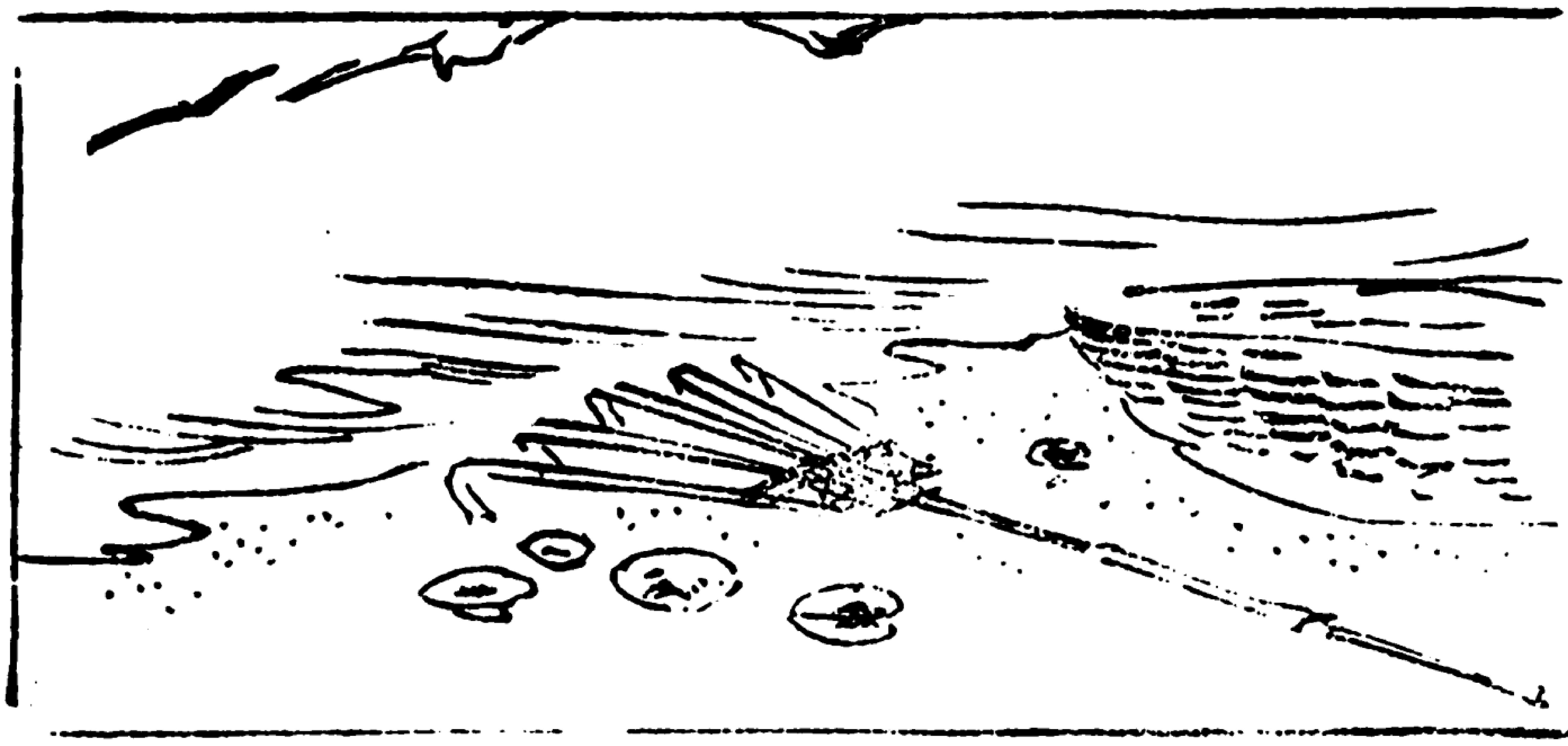
先是小石川の邸燒失し、公は大塚なる松平大學頭の邸に遷り夫人には大城へ移らせ給ひぬ。阿簾は大塚へ參りて公に侍づき、時折は大城へも伺候せり。或日大城へ參りて夫人の機嫌を伺ひ歸邸せしが、其夜刄に伏して死しける故上下の騷亂大方ならず、其屍體を檢せしに、懷姙の徵わりしかば、人々別して惜しみ嘆きけり。然れども其何故に自殺せしやは、何人も之を知る者なし。但前後の形蹟に就て推考するに、元來奥女中は意地惡ろき者なるに、まして將軍より降嫁の女公子に附屬し來る老女輩は特に陰險殘忍の者多ければ、阿簾の懷姙せしを嫉みて種々に中傷せしならむ、阿簾は深く行末を考へ、己れの世にながらふ事の、終に君公の御身に不利なるべきを思ひ畫りて、命を捨てたるならんと、其頃噂わりしとかや。(故老遺聞)

お簾の事文献の徵すべきものなし、然れども哀公の殊に悼惜深かりしを見れば、身を以て君の難に代れるものに似たり。美人薄命とは是等をや謂ふなるべし。

立原春沙女史

女史は水戸有名の畫家立原杏所先生の長女なり。幼より家庭に學びて經史に通じ、書讀詩文を善くせり殊に畫は父及び文晁、華山、椿山の諸家に就きて、各其長とする所を採り、妍麗の裏に剛健の氣を含みて、自ら一家の風を爲せり。又能く一絃琴及び月琴

を弾ぜり、一日藩主烈公其家に臨み、女史をして月琴を彈せしめ、傾聴し給ふこと數時、其精妙を賞せらる。扨歸殿の後使を賜はりて召されしかど、固く辭して參らざりき。或人何故に辭されしやと問ひしに、六法の技は先人より授けられし所、是にて召されんには喜んで參殿すべきも、月琴は遊戯消閑の具のみ、是を以て召さるゝ事本意ならねば、參らざりしと答へしとかや。杏所先生交遊極めて廣かりし故、文士才子の女史を迎へんとする者多かりしが、高く標致して應ずる事なし。巻菱湖當時盛名都下に鳴り、亦先生と親善なる故婚娶の事に及びしに、女史笑て曰く妾不敏書家者流の妻たる能はずと後加賀侯の後宮に仕へ、姫君の寵任を得たり。嘗て命により屏障へ花卉翎毛



を畫きけるに、傅彩絢爛として筆々生動の妙あり、觀る者驚嘆せざるはなし安政二年十一月病に罹りて遽に歿す享年四十三、駒込海龍寺に葬る。女史名は春、邪沙は其號、字は沙々、其畫く所寸絹尺紙と雖も、人爭ひ購ふて之を珍とす。

女史の天才に配するに、池貸成、柳里恭の如き人物を以てし、日夕和研磨したらんには、其造詣する所量り難きものありしならむ、月老好緣を吝みて孤棲に終らしめ、且つ年を假す長からず、憂鬱して竟に隕す、天の才俊を待する、薄しと謂ふべきなり。

伊平太の妻佐與

さよは水戸城の東、吉沼村の農、伊平太の妻なり。伊平太妻と與に田畑を耕

して日を送りしが、不圖惡疾にかゝり、治療効なく農業もなり難ければ、家益々貧しくなり、遂に田畑を賣て醫藥の資となしぬ。斯てさよは人の衣裳を裁縫して辛く朝夕の烟を立てけるが、夫に事ふる事は益篤く、深く身を愼み、まめやかに介抱しければ伊平太其勞苦を憫みて、余の死せざるは全く爾の力にて忝なく思ふ所なるが、さりとて我が疾今は、やせんすべなし、然るに爾は年尚壯ければ、更に人に嫁ぎて身の安堵を圖るべしと諭しけるに、さよひたと打泣て、若おんみの疾癒ずして永き別れともならんには、妾終身其御墓守とならんのみ、身の勞苦を厭ふて、おんみを棄去るに忍ぶべきとて更に聽入るゝ氣色なければ其儘に止みぬ。伊平太奥州岩城の溫泉、其身の疾に効能あるべきよしを聞て、往き浴せんと思へど、旅費のなきに心を苦しめしに、佐與或人より錢三百文を借り來り、大工某に躄者車を作らんことを請ひしに、此大工亦志ある者にて、良材を挾みて車を造り與へ、其賃銀をば受ざりける、

さよ大に喜び、伊平太を此の車に寢せ、二人の幼兒を背に負ひ、懷ろに抱き、彼の車を挽き岩城を指して旅立ける。觀る者涙を流さぬはなかりし。素より路銀の用意とてもなければ、夜は大家に就きて一夜の宿を借り、晝は乞食して行くに、行遇ふ旅人皆ふびんに思ひ、助けて車を挽き呉るゝ者多かりける故遂に恙なく岩城に着しぬ。斯て伊平太溫泉に浴する事一月餘りにて、疾大方に癒ゑければ、妻子を引連れ徒歩にて吉沼に還りけり。然るに藩の法にて國境を出づる者は先づ役所に告げ、許を得て後出立すべき掟なるに、さよは其等のことを知らざる故請はずして旅行せしにぞ、其處の名主より右の趣を所管の役所へ具狀せしに、之が爲めはからずも從前奇特の行爲一々藩主の耳に達し、たゞに其咎を免されしのみならず、いたくさよの貞節を賞せられ、曩に賣拂ひし田地は官にて之を買戻され、更めて伊平太夫婦に賜はり且つ終身其租稅を免除せられけり。是實に享保十九年秋七月の事なりき。（東里文稿）

富貴には他人娶り、艱難には親戚離る、是世間普通の事なり、其家貧にして而も良人に惡疾あり、良人は外に嫁して身の安堵を計るべきを許す、此の一つあれば今の世之を棄去らざる者殆ど稀れなり、さよは啻に棄てざるのみならず、益善く之に事へ久ふして變ることなし、素より貧家の一匹婦なれば平生何の教養をも受けざるべきに、其行爲は古の賢女烈婦にも愧ぢざるものあり、終に能く伉儷の樂を全ふし、賞賜を拜して老境の安穩を得たる、天の善人に惠みする者にあらずや。

千萬のあたはありとも黄金もて城はかたむとも大君の
御をかゝふり人さきら神にこひのみ我の名のいつのを
たけびふりおこしいゆきむかひて其城を蹈破すてむ千
萬の醜男のとちは千尋繩つなぎからめむ長たてろやつ
こがくひは打きりてかくぞありしと大君の御前に我は
聞えあげてむ

朝鮮のはなし

菅原雅輔

七不思議

朝鮮へ兵を出さねばならぬ、朝鮮の鐵道を早く拵らへねばならぬ、朝鮮海峽の電線は我國で持たねばならぬなど、昨今我國人は矢鱈に朝鮮のことに氣をもみ出し、日々の新聞紙に朝鮮の記事の見へない日はありませぬ、そこで私も時節柄すこし朝鮮のお咄を致そふと存じます。

一寸考へますと朝鮮と云へば外國のとではあり、彼れ是れと騷げば、何だか他人の面上の蠅を氣にしてヤンヤと云ふやうに聞えまして可笑ありますが、所が中々左樣ではありません、他國と申してもツイお向ふ隣で、我々日本人が同じ國內でも北海道や臺灣へ出掛くるよりは遙か容易に渡海が出來まして、既に先々から出掛けて暮して居る同胞は幾萬と云ふ高に上つて居りまして、朝鮮の仁川とか釜山とか申す

所は丸で日本人の市街であつて、一たび彼地へ往たものは、誰でも外國とは思はない位でありまず、其上國防上の關係がよく申す脣と齒との間柄でありますから、決して餘所事に打遣て置く譯けに參らぬのであります。

さて此大切な相談相手である朝鮮人と來たら、どうでありませう、世界一の意氣地なしで、上に立つお役人と申さば又眼前眞闇で民とか國とか云ふ心掛は塵ほどもござらぬ、只我身勝手のみ計つて居ると云ふ始末でありますから、國王樣も安心ならず一寸何か騷動でも持上らふものなら、直ぐ他國の公使館へ逃げ込で保護をお賴なされると云ふやうな情けなき有樣でありまず、又何時國が亡ぶかも譯らぬとて、その御用心に亞米利加の銀行へ貯金して居らしやると申すことであります、脣齒の關係ある一方が斯やうな現狀でありますから、我國の氣が揉めますのも無理はないのであります、大に奮發せねばならないのでせう。

吾人は日出國じや、蓬萊島じや、瑞穗國じや、世界の上國じや、天下の樂土じやなど丶申しまするが引換へて、年々打ちつゞく天災には實に閉口いたします、大雨が降る、暴風か吹く、山が崩れる、洪水がでる、海嘯がする、地震がゆる、火山が吐く、ペスト、赤痢、コレラなどの疫病が流行する、旱魃がする、虫害が起る、數へ來らば限りがありません、これほど天災のある國は世界に珍しい、世界の樂郷どころでなく天災の問屋と申しても差支ありませんでせう。

所が我國のかく天災國なるに反し朝鮮は息災國であります、朝鮮には火山がありません、海嘯かありません、地震がありません、有ても百年に二三度位で感じないほどの微震であります、風災がありません洪水があつても極小區域で直ぐ止みます、その上氣候が乾燥して居りますからバチルスが繁殖いたしません、そして空氣の清くして天氣の良イことは伊太利以上だと申すことであります。

我國の勝地の筆頭に置かれてゐる須磨や舞子を御覽なされ、病院や、療養院の建てられてからは、あたら勝區も肺病患者の巣窟となつてしまつて、今日では僅にバチルス製造をいたして居りますから危險千萬であります、所が朝鮮へは馬關から船に乘れば一夜の内に着まして、それに海上が熊野沖や瀨戸内のやうに危險でありませんから、ポツポツ彼地へ出掛るやうにしたら命を拾ふやうなお目出度ことがあらふと思はれます、ことに地價は安し、海陸の產物には富で居るし、風景はわるくなし、住民はなづき好く、言葉は學び易いから、ツイ鼻の先きなる大磯や逗子や鎌倉あたりに不廉な別莊を持つより、少し離れた朝鮮に別莊を作つたならば、安直で愉快で、如何ばかり健康と利益とを得らるゝか知れませぬ。



でありますから朝鮮人が意氣地がないからとて相手にせぬのは、義俠なる日本人の遣り方ではありますまい、又かやうに好い所があるのを拾てゝ顧みないのは天の與ふる寶を取らぬのと同じことではありますまいか、つきましてはいろ〳〵彼の國情をおはなしいたさば叉却て面白いこともありますが今回は先づ一寸七不思議を述べて置きませう。

（一）玉笛　これは古新羅朴赫居王の時、東海の東海中で漁夫が得たもので、國寶として、新羅の都、

今の慶州にて保存せられましたが、この笛は誰が吹きても一切音が發ませぬ、所で古より慶州領内のもので只一人丈け必ず吹者が出來まして代々絶えません。

又此笛を烏嶺から西方へ持行かば國家大亂ありと戒められてありました、所が今の朝鮮王の先祖の李氏が漢城に都したに依て、前の戒を破つて漢城へ移しました、處が笛の音が出ませぬ、是れは吹者がわるいのであらふとて、慶州の吹者を呼び寄せて吹かせましたが、一向音が發ませぬから、人々奇異の思をなして心あるものは竊に心配をいたして居りましたが、其翌年果して倭冠の亂がありました、是れ偏に笛を嶺西へ移したからじやと恐れまして、急に元の慶州へ返したと云ふことであります、今では慶州の郡役所で大切に保管して居るそうですが、本邦人で郡守に賴みて一見したものがあります、聞けば笛は白色にして微に水色を帶びた玉石であつて長二尺太さ二寸計り孔は上六、下一すべて七つありて、玉色の美しく彫刻の古雅なことはまことに稀代の珍品であると申すことであります。

(二)松　前の慶州を五六里計り離れた所で一つの老松があります、此松は根幹から伐りても必ず新芽を吹き出しますことが、樫や槲のやうであつて、現在の老樹は古から幾回も伐採した後の新芽が成長したのじやそうであります、それで奇の一つになりて居ります。

(三)逆砂　これは慶州の西を流れて居ます、巾十四五間計の川流のことで、水の流れに逆ふて砂を河上へ送るそうであります。

(四)海印　陝川と云ふ所に海印寺と申す寺があります、此寺は新羅時代の創建で朝鮮三大寺の一であります、此處の寶物に海印と八萬大藏經とを秘藏してありますが、この大藏經と申すは支那から渡來したものじやそうです、さて海印と云ふものは拳ほどの大な玉に彫刻せられてあつて、此海印を前の大藏經の上に置く時は經中の幾部を其中から隨意に出

入することが出來て、すこしも障碍を感じないと申し、又層積してある形も毫も崩るゝことも無いから不思議の一と數へられてあります。

(五)金蛙　通度寺と云ふは梁山郡にあつて、これも朝鮮三大寺の一つであります、此寺の附近に一種の蛙が棲て居りますが、大さ我國の蟇のやうで其形もそれによく似て居りますが只美しき金色をして居ります、此の蛙を捕へて甕の中へ入れて密封して置きますと、一夜の内に其蛙が何處へ往つたか更に見えません、全く甕の中で消えて無くなつて居るそうであります。

(六)佛國寺　佛國寺と申すは、慶州を距れて四五里もあらふと思ふ所にある寺で、此寺の後は高き一の山であります、この高峯を隔てゝ三里計りある所に一つの大なる池があります、その池中へ常に先きの佛國寺の堂や塔が寫るそうでして、それが不思議の一であります、朝鮮人より聞くと、此影の顯れますは晴天の日に限るとのことであります。

(七)浮石　これも亦慶州を距ること程遠からざる所のはなしであります、大石の上に更に一箇の大石があります、恰も鏡餅を重ねたやうなものであります、此の石と石との間は密着して一見空隙がないやうでありますが、試みに一筋の綱の兩端を採りて石を廻してその層間を引きましたなら、自在に通過することが、恰も空に浮べるものゝやうであると申すことであります。

これで七不思議に付ての咄は一班述べましたから次に朝鮮の女性に付ておはなしをいたしませうと存じます。



米國通信

澁谷馬頭

一、タカミネ夫人

◎米國婚姻事情と云ふ通信の中に高嶺さんの奥さんの事が見えました、あれは女子高等師範の校長の高嶺秀夫さんの奥さんの事ですか、

△答いやいや之は飛んだ間違で御座いました高峯譲吉さんの奥さんの事で、タカミネ間違で御座いました、どうぞ御免あそばせ

◎高峯譲吉さんとは御聞き申した御名前のやうですが、

△答左様で御座います當國ニユヨルクで、紳士間で知らない人のない位で御座いまして、殊にタカヂアスターゼ、其他一二の新薬の發見で、世界に名をひびかせました方です。

◎その奥さんは通信によれば、米國婦人で立派な家柄の方のやうに聞えますが、詳い事を承りたいもので御座います、

△答御尤の御問で御座います、奥さんは當國シカゴ市の出生で、父君はシカゴ市に住し、醫を業として、同市第一流の名家でございまして、ヒッチ氏と申します、奥さんの妹さんは、また有名なる經濟學者ヘンリー、ジヨージ氏に縁付きました、

◎妙な事まで御尋申ますが、そんな名家の御嬢さんが、日本人に縁付ましたのは何か深い仔細でも御座いましたのですか、

△答そんな深い事まで私は存じませぬが、何しろ高峯さんも、今とは違つて、もとは哀れな一書生で御座いました所へ、名家の令嬢が縁付きましたので御座いますから、一通りの事情では御座いませんでしたらう、

◎そして

△答へイ日本の一書生たる高峯さんに、奥さんは、其時はまだ奥さんでは御座いません、御嬢さんが、深く見込みを付まして結婚の御約束をいたしました

が、父君はその結婚を御喜びになりませんでした、

◎それから

△答當國の風として、必ずしも父君母君または親族などの同意を得なくても自由に結婚する事が出來ますので、御孃さんは高峯さんに縁付きましたので御座います、

◎それから

△答當國で世帯を持ちますには、非常に困難で御坐います、高峯さんは奥さんを貰つて、生計のために困難に困難を重ねましたのです、内心其結婚を喜びなさらない、奥さんの父君は、一向見ついでくださらなかつたのです、

◎高峯さんは其頃何事業に御從事でしたか、

△答いろ〳〵化學上の研究に從事して御出でして此時ウイスキー酒製造原料を發見しました、有益な大發明で御座いましたけれども、天運いまだ來らぬためか、米國ウイスキー釀造組合は高峯さんの法を排斥して、採用しません、でしたから、少しも生計の困難を救ふためにはなりませんでした、哀れやパン一塊を買ふ錢もない位におちぶれました、併し奥さんは、此貧書生を見すてゝ、富家に立ち戻る考へは少しも起しませんでした、

◎それから

△答ウイスキー釀造組合と高峯さんとの悶着で、毎日の新聞に高峯と云ふ名の載つて居ない事は御座いません、とにかく此一事で有名な人と知れ渡りましたので、奥さんの父君もやうやう考へ直ほしなすつたので御座います「よいにしろ、惡いにしろ、とにかく毎日のやうに新聞に名を載せられるは、一廉ある人物に相違ない」と御考へ直しなすつて、それから父君も少しづゝ助力してくれましたので御座ます、それ故高峯さんの今日の成功は、奥さんの内助の力が與つて多う御座ひますと聞きました、

◎今日の樣子を少し御聞き申たいので御座います、

△答只今はニウヨルクに御住居です、高峰さんと、奥さんと、御子さん御二人と、奥さんの弟さんと

五人の御家族で御座います奥さんは常にお兒さんたちに御教へになつて、お兒さん達に決して『私どもは米國人である』と云はせません、『日本人であると心得させておいでゝす、今日家庭の樣子は、よくは存じませんが、此一事で、大概の事は推し測られます、

二、日米の結婚

◎ついでに珍しい御話を承りたいので御座います

△答 珍しくもありませんが、ついでと仰しやれば、日米人の結婚話です、其場所は、桑港の近邊で、男は日本人で容貌もよし、教育もあり、紳士として耻かしからぬ者、女は米人で其土地の者、

◎それだけですか

△答まづそんな者ですが、惡魔めが嫉妬を起しまして此二人の間を裂かうとして居ます、即ち此近所の人たちが、大勢聚つて相談を致しまして『日本人へ嫁を遣つたからには、我等一同今夜から御交際を致しかねます』と云ふのです、此談判いまだ結局を告げませんやうです、米國でも田舍にはこんな事があります、



三、日米の結婚其二其一

◎又ですか

△答左樣です、是だけでよします、場所はシヤトルの北の小市街、ワチカムと云ふ所、夫は日本人で其所の一洋食店の主人木村儀之助と云ふ者、女は米人然るに寺院で結婚式を終へて、後夫婦手を携へて歸宅はせずに別々になつて歸りましたと當地タイムス新聞に見えました、



白すみれ

佐藤露英

（上）

都大路に、衣紋亂れし花見小袖の匂ひ溢れて優しう、足は千鳥の一とむれ騒がしき、彌生のたそがれ。額にも頬にも髪の毛散らけて髷の恰好も埒なく、節美しき守唄に乳欲しとて泣く脊の子を賺して、爪先破れたる麻裏草履に塵砂を立てつゝ、右手の風車高う翳し行きし少女の、唐人髷に房長き簪の欲しかるべき年輩に、さすが裝ひ飾れる浮世の人の羨ましくてか、唯有る小路の前に足を停めて、圓らなる愛くるしき眼にしばし恍惚と往き交ふ樣を打ち眺めしが、再び泣き出でし嬰兒の聲におどろかされて、思ひ出せしやうに守唄を續けつゝ、足を返して小走りに其の小路へと曲りゆく、時、忽ち後に人の聲して、消魂しき鈴の音、耳近う響き渡りつ、

年齢足らねども都に住む身は見馴れ聞き馴れて、人を注意る自轉車の鈴の音とは知りながら、何方に身を退かばやと躊躇ふてそゞろ心に振返れば一方は淺き小溝、一方は折り曲りたる黒板塀、間挾き一と筋道のはや車の輪は少女の脊に迫つて進むは危ふし、さりとて避くるに途はあらず、と彼方も思ひ惑ひながらに身を輕ぅ轉ばして、周章だしう自轉車より下りる途端、叶はぬまでもと右方に走せ寄りし少女の足に車輪觸れて、あと叫ぶ間に幼き者の足許弱く支えられて其處に轉びしが、何時か溝に落入りて、身を俯伏せに少女の半身は埋れたり。

年若き自轉車の主は、車を塀に投げかけつゝ、走り寄つて華奢なる兩の手に少女を抱き上げしが、地上に立たせて言葉せはしう、

「何處か痛めたでせう、え、石で打ちはしなかつたの」

其の人の身の氣遣はれながら、驚き餘りて波うつ胸の我が苦しさに堪へかねつゝ、組みたる腕にしかと胸を押へて、靑年は少時天空を仰ぐ。

何れへか草履の失はれたる、片々の足を爪立てながら悄然と佇みて、幼兒に被せたる半纏の半ばより、裾も袂の先きも泥に塗れしあさましき我姿を我れと眺めし少女は、恨めしき人ながら言葉優しう問はれて絲に物悲しさの迫りしが、答へもせで犇と振れし袂に面を掩ひしが、忍び泣きてその音も洩らさず。

「濟まない事をしました、勘忍して下さい、ね、負傷はしなかつたの？」

吻と息吐きて再び問へば、幽に點頭くに、

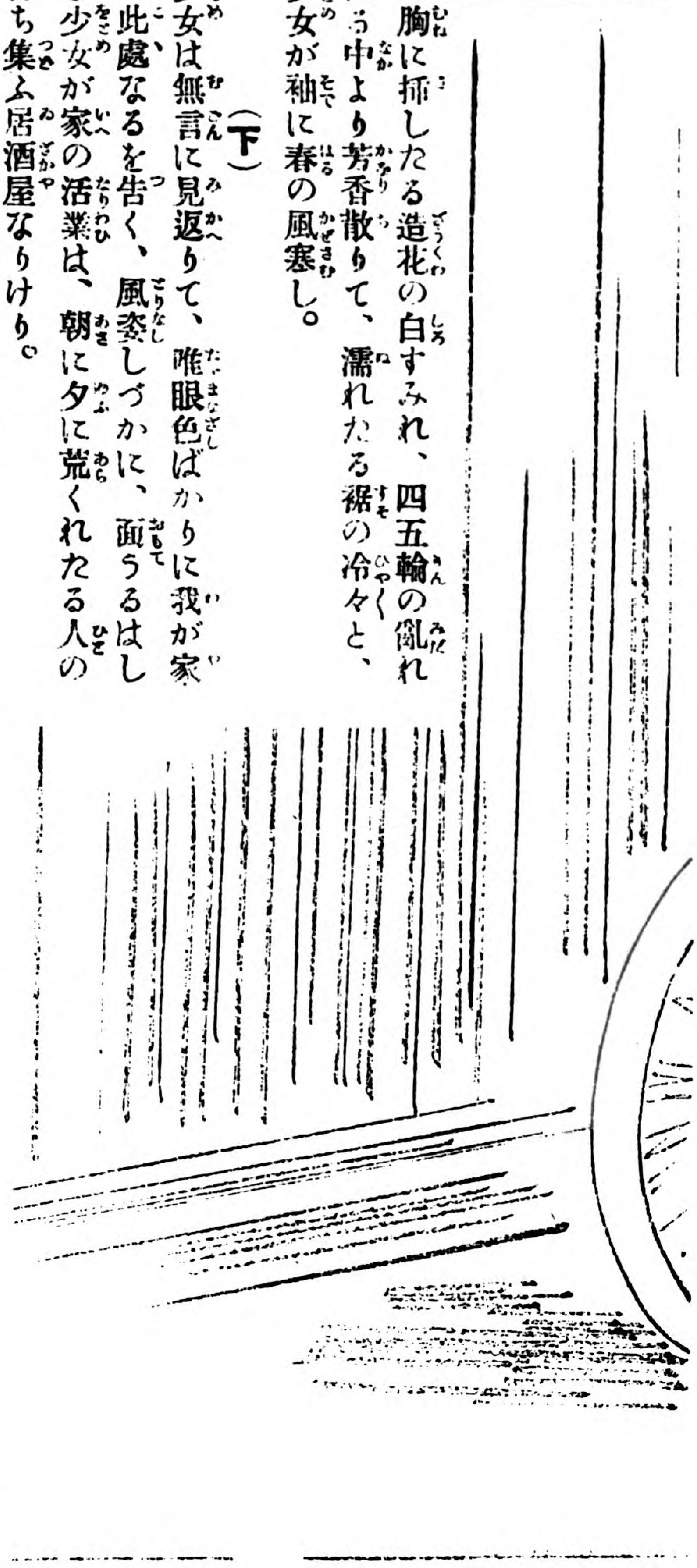
「然う、そりや可かつた、けれど」

と不安氣に、幾度か洗ひ洗はれて地の薄うなりし垂帽子の、毛糸ながら暖か氣にもなきをそつと除けて、

少女の脊をさし覗けば、露持つ瑠璃の眼を見張りて、小さき口を窄めたる幼兒は、色白う柔和し氣なるその人の面を珍らかに眺めてやがて懷し氣に打微笑む、唇綻びたるさまの愛らしさに思はず笑まれて、
「お丶機嫌の好いこと、何ともなかつたね」
と胸安らかに、頭を撫でやりつ丶、衣嚢を探りしが、取り出したる絹半巾を少女に渡して
「濡れたところをこれで拭いて下さい、氣味が惡るいでせう」
年齡經かねばとも思ひ侮らず、懇に云へど少女は泣き續けて見も返らぬに、怪みて、
「何うしたの？、矢張り痛めた所があるぢやないか」
美しき眉を顰まして摺りよれば、歔欷り上げて
「歸るとおつかさんに叱……………」
後は咽んで聞き分け得ず。
「叱られる？」
合點ゆかぬさまに少女を見守りつ丶、
「なに此方が惡るいんだもの、落ちたものに咎があるのぢやなし、叱られる氣遣はないの、けれど此の儘では僕も濟まないから一所に行つて詫罪ります、ね、家は近所ですか」
その言葉の嬉しう、少女は袖を放して晴々と見上げしが、
「もう少し前き」
と、さすが憶して聲低し。
「然う」

と調子輕う、自轉車の許に立寄りて、
「別に、氣分の惡るいやうな事もありませんか」
と慈悲含む眼許にちつと見やれば、鼻筋通りて氣品高き面立の、淚の痕の白う輝く頰をいさゝか赤めて俯向きたる、可憐らしう、その風情の見守られて、親し氣に、
「何ともないの？」
と青年は重ねて問ひよりつ、面は上げたれど伏目になりて、
「えゝ、何とも」
と漸う答へながら、しばし紛れて沈靜なりし脊の子の、乳欲しう母を忍びてか、ふと泣き出でしに、投げ出されたる風車拾ひ上げて翳しやれば、夕風さと吹き過ぎて美しう、廻ぐれば花は輪になりて隱れ、止まれば形現はれてとり〴〵の色浮ぶ。
「ぢや、行きませう」
我れも面白う、風車に心奪られながら青年は自轉車曳き出す、促されて少女も片々の草履脫ぎ捨てつゝ、素足に地を踏みて步調しづかに運ばせしが、汚れたるを自ら洗ひ濯ぐはさらに辛からねど、着替なき唯一枚の平常着をこのやうに泥にしたりしなれば、さぞや母の小言は激しく、姉は口汚う罵るなるべし、わが過ちにはあらずとて、いかにこの人詫び菲くるゝとも、歸られし後何のやうな目に逢はせらるゝやら知れぬをと、恐しく、足萎縮む思ひの行き惱みて、力無氣に立てば、小さき人の胸の思ひは知らねど、今日までも猶父を楯、母の御袖にかくれて世を經し身は、かゝる時、いかなる言葉もて詫びすべきか、と大事に逢ひたる心地の、此方も思案にくれて自轉車に身を寄せつゝ、共々足を停めて青年は茫然と立ち盡しつ。そ





の胸に挿したる造花の白すみれ、四五輪の亂れたる中より芳香散りて、濡れたる裾の冷々と、少女が袖に春の風寒し。

（下）

少女は無言に見返りて、唯眼色ばかりに我が家の此處なるを告く、風姿しづかに、面うるはしき少女が家の活業は、朝に夕に荒くれたる人の打ち集ふ居酒屋なりけり。

何としもなけれど青年は繩の暖簾を潜り得ず、家内なる人をば外面に呼び出して語らふべきかと、躊躇ふて店を透し眺めしが、いかに心弱ければとて、其れも餘りに稚びたる振舞と自ら笑ふて、少女の袖を捉りつゝ思ひ切りて、つと走せ入る時、横方の流し元に腰を屈めて無造作に物盛る器を洗ひ居し女の、結び髮に紺褪せたる筒袖着たるが、振返りざま客と心得て聲高う、

「いらつしやい」

と叫ひつ、青年の面は火と燃えたり、

樽に腰据えて、一杯の濁り酒に快からぬ醉を得ながら、猶快しとする客人の跡絶えて、此處に今は見えず、裸身に印判纏一枚着けしばかりなる姿の寒氣にもなく、崩壊れたる土竈の傍に立ちて、其れに懸かれる鍋の中を攪きまはせる男一人あるばかり、寂寥と靜まれるさまに心いさゝか落着きて、其の儘無言に云ひ出すべき端緒を打ち案ずるを、何をか思ふと訝かしう青年の服裝を眺めやりし主婦は、其の後に隱るるやうに身を側めて立つ少女の、泥に塗れし姿を目早に見出て何かひそかに點頭きつゝ、再び流し元に向ひて、小桶の中の汚れたる水を流せしが、其處に散亂れる葱の間を潜り、貝の剥身を上げたる小笊の下を通りて彼方に落ちゆく。心なく偶然それに目をやりたる青年の胸惡う覺えて面顰むれば、主婦は心付かぬさまを裝ふて、

「あなた、何を差上げます」

と改めて立直りつゝ、今初めて其の姿の目に留りしやうに、殊更らしう青年の後方を覗き込みながら、

「おや、お咲ぢやないか」

「あつ、おつかさん」

我れにもあらず身を退くを、進み出て、

「おや〳〵まあ、其の態は何うしたつてんだい」

眉の邊り少女と似通ひたれど、色黑う、口許の皺の卑しう見ゆる面に、屹と凄じう睨みて、

「また溝渠へ落込つて來たんだね、圖體の大きな癖に何故然うぼんつくなんだよ」

癇走りたる聲に罵りて、小腕捉へんと立寄るを、青年は周章しう、後に少女を圍ひつゝ、

「ま、待つて下さい、僕が惡るいのです、僕がこのお子を自轉車で落したのです、實はその事で……」
と云ひさして、涼しき眼に主婦を見やりしが、鮮麗なれどやゝ險しう、端黑ずみたる眼に熟と見返されて柔なれど猶木枯荒ぶ裸木の許に立つ思ひして、思はず面を外らしながら、
「實は其れをお詫びに上がりましたのです、其處の角の、道巾の狹い曲り角だつたものですから、兩方で避けやうがなくつてつい斯うなつてしまつたので、お二人ながら負傷はなさらなかつたやうですが、濟まない事をしました、小さい方をこのやうな目に逢はして申譯もありません」
語尾に力入れて憚らず謝す、それを、
「左樣で御座いますか」
とばかり、主婦は冷やかに聞き流して、
「お咲ッ」と鋭く、
「聾ぢやないんだらう、盲目ぢやないんだらう、自轉車が後から來るか前から來るか、知らずに居る奴が何處にある、眞拔め、だからぼんつくだつて云ふんだ、ぼんやりだつて云ふんだ」
右手を延ばすより早く、お咲の耳朶を抓り上げて、
「この耳は何の爲につけてるんだ、自轉車の鈴が何うして聞えない！
其儘ぐつと引寄せて、皮も裂けよと力の限り平手に頰を打つ。
「あれつ」
と髮振亂つて、背の子と共に泣き叫ぶ少女を前より抱きつゝ身を飜して
「手荒い事を成さるな、このお子に咎は無いのです、だからこそ僕が詫罪つて居るのぢやありませんか」

切む息を押鎮めて、懐へそのゝく少女を後方に逐ひやれば、

「いゝえ、飛んでもない、其樣ことは御座いません生のつくやうに擦つてくれなきや」

留むる青年を押退けて少女の傍に走せ寄り、

「おい、誰が守りしてると思つてるんだい、若しその坊つちやんに負傷でもさせたら、家内の者は親分に何と云つて申譯する、え、何と云つて云譯するよ」

合點ゆかぬ氣に、怒り猛れる母を振り仰ぎし少女を何か目に制して、

「生命に關はつたとした處で家の子なら内輪で濟むけれど、その子には爪の跡一つつけても云譯は立たないんだよ、どぢめ、今夜終夜親分への申譯だ、眞つ裸にしてこの土間へ立たして置から、然う思つて居な」

言葉の調子の手荒き事を又もやすると青年は少女を庇ひて、

「もう叱らないで下さい、僕が困りますから」

吐息つきつゝ、宥むる術のなきに困じて彼方を見やれば、先刻より、物も云はず、眉も顰めず、笑みも漏らさず、腕を組みて唯茫然と立盡せる彼の男は物云はねばならぬ場合を五月蠅く思ひてや、火の勢失せたる竈の前に向き直りて、再び見も返らず。其れを怨めしとも思はねど、情なくは覺えて詮なさに、

「何處までも僕が惡るいのです、飽くまで罪は僕にあるのです」

呟くやうに繰り返して云へば、いさゝか嘲りたる言葉付に、

「いゝえあなた、迂濶り茫然り、歩いてた者の方の落度なんでございますよ、他人樣が然う仰有て下さるからと申て、親の身で默つちや居られません、此の後の見せしめに充分折檻してやります」

「其れでは猶に僕が困ります、このお子が惡いと云ふのではなし、殆で僕の爲に」

哀れの人を思ふて胸迫りつゝ、そと後より擁い抱けば、其れに縋りて少女は細々と嗚咽の音を漏らす。
「僕の罪は罪で償はなけりやなりません、が、お母様が然う仰有るものを仕方がありません、このお子の過ちと云ふのぢやないんですけれど、半分はこのお子の過ちとして、これも僕からお詫びをしますが、其れでも許して上げる事は出來ませんか」
筋正しう云はれて枉ぐる言葉もなかりしが、默して思ひに耽りし主婦は、やがて打解顏に微笑みて、
「許すも許さないもあなた、親子の間柄にそんなむづかしい事はございません、唯自分の子となりますと人一倍惡るい事は矯めて直してやり度い氣がいたしましてね、つい手酷い事も爲るんでございますよ、罪を償ふとか仰有るが、なあに貴郎お互様ですもの、これが晴着と云ふのぢやなし、平常着の一枚や二枚泥にいたしましたつて、何の事もありやしません、唯ねえ」
當惑氣に再び默して首傾けしが、
「困りますことには此子が宅のぢやございません、些と家主で立てゝ置きます親分の秘藏つ子なんで御座いますよ、今の分ぢやお負傷もなし、温和しいやうぢや御座いますけれど」
何とや思ひし、媚つくりて、主婦の秋波に見やりたる、其れを厭ふて俯向きし青年の、片手を腋下に支えて、
「は」と謹みて受けつ。
「其の時は必定驚いたに違ひないと思ふんですよ、誕生前の乳呑兒ですもの、後になつて虫が起らないとも限りやしません、若しそんな事にでもなつた時、誠に私共が困るんでございます、若い方が自轉車で斯う〳〵と申た處で、あなたがお出でに成ない事にはそれも證に立ちませんし、守りをして居たお咲は猶

更、一同が憂い目を見なけりやなりません、親分と云ふのが中々の悪黨なんでございますからね、お住居を伺つて置いて然う申たら異賓にしませうが其れこそやれ藥代の、やれ診察料のと其れを假托けに何れ程のお爲目を強請られなさるか知れないんですから、其れもお氣の毒です——、困つてしまひました」

と溜息つく。

まだ妹の幼き頃、我れ可愛ゆくてさま〴〵と調戯ては打ち笑はせしを、驚き恐れて泣き切りたる時ばかりにはあらず、興も餘りに過ぎては虫と云ふもの〻起るとか云ひて、乳母の押止めし事ありしが、これは自ら泣きこそはせざりつれ、危ふき目に逢ひていかばかりその小さき胸を躍らせけん、實にさる事の起らぬとも限らぬを、と青年は一向それを思ふて心弱くも涙含みつ。

「こんなにもお優しい方を、つまらない目にはお逢はせ申度くないと思ふんですよ、なにねあなた、虫が出たの引込んだのと、紛紜の起らない前に、若干金包んで私からお内儀さんへ渡して置きやお造作のない話なんですがね、この貧乏世帶ぢや一錢の事も出來やしません、斯うしませう、子供の事つですからお咲一人の所業にして置きませう、親分の目の前で、思ふさま折檻してやつて親分にも脊中の五つ六つ打たせりや、其れで濟んでしまひます」

痛々しき様を目に見る思ひの、事もなげに云はれて若人は唇をの〻かしつ〻、

「其れは可けません、其のやうな目に逢はさせる事は出來ません、御自分のお子を其れほどまでにしても僕を庇護はなくてはならぬと云ふ理由はない筈です」

激して言葉荒く云ひか〻る時、少女は青年の手を退けて、見張りたる涙乾きし眼に母を疎ましう眺めやりながら、

「おつかさん、親分々々つて誰の事なの、これは家の子よ、乙吉ぢやありませんか」
母の言葉を僞りと思ふ信の強く、恐れ氣もなく明瞭と云へば
「えつ」
と我れ知らず叫びて振返りしが、閃く眼光にきつと見据えて、
「つべこべ、つべこべ、と何を云ふんだい、家の乙吉だらうが、親方の子だらうが、手前の知つた事ぢやない、好い加減にして置かないと後が恐いぞ」
烈しく胸を突かれて蹌踉きながら少女は恐れず、猶何か云ひ爭はんとするを、世馴れぬ心にも大方悟るところあり、
「もう好いです、分りました」
と青年は遮つて、黒金に白金を散らせし鎖を胸より外しつゝ、その儘引き出したる小形の金側時計を、皿小鉢の順序よく並ぶ傍の棚の上に置きて、
「何にしても飛んだ御迷惑をかけて濟みませんでした、僕に金子の持ち合はせはありませんから、失禮ですがこれを總てのお詫びとして置いて行きます」
言葉を切りて少女を見返り、
「このお子が僞言を云ふ筈もなし、又あなたが初めて會つた僕を欺くと云ふ筈もなし、其處には何か複雜つた事情があるのでせう、若しこの粗忽が原因になつて仰有るやうに虫が起つたと云ふ樣な事になりましたら、名刺を置ひて行きますから、その親分とか云ふ人に僕の住居を敎へて上げて下さい、お出で下されば充分手當てをして差上げます。これで最うこのお子を惱める必要はないでせう、衣服を汚したのは僕が

惡るいのですから、勘忍して上げて下さい」

再び繰り返へして、

「ぢや、失敬します」

卑しき心の計らひを見透かされしとは猜したれど、價貴かるべき時計の、ゆくりなく我が手に入りし喜びに胸は滿ち充ちて、それも深くは思はず、心落着ぬさまに辭儀する術も忘れて唯會釋するを、青年は不憫氣に見守りながら、襟に插したる白菫を、少女の艶なる頭髮に簪しやりつゝ、

「この花の色と同じう、その心の永へに淸かれよ」

と密かに念じて、無言に店を立ち出でゝ、汚れたる氣に蒸されて曇りたるやうに覺えし面をば、この巷にも花の香こもる夕風に拂はせて、まだ暮れ殘る空に、影淡き五日の月をば打仰ぐ。

名殘の惜まれてか、暖簾をそと分けて輝く面を出したる少女の。片手に白菫を捧げたり、與へられたる志の何とも知らずして。

谷の眞淸水、落ちて流れゆく儘にその末の濁らでやわるべき。



さらば！

西岡曦山

（上）

午後三時、退校の時間を告げる鐘が、ぢやん〳〵〳〵と鳴渡ると、筆太く、東都女學校と記された、標札が掲つて居る、赤煉瓦の門の内から、どや〳〵と現はれ出た蝦茶袴は、紫包を抱へ、洋傘翳して行くもあれは、路傍に人を避けながら靴紐を結び換るのもある。何子爵の令孃は、車上から微笑ながら、同級生に一禮して行かれ、某さんは、門を出ると、ひらりと自轉車で彼方へ。手に手を連ねて、樂しげに唱歌を歌ひ行くは下級生、畫帖を寄合て見て行くは四年級らしく、活花のお花を大切がつて提げて行くもあればラケト片手に急ぎ足で行くもある。詩集を暗誦する某女史とか綽名せらるゝ文學者、音樂家もあるとのこと、なにはさて、何れが菖蒲と分ちかぬる生徒の群、恰然、春の野面を飾る花のそれのよう！

咲き揃ふ花の樣な蝦茶袴も、右に左に、道をとり〳〵、己が家路に急ぐのであらう、樂しげに語り行く會話も遠ざかつて、往來も今は稀になつた頃、これも同じ門から出て來た二人の女學生、お揃ひの束髮に、色も異へぬ水色リボン、密々と語り行く樣子は、姉妹か、さりとは仲睦しき友垣か、桃に例ようか、櫻にせんか、鬼も盛の十八九、道行く人を避けながら、或ある角を左に折れると、こゝは片側町の往來稀れに、小供相手の飴屋の爺さん、頓狂な喇叭を流して行くばかり。

『あら一寸と……』二人は、これを見て、くすりと笑ひながら小走つて、彼方大通へと出た。以前と異つ

ての往來繁きに、二人は軒下を步んだ。ちりんちりんと鈴の音高く、洋服姿の日本婦人、得意然として自轉車を走らしたので。

『あらまア、あの女は……』　二人は云ひ合した樣、

『どうしたんでせうね、まア……厭だことね、あんな女が居るもんだから、世間から彼是云はれるんですね……』と恨めしげに云つたは荒木道子。

『だけどもね、致方がなくつてよ、だから妾達さへ氣を付けたら可いわ、構やしなくつてよ、世間の口なんか……』と答へたのは三田愛子と云ふ女學生。

『えゝさうですけれどもね、三田さん妾や口惜しくつてよ……あの此間兄さんのお友達が來してね、やれ今の女學生は生意氣だとか、お俠だとか云ふんですもの、眞箇に……だからさう云つて遣つたの……それは世間の女學生はさうかも知れませんけれど、妾達の學校なんかには、那樣もの居りませんつて……』

『おやまア、貴女は、大膽だこと……だけど荒木樣、今の女學生は全く口ばかりですからね』

『あら貴女は……』

『だつてさうぢやありませんか、現に寒川さんなんかは……』

『それは然ですけれど、あんな方と一所にされちやア堪らないわ、あんな女こそ、新聞や小説の材料になるんですね、眞箇に……』

『えゝ、だけど仕方がないわ、あの恩田先生が仰しやつた通りにね、自分さへ愼んで、誠の道に叶ふ樣にさへすれば可いわ』

『それは然ですがねー』と素氣ぬ返事。

『でも然でせう、爰に誠の道に叶ひなば、祈らずとても神や護らんで、正義に敵はないんですよ』
『然ね、そう〳〵、あの妾や先生の御詞は忘れなくつてよ、……ねえ三田さん、何故先生はお止めなさるの……』
『それは先生が御榮轉なさるんですもの』
『あらそう、あの茨城へ……』
『え〻、なんでも、今度は彼地で學監をなさるんですとさア……』
『まア然う、お名殘惜しいことね、妾やあの掲示を見て、お止なさるのかと思ふと、もうがつかりしてよ』
『え〻眞箇に、あんな親切の先生はないわね、もう後一年で可いから、妾達が此校を卒業まで居て下さると可いですけれどもね……』
『え〻、ですけれども、それやア仕方がないとしても、今お別をするかと思ふと、何だか姉にでも……』
と最早涙に物を云ひかねた、
『え〻』と頷いて歩みを續けるばかり。
『あの寫眞會は……明日午後二時、講堂前で……』
『え〻、參りますわ、必らず……』
と莞爾り笑ひながら、常に出るべき四角に來たのに驚いて、
『あら、もう來ちやつてよ、眞箇にまア……』
『え〻、話に釣込れてね……オホ〻〻〻……』
此處で、左樣ならと別れて右左に行くと、やがて、

『一寸、荒木さん、』と後から一人が追掛けた。
『おやまア、』と笑顔で迎へると、
『あの、今夜、お暇乞に來しやらなくつて、恩田先生の御宅に……
『え丶、參りませうよ、あの何時に行しつて……』
『あの六時頃、夕の御飯を頂いてから……』
『あ丶さう、ぢや妾御誘してよ』
『え丶、何卒か……』とまたも左右に別れて行つた。

（下）

恩田先生と云ふのは、今年四十の聲を聞く年輩であつたが、生れ付ての美しさは、三つ位は若く見える、品の好い、すらりとした背の高い婦人で、眼に慈愛が含まれ、〆つた口からは、數千萬言の益のある詞が出さうな形し、實にこの口からは、多年有益な言が發せられて居る、當今女流教育者中、その人ありと知れた方で、緣あつて此校に教鞭を取られ、朝夕に、未來の良妻賢母となるべき、數多の女子に向つて、倫理科の教師として、婦德涵養に盡力されたとが前後五年、此校に通ひ來る女生の誰彼も、一層の尊敬と畏怖とを以て師仕して居る程の、好望の女教師であつた。
五年！其間、教壇に立つての講義は、幾多の處女をして道德を重せしめ、また婦德の何たるを解せしめたであらう。
さるところ、今度此先生は、任を茨城の某女學校に轉ずることとなつて、都大路を後に、東の方常陸の國に赴かれる事になつた、而して其事が、あはれ幾多の教子を驚かしめたであらうか？、今教を受けて居る

生徒は勿論、來たるべき春に、進級して、慈愛の溢れた先生の御顔を拜し、誠含まれた先生の御口から、益ある敎を伺はうと、心私に待ち樂しんで居つた下級生は、いか程か失望したであらう?、

『あら、恩田先生は、もう居らないだわね…………………まア眞箇に、妾やがつかりしてよ』

と異口同音に物語つて居る程。

その別れの日、恩田先生は、敎壇に立たれて、お別にと述られた、數百言は、いかに難有く女生徒の胸に染込れたであらうか、この先生にも、今日限かと思つたか、恭々しく拜聽して居つた女生徒は姉や母にでも別れる樣に感じたか、隅々より我知らずすヽり泣する聲が聞えた、流石に先生も、別を惜まれたであらう。

『皆さん、最後に一言……』と云つて、白いハンケチで眼を拭ひながら、立たれた姿は神の樣!

やがて、一同を見渡して、

『皆さん、何卒か、今申したことはお忘れにならぬ樣に……凡て、男と異つて、女は靜に花の咲く樣に美で然も犯すことの出來ない品格を保つことが肝要でありますよ、例へば錦の美を纏ふても、心が、心が汚れて誠がなければ、紟と何程に違ひませうか、女は人の妻となつては、內助の功をなし、母となつては慈愛の母とならんければなりませぬ、世間が何んと云つても、己の心に誠さへ御座ますれば、何の憂るところもないのです、社會…今の社會は濁汚て居ります、けれど、皆さん、あの泥の中から、淸い蓮が咲きますどうか、世の中の風潮に染まず、蓮の泥より淸く咲た樣に、この世の中に淸きをなされることを望みます』

と云はれたわヽ、淸い遊びは、撮影會の後に行なはれしと。……夏は中頃、上野の森の綠りが濃くなつた七月十日の、午後四時三十分、水戶行列車は、この恩田先生を運ばんとして居る。プラトホームの上二等

室の前、行儀よく列んだ蝦茶袴の一隊は、この先生を見送るのである。列車の中からは、この生徒等の厚き情に涙を押へつゝ、窓より頸を出せるは恩田先生、名は幸子。

『どうも皆さん、わざ〳〵恐れ入りますね………』

生徒は輕く叩頭をした。

『あの水戸の方に來らしッたら、お出で下さいな………』

また恭々しく受けた。

『あの、先生、またお出で……』と問ふたものがあつた。

『さうですね、またお正月にでも………』

『あら、先生、お出ですか………』

『えゝ、參りますよ、また歌の會でも致しませうね………』

『どうか……』と、一同が小聲で云つた。

『ねえ、妾も樂しみにして居りますからね、まアそれまでは、申すまでも御座ません、皆さん御勉强を………』

と云はれて、また一同、難有しと叩頭をした。折しも後れて來た女生徒は、懸寄りながら、はや眼に涙を浮べて、

『先生！』

『おや、三田さん、どうも恐れ入りますね、どうか御兩親にも、よろしくお願致します、いゝえ、何れまた上京ました節は、御伺ひいたします……』と云ひ終つて、更に一同に、

「ねえ、皆さん、先日學校で申し上げた事はお忘れにならん樣にね、オホホ、もう止ませう、出發までねこんなことを申して……」

滊笛が鳴り、列車は靜かに、プラットホームを放れた、刻一刻、進みを速めた滊車は、綠色濃き上野の森を曲る時、此方を向いて、白いハンケチを振られて居られるのを、停車場を彼方に去る女學生が見付けて

「あら先生が……」

ど云ふや後し、此方も、赤白黄、とりどりに振り出して。……水戸行の列車は、遂に見えずなつた。山來たり河移り、東水戸のあたりを望んで、獨車中に搖れ行く恩田幸子先生は、これを思ひ、かれを思ふて、女生徒の事に移たならば、先生の胸は、さて如何であらう。

（完）





明治卅七年二月五日

宮中月次御歌會兼題詠進寫

盆栽

とつ國の花のかず／＼鉢にうゑて
わかたか殿の上にこそみれ　田中　光顯

あたゝけきむろにそたちし撫子は
夜寒もしらて花さきにけり　田中伊與子

はちうゑの花のさきくさひと本に
つくゑの島も春めきにけり　高崎　正風

ふつくゑのうへにほゝゑむ梅の花
とる筆さへもかにそ匂へる　渡邊　千秋

わか國になかりし花も鉢にうゑて
居なからみるそ樂しかりける　鍋島　直大

こけむせる石さへすゑしすゑ物の
老木の松そとこめつらしき　本居　豊頴

はちの木の梅のはつはな咲にけり
まつられしさのおき處なき　黒川　眞頼

苔むせる岩ねにそひてはちうゑの
けやき林のかけしけりけり　津輕　承昭

松竹をひとつにうゑてとことはに
千代の緑をもてあそふかな　松浦　詮

手すさひにひきし二葉のひめ小松
これも器にうゑておかまし　渡邊　清

枝をためはをすかしたる鉢うゑの
松のすかたのおもしろき哉　小畑　美稲

時ならぬ花さくむろのはちの木を
わけくれ老の友とこそみれ　北小路隨光

文机のもとにもはなのかをれるは
うゝる器のあれはなりけり　梅溪　通治

外國の草木のはなもとりませて
いろ／＼鉢に咲せてそみる　竹屋　光昭

野にはまたつほみもみえぬ梅の花
はちにゝほへる窓のうち哉　前田　利鬯

めづらしき草木の花をところせき
つくゑの島に移してぞみる　山本　實庸

窓の内にみるぞ樂しきはるあきの
花も紅葉もはちうゑにして　藤井　行德

さま〴〵の鉢に草木をうゑおきて
ひとりなかむる窓のうち哉　植松　雅平

文机のかたへにおけるはちうゑの
梅咲初めしけさのうれしさ　小原　漣

あけくれに心つくしてはちの木の
花さく時をまつそたのしき　澁谷　隆敎

水かひしゝるしは花にあらはれて
手植のはちの梅さきにけり　宮地　嚴夫

月の瀬の春のおもかけはちうゑの
梅にうかへてこもる庵かな　坂　正臣

はちうゑの土のねさしは淺けれと
ちよにたかわぬ松の色かな　近藤　久敬

たなそこの上にのせてもめつる哉
千代の小松を鉢うゑにして　荻原　嚴雄

はちうゑの梅を火桶の許におきて
またきに花をさかせつる哉　猿橋　有經

むな木より高きあたひを競ひけり
はちの小松も世にひかれ見　小出　粲

かたつえに硯のうみをおほひけり
机のしまのまつのひともと　中邨　秋香

鉢植のむめのしらたまひかれとも
こかね色なる花もさきくさ　小杉　榲邨

はちうゑの杉のむらたち陰ふかし
鳥もねくらをしめん計りに　大口　鯛二

窓の内にしらぬ野山のはなみるも
うゝる器のあれはなりけり　猪熊　夏樹

朝な夕なまとの内外におきかへて
はちのうゑ木に心やりつゝ　千葉　胤明

山人のほめておくりしまつなれと
鉢にはそはぬ枝もありけり　滋野井實麿

はちうゑのむめのかをりを久方の
空たきものにまかへける哉　遠山　英一

只ひとつかをるすみれに冬こもる
窓の日かけは春めきにけり　加藤　義清

たくみにもうゑなしけりな百鳥も
林のうちになくこゝちして　鈴木　小舟

是やこのかねのなる木と葉變りの　　尾崎　宍夫
おもとを鉢にうゑてめつ覧

拾ひてしかも川石もそへてけり　　須川　行信
さか山まつをはちうゑにて

明治卅七年二月五日

宮中月次御歌會當座御通題

山霞

春されはかすみのころも重ねきて　　松浦　詮
のとかに匂ふ雪のふしのね

夕月夜ほのかにみえしをちかたの　　前田　利鬯
山をかすみの又へたてけり

あつさ弓春たちそめしあしたより　　水野　忠敬
霞たなひくちゝふかひかね

竹芝のうらのとかにもはるたちて　　宮地　嚴夫
かすみこめたるあはの遠山

春かすみふかくたてれは筑波嶺の　　荻原　嚴雄
このもかのもゝ分れさり見

ふしのねは空に聳えてあしからの　　植松　有經
八重山つゝきかすみ棚曳く

けさはまたかすみの衣うすけれは　　小杉　榲邨
山寒けにもみえわたるかな

けさみれはふしも筑波も霞むなり　　大口　鯛二
よもにあまねき春やたつ覧

いたゝきの雪のひかりは變らねと　　千葉　胤明
ふしの裾野そ霞みはてたる

あさとてのたもとは未た寒けれと　　遠山　英一
遠山のはそかすみそめたる

つくは山このもかのもを立籠めて　　加藤　義清
へたてぬものは霞なりけり

春氷

さえかへりまた朝風にこほりけり　　松浦　詮
ぬるみそめたる春のいけ水

日をさふる松の木陰のにはたつみ　　前田　利鬯
凍りしまゝに春たちにけり

このあさけたらひの水も凍りけり　　水野　忠敬
また春風やさむけかるらむ

はるの日の光のとけき北のうみの
氷もいまやとけむとすらむ　宮地　厳夫

いくさふねよする港のあつこほり
くたくる春になりにける哉　荻原　厳雄

春風につのくみそめしあしの根の
下根にのこるうすこほり哉　植松　有經

きのふかもつみてにこし丶芹川は
うすこほりして朝風のふく　小杉　榲邨

北の海に春なほとけぬあつこほり
御旗の日かけまち渡るらむ　大口　鯛二

春雨のはれにし庭のたまりみつ
さなから凍る時もありけり　千葉　胤明

とけのこる氷もいまにみゆるかな
野川のつ丶み草はもゆれと　遠山　英一

梅かをる池のみきはのひもか丶み
とけんともせす春寒くして　加藤　義清

明治三十七年一月二十五日

宮中月次御歌會兼題詠進寫

正述心緒

身にあまる君かめくみを思ふにも
足ぬ力のはつかしきかな　田中　光顯

天の下ことあるたひにくゆるかな
みいくさ人に列らぬ身を　高崎　正風

よの中のそしり譽れにうこかさる
心ひとつそ身のたのみなる　渡邊　千秋

まなひやに未た通はぬをさな子も
た丶に養へやまとこ丶ろを　鍋島　直大

よしあしに思ひ亂れてよをへなは
た丶一節もた丶てくちなむ　本居　豐穎

をさまれる御代にあひたる嬉しさは
いへとも／＼盡せさりけり　黒川　眞頼

蟹文字はかき習ふともすなほなる
御國の道をふみなたかへそ　松浦　詮

よになさん事は皆からみつからの
こ丶ろに誓ふ外やなからん　渡邊　清

わしのすむわら山中もわさ日かけ
さし渡るまてきり開かなん　小畑　美稲

何事もたゝしきみちのなかゆかは
人のそしりはわらしとそ思ふ　北小路隨光

おいぬれとなほわけゆかん昔より
かきりしられぬ敷島のみち　梅溪　通治

いにしへの人に劣らぬまこゝろを
君と國とにつくさゝらめや　竹屋　光昭

くれたけの憂き節しらて過せるは
この大御代にあへは也けり　前田　利鬯

千萬のたみのこゝろもひとすちに
正しき道をすゝむ御代かな　藤井　行徳

數ならぬ我身なれともきみかため
大和こゝろを磨かさらめや　同　鐵子

ともすれは心のまよふよなりけり
たゝひと筋に道はふめとも　植松　雅平

人はよしいかにいふ共ひとすちの
我かまこゝろは變らさり鳬　唐橋　在正

大御代のふかきめくみにもの學ふ
みちはひらけぬよもの國々　水野　忠敬

君か爲みいくさふねにのるひとの
おなし數にも我はなりなん　日野西光善

我はたゝおもふ事なしくにさかえ
御代やすかれと祈る外には　常磐井堯熙

朝夕に身をかへりみむおこなひは
人のこゝろのかたちなりけり　藤枝　雅之

口にいふ事をたゝしくおこなひて
こゝろに恥ちぬ我身共かな　金子　有卿

おいぬれは數にはたらぬ身なれ共
大和こゝろはたゆまさりけり　小原　適

ひらけゆくこの大御代に生出てゝ
いたつらにのみ過すへしやは　千種　任子

おろかなる心なからもおほみくに
安かれとのみ思ふなりけり　小倉　文子

あら玉の年をむかへておほきみを
千代萬代とまついはひけり　三室戸治光

すめろきの知しめさゝる國もなく
開けゆく世を待つか樂しさ　宮地　厳夫

百千たひ悔をかさねてあやまちの
やゝ少くもなりにけるかな　坂　正臣

いにしへの六の御史にふてつきて
千代の惑はたれかとくらむ　近藤　久敬

君やすく國やすかれとあめつちに
祈らる日なし數ならぬ身も　小池　道子

大空にひとりはねうつあらわしも
やかて御狩の之物ならまし　荻原　巖雄

神もいかて助けさるへきやまと人
命をすてゝいてやと向はゝ　植松　有經

老いぬれと白髮にましるくろ髮の
つきぬは戀の心なりけり　小出　粲

よし人はしりもしらすも後の世に
ものはれぬへき言草もかな　中村　秋香

ふるき身の又あらたなり明らけき
世に立年もあらしと思へと　小杉　榲邨

たふときは遠つ祖よりうけつきて
君につくさむ大和たましひ　鎌田　正夫

執るものは筆につるきに變れとも
つくす誠は二つあらなくに　大口　鯛二

青雲のたなひくきはみおほみいつ
かゝやく御代となす由もかな　猪熊　夏樹

ひとたひはうちくたかすは大八洲
よるあたなみや限なからむ　千葉　胤明

國民のひとつこゝろにすゝむへき
時こそきつれ一つこゝろに　遠山　英一

いてといはゝ昔ならしゝいくさ笛
われ吹きたてん進め〳〵と　加藤　義清

天傳ふひかけのかつらすゑなかく
かけてそ祈る國のさかえを　鈴木　小舟

まよはしと思ふこゝろを枝折にて
分こそゆかめ千代のふる道　則武　正副

わかおもひ歌た任せていひ出るも
樂しき御代にすめは也けり　尾崎　宍夫

やせ馬の脊に負ふ重荷おもけれと
ゆくへき道は行かてやまめや　須川　信行

明治三十七年一月廿五日宮中月次御歌會詠進

御通題

曉山雪

ほの〳〵とあけわたりゆく遠山の
いたゝき白くつもる雪かな　水野　忠敬

ふりつもる高嶺の雪のほの〲と　松みえそむるわかつきの空　宮地　厳夫

よこくものわかるゝ峰にふり積る　雪のうへよりよはわけに見　萩原　巌雄

ひむかしの空まにくらき山のはに　わけ離れたる露のいろかな　植松　有經

はこね山よのまに雪をいたゝきて　明くる雲間にあらはれに見　大口　鯛二

ありあけの月も色こそなかりけれ　つらなる峰の雪のひかりに　千葉　胤明

さしくしのわかつき深く起出てゝ　をすの外山の雪をみるかな　遠山　英一

ふりつもるたかねのゆきの光より　夜はほの〲と明初めに見　加藤　義清

岸竹

千代かけて茂れる色のみゆるかな　ほそたに川のきしのくれ竹　水野　忠敬

茂りあふ岸のくれたけよろつよの　かけこそみゆれ池のまし水　宮地　厳夫

谷川のみつのみとりをそへてけり　きしのくれ竹かけ深くして　萩原　巌雄

かはきしの竹のしけみに隠れけり　降すと見えし宇治のはし舟　植松　有經

かけろふの夕かはしきのたか村に　むれゐる鳥は鷺かゝもめか　大口　鯛二

水ましてくえたる岸のくれたけも　薄ましりに茂りあひにけり　千葉　胤明

さし下す舟の内くらしみきひたり　きしのたかむら茂り〲て　遠山　英一

柴舟のさをにをり〲きられけり　わか山川のきしのたかむら　加藤　義清

柳

下田　[illegible]興

さほひめのかすみのおくの
そこすめるみつをかゝみに
ゆふごとにまゆをつくろひ
あさごとにかみをあらへる
かはそひのひともとやなぎ
かせふけばかせにまかせて
千ひろあるかみをけづらせ
つゆおけばつゆにまかせて
まゆずみにたまをゑがゝせ
あさよひにすがたつくらふ
かはそひのひともとやなき
さほひめのかすみのおくに
ねむるのどけさ

教の庭

正三位子爵 黒田清綱先生撰
（釣池武則先生代選）

旅行

天

學ひ屋のこゝろあひたるわがともと
つれたつたびはたのしかりけり

東京市京橋區釆女町二十一番地 森政子

地

野山ゆく旅こそはるはたのしけれ
しはしいこふもはなかけにして

三河國寶飯郡下地町 永井さい子

人

旅ころもいくへのやまかこえつらむ
おもへはなかきはるひなりけり

本郷區駒込東片町百二十八番地 高留意子

甲

ふるさとの母にあひぬと見しゆめの
さめてかなしき草まくらかな

和泉 福原菫子

もゝとりの聲なつかしきのにやまに
はな見つゝゆくはるのたひかな

神田 金原玉城子

ゆう／＼とさくらの花を見なからに
はるのやまちをゆくそたのしき

三河 白井よし

旅といへとよるひるわかぬくるまにて
ちさとのはてもとなりなりけり

下谷 河合象子

うきものと誰かいひけんことなくて
をさまる御代にあそふたひちを

肥後 千々波橋子

さきつゞく花のしたふしよころへて
いへちわすれしはるのたひかな

本郷 甲藤若子

乙

伊勢 梯 たけ子

草まくらうきてふことも知らすして旅は樂しき世となりにけり

上總 高石とよ子

心ゆく四方のけ色もありなから猶ふるさとのわすられぬかな

名古屋 淑子

たらちねの心つくしのたひころも一人かたしくけふにもある哉

東京 山田靜子

かすみたつ春の旅路はのとかなり花をいてゝははなにいりつゝ

東京 林 璟子

かはりゆく野邊のけしきにうき旅も忘れはてたる汽車の窓かな

三河 榊原てい子

わか思ふこゝろの駒にまかせつゝ春ゆくたひのおもしろさかな

東京 岩谷梓子

開けゆく御代はみくにの外までも旅のまくらのうらやすくして

秋田 古瀬惟子

はり金のたよりひらけて一人旅こゝろやすもなれるみよかな

東京 神戸すゑ子

かゑり見るなれし雲井のあと遠きこよひやとらんいへそ戀しき

山口 村上操子

旅をしもうしといひにし古のこゝろうたかふ世にあひにけり

丙

松山 上原のふ子

今の世のたひは舟にも車にもこゝろののらぬ日はなかりけり

秋田 古瀬とよ子

このころは吉野はつせととひよりてみちはかはらぬ春の旅かな

埼玉 横田音羽子

あしからのせきの峠をよちのほりふりさけみつるふしのしは山

東京 椎野兼子

開けゆく御代は車のたよりにてみやこの月をひなにみるかな

秋田 古瀬りく子

いそけとも老の旅ちはなか〳〵に思もよらぬつきをみるかな

埼玉 横田やな子

甲斐かみねこゆるたひ人心せよふち綱はへてわたすかけはし

埼玉 横田秋子

明ぬれはすゝかの御坂こえぬへしいく日になりぬ出し古さと

熊本 田代艶子

いさ我もかすみとゝもにたち出てはなのみやこの春をたつねん

熊本 田代綾子

花とりに心ひかれてたとりゆく春の旅ちはものうくもあらす

秋田 古瀬りく子

青柳のいとよりほそくふる雨にぬれはつくらふつはくらめ哉

東京 岩谷淺子

よの中を思ひはなれてうれしきは草をしきねの旅にそありける

東京 椎野ぬき子

うれしさを袖につゝみて旅ころもゆくてをいそく夕くれのそら

東京 河田いし子

馴れきし旅のよとこに夢さめてふるさとひとにまたもわかるゝ

肥後 佐々小琴子

梅をなかめさくらやまふきかさしつゝあそふ旅路の面白かな

東京 山口學子

打いてゝひとりのとけき旅衣こゝろにかゝるむらくもゝなし

大和 梁山たか子

たひころもいく日へぬらんしら露のかゝりし袖もかすみ初けり

出雲 高橋依子

ほゝきのや大神山のみゑしよりこゝろもそらにゆくたひちかな

肥後 佐々有隣子

花にあけつきのかけふむ旅のそら心なくさのかすそかさなる

秋田 日野 ちませ子
花を立ちはなにやとりてかまれ行く夢もはなゝるたひの嬉しさ
但馬 田尻保代子
ふるさとのやまは霞にかきゝえてなかめにくるゝ旅の空かな
東京 荒井満武子
けふよりはたれをともとしかたらんと思は戀しきふるさとのそら
大和 栗山俊子
出たちし日數を指にかそふれはあまりてなかきたひ路なりけり
東京 椎野秀子
空にみし雲をいつしかふみわけてけふも旅路のやまをこゆらん
東京 山本茂子
白川のせきもなこそもなのみにてかよふ旅路のやすらけきかな
東京 椎野銳子
山川のかはる旅ちに友としてみやこのまゝにてらすつきかけ
東京 伊東よし子
道すから四方のけしきをなかめつゝゆきゝもしけき旅の空かな
東京 宮三原てる子
いつしかに遠山のはの打ち過て行くてはるけきたひのそら哉
神奈川 森田八十子
つゐとめて見なれぬけしきなかめつゝなほかへりみる故里の空
伯耆 樋口つる子
いつのまに春やたちけん旅ころもたもとにかろくなひく風かな
羽後 三浦さわ子
はるのひの霞とゝもにたちいてゝ旅路にはなをみるそうれしき
福岡 中島たけ子
きみか代の旅路はいとゝ安らけく夢のうちにも越ゆる箱根路
福岡 中島よしみ子
朝にはそてのみなとをふな出して夕はめつろなた江のつき
羽後 佐藤かつ子

旅やかた越路の山をなかむれはかすみのおくにつきもやとれり
羽後 三浦みれを子
故里の山をへたつるかすみこそうれしきたひのうらみなりけれ
長野 山本直枝子
夜なく〱に旅寢のまくらかはれともむすへる夢はおなしふる里
長野 山本基子
故里をしのへは夢も結ひあへす八重くもへたつみちのくのたひ
長野 小泉みつじ子
うかりけるたびのやとりの波まくら思かさなる八重のうみさか
羽後 三浦ふさ子
咲きにほふ花にうかるゝ旅すらもかへる家路はうれしかりけり
東京 荒井幾久子
都路のいとも戀しき旅なれとゆめにもわすれぬ父母のおもかけ
東京 荒井あさ子
都いてあせのほそみちゆきくれて夕日のかけに月やとるらん
東京 荒井千代子
春の日のなかきをうみははるく〱と都をあとに旅立ちにけり
東京 荒井幸子
にはとりのつくるに夢をやふられて旅ちいそきてたちにける哉
尾張 後藤信子
やとからはとく認めて故里のはゝにしらせむたびのけしきを
東京 青木たま子
くさまくら野ゆき山ゆきはるく〱と月を都のかたみとはして
越後 五十嵐美代子
ゆきかひも心の儘にたやすくて旅路うからぬみよにそありける
伊豫 渡部信子
はるく〱と親に別れしたひゆきにはなの都もゝのうかりけり
名古屋 瀬木せき子
旅衣きつゝふりにしおいか身もなほ行さきはあらたなりけり

旅の庭

古里の山はあなたと聞しより旅のつかれもわすれつるかな
東京 牛山素子

たちかへり家なる母にかたらまし草ひきむすふたひのなか路を
肥後 秋吉輝尾子

いまたしと思ひし花やいろとりのさそふかまゝにいてにける哉
京都 坪内りき子

我宿の庭のさくらやいかならんたひしのはなを見るにつけても
丹波 大槻房野子

かたるへき友こそなけれあかこゝろ明石浦のたひれたのしも
薩摩 松原みれ子

見ぬ里やふるき名所たつねつゝゆく旅たのし日かすへぬれは
埼玉 柿沼福子

瀧の音あらいそうつ濱音かへてつかれたひれの夢やふるらん
下野 井上滋子

開け行く御代のめくみはふれくるまうしてふともしらぬ旅かな
攝津 鹽見文子

古さとににたる山みてなくさみつあすはいかなる道たとるらん
神戸 睦子

小なみや大津のうらを舟出して思ひそわたる木曾の懸けはし
近江 福永勝子

故さとにことつてやらん飛ふかりにいまあふさかの關を越ぬと
東京 石川叢子

思ふとちかたりあひつゝ海山のけしきなかむるたひそたのしき
神戸 小林竹子

立いてゝ幾日へぬらんこし山はそれともわかすのこるしらくも
東京 山田婦美子

たひれしてうれしきものは故郷の夢のねさめにはつかりのこゑ
東京 清水はるみ子

旅枕らふるさと人となつかしくかたると見しは夢にさりける
東京 篠田圓子

八千草の花さくのへをたとる身はうき旅としもおもはさりけり
東京 林艶子

なさけある宿のあるしのもてなしに旅れの憂をわすれはてけり
群馬 脇坂淑子

雪ふかきわかふる里をあとにしてあすは都のはなにあそはん
山形 加藤てる子

敷島のやまとにはあらぬ國ふりをまなふいもせの千代の初旅
長野 今井喜子

長閑なる旅のつかれもうちわすれ花に心をみたしつるかな
陸前 前田河千歳子

いくたひか地圖をひろけて眺むなりあす思はるゝ初旅ひの空
下野 井上倫子

みちのくに旅ゆくわれをなくさめてたはたをわたる雁の一つら
武藏 伊東磯子

空にみし雲をいつしかふみわけてまたも旅路の山をこゆらん
東京 椎野秀子

古里に歸りたいそくたひなから花にはこゝろしはしとゝむる
福井 平田さくら子

ひらけゆく御代の旅路は海山の千里のほかものとかなりけり
東京 三好珍子

春雨

天

大阪府和泉國泉北郡深井村 福原菫子

つはなぬくうなゐの聲もたえはてゝ
おとしづかにも春雨そふる

地

本郷區湯島天神町二丁目五番地　山口琴子

打なひくやなきのいとにつゆ見えて
かすむわしたのあめをしるかな

人

伊東よし子

うくひすのなくねのとけきはるの日の
こゝろもしらて雨のふるらん

甲

出雲　高橋依子

玉みづのをとしめやかにきこゆなり
よはのかすみや雨となるらん

東京　森政子

音もなく降ともわかぬはるさめに
いけのいろくつうかひ出けり

乙

神奈川　森田はな子

ふりくらすこの春さめに靑やきのおさきみとりのいろまさるらん

東京　金原玉城子

鈴菜さきむきふみとりのやまはたけかすみと見てはるさめのふる

埼玉　横田やな子

淺ちふのにははつれたにさひしきになほつれ〳〵とはるさめのふる

熊本　田代綾子

花見つゝやすらふそてにふりかゝるしつくのとけきはるのあめかな

丙

長野　小泉みつじ子

きのふ今日しつかにふれる春のあめおのれわかくさもえそめにけり

長野　山本直枝子

軒端よりしたゝる音もしらまゆみいとしつかなるはるのあめかな

長野　山本基子

まと近きいさゝむら竹なかりせはふるはるさめをいかて知らまし

羽後　三浦さわ子

はる雨のふるもいとはすまふ蝶の羽そておもけにゆきかえるみゆ

羽後　三浦みれを子

おほ空のいろにのやまをそめなすやふるはるさめのしわさなるらん

羽後　佐藤かつ子

花さそふめくみのつゆとおもほえははるのあめこそうれしかりけれ

東京　甲藤若子

袖ふりしこてふも陰にかくれけりすゝなにそゝくはるさめのそら

三河　榊原てる子

はるさめのうたけのまとひたのしくものとかにふくるのきの玉みつ

肥後・秋吉輝尾子

かくれ家にふる春のあめ草も木もめくみのつゆにみとりそへけり

伊豫　梯たけ子

家はとのこゑもしめりてわか宿ののきはしつかにはるさめのふる

但馬　田尻保代子

みすまるのたまかあらぬか靑柳のいともしつけくそゝくはるさめ

秋田　日野ちませ子

はる雨にぬれし乙女のこひころもひとしらぬまにそてしほるらむ

肥後　佐々小琴子

うるはしく香こほろゝさくらはなふるはるさめそいくすりなる

肥後　佐々有隣子

黄金色のくものなかゆく心地して菜のはなたどるはるさめのそら
東京 河田いし子

もえいづる野へのわかくさ春雨のふるたびことにいろまさりゆく
肥後 千々波楢子

もえいづるいろなつかしき若草のみどりふかめてはるさめのふる
三河 白井よし子

おしきかな春の一と日をふる雨によしのゝやまにぬるゝさくらぞ
東京 荒井満武子

咲きかゝる梅や色香ををしむらんぬれにぞぬれしけふのはるさめ
東京 荒井幾久子

春雨にしめりがちなるまとゐうち一としほさゆるうぐひすのこゑ
東京 荒井あさ子

庭もせの色香たへなる梅のはなちらすもなしゝはるの小さめよ
山口 村上操子

やなぎにも花にもいろをそへてふるあめこそはるのめぐみなりけれ
松山 上原〆ふ子

静にもふる春さめのおときけばはなもやなぎもおもはざりけり
東京 神戸すゑ子

つれ／＼にとほく聞ゆることのねもゆふぐれさびしはるのあめかな
東京 荒井千代子

夜もすがらふりくらしたる春雨はもゆるわかばのつゆとなりけり
東京 荒井幸子

すぎしとしありし都のことゞもをはるさめふりておもひいでつゝ
埼玉 柿沼福子

しめやかにふる春雨をよそにしてたのしくたどるふみのみちかな
東京 山本茂子

はなさかす雨とおもへばよもすがらきゝてうれしきのきのいとみづ
薩摩 松原みれ子

ほひめのはなの小そてもふりにけりこち吹く野へにながめせしまに
下野 井上滋子

かぞいろのくさきをめぐむしろあとにふるは涙かあめのしづけさ
東京 宮之原てる子

春さめのふるとしられど青柳のいとにおきけるつゆにこそしれ
東京 高留歡子

音もなくふるはるさめにあさまだきぬれてぞかへるやどのかられこ
東京 河合泉子

やま鳩のともよふ聲もうちしめりさくらがえだにはるさめのふる
秋田 古瀬とよ子

ともどちとつれ／＼草をひもときてはるのあまよのまとゐするかな
秋田 古瀬帷子

わがやどの椿はやしにひえどりのはなのつゆはむはるさめのころ
埼玉 横田秋子

遠山はかすむとみればとほやまはいよ／＼とほくはるさめのふる
熊本 田代魏子

なか／＼にのどけかりけり青柳のいとしめやかにふれるあめかな
越後 五十嵐美代子

かきならす箏の調へもうちしめりいとしづかなるはるのよのあめ
東京 林瑕子

春雨にひとりふみよむまどのへにおとものどけくちるつばきかな
下野 高橋幸子

やれにはのうめがかしめり鶯のいろねしめりてはるさめのふる
東京 林艶子

春さめのめぐみあまねしみどりなすのやまは日ごといろまさりゆく
信濃 伊藤道子

よはふかみとふひともなきやま郷にいともさびしくはるさめのふる
東京 岩谷梓子

梅か香もしめる軒端をわくらばにたゝくやあめのしづくなるらむ
東京 岩谷淺子

すがのねの長き春日にふる雨のかゝるのきはのおとのさびしさ
東京　篠田圓子

もえそめし垣根の小草いろそひてふるともわかすはるさめのふる
東京　清水はるみ子

ゆめさめてきけばしづくの音すなりよひのかすみやあめとなりけむ
東京　柏田靜子

きのふけふ庭にそゝくはるさめに野へのわかなもいろそへてけり
福井　平田そう子

やまぶきのつぼみゆたかに雨ふりてまどよりもるゝうぐひすの聲
上野　脇坂義子

はる雨の音しめやかに降り出てゝはなまつやどはのどけかりけり
陸前　阿部はつみ子

月姫のあやのとばりやとぢぬらんこよひさびしきはるさめのおと
東京　石川薫子

春雨のふる日は絶えてみちの邊のゆく手のやなぎうちけぶるなり
千葉　石井千代子

春さめやふけゆく夜半のしづかにてはかどるものはふみたどるみち
名古屋　瀬木せき子

おさな子も乳房はなれてねたる夜のまくらのどかにはるさめそふる
東京　青木たま子

つれづれと花まつころの長き日にこゝろしづけくはるさめのふる
播磨　原田ひで子

荒草のみどりのはゝとおもほへはふかきめぐみのはるのあめかな
東京　三好珍子

春雨のめぐみしなくは若くさのおひたつさまもあやふからまし
山形　加藤てる子

ほころぶもちるも同じ春雨のめぐみとおもひはふるそうしき
東京　山田靜子

野も山も緑ふかむるこのころはふるはるさめのめぐみなるらむ

吉野山はなにうかれし人ちりてばかげしづかにもはるのあめふる
神戸　小林竹子

いつしかと花なまたるゝ心よりふるはるさめもなつかしきかな
長野　今井[illegible]子

青柳の糸よりいとゞつたへるはふるとも見えぬはるのあめかな
陸前　前田河千年子

物思ふ軒端にちかきうめのはなしへゆふにとのなとしづかなる
下野　井上[illegible]子

いつよりかふり出しけむ春雨のおとにはたてずぬるゝそでかな
東京　山田婦美子

雲つゝみ峰のまつ風さよあらしいくよたびねのまくらへにきく
下野　高橋榮子

音をさへなにしのぶらんまきのとにふるともわかぬよはのはるさめ
下谷　椎[illegible]秀子

はるばるとたなびく衣の雲間よりかほりさそひて春さめぞふる
東京　松河ちよ子

二つみつほころびそめし梅の花に匂ふのきはにはるさめのふる
尾張　後藤のぶ子

朝げたくけふりとみれば賤が屋の軒のやなぎにはるさめのふる
攝津　駒井登[illegible]子

うちたるゝ柳の糸のいろそめておとものどかにはるさめのふる
近江　福永かつ子

上野山かすみこめたるはなかげにあまやどりするひともありけり
東京　牛山樂子

咲き初めし梅のにほひやちりぬらむこゝろしてふれ夜はのはるさめ
横須賀　上田雲子

旅びとの心もそらのしらるらむはなもひらけとはるさめのふる
京都　坪内りき子

はな鳥にはやる心をおしゝづめそらものどかにふれるはるさめ
攝津　鹽見文子

そほぬれてかへる乙女がこの中のよめなうつくしはるのあさあめ
上總　高石とよ子

降る毎にうれしかりけり待わぶるはなのひもとくはるのあめかも
丹波　大槻房野子

青柳の糸のしづくにしられけりふるとしもなきはるのむらさめ
神戸　しずの子

華族女學校教授井上頼圀先生撰

月夜櫻花を賞して

天

肥後國菊池郡隈府町　秋吉輝尾子

限もなく晴たる空に、のどかにてらす月影の、霞のひまの花のかげより、朧にうちかすみたるまゝ、もりいづる景色は、水莖にもはた言の葉にも、えつくさず、この夜のながめ、ただにやはと、みやびの友二人三人打つれ、そこともしらずあこがれいでぬ。げにや、しくものぞなき、春夜の、照もせずくもりもはてぬ月影に、ゆく方みせて、越路にいそぐ雁金の、霞の奥にきこゆるなど、いひしらずをかし。往來の人も、とだえていとしづかなり、なほゆきゆきて、隅田川のほとりにさまよへば、木末のそこはかとなく、雪かとばかり、うちかすみて、花のにほひ香、いざなふ風のしみじみと、さもここちよく、朧月のわかく、岸べをてらしてさながら、綿ぼうしかづける、花嫁のはぢらへるごとく、いまをさかりに咲みだれ、一入しろくなりまさりぬ、花はかすみか、はた雪か、流るは水の面にくもりなくうつらふさま、風情をましてここちよし、をりしもあれ、吹わたる風に二ひら三ひらちりくめり、あなかぐはしのさくら花、吾大和しまねにのみ咲いづれば、まことにゆかしや、まして月前の滿開は、朝川ににほふと、鈴屋大人のよみ出たまひしと、いづれなるらん夜といひ、晝といひわかちがたくてなん、此佳絶なるながめは、とこしなへにうむといふことのなからんを、いかでつたなき短筆には、賞詞を綴りえらるべきや、

地

神奈川縣小田原　森田花子

久方の大空より、木々の梢にかゝるうすがすみ、おほろげなる月の光りの、なほにほへる花にむせぶ風情、えもいはれず、獨なかむる身も共に、つゝまれて、この世の外の思をそする、あかず、たちまよふ木の下に、心もおなじ友垣の、とひ來しさへ、うれしく、共にこの花をふすまにて、この月かげに、今宵一夜やとりてましなといふもをかし、ことに吉野

櫻のいとのやう、玄たりし姿のやさしさには月もしばしは、たゝよひぬらむ。

人

熊本市東寺原町　田代艶子

人は花を見すてゝ、家路にいそぎ、鳥は明日をちぎりて、ねぐらにかへる、夕ぐれの空、おぐらうなりゆくに、月のまゆ、ほのかにかゝりて、花のかんばせの、にほひ出たる、いはん方なく、ゑんなり、名のみきく、月宮殿の、天つ乙女の、おもかげも、かくや、たぐひなき其色、ゆかしきかをり、朧月夜もおぼろならで、なか〳〵に、いさぎよき其風情、あはれ〳〵、ゆくかりも、翼をとゞむべく、歌人も筆をやなげん、かすめる月も、爲めに光を、そひぬべうおぼゆるは、げにこそ、花の中の花、皇國の花の櫻ともいふべけれ。

東京　石川おほろ子

窓を開きて見渡せば夜に深々と更けわたり、春月朦朧として空に懸り風の音も靜かにて、默しがたきけしきなるに心うきたち、夜半の櫻をめでばやと、程近き某公園にたどりゆきぬ、此處彼處目の及ぶ極り眺めやれば、今を盛りの櫻花、さながら白雪の積りしがごと、にてもなく眞白にのみ、木の間をもれてさす月に、花はます〳〵白く、其景色の面白さ例はんに物もなく、雪の曙し物かに、げに風情ある眺めなり、されば自と心も靜まり來て何となく、清げなる思ひせまり、あたりの靜けさ、さながら仙居にあるの思せられぬ、彼處には、神殿神さびて、鐘えまし、其筋の櫻花滿紅にて夜目にもそれとけじめつき月の光に映じてはさながら霰の如く、誠に花は櫻木人は河とやらけにことわりの言ぞかし、櫻こそ眞花の王女なれ、まこと日の本の花ぞかし月の夜人靜かなる時にこそ眞花の心ならめ。

東京　松川ちよ子

月の夜こそ春にうれしけれ。見渡すかぎり雲か雪かとあやまたるゝばかり滿の花のさきみちたるに、霞こめたる月影のおぼろ〳〵さしいでたる、言はん方なしや。はし近うゐざりて眺むるに、月の匂ひか花の光りかおぼつかなう、ちりもはじめず、さきも殘らで、うら〳〵と匂ひわたりたる、いみじうのどけゝ、まことに、唯、絵の中にて絲を眺むるやうおぼゆ。あかぬ眺めに、めかれせずうちまもる程に、たが心のすさびにや、花の雲間をもれて、かすかに、琴の音の聞えたる、一しほ心にくくて、気も消えつべくなむ。げにも春宵の一刻は、千金の價値あり、と、古より人々にめでゝはやさるゝも、ことわりぞかし。あはれ花の中の花、世にもたぐひなくひいでたる花、其ゆかしさ心、きよらかなる姿、世の女子もかくこそあらまほしうなむ。

兵庫　原田ひで子

彌生の空もいとのどかに、照る月かげのおぼろ〳〵なるに、いささか心なぐさめんと思ひたちかれ打つどひ、日山公園にとぞ出で立ちぬ。山櫻の、紅さむ、花しげゝ咲たる比ふべき物もなく、浮世の物とも思はれざるに、見渡す限り目もあやに白雲のたな引く如く、ひなの春な名ごりなく浮べけり、なつかしさに心もうかれ〳〵て、花の下かげさまよへる時しも衣冠正しき神主一人花の木楷ななめて立てる恰も畫を見るやうにていとをかし。神殿に花のひま〳〵ほのみえて神々しきに、颯と吹き來る一嵐に花の

吹雪の鳥居のもと積もりたるなど筆も言葉も及ばずなむ。

折しも霞みにまよふ小鳥の、東の方になき渡るに、ふと心づきてかへり見れば、掛保の川瀬の風なぎて、徐ろに、こぎのぼる川舟の影淡く、片山寺の鐘の音の、聞えて、またゝく星の花空にさきかはりぬ。

千葉　石井千代子

兆鷲のすむてふ西比利亞の天、虎の吼ゆてふ雞の林は、未だ積れる雪紺へる氷も消えやらで、聯隊旗に従ひ給へる益兆猛夫の君たちは、如何に艱み給ふらん、されば、女子の身とていかでかは、あたゝかに夢を結ばんやはと、頻に心の駒に鞭を加へつゝ、文の林を辿りしが、いと親しき友どちより、○○の山々霞の奥は知られども、見ゆるかぎりは櫻なりけり、蓋はさわがしければ夕刻より出でたまへなど、いひおこされたれば、夜半に嵐の吹かぬものかはと、春風になん誘はれて、遂に浮れいでぬ、途中は車よりいと、友の君と袖ふりはへてまかでしに、同じ心の人もさはにし、行きつける頃は、既や薄ぐらく夜目にも知るき、いとさはの櫻木は、指言ひ合せたらんやうに、今まさに花さかりにて霞か雲か將た雪か、たなびけるにも髣髴り、又一本二本の打離れしが常磐木の中にあるは、さながら未だ打のこれる雪かとも見まがへられて、爽の原にものしたまへる赳々たる武夫の君たちを偲ばれてなむ。且又打集へる人々は、此所彼所に席占めて、酒に花にかたみに浮れたまひてあるは歌ひ狂じ、あるは笑ひさゞめくなど、思ふにまして、いと賑ひければ、遂に共に浮かれて時をうつせしを、十六夜の月高くあがれるころ、風亦漸々吹きいでゝ夜を縫ふ花の香のいや高く、又時ならぬ雪かとも思はるゝは、倏にして滿地歩をうつすべきの所もなきにいたりぬ、されば、『益兆雄の日本心に似たる哉、雪と散りぬる山櫻花』とものして、とある枝に付けて歸りぬ。

神戸　賤　女

おぼろに、霞むならひの、月かげ、今宵は、いと清う、すみ渡りたるが、今しも半開なる、櫻の、枝にかゝりたる、花か月か、月か櫻か、花の艶なるか、月の美はしきか、實に天然の美景、自然の妙趣、何物か、この上に出でんや、詩人と筆を投ぐべく、畫工も啞然たるべし、己と友と亦、此最中の一物と、なりて、しばしは、ものも覺えず、たゞ茫然たるのみ、折しも一陣の微風、除ろに來りて、面を打つに驚き、我に返れば、月は半面を浮雲に沒し、花は首をたれて、我等を笑へるに似たり、忽ちにして雲散ずれば明光えの如く、花も亦喜ぶが如し、あはれ美なる哉美なるかな、こよひは、いつ迄もかくてあらなん、などささやくに、ふと思ひ遣らるゝは、遠征中の我同胞の身の上、などてか、月花を弄びて、妄りに光陰を過すべけんや、と互に語り合ひて、俄かに此景をあとにして歸路につきぬ。

熊本　田代比登子

彌生の、月のある夜、おのれは、文よみつかれて、つれ〲なるまゝに窓うちひらきながむるに、美しき十六夜の月は、いましも雲間を出で庭面の糸櫻の目もあやに光みだれたり、薄紅の、花は、高き香を、我が窓へと送りて、こゝちよきことはむ方なし、しばし我を忘れて、美しき優しき匂かき、月と花とにみとれぬ、あはれかばかり美しき花も、いつか無情の嵐に散るらんとおもへばはかなき心地もすれど、また咲きかへる春の頼みもあれば、などかさのみは悲まむ、さるにつけても、悲しきは我が身にこそ、ふりつもる、年ごとに、なに事をもなしえで、むなしく月日をすごすこと、實に、はづかしくも悔くも云ひ出む言の葉もなし、いざや今よりの後はいそしみて勉めはげまん、とゆめぢを、たどるこゝちして、我れを忘れ居る、をりからふと月影の、黒雲に、覆はれ、やみになりしに、我れにかへれば、いたくよもふけぬらし、あたり、靜まり返りて、音るへきこえず、折しも、遠山寺の鐘の音に、送られて、いづちゆくらん雁がねの、二聲、三こえ。

ふるさとにゆくかりの一こえは
化になこりをおしむらん

和泉　稲原薫子

夜も見よと紅葉を照らす限なき光こそ、秋の夕には及ばざらめ。照りもせず曇りもはてぬ此朧月のもとに、櫻花をながむるこそ、中々にお

かぬ心地のせらるれ。雲か霞かとうたがふ許りの花も、月影にねんにうるはしう、言ふはかりなく、色香まさりて見ゆ。げにむかしより貴き賤しき隔なく、人の心を慰め、うき思ひを拂ひくるゝは、此月の匂ひよ。此花の姿なるよ、などゝ獨ごてば花の一ひらこゝろありげに、たもとに散りくるは、あはれふかく言ひ知らすなかしうてなん。

岩手　後藤てる子

埋火かき起し、例のごとく文机にむかひて居しが、ふと丸窓に月影さし入りたれば、やがておばしまづたひ庭に下り立ちながむるに、今宵は三五夜の月なり、月夜としいへば、四季のわかちなく、めづらしきものにぞあなる、さはあれど、今宵の月のみはことさらに空のはれ渡りたるに、きら〳〵しうてりかゞやき柴戸のほとり櫻花のこきうすきまを盛りに咲きほこりて人まちがほなる樣、冬の夜枯木に雪のつもれるごとくにて、其景色また何にかたとへん方もなかりき、さればこそ古歌に「みよしのゝ山邊に咲ける櫻花ゆきかとのみぞあやまたれけろ」と詠めりしも、げにむべなれや、またこの花西の國にはまれにして御國にのみ雲井の邊りをはじめ、賤が伏家の軒ちかうさへ咲きまことに美はしきが故に外つ國人より愛でたふとばるゝなり我が國民の古よりかはらぬ大和心は一のまごゝろにして、いともうるはしう櫻花にひとしき是によりみ國のはねら一しほ类をそへ光り輝くめり、古人の歌に「敷島の大和心を人とはゞ朝日ににほふ山櫻花」いとも優に、しかも勇ましうこそ詠ませ給へしが、あゝかくも櫻花は世人にもてはやされ、なほまた西洋にまでも名をあらはし、いともめで賞さるゝなり、あはれ我が國民たるものこの後ともます〳〵大和心を失はず、この花にならひ外つ國人に見おとされぬやう心がけざらむやは。

熊本　田代綾子

ほのしくものぞなきと、古人のめでられつる、月のかげ、山の端近う、ほのめけば、さらぬだに、霞める空の、何となう心も、うき立まゝに、近きやしろの、夜櫻見にものせんとて、友がきそゝのかし、まうでぬ、まづ、神の御前に、ぬかづき、打つれて、花の、もとに、ゆきみれば、今を盛りと、咲きたるに、月の光りの、ざしそひて、艶なること、いはん方なし、げに繪なりとも、かくはあるまじと、かたみに、あかぬながめを、めではやしつゝ、見あぐる面に、一ひら、二ひら、ちりかゝるも、いとあはれなりかく、月と、花とを、見れば、何れを、何れとも、定めかたけれど、この、やまと心をあらはしつる、櫻の花には、いかでか、まさるべき、あな、いさぎよき、櫻かな、月にもはぢぬ、花のかんばせに、かぐはしき名を、とどめ、つゝやがては、散りなんを、おもへば、しばしのながめなりけりと、友も、おのれも、夜のふくるさへ、しらで、たゝずむに、いつしか、月の光りも、小くらうなりぬれば、今はとて、心のこして、家路たつきぬ。

肥後　佐々有鄰子

春の夜のやみはあやなしうめのはないろこそみえれかやはかくるゝとの歌は梅によれる古歌なり、今宵の空は、櫻花爛熳たる、匂ひゆかしき、菊池神社の神苑にて、宮司の夫人菊池經子の君のまれきたまふにより、たれかれ二人三人、夕月かげに馬車にのりていでたちぬ、隈府の町にいたれば、日はなごりなく暮はてけり、大鳥居のみとより、神社にいたる所の馬道は、櫻の大株に蔽はれ、望月の影も朧にみえていと懷かし、夫人の御館は、奥まりたる櫻花の下かげ、うきをわするゝ御すまゐなるに、東方の鞍嶽より國原かけてさしいづる、十五夜の光に櫻のにほひあひたる、ねもいへぬ眺望なり、なりから夫人は、薩摩琵琶といふものを取いでゝ、平家をしらべたまふ、音聲いとみやびに、花のにほひいとどうるはしく、月の影は霞も、はれてまさやかにみえける、なりから籠の鳥の二聲三聲囀るは、今宵の興をそへかほなるもをかしや。

在松山　泡沫女

おぼろに香ふ夕月夜、庭の櫻の咲きみだれ吹きくる風も香ひ床しう、かなりくるにそゞろあこがれつゝ、常には恐ろしと思ひし築山をも打過ぎ、池のほとりの櫻が許に來りぬ、白雲の如き櫻花さながら佐保姫のおりなす錦かとあやまたれ、げに日出たくぞ咲き揃ひぬ、明日にもなれば盛も過ぎなむとあやぶまれて眺むるに、月の光や花に入りけむ花の匂ひや月に入りけむ、あやしともあやし、月はいよ〳〵匂ひ、花は

いよ〳〵光をはなつ、此眺め誰にか語らむ去年の今夜は此櫻が許に我が友とちとりかはして、月の光に櫻花をめでにしものを、其時友はかく云ひぬ、我は櫻の如く潔きよく散らまほしと、其の言の葉の今頃友の身の上に見むとは、思はざりしを今暫玉の緒の絶えざりせば、此月此花を共に眺めて、嬉しからまし、やさしき友の面影さこそ胸に浮びて、思はず落す涙の雫、いとゞしげしや、我が心哀れとみしかあらぬか櫻花、二ヒラ三ヒラ袖の上に……あはれ今夜しもなつかしの友よ、あはれ此夜吹く風寒き西山の奥城の下に、姥櫻をやめで給ふらむか、此月、我が友の御墓あたりを月の光ば照らせらるゝの、

春季運動會の記

小石川區久堅町七四　松川　ちよ子

人

指折りかぞへつゝまちにまちし運動會も、けふになん。紫匂ふ飾旗の、ひら〳〵と、淺緑なる大空に、打ち靡ける、さては、紅白の幕の、はるばると、張り亘されたる、一きは心も浮き立つぞかし。いづれも我こそはと思へるか、つゝみもあへず、自ら面にあらはるゝぞをかしき。

はや時の鐘もなりたれば、いざとて師の君たちの審判のもとに、開かれつ。我等のなせしは、抽籤競爭とかいへるなりき。いざとなりて、其場にのぞめば、そゞろ心騒ぎせられてなん。やがて聞ゆる合圖の音に、心も空に走り出しつ、手桶片手に附ふもの、火桶の重さに困じはてたるあれば、硯をもちて來たり顔に走るあり、帶あり、煙草盆あり、金盥あり、其滑稽さ思はずふきもいだしつべくなむ。幸にも我はふさはしきものなりければ、いと早く、嬉しさたとへんかたなし。

空にのぼるや、まりの音、烈しきかけごゑ、我劣らじときそひ走るさま、勇ましともいさましや、面白さに時の移るもおぼえず、かたみに打ち興じつゝ過しぬ。

あはれ此日の運動會ほど、世に愉快なるはなかりき其聲、其有樣、今もなほ耳目に殘れる如き心地してなん。

肥後　佐々有隣子

三月六日は日曜なれば、高等女學校の職員のしりへにしたがひ某の運動會場にいたりつきぬ。首席の校長は受持の教員に、女生徒を學級每にひきつれて、今日の遊技の種類、品々を渡したり、さて演舌には日露事件も女流といへども、傍觀すべき時節にあらねば、古の烈女勇婦におとらず、大日本帝國は皇統連綿として吾輩の臣民まで、神代よりの臣民なれば、鎌倉右大臣の歌のごとく、海はあせなん世なれども、君に二心、わがあらめやも、といふ意をこゝろとして、兄弟叔姪の忠義をはげましてよ云々と演られたり、終りて各級の教員より生徒に令して、遊技をはじめらる、第一は、アレヒなり、長幼にしたがひ、木製もあり

競しあり、その戦のさまに、實に目さましかりき、次には旗とりの競走なり是もくはつばつに見受けられし、其他種々の運動ありて、午後四時すぎて閉散せられたる、かへるさには、賞品を各級の生徒おもひおもひにかづきて、勢いさましく見えつるも、をりからいといとなづかしくこそ。

福岡　中島たけ子

時はこれ彌生の末つかた、おきての禁しことはてゝ、遊びの子らが心もあがり氣ものびたる此頃、庭には山櫻の吹き匂ふあり、はた青柳の枝しゆたかに百鳥のさえづる樣さへいとのどかなる春の日を撰みて我校の運動會は催されぬ。

かくて運動場の準備裝飾、さては來賓の接待等に至るまでいと行き渡りて一つの遺憾だになし、やがて合圖の鐘に六百有餘の女兒は紅白のたすきかいがいしくかいとりて樹の東西に打並びぬ、夫より定めの順序により或は行進舞踏の優美なるあり或は競走競技の勇しきありて、見る人も行かふものもいと愉快げに見ゆ、中にも一年は人々の目をひきしは上級選拔生の舞踏にぞありける、嚠喨なる音樂の音につれて手をみ足つきいと輕やかに打舞ふ樣はさながら天女の舞もかくやと空行く雲も止めつべうなり、さても勇しかりしは擔架競爭にして赤十字看護婦のさまに裝ひて負傷者に繃帶を施し擔架にのせて野戰病院にかつぎ行くものなり其働きざまいとかいがいしかりき、終りに薙刀体操を利用して娘子軍を編成したるが始めのほどはいとおごそかに初段の形式より初めしがやがて合圖の笛に敵味方入り亂れて太刀を合せしのぎをけづりて戰正に酣ならんとする時東西に殘り居たる女武者はかねて用意やしたりけん手に手に紅白の紙の細かに切りたるを取り互に打つけつゝ味方の軍をたすけ敵兵目かけて進み行くさまの雄々しさながら源平の實戰をまのあたり見る心地してそのかみ蒙古十萬の軍勢博多灣に襲來せし時、老若男女をこぞりて打むかひしことは彼等が祖先の歷史談として常に聞かせられたるが、今にも外寇の來るあらば女ながらも御國のためにはかくもめざましき働きをなすならんといと頼母しゝ。

すべて昨年の秋季に比して今年の遊戲は皆雄々しき軍などにかたどりしものゝ多かりしはおのづから世の流潮につれて女ながらも日頃養へる大和魂の發揮せるなるべく思はれていづれも皆優雅に失せず柔弱に流れず、しかも体育の本末を失はずして女に似つかはしく取り行はれたるは皆人々の賞讃せる處なり、かくて全く終りをつげたるは午後五時頃なりき、いさゝか今日のあらましをかくは記しぬ。

肥後　秋吉輝尾子

三月なかばのけふの日は、學の庭の運動を催されぬ、まちしさくらもさきみだれ吹來風さむからず、遊糸のもゆる野末の空にこゑものどに千代とことほぐ、雲雀もゆかしや、用意もそこゝにして、學校の門にいれば、男子も女子もかひがひしき姿、なににたとへん詞もなし、高等校は午前六時より宇土驛の住吉濱邊へ滊車に乘てゆるさいでぬ、またたくひまに濱邊へ着きしが、右は住吉神社左は九州鐵道の線路なり向ふには海原へだてゝはるかに聳ゆるは、肥前の溫泉嶽かなたよりよせくる男浪女波にてる日影黃金のごとし、小舟のかずかずそこゝにうかびていとをかし、神社の北面には風流島あり、こはいとおもしろきかたちなればかく名づけしとぞ、松のかげよりふきわたる春風いとこゝちよし、こゝにて、さまざまの故事など語かはし、正午時になりぬれば、すこし小高き所にのぼりて、晝飯をくう、今日は別て香ばしくおぼえぬ、後午は汐ひきたればおり立て師の君たちとあそびぬ、始てのものも多ければ、こゝかしこに面白き貝ども砂中にあるが、嬉しさに道なき所にふみまよひし人もあり、拾へどつきぬたのしみはいはん詞もなし、師の君の傘をひろげたまひて、是に入れなどしこそ、日頃のうさをもうちわすれ、つひに長き春日の西山にうすつくもしらざりき、岸根より旗ふりて師の君のまねきたまひしに、歸校の事はしられぬ、名殘をしくも停車場にかへりつくころ日は入りはてぬ、月いづるころとなりぬれば、汐みちて此涯をてりわたる朧月いとゆかし、浪まに浮ぶ風流島、松の梢にあらはれていとをかし、家にかへりてかくものしぬ

樋口つる子

東風吹く吹きて咲きも揃はず散りも初めぬ今日此頃の運動散歩の好時節何のなやなめひそんで居られましよお貴娘には何のおさわりもあらせられざるや早々御承知の通り明後日は我校運動場にて大運動會を催さるゝ筈にて殊に今度は運動會も皆新奇の遊なれば格別に面白き事と思ひます中には愉快な日と露との兩軍に別れて假設の戰爭も有り其れにふしよな英な看護にあたる赤十字社も有るとの事是又一しほの愉快と今より樂み夜の目もあはずさて申迄もなく運動會は體育を快樂にし買ひ得らるゝ事に有りますれば相互一擧兩得の業でありますれば學びの餘暇うつを散するには此上も無き好事と存ます先度の土曜日にも池田校長殿の話にも體育の惰者は將來の敗將ともなされし故一層身體の鍛ひを勵み健康の上にも健全に有之たきのぞましけれ然てあなたには體育には充分に御熱心のお方におはしますこと故ふるつて御出會とは確に信じて居りますれどもほのかに聞けば此度は心ずの差支が有るとの噂これは必ず虚傳とは思ひますがな心如何におはすや御身だにおさわりもあらせられずば萬障御繰合せ御來會なされたく又仕立物の手傳にはあがります程に必ず〳〵御來會成被度くれ〴〵もおすゝめもなしまする明後日は極東明にあなたの村を廻りなさそいもおすゆゑ御仕度の上まち居り被下度今日より三日間は櫻の花もきつとにぎやかにまちて居しますまずは亂がきにておさそいまでいずれお目もじの上積る物語りをいたします濱代樣にも武一樣にも厚く宜敷御傳へ被下度いそぐはたしの身の新造を連れてあがります

歌にまれ詞にまれチニナハの整はざるは譬へば拙き手にして縫ひたる衣の如し其言葉は如何にめでたきも綾錦なりとも縫へる樣の惡しからむは見苦しからずや

短文

無題投稿歡迎

雨の日

東京市京橋區木挽町　竹田靜子

雨の一日をわびしく、今日もまた訪ふ人もなき窓のもとにおもひ暮すらんかと、妾は思ひに堪えかねて、痛き胸を押へつゝ庭の面を眺めやりぬ。ポツリ〳〵またポツリ、軒端を回ぐる幾點滴、春まだ遲き我が庭の木立がくれの雫と共に和して、果敢なき世の春を、恨むが如く悲むが如し。あはれ人生の春……嗚呼人間の榮華……思ひ浮ぶる一刹那、可愛らしい胡蝶一ツ、何處の花に追ひたてられてか、雨にぬれて羽根も重げに、ひらりひらり。

畑

大分縣大分町　立木かず子

畑、妾は殊に田家の畑を愛す、御覽なさい、夕暮近き山里の賤が伏家のあたり、夢の如き薄靄フワリと棚引きて、入相の鐘何處よりともなく響き渡り、森にいそぐ鳥のかげ、二ッ三ッ四ッ見らるゝ、時、有るか無きかに、絶えては續き、續きては絶え、新月には

ふ山の端さして、一條二條長閑にたちのぼる炊烟、まあどんなにかめでたりませうか。思ひなさい、其處に〳〵平和あり又た慰籍もあることを。

菫　　東京市麹町區　藤井はる子

昨日は愛らしき菫一本御おくり下され有がたく御禮申上候、慰む友とては侍らぬみの、いかばかりかうれしうなつかしく早そくに花籠に移し入れ、文机のそば近うおきはべりぬ、さるに何となう打ちしほれ、色も青ざめ眼もうるほふに、いと心を痛めいろ〳〵と慰め侍りしところ、今日はいたく馴れ〳〵、心おきなう無邪氣なる顔ふりあげて、面白き野べの話くさ〳〵遊くる由もなくぞ侍る、御よろこび下され度候。

こよなき友を得て妾も今は、霞たなびく野べに出、花の下かげ胡蝶と戯むるゝ心地になりはべりぬ。かして。

わはれ琴のぬし　　東京市麹町區三　石川薫子

良き月の庭垣根ごしに琴の音をきけば誰しも彈く人の見たき心地のする者で有る、或夏の事一しきり夕立すぎて青葉に綠の玉がゆらいで居る頃、妾は散歩がてら何處と當もなく出かけたので有た、トある黒門の家をすぎ樣として、端なく琴の音を聞た、糸につれ歌出す聲は、聞く人の血をも沸騰させる樣な氣持がしてしばし其處に立ずくんで居た、やがて調も絡えた、が尙ほ餘音は耳に殘て居る、如何なる人のすさびかと思へば懷敷、そなたにのみ心ひかれて、去りゑえやらず、いかで其の人の影も見たく、一人、夕立の名殘の露にぬれて、停ずむこと幾時ぞ。

池末きみ子

うらゝかなる日かげののとけさに裏戸より畦つけさに立ち出づればむら消ゆの雪間は苦菜の芽うあれたる山の端はうすく霞めるなとそもいはぬながめなるに恍惚たるおりしもうらわかき鶯の一聲また二聲おさなこのとり〳〵なるとのかたりに母君もうち笑ませたまえ皆々此天眞爛熳のこゝろに化せられぬ

話ときれし折ふと手かざせる火鉢さしのそけはこそいかに埋火何時つきにけむ皆しろし

おもしろき者　　信濃　今井喜子

新玉の年の始めの遊び事何れかおかしからぬ事やあろさろが中に羽根つき雪人形造るなといと捨てかたきに一きは優りておもしろきはへだてなき友垣七八名打ち集ひ歌留多遊びの競爭こそ實におかしけれ始めのほどは互に控へがちなれども源平てふ二組に分れ優劣を爭ふ頃皆々ひろひ得て殘るは僅かに三四葉ともなりぬればすはやこゝ

一戰にて勝敗の分るゝぞいで〳〵とて鳥瞰して讀者の聲に耳傾むくればはや判者は墨白粉など手にして待つはものすごきばかりなりこれやこの聲諸共に知るも知らぬとも敵者の一葉を得て早勝利は我者いつしか敗者の方には墨白粉などあらはれ互に打ながめつゝ笑ひさゞめき勝者の心地よげに打興ずるこそ實に〳〵云ひしらず面白けれされどこは余りに下れる遊びにや忽ちあきてふものゝ來れども月に己が好める雜誌に文歌など投じて此月は如何又も擯もれとやならんいと心もとなやと打ち傾かるゝは苦しき者の猶ほ云ひがたきふしのこもりて千年百年打續くともこれのみは變ることあらじ實に一生捨てがたきは此遊びにこそ

短歌

亡友を偲びて

行春を君が繪姿薄うなりぬ繪にある如き君が繪姿　本郷　桑山はる子

戰の歌なまぐさき此の春よ平和の神の霞み隱ましぬ　京橋　城内いと子

曙の海原かすむ霞のうみ春のどかにもいくさ舟みゆ　牛込　青山石子

梅咲ぬ世は戰の噂にてやめる我のみ香をほしいまゝ　廣島　安藤きく子

過去は皆戀の涙にくちよかし年新たなりいざ働かむ　豊後　永井梅子

山家梅

鶯の外に又とふ人もなし梅がかふかき山のいほりは　周防　上田いそよ子

此頃はのきばの梅も薫る也とふ友もなき山家乍らに　肥後　徳永萬壽子

征露從軍の徳永省二を祝ひて

梓弓ひきかへさじと身を捨て君の威棱をよに輝かせ　同　徳永多瑠子

美し我も男子にあるならば潔よき名を共にあげなん　同　徳永廣子

征露從軍の第五高等學校助教授佐々豐登を祝ひて

君のため兼て磨きし眞心をよに輝せますらをなれば　肥後　佐々小琴子

朝とりの旭の御旗輝きて國の光りぞよにてりわたる　肥後　佐々有鄰子

國たみは老も若きも勇しく戰の門出いはふこゑこゑ　京都府師範學校　鈴木きく子

野邊懷舊

たもと列ねてすぐる年　花にほたるにきし野べは
今もにしきをよそほへど　めでにし妹は早なくて　同

白百合

涼しくいでし三日月の　影はこ立に、かくろいて
しげみに匂ふ白ゆりの　花のかのみぞ袖にしむ　本郷區森川町一番地　青木多滿子

柳

春の日かげになよ〳〵と　糸よりかけて白つゆを
玉にもぬけるあをやぎの　風になびくぞお面白き



◎兩内親王御近狀

目下小田原の御用邸に御避寒中の常宮、周宮兩殿下の御近狀を承はるがまゝ記し奉らむに

◎御健康　去る一月十日小田原に成らせられしより殊の外御健康に渡らせられ毎朝七時の御目覺め夜間は十時の御格子なり（十時後も御勉學あそばされたき御意あれど御健康上且つは近侍の者共の上をも思召されて斯くは定め玉へるなり）御日課として御治定の學科を御研鑽遊ばさるゝは勿論、御室内外の御運動をも怠らせ玉はず時には器械體操或は鞦韆等の御慰みもあり又折々御用邸内の天主臺址に御上りありて御二方互に御競走の御運動を試み玉ふ事もありとぞ御姉君常宮殿下の御體量は十四貫餘　妹　君周宮殿下は十三貫五百目もあらせらるゝと申す

◎御修學　目下兩殿下毎週御修學の時間と御科目とを承はるに

時間	學科	教授
一週日二時間	漢文	秋山四郎
同　同	國文、習字	坂正臣
同　同	修身、作文、歷史、文法	下田歌子
同　六時間	地理、算術	堀江義子
同　二時間	圖畫	野口小蘋
同　四時間	佛語	三田守眞
同　二時間	理化	佐野安
同　四時間	音樂	細所辨太郎

此の外に佐々木伯爵夫人加賀美夫人（佐々木伯令孃）より裁縫、編物を始め炊事御料理の御稽古までをもあそばされ少しも御倦怠の御氣色なしとぞ

◎御聰明　御兩方とも御聰明にましますは今更申上ぐるまでもなけれど目下時局の事共を御承知ありて御國と外國との關係に就き御物語あらせらるゝ折もありとか

◎國風と御成り　兩殿下は和歌を嗜ませ玉ひ日々數首づゝ詠ぜさせ玉ひ坂正臣氏へ拜見仰付られ時々

兩陛下の御覽に供へ玉ふこともあり又近き頃よりは御用邸附近の小峰の梅も咲き初むべければとて日々に之をば待たせ給ふ其の御意の御詠も少からずと申す

○三殿下の御勇武

勇武絶倫に渡らせ給ふ大元師陛下上にあらせ給へば金枝玉葉の各宮殿下が夙に軍國の事に御身を委ね給ふも亦當然なるが其中海軍將校の任に在らせらるゝ方畏くも東宮殿下を除き奉りて四柱あり曰く少將有栖川宮威仁親王殿下曰く中佐東伏見宮依仁親王殿下曰く少佐山階宮菊麿王殿下曰く少佐華頂宮博恭王殿下是なり事情に通ぜざる者は各殿下の將官たり佐官たり尉官たるは所謂名譽將校にして總ての御勤務も他の相當官より大いに御猶豫あらせらるべしなど想像し參らする者なきにあらねど其は大なる僻事なり各殿下御服務の模様は他の將校と更に異なる所なきのみか皆嚴かなる御課程を踏ませられ多年の御研鑽を積みて漸く現任に進ませ給ひたるものなれば學術上同列將校等の各殿下の訓へを受くる事敢て珍らしとせず恁くて又御服務中は其上長官に對して相當の尊敬を拂はせ給ふ事少しも他の同列將校等と異る處なく下僚の兵員に臨ませらるゝにも御官職以上の敬禮は受け給はずとかや又各殿下の勇壯豁達に渡らせらるゝは今更事新しく申すまでもなけれど去九日我聯合艦隊の大擧して旅順口を衝きて奇捷を制したるは今や中外の均しく具瞻する處なり此役東伏見宮殿下は千歳艦に在らせ給ひ華頂宮殿下は三笠艦の分隊長として山階宮殿下は八雲艦に座乘せられて孰れも御勇戰ありしが硝烟彈雨の中に立たせ給へる東伏見宮殿下の御動作は極めて愉快に華頂宮殿下の御動作は極めて沈着に山階宮殿下の御動作は極めて熱心に見受け奉り苟且にも御任務を忽にし給ふが如き御振舞なかりしより艦員の總ては之に勵まされて一層士氣を皷舞したり就中華頂宮殿下には艦艇の十二吋砲を受持れ發射毎に必ず正鵠を誤らざりしかば戰鬪休止の後艦長より特に褒辭を呈したりと云へり御

勇武の程察し奉るも恐れ多しといふべし

○珍味を卻く

（北白川宮殿下と井上伯）

井上馨伯監督の下にある麻布の自修舍は北白川宮輝久王殿下及び二荒伯、上野伯を始め毛利家、三井家等の子弟二十餘名を收容し學問品行共に秀拔の教師を置きて日夜切磋勵精せしめ朝夕の起臥、動作一々嚴肅の規律ありて毫も他の弊習に感染せしめざるは云ふ迄も無く金枝玉葉の御若君と一平民の子弟とに區別なく食料、衣服悉く勤儉尚武の主義に基きつゝ質素を旨とし舍員日々の雜用の如きも一個月二圓內外に過ぎざるのみならず其遣ひ方さへ總べて帳面に記入せしめて伯親しく檢閱し若し過分の費消もあらば受け持ち教師に命じて嚴しく取り質さしむるほどなれば舍員が外に其々通學して雨雪に逢ふことあるも成るべく徒歩を專らとせしめ居れり然るに今や日露の外交遂に斷絕し我が國民が擧つて義勇公に報せざるべからざる秋となりしかば伯は數日前自の子弟を會し諄々として邦家に傾盡するの途を說き且つ「自分は家人とゝもに今後大に勤儉尚武の主義を守り鹽引の鮭を口にする外決して珍味膏肉を膳に上せざるべし故に卿等も此の精神を容れ質素を旨として切磋勵精し以て國恩に報ひらるべし」と告げ自今同舍食費の二割方を減少せしめたりと

○討露軍歌（稲島陸軍少將作歌）

世界に名高き日本國　旭に輝く日の御旗
皇統連綿大君の　臣子は今や五千萬
仁義を以て建てし國　忠勇勝りし國の民
之に反する敵國の　其有樣は皆知らん
詐僞りを常として　他國の領地を掠め取り
告なき家を燒拂ひ　罪なき人を鏖殺し
逃ろ婦女子を辱しめ　乳に泣く小供を刺殺し
兇惡暴戾神人の　共に赦さぬスラヴ人
國は廣きも荒野原　人は多きも烏合勢
一億半餘の人口も　六十有餘の異人種ぞ
直隸平野の戰ひに　進み兼たる卑怯者

歴史に名を得し哥薩克も
旭に解くる雪氷
イザ起て戰へ我男兒
仁義の師に敵はなし
旅順、哈爾賓蹂み破り
旭の御旗を飜へし
森の畔りに追窮めて
普く宇内に宣揚し

今は昔の夢なるぞ
消えてぞ失せし露西亞兵
駒さへ勇む春立てり
愉快極まる此の戰
烏拉の山の絶頂に
スラヴを舊都莫斯科の
我大君の御威稜を
世界の平和を樂まん

○征露軍歌（横井編修作）

第一

膺てや懲らせやロシヤ國を
正理公法攪き亂す
信なく義なく昔より
同洲同種の諸國にも
暴虐非道豺狼の
滿州三省併呑し
平和を貴ぶ我國の
さてこそ皇師は動くなれ

ロシヤは平和の讐敵ぞ
ロシヤは道義の讐敵ぞ
他國を取るを國是とし
蛇蝎の如くに忌まれ居る
飽くを知らざる貪慾は
韓をも蠶食せんとせり
爭でか之を坐視すべき
膺てや懲らせやロシヤ國を

第二

遼東還附は誰が業ぞ
其舌未だ乾かぬに
撤兵條約棚にあげ
暴戻倨傲の振舞は
殊に御國は同胞が
危急を不問に附すべきや
天定まれば人に勝つ
時は來れり今ぞ今

平和に妨ありとして
己は恬然之れに據る
我物顏に他を拒む
世の同情を失へり
鮮血灑ぎて得し土地の
嘗膽臥薪はや十歳
惡運何ぞ長からむ
膺てや懲らせやロシヤ國を

第三

國大なりと云ふ勿れ
人口多しと云ふ勿れ
財源涸竭し負債殖ゆ
糧食缺がす民和せず
金甌無缺の我國は
君を戴き臣民は
名詮自體の敵國は
日の旗押建て押進み

過半は沙漠不毛のみ
數十種族の烏合のみ
虚無黨潜かに時機を待つ
渠豈久しく支へんや
上に萬世一系の
忠勇世界に比類なし
朝日の前の露ぞかし
膺てや懲らせやロシヤ國を

○赤十字社婦人會總裁御諭旨

日本赤十字社篤志看護婦人會總裁彰仁親王妃賴子殿下には本社救護事業開始に伴ひ其翼賛の主旨の貫徹せんことを望ませ

られ本支會員に對し左の御諭旨を賜はりたるにより會長侯爵夫人鍋島榮子氏は直ちに會員一同に傳達したり

本會は國家有事の日に方り軍人傷病者の看護慰問本社救護員の送迎、慰勞其他種々の行動を爲して本社事業の翼贊に勗むることを旨趣とす曩には二十七八年の戰役及び北淸事件等に際し會員各應分の力を盡し社業を幇助せしが不幸にして今又一大國難に遭遇し將來或は前役に數倍するの慘狀を見るに至るやも測りがたく終て本會の執るべき業務も亦一層繁多なる事と思惟す會員の諸氏同心協力國家の爲め益々奮ふて本會の主旨を貫徹せんことを望む

三十七年二月

日本赤十字社篤志看護婦人會總裁　彰仁親王妃頼子

○篤志看護婦人會の申合　赤十字社篤志看護婦人會は去る五日本社に於て職員會を開き左の事項を決定せり

職員集會申合條項

一本社救護員派遣の節は會長副會長幹事の内若干名づゝ、停車場若くは横濱港まで見送り其行を壯にし引揚げの節も同様之を歡迎する事

一陸軍省海軍省及び本社へ献納用の繃帶製造場所を在澁谷本社病院內に設け會員若干名づゝ其製造に從事する事

一東京支部に於て患者休養所を設置せられたるときは同部へ交涉の上會員中の有志者同所に出張其勤務を幇助する事

一本社若くは東京支部より協議あれば會員若干名づゝ犒軍に從事する事

一護送患者一時に多數通過の儀豫め相分りたる節は職員の內若干名停車場等に出張慰問の事

一職員若干名づゝ豫備病院入院患者を慰問し或は患者に物品を寄贈する事

一本社出張の救護員を慰問し又は之に物品を贈與する事

一會員中(修業證書を所持する者に限る)實地看護志望者を取調べ其人名を本社長に提出する事

一豫備病院より繃帶の洗滌若くは卷替等依賴ある節は之に應ずる事

一當分の內每金曜日に例會を開く事

一臨時に幹事七名を增員する事

一會員へ寄附金を依賴する事

○看護婦人會の繃帶献納　赤十字社篤志看護婦人會京都支會は過日京都支部內に於て例會を開き村雲會長大森副會長出席の上看護學の講話に先ち村雲會長より今日の時局に關し大に同會の事業を發揮すべき時機の到來近きにあるを以て先づ同會事業の第一着として繃帶四千卷を製造し之を陸海軍に献納

の事とせしに付左の如き訓示を會員一同に與へられ夫より中村事務幹事訓示の趣を服膺の上此際奮つて事業に精勵せられたき旨を述べ繃帶製造實施の順序を談話なしたり其繃帶製造の順序は會員總數の三百七十八名を十組に別ち其組毎に幹事一名を付し毎日京都支部内に於て製造をなし村雲會長大森副會長時々臨席の上是れが督勵せらるゝ由

日本赤十字社篤志看護婦人會京都支會例會に當り特に諸氏に告ぐべきことあり我が京都支會は諸氏の力により會員も増加し準備も整頓して全國支會の模範とも稱へらるゝにいたりしは誠に喜ばしき限なり今や西北の風雲日に急にして諸氏が多年辛苦學修せし科業を實際に用ゆべき時機は正に到來せんとす仄に聞く米國の婦人は一旦事あるの日には遠く來りて我國の爲め恤兵救護に力を盡すべき由を其筋に申出たりと他邦の婦人すらも其篤志なる此の如し況して我國は其安危にも關すべき一大事の時なるをや爭でか奮發興起せざるべき由是我支會は支會規則第一條の規定に基き先づ繃帶の製造より始むる事とせり諸氏は身を軍國の間に置く心得にて盡力あらん事を望む是れ諸氏が報國恤兵の任務を成し博愛慈善の實績を舉げて益我支會の光彩を發揚する所以なり

○河原女史の消息　客年蒙古王の家庭教師として招聘せられ舊冬北京出發雲山茫々たる蒙古に向ひし河原操子は同月下旬恙なく喀拉沁王の邸に到着したるに蒙古王は非常の懇待を以て女史を迎へ殆ど歡喜措く所を知らざる有様にて女史のために準備到らざるなく女史も大に心を安んじたる由なるが奈何せん地は是れ茫々無邊の荒地而かも寒風凛冽たるより女史も大に其防寒に苦み最初四五日間は寒氣のため睡眠さへ取る能はず食物の如きも嘗て天津北京にありて食せし支那料理と異なり純然たる蒙古式の料理にして異臭紛々喉を下らず然ればとて牛肉を求むれば王府より我大約五六里を行かざれば之を購ふに由なく其食物の困難にして且不自由なる實に世人の豫想外なりと目下女史が任に當り居れる女子教育は日尚淺きにも拘らず今や既に王族二十餘名の生徒あり現に專ら普通學教授の準備として先づ重きを日本語に置き日々熱心に教授し居れりといふ

○女教師の壯圖　今回安井哲子女史暹羅國に聘せられたると共に萬里の行を共にし暹羅の教育界に新空氣を注入せんとする一女丈夫は山口縣山口字八軒屋の河野鼎三氏長女キヨと稱し嘗て同縣某小學校に教鞭を執り居たることあり其後高等師範學校に入り

技藝專修科を卒業し現に東京幼稚園の褓姆たりしが今回安井女史を輔けて暹羅に赴くことゝなれるなり壯圖洵に感すべし

○女子職業學校の暹羅女學生　先月より同校へ暹羅の女學生四名が入學したるが孰れも同國にありては皇后陛下の御傍近く使はせ給ふ宮女にして中にも一人は貴族の出身なるを昨年五月皇后陛下の思召により日本へ留學を命ぜられ女子高等師範學校の舍監たる喜多見佐喜子女史の許に監督せられ學科は同校教授たる井上わぐり女史及町田則文氏の薰陶を受居たりしも今度更に學科外の手工を修るにつき町田氏が保證人となつて職業學校へ入る事となり四名のうちビット(十六)ジヨン(十七)の二人は刺繍科、リー(十五)ヌアン(十五)の二人は造花科を志願し、わぐり女史が車に添ひて登校せしが四人とも頭は束髮、日本服に海老茶袴を着用し皮膚は日本人より稍黑けれど極めて愛らしく又其日は風の烈しかりしかば附添人の注意にてか紫縮緬の頭巾を持參せしも頭へ被る仕方を心得ねば同校の事務員が一々被せてやるなど愛嬌なりし尙ほ右のうち二人は英語を巧みに操り日本へ來りし當時は英語にて日本語と本國語とを結付けて用を足し居たりしも昨今は片言ながら孰れも些しづゝ日本語を用ひ得らるゝやうになりたれば授業の上にも然ほどの不便なかるべしといふ

○本邦留學の清國婦人　王蓮は今年二十五清國湖北省施南府本街に生る實父尹家楣夙に令聞あり今は北京宣武門外椿樹頭條胡同に住し道臺の顯職にありて辣腕の聞え高し蓮幼にして怜悧十二歲の時臺有堂にありて小學を卒業し十六歲にして大原堂の普通學を卒へ王氏に養はる蓮孃巾幗の資を以て慷慨の念深く祖國の形勢日に振はざるを憤ること久しかりしも女性の身の國事に鞅掌する能はざるより念を屈して平生嗜好する西洋畵に遊び自然の美を擅まゝにして纔かに心を慰めゐけるが昨年四月本邦に來り東京女子美術學校に入學し西洋畵普通科選科に入り孜々として勉學し常に他女學生の模範と稱せらる邦俗に習

ふて蝦老茶袴を穿き束髪のリボンに倭撫子の俤を描し巧に日本語を操るところ唐土の人とは思れぬ程なり又曾汝錦は清國蘇江省松江府上海に生れ芳紀二十六なり令兄曾汝霖は去三十三年我國に遊學し外國語學校に入りて佛語科を卒へ今や東京法學院大學にて法律を修め居れり父曾鑄は上海にわり南洋産物會社長として敏腕の聞え高く又人材を養成するを以て名を後進の間に知らる汝錦幼にして曾氏に養はれ小學普通學を卒業し一昨年四月本邦に來つて下田歌子の監督せる帝國婦人協會に入り更に翌年四月東京女子美術學校の西洋畫普通科選科に入りて專心西洋畫を研究し作品見るべきもの少なからず思ふに王蓮會汝錦二孃の如き本國始息の弊竇より脱れ來りて文明の學術を修む他日故國進運の鑰を握るもの此等女性の手にわるべし

○女學生の學資　都下の女學校にて在學生徒が一ヶ年分幾何の學資を要するかに付て東京府立第二女學校の調査したる處によれば授業料(十一ヶ月分)十九圓八十錢、運動費(毎學期、廿五錢)七十五錢、書籍代(一學級)五圓、靴(一足修繕費靴下十一ヶ月分十一足代共)七圓二十錢、紙(半紙四十帖卷紙二本書箋十一枚礬水引半紙十一帖半紙十帖)三圓十五錢筆、(大三本小十本畫筆三本ペン六本軸一本)一圓四十錢墨(一挺木炭二箱、及羽箒二本インク一壺)四十錢(繪具一、二、三學年を通じて毎年二十錢四五學年を通じて毎年一圓十錢)雜記張(十五冊)七十五錢、鉛筆(二十本)六十錢、遊戲器具三十錢にて總計一、二、三學年四十一圓七十五錢、四、五學年四十二圓六十錢なり

○孝行鮨　國亂れて忠臣現はれ家貧うして良妻出づ親の困苦を見るに見かねて納豆枝豆を賣り歩く少年少女に孝行の名の殘るも其身の不仕合こそ思遣れて甚憫れなれ神奈川縣下大磯町南本町に家號を長岡屋とて鮨汁粉を商ふ家あり主人某は四五年以前より胃癌に罹りて昨年十二月三日に此世を去り妻コノも近年僂麻質斯を患ひて足腰立たぬ不自由の身となり

長女シマ(卅)は三年以前病める兩親を振捨て何處へか逐電し七年以前東京のさる方へ奉公に遣りし次女クニ(廿六)は其後如何にせしか音沙汰も無くなりしがコノは三女アサ(廿四)を杖とも柱とも憑みて僅か計りの商買の利益に末の娘ナオ(九)をも養ひ漸く其日を送り居りしが泣面に蜂とやら去年十二月の大火に全燒となり搗て加へての厄難にもアサは一向撓む事無く斯樣云ふ時こそ子たる者の盡すべき時なりと父の遺産にて元の如く家をも建て只管に商買を勵みて殘りたる母親に一層の孝養を爲し居るとぞされば父が生前酒と博奕の爲妻子をも顧みず土地の信用も全く地に落ちんとせしかばアサは折を見て遠廻しに諫めたりしが持つた病は死ぬ迄止み難く今は是迄となりて漸くに眼が覺め鳥の將に死せんとするや其聲悲しくアサの手を握りてホロリと一滴懺悔の涙を溢せしが父の病氣重りてより四十日餘り衣帶を解く暇無く棺に白布を纏ひし後は位牌の前に坐して三晩の夜伽にマンヂリともせず七日七日は更なり今日は逮夜明日は命日と不斷に父の戒名を心に銘じて忘れず日々午前六時の聲を聞くや起出で丶齋戒沐浴し菩提寺に到りて墓前に合掌禮拜すること風雨霜雪を分たず生殘りたる母の看病さへおさ〳〵怠り無く何事に付ても母に諮りて自分一人の量見に任せぬ程の孝心に好事門を出ずと云へど暖簾の出入りに何時しか見留たる客の口より斯と世間に知れ渡りて今は却て父存生の時よりも客足繁く孝行娘よ〳〵との判評高きにつれ或は鮨に事寄せ汁粉に事寄せて出入する若者の折を窺ひては袖褄引くもあれど柳の風と受流し堅く結びし下紐の解く由も無き素行を聞傳へ〳〵て大礎町の際より涯に孝行鮨の評判高くやがては名物の一つともなる可しとて褒立る人も有りとかや

○軍人の餞別(特志の婦人)　佩劍相觸る丶音、靴音に錯雜して氣色立たる巷の樣、東西に走せ違ふ腕車の提灯馬蹄の跡の潦を照して十一時過ぎし去る二月一日夜の事赤阪區青山北町一丁目の往來に佇める婦人あり年の頃は四十六七、奥樣風の扮裝品格も

卑しからざるが十四五ばかりの少年に一個の袋を持たせつゝ道行く人の袂を引ては「貴君、戰にお立の方ではありませんか」とそれらしき壯者を片端より通さず、尋ねつゝ然なりと答ふれば彼の袋より莢ながら乾したる豆を取出し「甚だ唐突で失禮ですがこの豆はお目出度い豆ですから何卒持て被入て下さい私が軍人方への寸志でございます」と二個又は三個づゝを與ふるに人は皆狂人と見做て受收行くも婦人は猶去んともせず同じ事を繰返し居たるが折しも通りかゝりし某も此の婦人の目を漏れずして彼の豆を差出されしにぞ其仔細の訝かしくいかなる故ぞと問へば婦人の答ふるはこの豆は自家々傳の鉈豆なるが祖先よりの言傳へにて戰の際も旅行の時もこれを所持すれば疫癘を避け旅勞れなく必ならず無事に歸宅するといふ効驗ありされば日清戰爭の時も出征の兵士の健全を祈り目覺しき戰かひして目出度凱旋あるやうと自ら途に立ちて多くの兵士に分與せしが知れる人にては一人病死せしのみにて多くは無事凱旋を得られたれば今回もこの佳例に任せ斯くは皆樣に差上ぐるこれも私の國に盡すせめての寸志、お笑ひなくお納め下さらば難有うございまする」と語るに某もその特志に感じ且つは好奇の心も起りて今日は何時頃より豆の分與には出られしと問へば朝の程より青山の邊りに立ち食も落着ては頂載きませぬといふに某は愈よ感じ入りさて宿所姓名はと問へばそれのみはと堅く包むを强て問ひしに包み切れず赤阪區青山高樹町十二某會社員野呂直尙妻つや(四十)と答へ「今夜はまづこれ限にして明日に致しましやうサアお前も御苦勞でした」と少年の手を引きて立去りしと

○●●●●●●●女學生の軍資獻納　大阪に於ける各高等女學校の生徒は續々金品の獻納を爲さんことを其筋に申出でしも時局の進轉を待ちて校長等は其儘になし居りしも愈々時局も明瞭となりたるを以て女學生全體より金品献納の準備中なりといふ

○新刊批評

◎歐米各國舞蹈大觀（定價六十錢郵税八錢）東京銀座十字屋發行

本書は斯界に名聲ある是原氏が陸軍音樂學校、音樂遊戯協會、萬世倶樂部、東京舞踏會等に於て舞踏の解、舞踏の注意、方舞圓舞の履行方法其他列舞環舞の注意方法に至るまで、實地に教授せられたる經驗を以て、叮嚀親切に凡何人にも容易に了解し得る樣編纂せしものにて、數十の圖畫をも挿みて歐米最新式の各種舞踏の方法を說示したれば、初學者と雖も舞踏の何物たるを了解し、悉に此の技を爲し得べし

◎新教育唱歌（定價廿五錢郵税四錢）東京銀座十字屋發行

本書は此道に實驗ある東京府師範學校教諭小出雷吉氏が自ら作曲し、歐米音樂諸大家の作爭したる樂曲を蒐集して、之れに適切なる歌詞を附せられたる好唱歌集なり、現に京北中學校、東京府師範學校、及中學程度高等小學校の唱歌科用として採用し居るもの少からずと云ふ

○新刊書目

成　　功（第三卷第五號）　東京本鄉區弓町　同　雜　誌　社

時　　好（辰之第二號）　同日本橋區駿河町　三　井　吳　服　店

日本婦人（第五十一號）　東京府豐多摩郡澁谷村　帝國婦人協會

賢家之友（第二十三號）　同京橋區鍋町二丁目　時事新報社

愛國婦人（第四十七、八號）　同麴町區下二番町大日本女學會內　同　發　行　所

東京感化院月報（第廿八號）　同東京感化院內　羽　澤　文　庫

音樂之友（第五卷第四號）　下谷仲徒町三丁目　樂　友　社

兒童研究（第七卷第一號）　同神田區裏神保町　富　山　房

中學科講議錄（第一學年第十四號）本鄉湯島六丁目　大日本國民中學會

東京經濟雜誌（每號）　同京橋區彌左衛門町七　經　濟　雜　誌　社

平民新聞（每號）　同麴町區有樂町　平　民　新　聞　社

新　　聲（第十一編第二、三號）神田區錦町二丁目　新　聲　社

婦女新聞（自百九十六號至百九十七號）　同牛込區東五軒町　同新聞社

大日本婦人教育雜誌（第百六十一號）　同麴町區永田町一丁目　大日本婦人教育會

婦人と子供（第四卷第二號）　同本郷區湯島　フレーベル會

工談雜誌（第百六十七號）　同京橋區新榮町三丁目　工　談　會

萬週報（每號）　同神田區錦町　正則英語學校

慶應義塾學報（第七十三、四號）同芝區三田四國町　同　發　行　所

六合雜誌（第二七八號）　同芝區三田四國町　日本ゆにてりあん弘道會

文　　庫（第二十五卷第四號）同神田區南甲賀町　內外出版協會

日本之小學教師（第六卷第六十二號）同神田區表神保町　國民教育社

婦人世界（第三十二、三號）　大阪市南區葭吉橋通四丁目　浪華婦人會

通商月報（第九十五號）　大阪市北區堂島濱通府立大阪商品陳列所

愛媛縣教育雜誌（第百九十九號）　愛媛縣松山市　愛媛教育協會

上野教育會雜誌（第百九十六號）　上野國前橋市　同　教　育　會

なゝんな（第四卷第二號）東京市麴町區下二番町　大日本女學會

女子新聞（每號）　同區麴町區有樂町三丁目　女子新聞社

投稿心得

短歌
今様
短文

各題随意

右今回より毎月募集す投稿規定は左の如し

一、用紙は半紙又は郵便端書とす

一、今様、及短歌は一人一首若くは二首を限りとし今様は毎句中二音の漢字二字を入れ和歌は一首中同三字を入るべし

一、今様、短歌短文とも各其用紙を別にすべし

一、短文は簡潔を主とし毎行十五字として十五行を越ゆべからず

一、原稿は各添刪を施して之を女鑑紙上に掲ぐべし但し各種毎に其秀逸を拔萃すること兼題に同じ

一、〆切期限其の他の諸規則は兼題投稿心得に據る

兼題投稿心得

一●投●稿●歌●文●は　女子は何人にても隨意投稿することを得●べ●し

一●投●稿●用●紙●は●　文は半紙又は半紙二ッ折和歌は同上又は端書を用ふべし但題異りたるときは必ず別紙に認むべし

一●題●目●の●下●には必ず住所姓名を明記すべし

一●文●字●は●必ず楷書にて句讀點を施し鮮明を主とすべし若し二葉に渉るときは必ず紙捻にて綴り置くべし

一●文●は●題毎に用紙を別にし一行十五字詰に認め三十行を越ゆべからず

一●歌●は●一人一首若くは二首を限りとし上下句中二音の漢字三字を入れ其の他は悉く平假名にて認むべし

一●投●稿●宛●名●は●　國●光●社●女●鑑●編●輯●局●と●す●べ●し

一●總●て●以上所記の規定に違ひたるもの及び〆●切●期●限●に●後●れ●たるものは採用せず

一●原●稿●〆●切●期●日●は　雜誌發行日の廿日前則ち四月分は三月十日五月分は四月十日とす

一●當●撰●者●に●は　文は一圓(天)五十錢(地)三十錢(人)歌は其半數に當る計算を以て各代價相當の書籍を呈す

締切期限毎月十五日

繪畫募集廣告

募集規定

一應募繪畫は日本畫たると西洋畫なるとを論せず、又流派材料の如何を問はずと雖も、成るべく時期に適合せんことを要す

一其の素畫なると着色畫なるとは應募者の隨意なりと雖も、用紙の大さは、縦六寸横四寸に過不足なきを好しとす

一應募繪畫は某畫伯に囑托し嚴蜜調査の上、其中より一等二等の二種を選拔し、當選者へは本社發刊の書籍を贈呈す

一締切期限は毎月十五日とし、當選繪畫は、翌月十五日發兌の女鑑口繪に挿入して發表すべし

一應募者は左記の切符に住所姓名を記入し、繪畫に貼付し、女鑑編輯局に宛て送付すべし

府縣　市郡　區町村　番地

國光社

女鑑編輯局

明治三十七年 女鑑月並兼題豫告

	歌	文	〆切
四月	海上雲 遠山花	故郷の友に試験成績を報ずる文 春を惜む詞	〆切三月十日
五月	猿 夏朝	硯 吾が常に愛讀する書籍に就て	〆切四月十日
六月	親友 郭公	藤花を贈る 梅雨中日記の一節	〆切五月十日

定價

一冊	前金貳拾錢
三冊三ヶ月分	前金五拾七錢
六冊半年分	前金壹圓拾錢
拾貳冊一年分	前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行	金三拾錢
半頁 三十二行	金八圓
一頁 六拾四行	金拾貳圓
表紙二頁	金拾六圓

(色刷は特に御相談に應ず)

御注文規定

一切前金の事(但郵券代用一割増の事)●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貳丁目貳拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御送附ありたし

明治三十七年二月廿九日印刷
明治三十七年三月一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 渡邉棠一
東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人 河本龜之助
東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所 株式會社國光社
(電話新橋二六九三番)
(電話新橋特八八番)

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御明記被下度候

松川霞州著

結婚と家庭

四六倍判三ツ切

定價金拾五錢

郵税金四錢

結婚と家庭！是れ未だ解答を與へられざる一大問題なり抑も兩性結合は天の大倫。男女相愛は人の常情。誰れか又之を防過するを得んや。然りと雖も淑女必ず吉士と遇はず。才子必ず美人と配せず。是を以て或は失戀に泣き或は破鏡を嘆じ、終生孤閨を守りて。厭世の人となる者古來其類多からずとせず。是れ豈人生の最大不幸にあらずや。著者の麗筆を以て此の大問題の解決を試み。近く證を取り遠く例を引き。縱横論議して毫も憚かる所なし希はくば靑春妙齡の士女、此書に據りて以て、相愛の結儀を擧げ和樂の家庭を構成せば、始めて人生の眞福を享くるを得ん歟。

堀内新泉著

少女讀本



花月雪の卷

全三冊定價各十八錢郵税各四錢

先づこの書の特色は、第一嬢さん達のためになるお話ばかりを集めたのと、第二には面白いのやら、悲しいのやら、又勇しいのやらいろ〳〵あるお伽話の中に、みな一〳〵修身の教のこもつて居るのです。その外まだ面白い唱歌もあれば、球歌などもありますが何れも世にありふれたものとは、丸でかはつて居りましてこの度著者が親切に皆新しく作つたものばかりでございます。

藤野天城著

女子小觀

四六版洋裝

定價二十錢

郵税四錢

發兌元　東京築地　株式會社 國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

磯部武者五郎著

家計簿記法

●家計寶典

●御婦人方必携

本書家計簿記の法を說く簡にして明、何人も一讀會得するを得べく主婦たる人には勿論苟も家計整理の任ある者必ず座右に放つべからざる良簿記法なり

菊半切厚表紙美本
定價十五錢
郵税二錢

中村清藏序　中村佐平著

●銀行簿記學

菊判總クロース
定價五十錢
郵税六錢

富田鐵之助題字　須田毎六著

●銀行利用法

菊判洋裝美本定價金四十錢郵税金六錢



發兌元　株式會社　國光社

大宮兵馬著

●國語漢文假字遣ひ法

菊判大和綴
定價十八錢
郵税四錢

大林弘一郎著

●中等國文學史

菊判總クロース
定價六十錢
郵税八錢

華族女學校講師
大宮兵馬著

中等日本文典

菊判總クロース美本
定價五十五錢郵税八錢

本書は、文典初歩及文典の二冊を以て合本とし、中學科程度の教科用に供せんとす。書中編述の事項は現今の普通文に向ひて直に之を應用せしむべき方法を以て各條を規定し併せて之を通俗言語と比較して其差異ある諸點をも會得せしめんと努めたり。其程度配置の如きは著者が授業上の經驗を以て基礎とすと雖もまた明治廿五年二月の發表の中學校教授要目にも準則すること勿論なり、委しくは本書を閲讀して知るべし。

新潟縣師範學校教諭平野秀吉著

●國語聲音學

菊判總クロース
定價六拾錢
郵税八錢

華族女學校編纂

●國語假名遣ひ一覽

四六倍二つ折
本美本定價拾
貳錢郵税貳錢

井上賴圀校訂小澤政胤著

國學家略傳

（菊判洋裝總クロース美本
定價一圓五十錢郵税十錢）

本書載する所は、慶長以來明治二十八年までの有識故實家、神道家、漢學者、文人、歌人等五百四十名、人名の末には、其の著書目錄を掲げ、かつ引用書目を明示したり。或は之れを國學者人名辭書とも謂ふべく、また列傳體の國學史とも稱すべし。本書一たび出でても、國學研究者は、晝夜に寶典を得たるの思ひあらん。師範學校、小學校、高等女學校、其他各種の學校に於ては、無二の參考用書たるべし。

發行所　東京京橋區築地　國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

明治三十七年三月一日發行　毎月一回一日發行　第拾四年第四號
明治卅五年三月十二日第三種郵便物認可

東京築地株式會社國光社印刷